

付けられる。80～83はいずれも細かい縄文が施文された底部である。80は胴部に沈線を伴い、81は底面に網代痕を残す。

84～141は4～5層の出土である。

84～91は壺である。84は肩部で、変形工字文で施文される。85内面に沈線、外面口唇部に刻みを伴う。86は頸部が直に立上がり、口縁部が外反する。頸部に沈線をめぐらす。87は口縁部は直に立上がり、貼瘤付きの隆線で施文する。88、89は口縁部はやや外反し、沈線を伴う。90は肩部で、縄文で施文され、沈線を伴う。91も肩部と思われる。沈線による区画と磨消を伴う。

92～109は高坏である。92～94は口縁部が内反する。92は二段の沈線と縄文、93は貼瘤の二段の変形工字文と縄文で施文される。94～100は平行沈線を伴う。101は山形口縁で、頂部に抉りが入る。102も同じ器形と思われる。いずれも貼瘤の沈線で施文される。103～109は高坏の脚部である。106～109は平行沈線で施文され、109は波状沈線を伴う。

110～122は鉢である。110～113は浅鉢で、いずれも沈線と縄文を伴う。110、111は同一個体である。口唇部に抉りと溝が入り、沈線に貼瘤を伴う。112も沈線に貼瘤が付く。114は隆線と縄文を伴う。115～120は口縁部に山形突起をもつ。115～117は同一個体である。頂部は円形の凹みもち、溝が入る。変形工字文を伴う。118の頂部には抉りと溝が入る。口縁部は無文で、頸部に変形工字文を伴う。119は頂部に抉りが入り、口唇部は縄文回転で施文される。120頂部の間に溝が入り、口縁部に沈線を伴う。121は平行沈線と山形沈線を伴う。122は沈線による楕円？の区画と思われるが、地文ともに不明瞭である。

123～140は甕である。口縁部は外反もしくは直立し、肩部はやや強く張出す。口縁部は無文、頸部から縄文が施文される。頸部に段あるいは沈線もち、無文と施文の境界は明瞭であることなどを特徴とする。123は台付甕の底部である。124～131は5層出土の58～75と同タイプの甕である。132～135は口縁部の無文、肩部の張出しなどは上述のタイプと同じであるが、口縁部の成形が異なる。132は山形口縁で、頂部に抉り、口唇部に溝が入る。133は山形口縁で、頂部は円形の凹みをもつ。133～135は口縁部に押圧が加えられる。136～138は平縁で器形は上述のタイプと同じであるが、小形で比較的精製の土器である。139は口縁部に押圧が加えられ、口縁部は直線的に「く」の字に外反し、器厚が薄い。140は口縁部に抉りが入り、口縁部は内反する。頸部のくびれはない。141は壺の底部と思われる。底面の中心部に網代痕を残す。

142～174は4層の出土である。

142～147は壺である。142は口縁部が内湾気味に立上がり、やや外反する。胴部中位に最大径をもつ。口縁部は貼瘤付きの隆線で施文される。143は直線的に立上がり、やや大きく外反する。口縁部、頸部に沈線を伴う。144は直線的に垂直に立上がり、口縁部と頸部に沈線を伴う。145は142と同タイプの口縁部である。146、147は143と同タイプであるが、146は口縁部に変形工字文を施される。

148～156は高坏である。148～150は山形口縁である。148は頂部に楕円の凹みもち、149、150は頂部に抉りが入る。150は貼瘤付き沈線である。151は口縁部が内反し、沈線で施文される。152は体部片で、平行沈線と縄文を伴う。153～155は高坏の脚部である。いずれも平行沈線で施文される。

156～161は鉢である。156は口縁部に抉りが入り、口縁部に沈線、体部は縄文を施す。157は口唇部が外反し、口唇部に溝が入る。口縁部は無文である。158は頸部に變形工字文を伴う。159は沈線による区画と磨消を伴う。160は平行沈線とやや粗目の縄文を伴う。161は台付鉢である。上半部を變形工字文で施文する。

162～173は甕である。口縁部は外反もしくは直立し、肩部はやや強く張出す。口縁部は無文、頸部から縄文が施文される。頸部に段あるいは沈線を持ち、無文と施文の境界は明瞭であることなどを特徴とする。172、173は口唇部を縄文回転で施文する。174、175は口縁部に山形突起を持ち、174は頂部に抉りが入り、頸部のくびれはほとんどなく、口縁部は無文である。

176、177は細かい縄文を施された底部である。

178～184は3層～4層の出土である。

178は壺である。直に立上がり、口縁部が外反する。貼瘤付き隆線を伴う。179は變形工字文を伴う浅鉢の口縁部である。180、181は高坏である。180は山形口縁で、貼瘤付き沈線で施文される。181は平行沈線と縄文を伴う。複合口縁で、隆帯には押圧が加えられる。器厚は薄い。

183、184は甕である。口縁部は外反もしくは直立し、肩部はやや強く張出す。口縁部は無文、頸部から縄文が施文される。頸部に段あるいは沈線を持ち、無文と施文の境界は明瞭である。

185～199は3層の出土である。

185、186は高坏である。沈線による区画と磨消を伴う。187は壺の口縁部である。直に立上がり、沈線を伴う。188～195は高坏である。188は變形工字文を伴う。190、191は二段の平行沈線と縄文で施文される。192は山形口縁で、口唇部に溝が入り、貼瘤付き沈線で施文される。194、195は高坏の脚部である。いずれも平行沈線で施文される。196、197は甕である。183、184と同タイプの甕である。

198、199は小形で、無文の底部である。いずれも平滑に仕上げられている。

200～207は1層の出土である。

200、201は壺である。200は口縁部で、直に立上がり、沈線を伴う。201は肩部で、變形工字文が施文される。202～204は高坏である。202、203は變形工字文、204は平行沈線を伴う。205は口縁部に隆帯をめぐらし、押圧を加える。無文で器厚は薄い。206、207は甕である。206は山形口縁で、頂部に抉りが入り、いずれも口縁部に段をもつ。

#### 縄文土器 (第141～144図)

208は8層の出土である。

208は口唇部に波状の粘土紐を貼付し、頸部の二列の隆帯には円形の刺突が加えられ、さらに細い粘土紐が下段の隆帯に貼付される。大木4式に伴う。

209～214は10a層の一括出土した土器である。

209は口縁部が外傾し、胴部はふくらむ。波状口縁で、沈線で渦巻文が施される。頸部は無文、胴部は横位の渦巻沈線文と直折渦巻沈線文が施される。地文は単節縄文の縦回転である。210～213はキャリパー形深鉢である。210、211は口縁部には連結する横位渦巻隆線文が施される。地文は口縁部が、単節縄文の横回転、胴部が縦回転である。214は上述の深鉢の底部である。以上大木8b式に伴う。

215～234は7～10層の出土である。

215～225は沈線による区画と磨消を伴い、215～219は磨消を円形刺突で埋める。

226～228は隆沈線を伴う。229は沈線で区画し、区画内に無節の縄文施す。215～225は大木9～10式、226、228は大木8b式に伴う。229は縄文後期前葉に伴うか。

230は横位、縦位の沈線に山形沈線が伴い、胴部は無節の縄文で施文される。大木7a式に伴うか。231、232は撚糸文で施文される。233は結節縄文の縦回転である。234は底面全体に網代痕を残す深鉢の底部である。

235～264は6層の出土である。

235～239は浅鉢である。いずれも口唇部に刻みを伴い、沈線と縄文で施文される。240～243は甕である。いずれも口唇部に押圧痕をもち、口縁部は無文である。240は口縁部に沈線を伴う。縄文晩期に伴うものと思われる。

244～252は沈線による区画と磨消を伴う。244、245は帯状の区画がなされ、244は口縁部に貼瘤をもつ。246は磨消に波状の沈線を施す。244～247縄文後期に伴う。238は橋状の把手が付き、239～243はC字、楕円の区画と思われる。大木9～10式に伴う。

253～255は隆沈線を伴う。253、254は口縁部は内傾し、口縁部を直折隆線で方形に区画する。大木8b式に伴う。

256～260は複合口縁である。256、257は山形口縁で、頂部に円形の凹みを設け、隆帯に棒状工具で沈線を施す。258も山形口縁で、頂部に傘状に貼付した隆帯の連結部に円形の凹みを設ける。隆帯には刻みが施され、隆帯に沿って沈線が引かれる。259は隆帯に横位の山形沈線を施す。260は沈線間に山形沈線を施す。261は頸部の隆帯に刻みが入る。262は結節縄文の縦回転を伴う。263は隆帯に円形刺突が加えられ、撚糸文で施文される。

264は小形の深鉢の底部である。256～260は大木7a式に伴う。

265～269は5層の出土である。

265、266は浅鉢である。口唇部に刻みが入り、口縁部は沈線で施文される。267は橋状の把手である。268は複合口縁で、隆帯に竹管刺突と沈線を伴う。269は隆起区画文を伴う。265、266は縄文晩期に伴う。

270～272は4層の出土である。

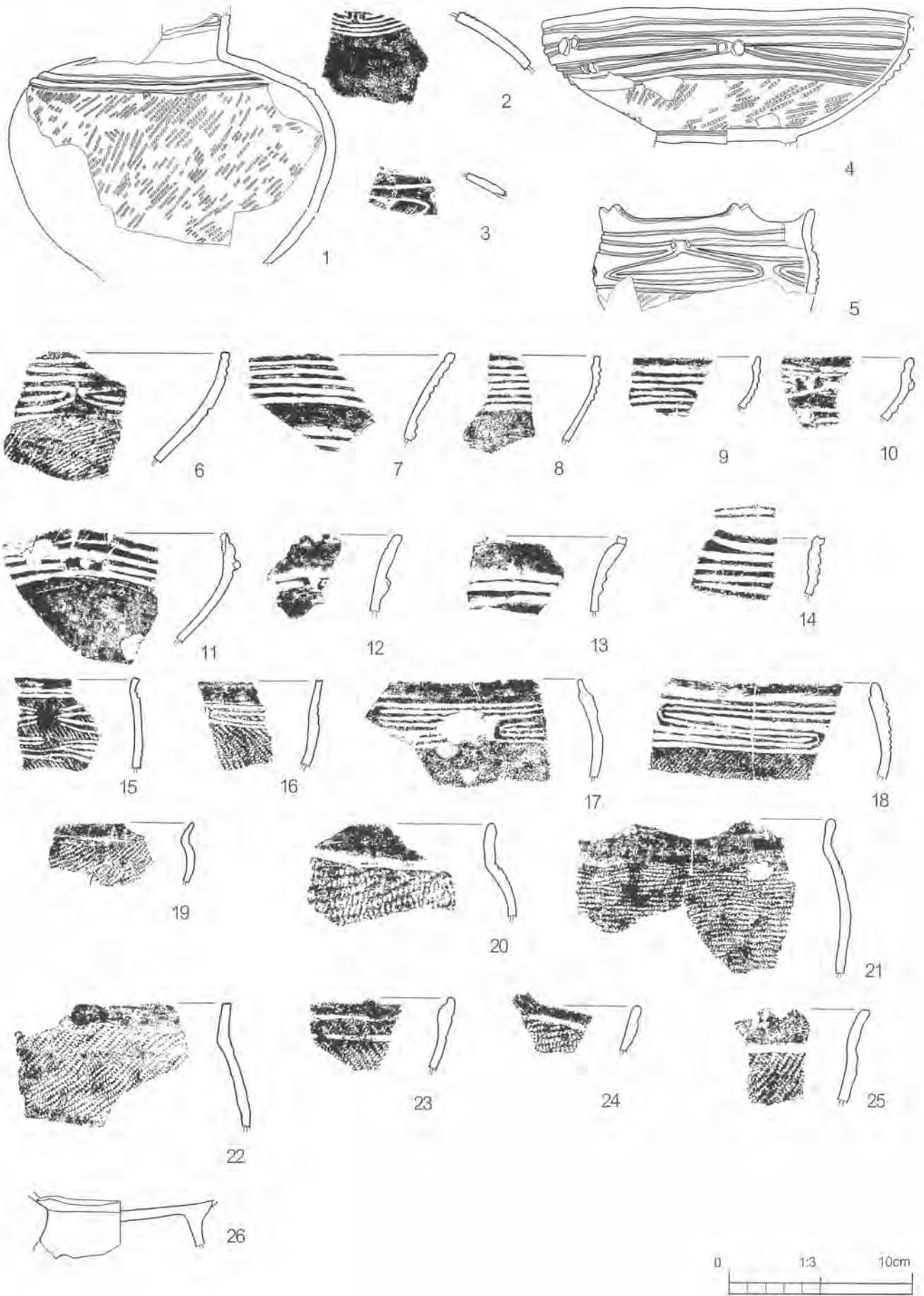
270、271は沈線による区画と磨消を伴い、270は磨消を刺突で埋める。272は隆沈線を伴う。

273～278は3層の出土である。

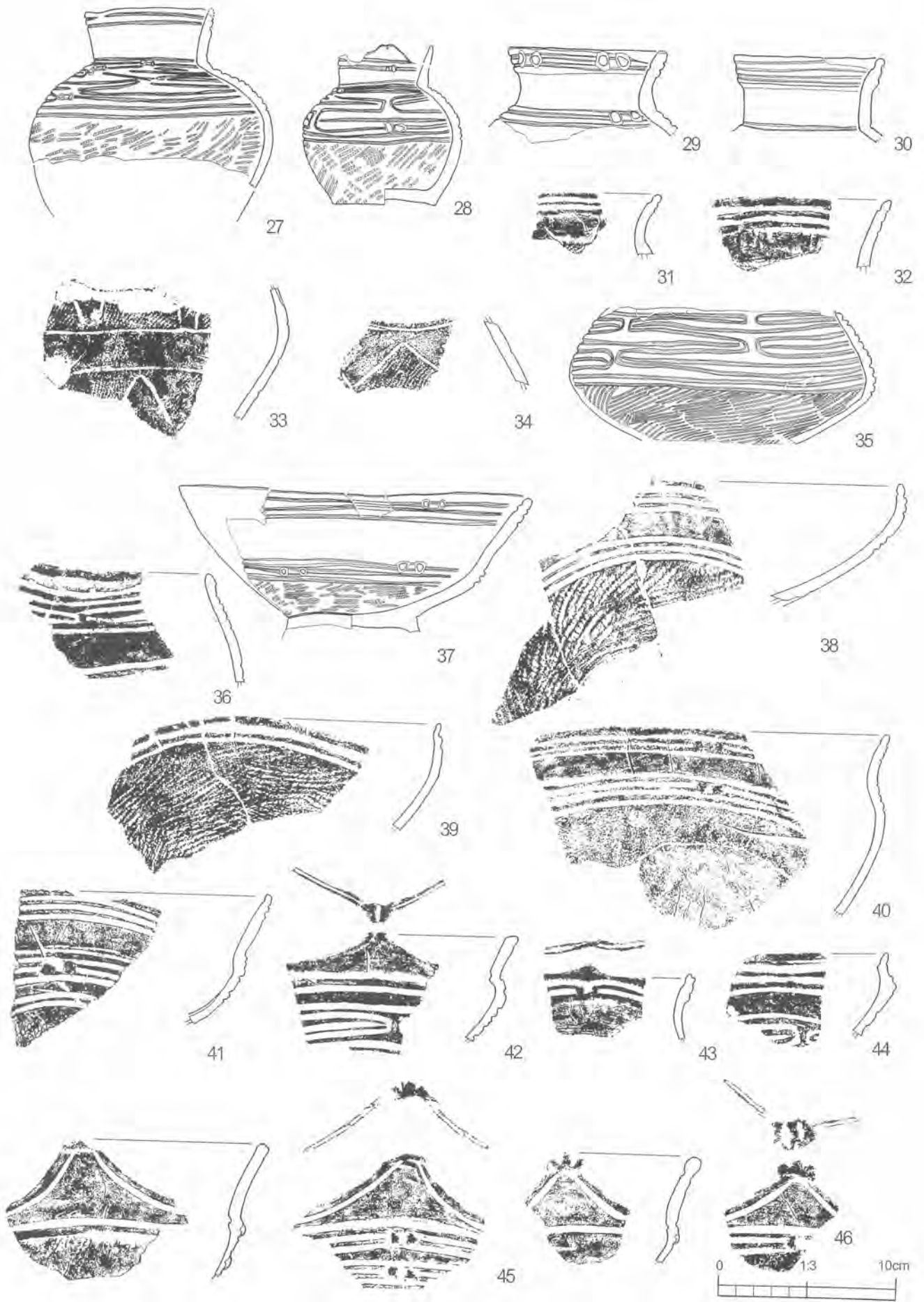
273～275は浅鉢である。273は口縁部がくの字に内傾する。口縁部に山形状の突起をもち、口唇部には刻みが入り、口縁部は平行沈線で施文される。274は口唇部に刻みをもち、口縁部に沈線を伴う。275は沈線で施文された底部である。底面も平滑に仕上げる。以上縄文晩期に伴う。276は沈線による区画と磨消を伴う。倒卵区画の一部か。277は隆起区画に半円刺突を施す。278は隆起区画文と楕円区画を伴う。279は複合口縁で、隆帯に刺突列を施す。

280～282は1層の出土である。

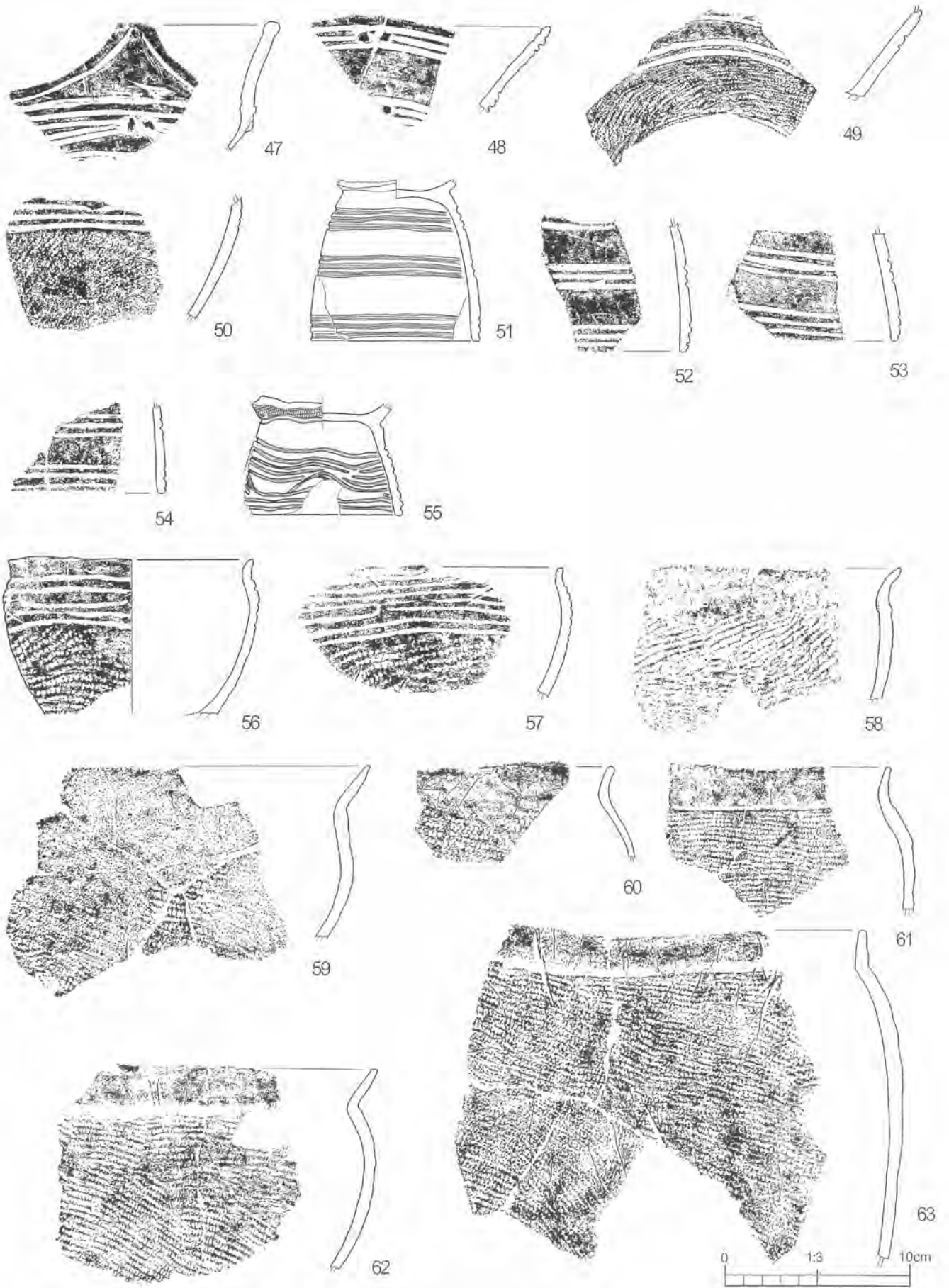
280～282はいずれも沈線と磨消を伴い、280は刺突列が加えられる。



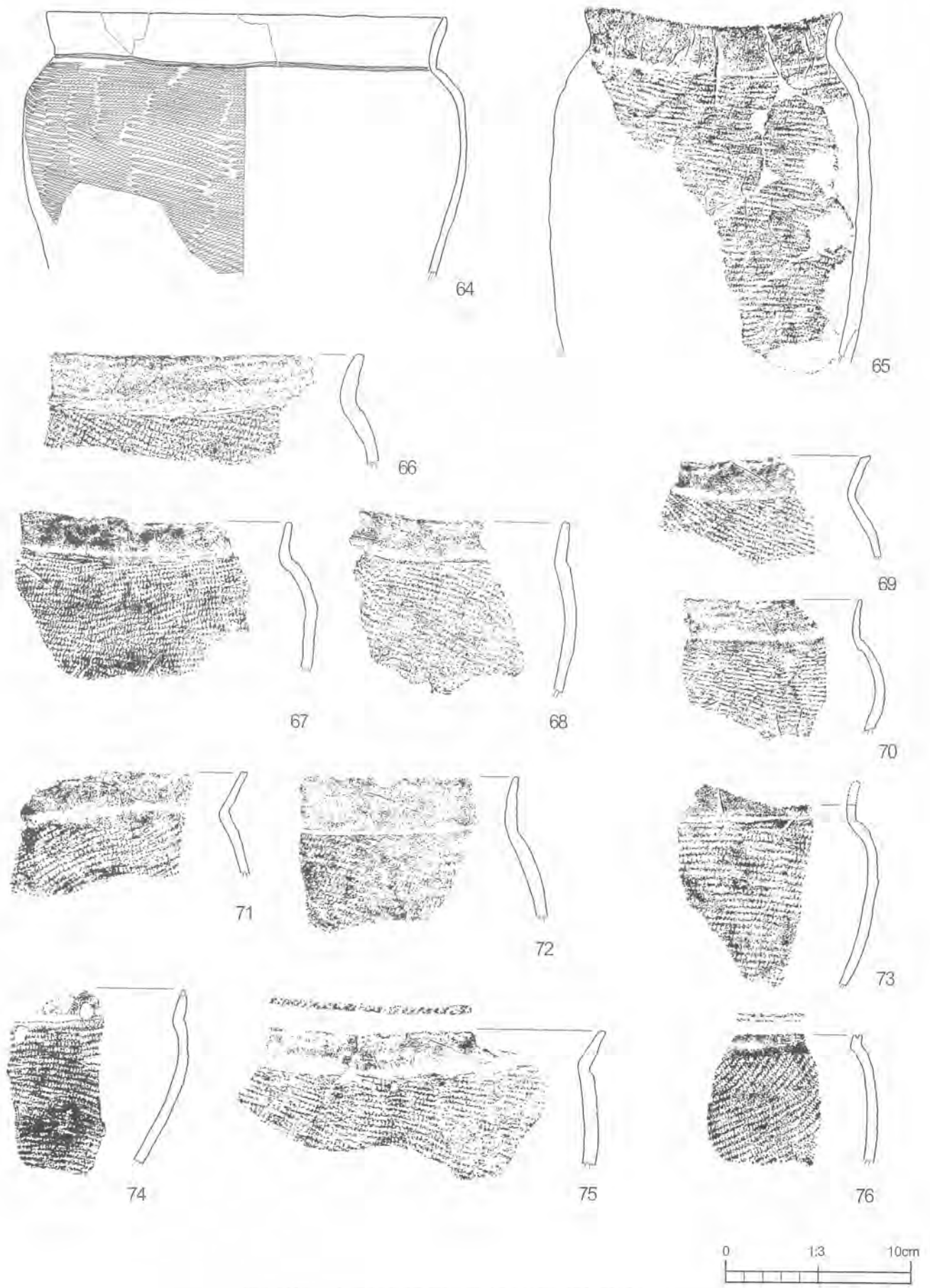
第129図 A-4区遺構概出土遺物・弥生土器(1)



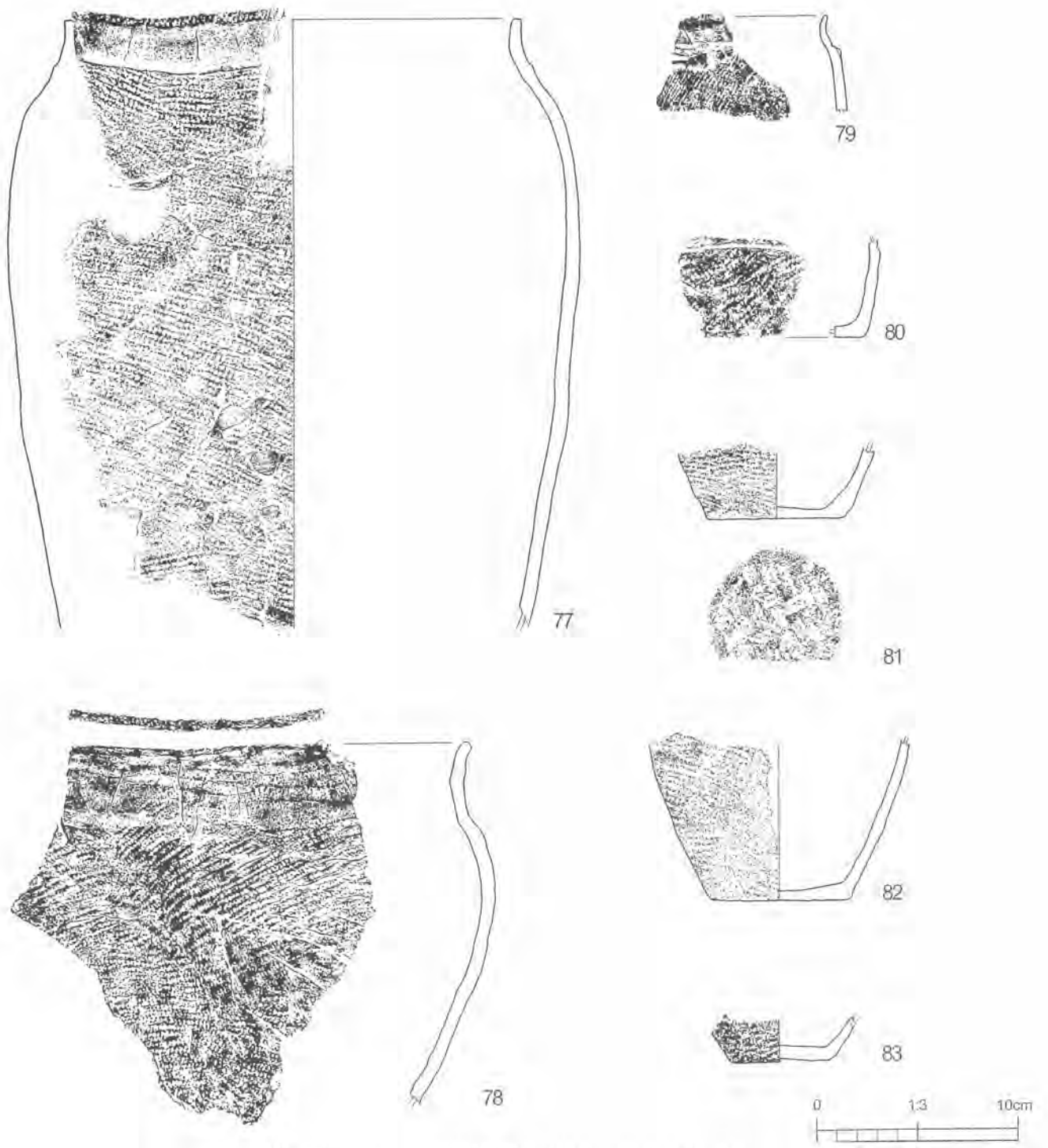
第130图 A-4区遺構概出土遺物・弥生土器(2)



第131図 A-4区遺構概出土遺物・弥生土器(3)

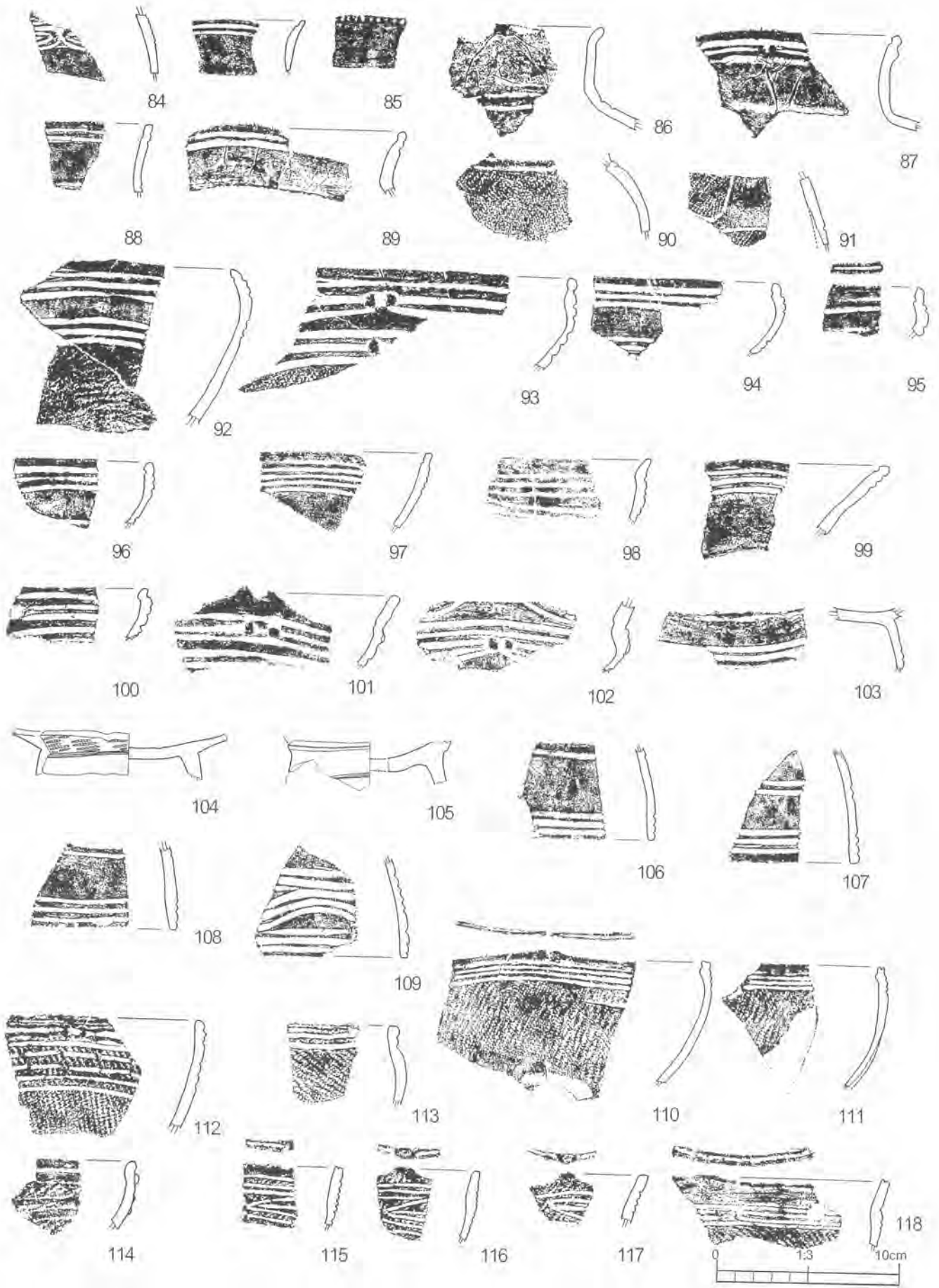


第132图 A-4区遺構概出土遺物・弥生土器(4)

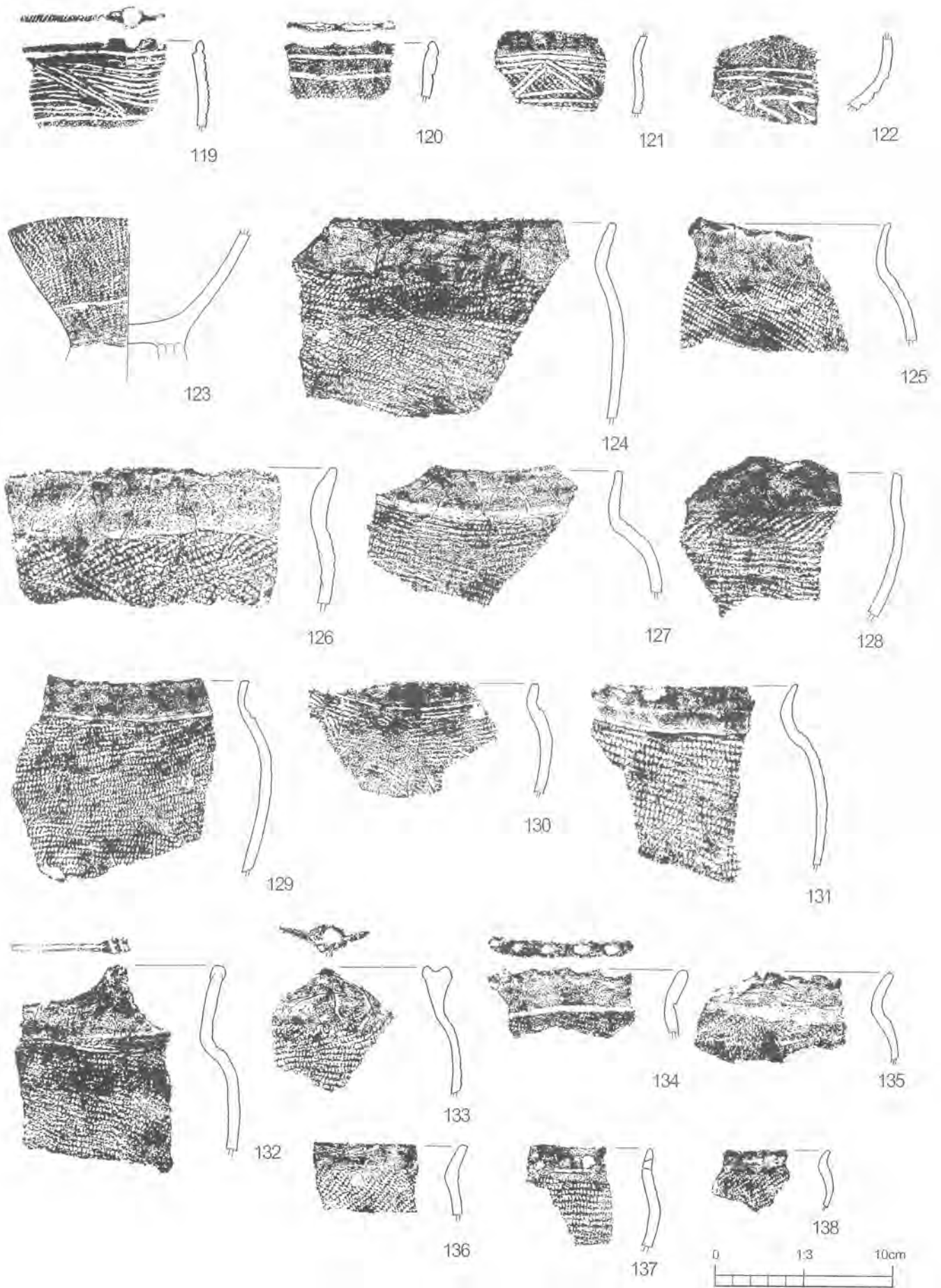


第133图 A-4区遺構概出土遺物・弥生土器(5)

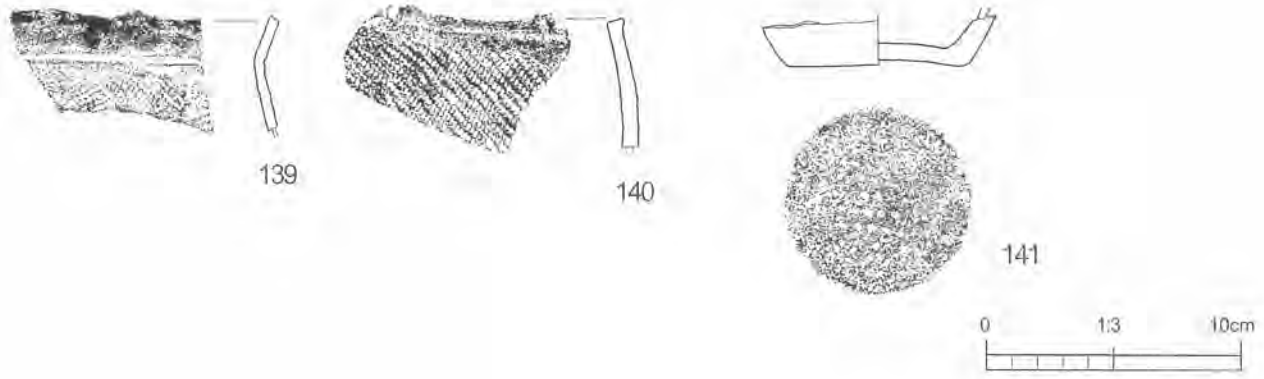




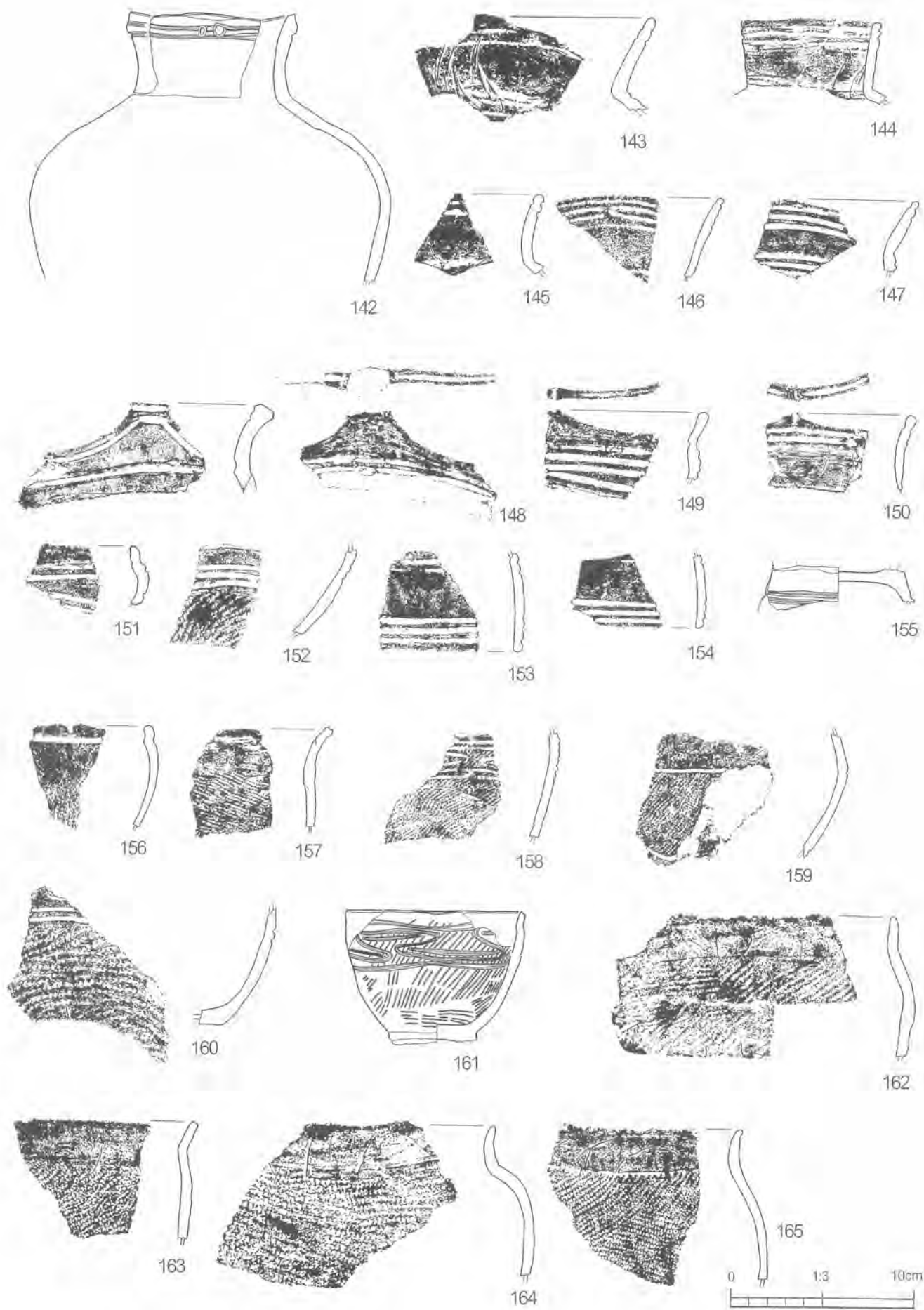
第134图 A-4区遺構概出土遺物・弥生土器(6)



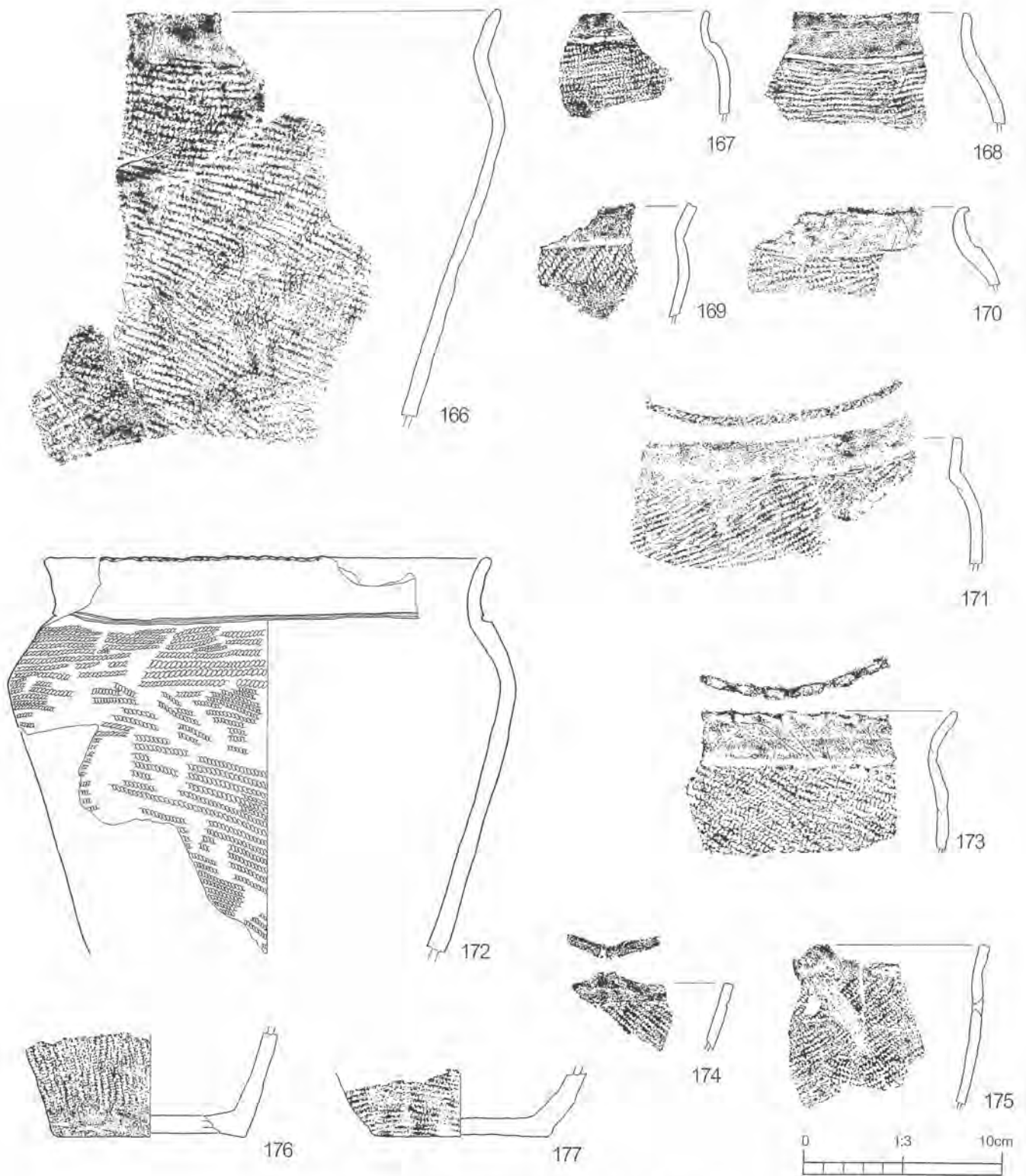
第135图 A-4区遺構概出土遺物・弥生土器(7)



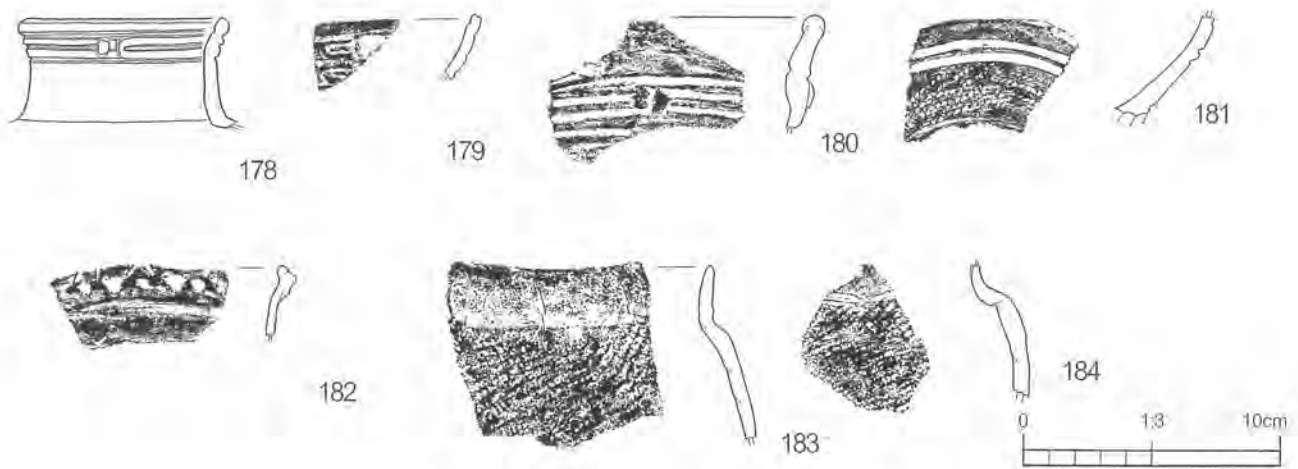
第136図 A-4区遺構外出土遺物・弥生土器(8)



第137图 A-4区遺構概出土遺物・弥生土器(9)



第138図 A-4区遺構概出土遺物・弥生土器 (10)



第139図 A-4区遺構概出土遺物・弥生土器(11)

#### 石器(第145~149図)

283~287は石鏃である。283~285は凹基である。283、284は正三角形型、285は二等辺三角形型で、いずれも側縁は平らである。286、287は凸基である。いずれも二等辺三角形型である。側縁は286はややふくらみ、287は平らである。

288~290は石匙である。いずれも縦型で、両面の周縁部を加工し、刃部の末端は尖る。

291は石錐である。つまみ部と錐部に境界は明瞭で、錐部は短い。

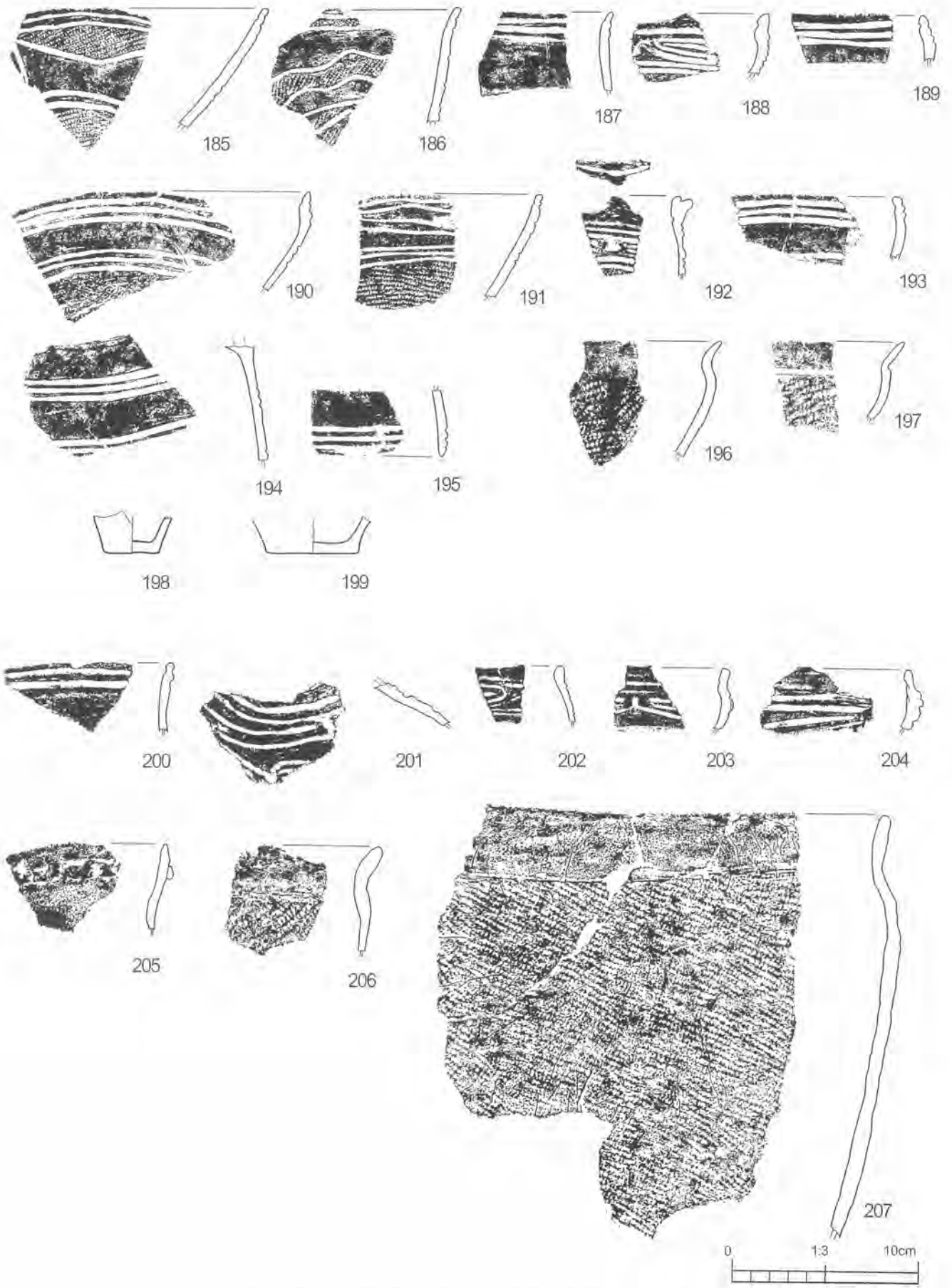
292は不定形石器である。刃部末端は尖らず、側縁を直刃に加工する。

293~298は磨製石斧である。293は頭部は平たく、胴部のふくらみは小さい。刃部は胴部よりやや幅広くなり、刃縁の形態は丸みをもつ。294は刃部であるが、未調整の段階のものである。全体に調整痕を残し、刃部のつくりだしも未完である。295~297は頭部である。295は平たく、296は尖り気味だが、いずれも明瞭な磨面をもつ。297は円錐形で、全面に調整痕を残す。298は刃部を大きく破損している。周縁の剥離痕は二次利用のための調整か。

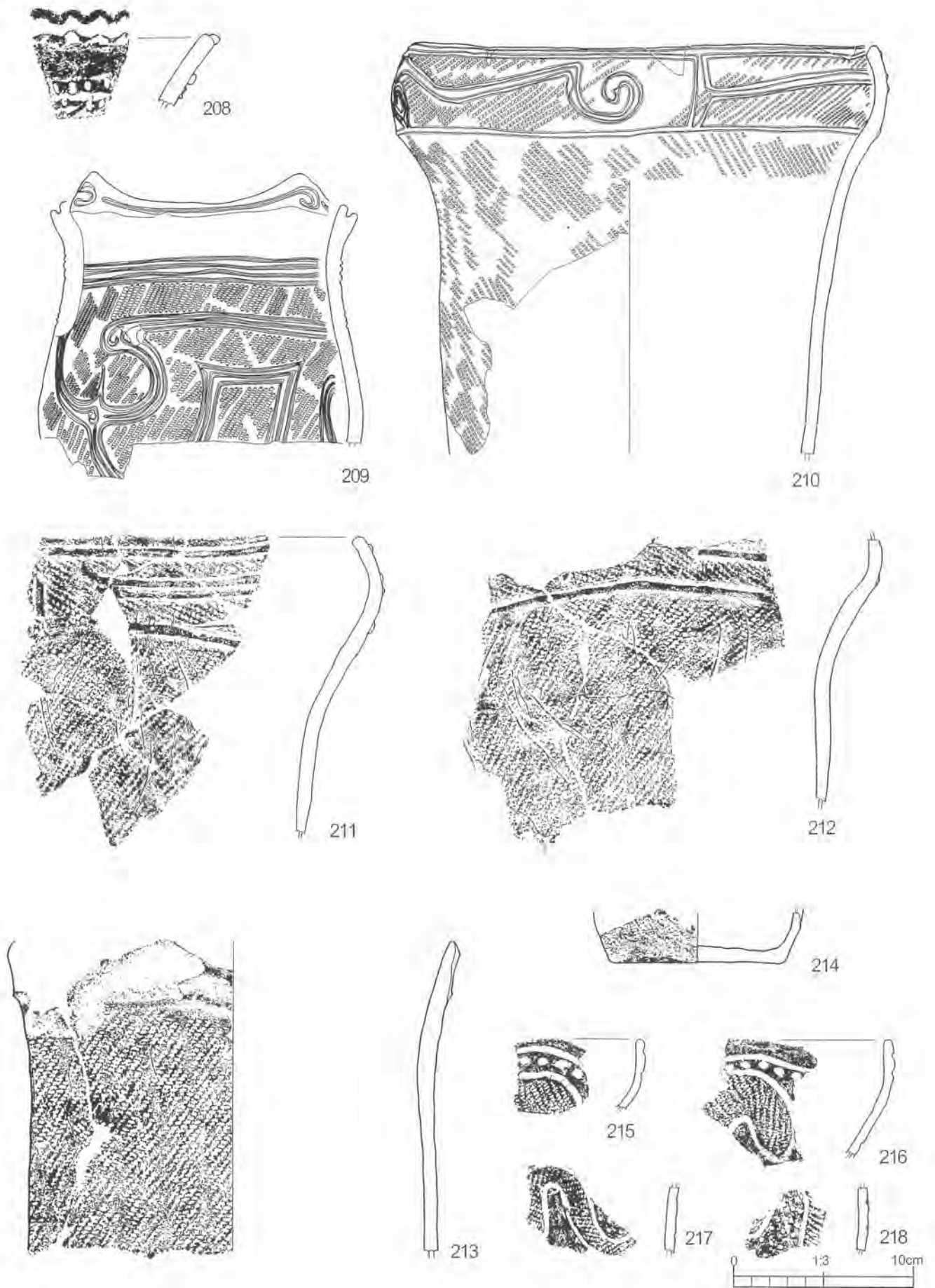
299~313は敲打磨石である。299~301は端部に敲打痕を残す。303、305~310は、機能面のほかに調整磨面をもつ。

314~316はすり石である。314は楕円石の端部、315は半円石の側縁を擦面とする。316は棒状で湾曲し、底面を擦面とする。

317、318は石棒である。317は側面の二箇所の長楕円形の凹みの周辺をのぞいて全面に調整痕を残す。また亀頭部の中心に円形の凹みを付ける。318は全面研磨され、亀頭部側面の横位の刻みが入る。

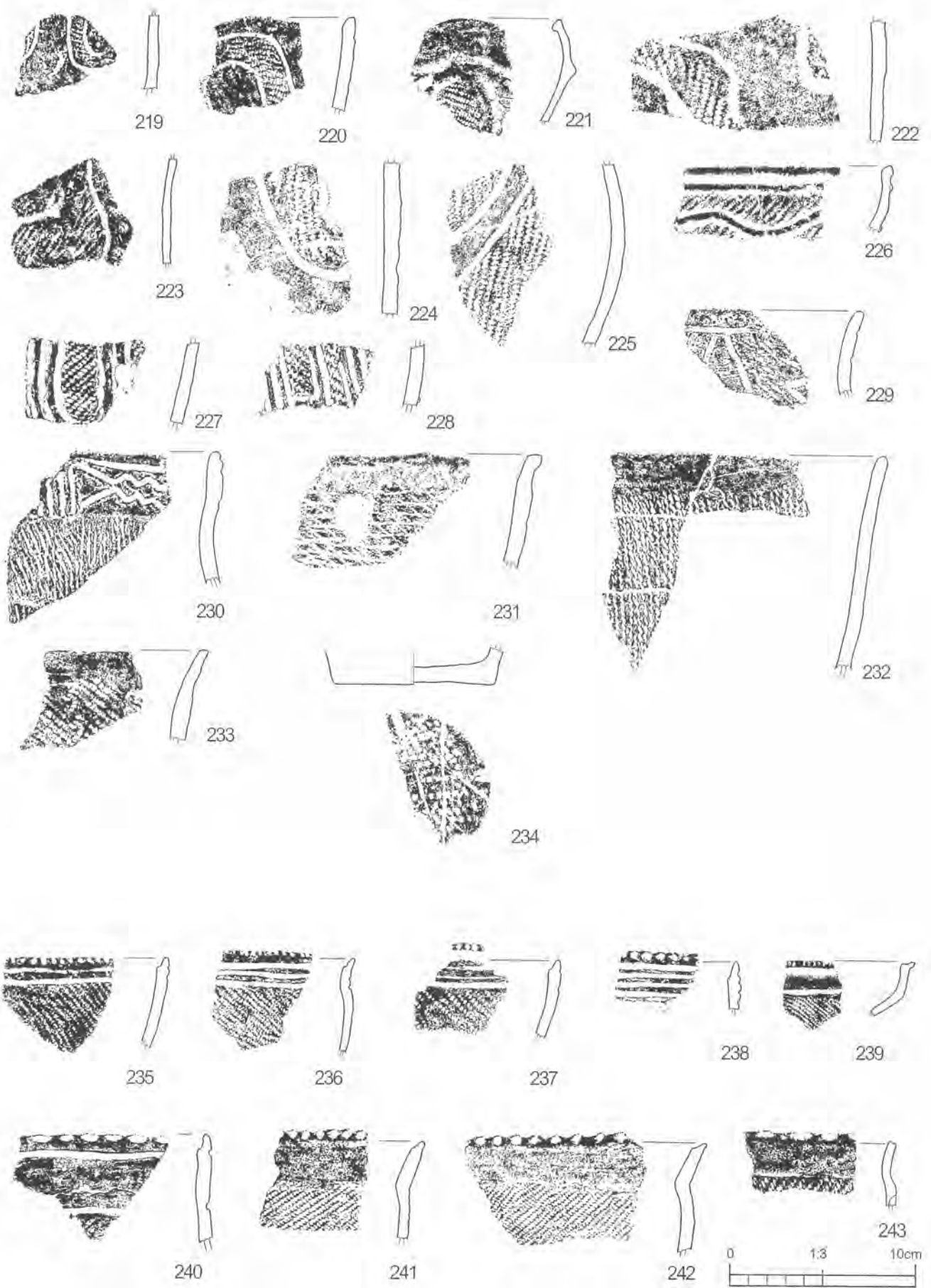


第140图 A-4区遺構外出土遺物・弥生土器(12)

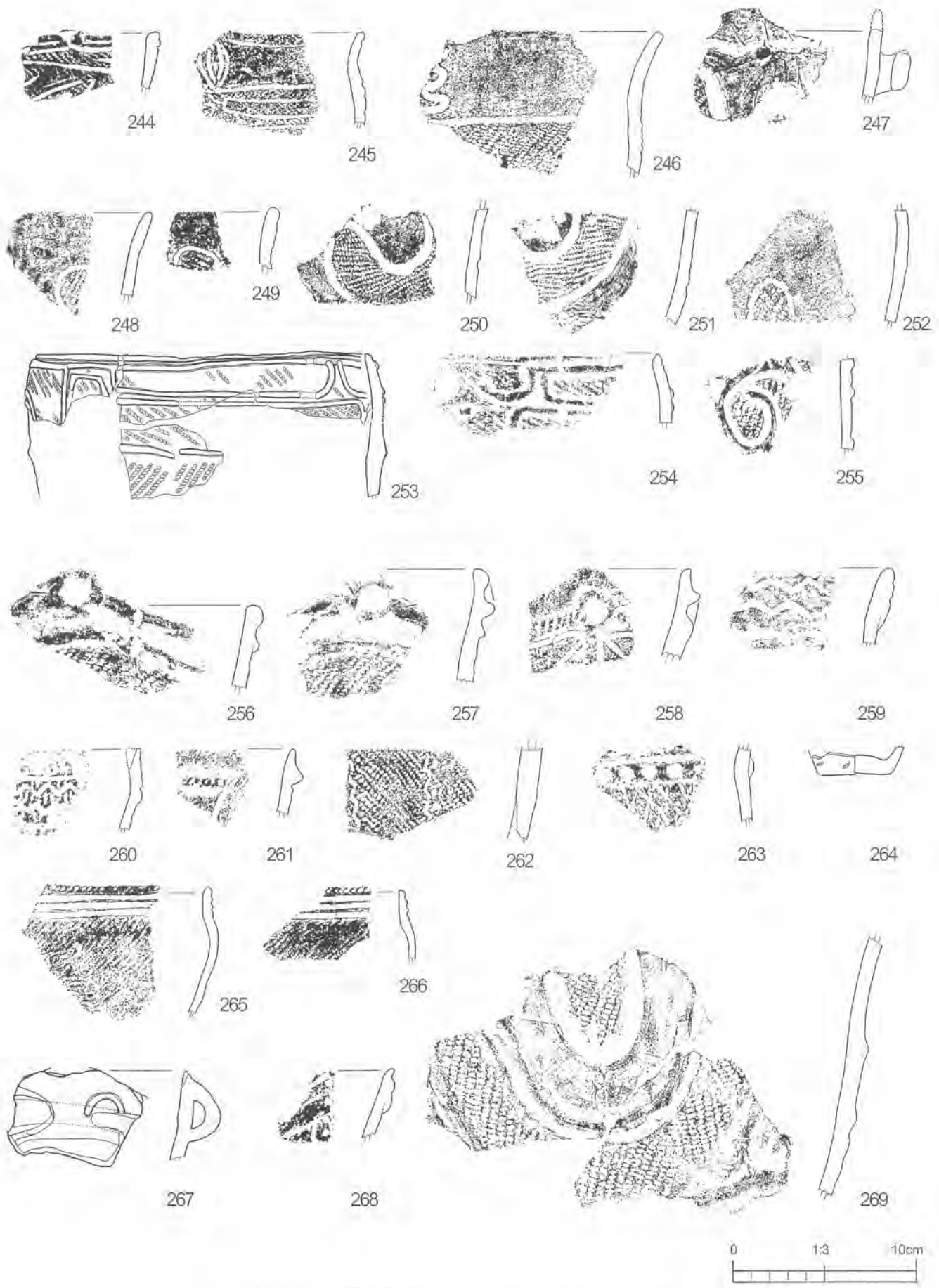


第141図 A-4区遺構外出土遺物・縄文土器(13)

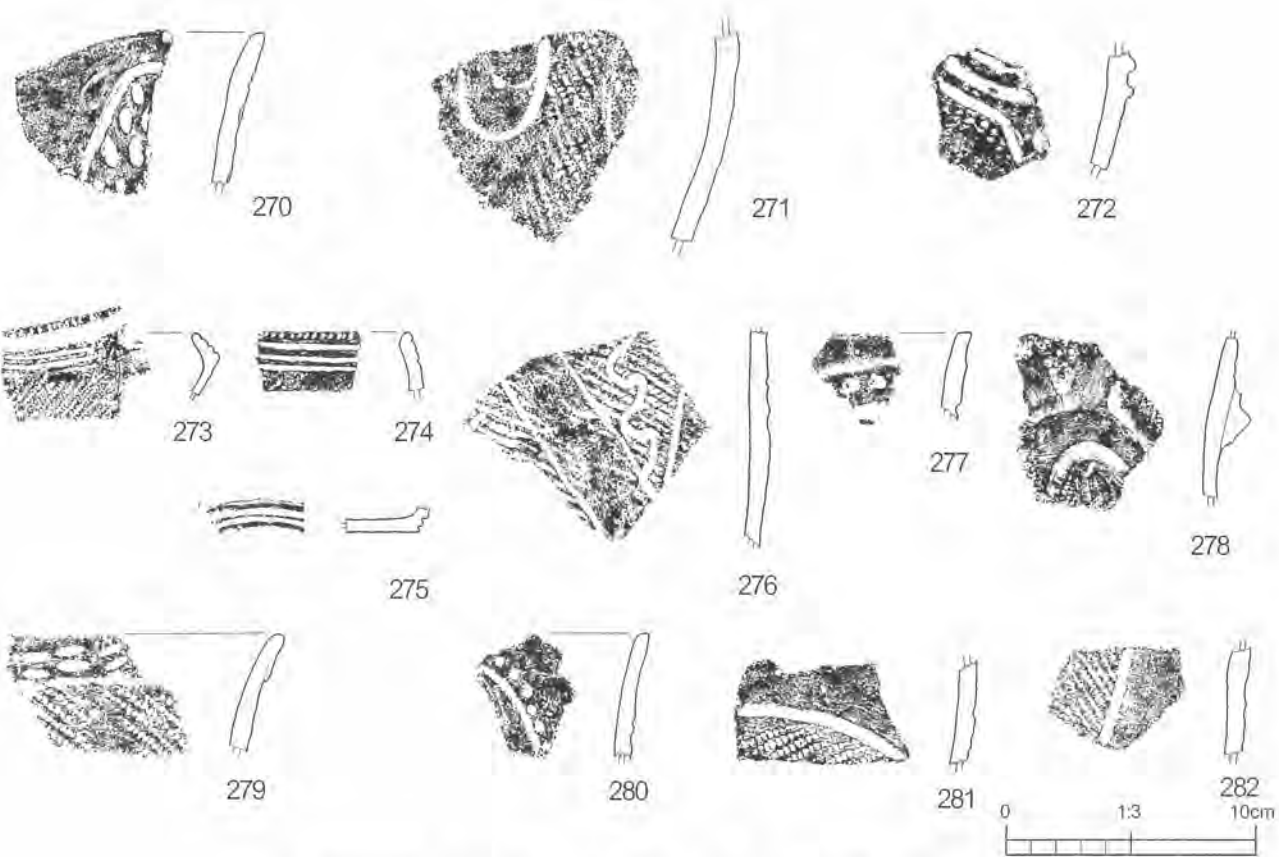




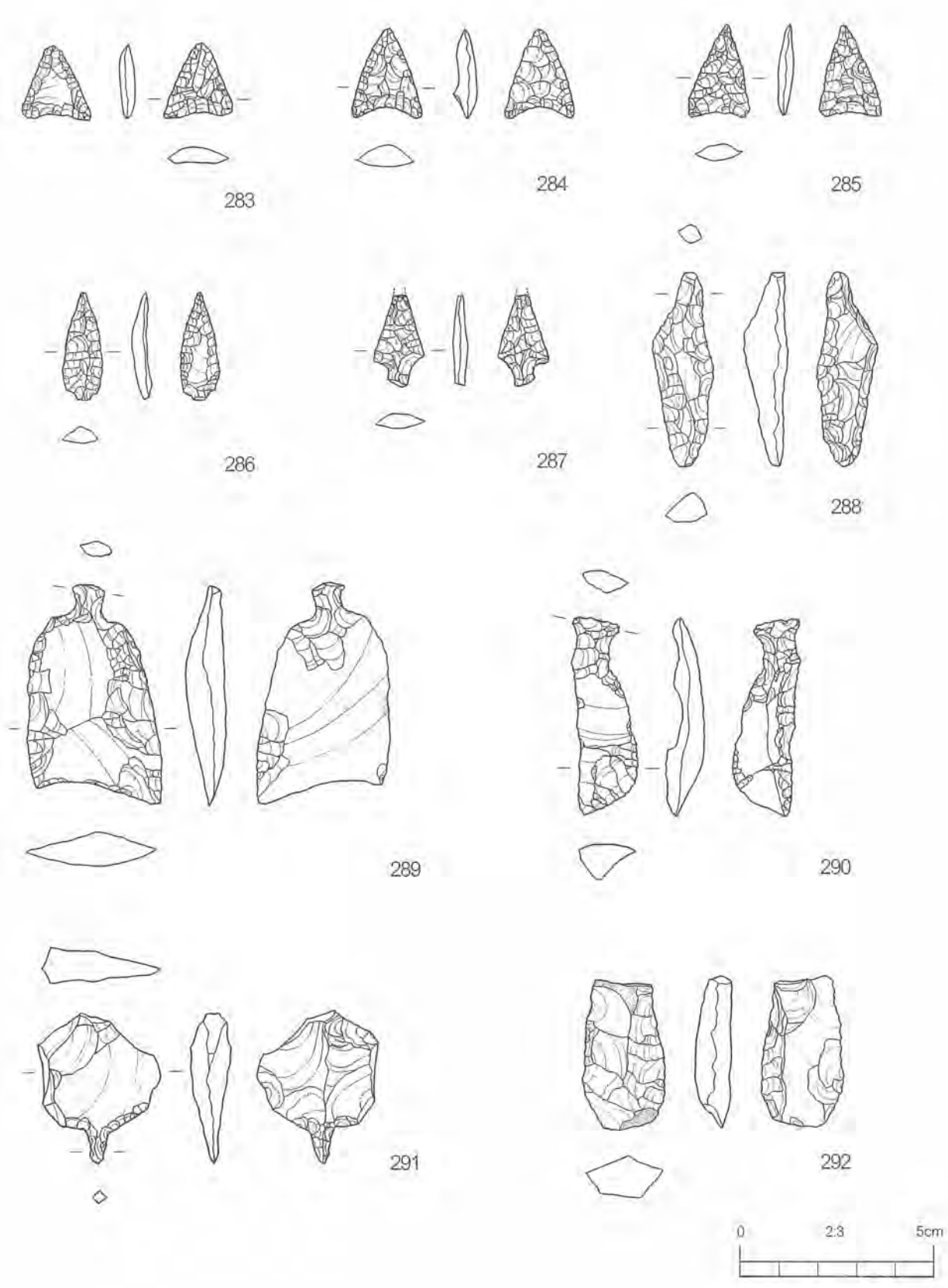
第142図 A-4区遺構外出土遺物・縄文土器 (14)



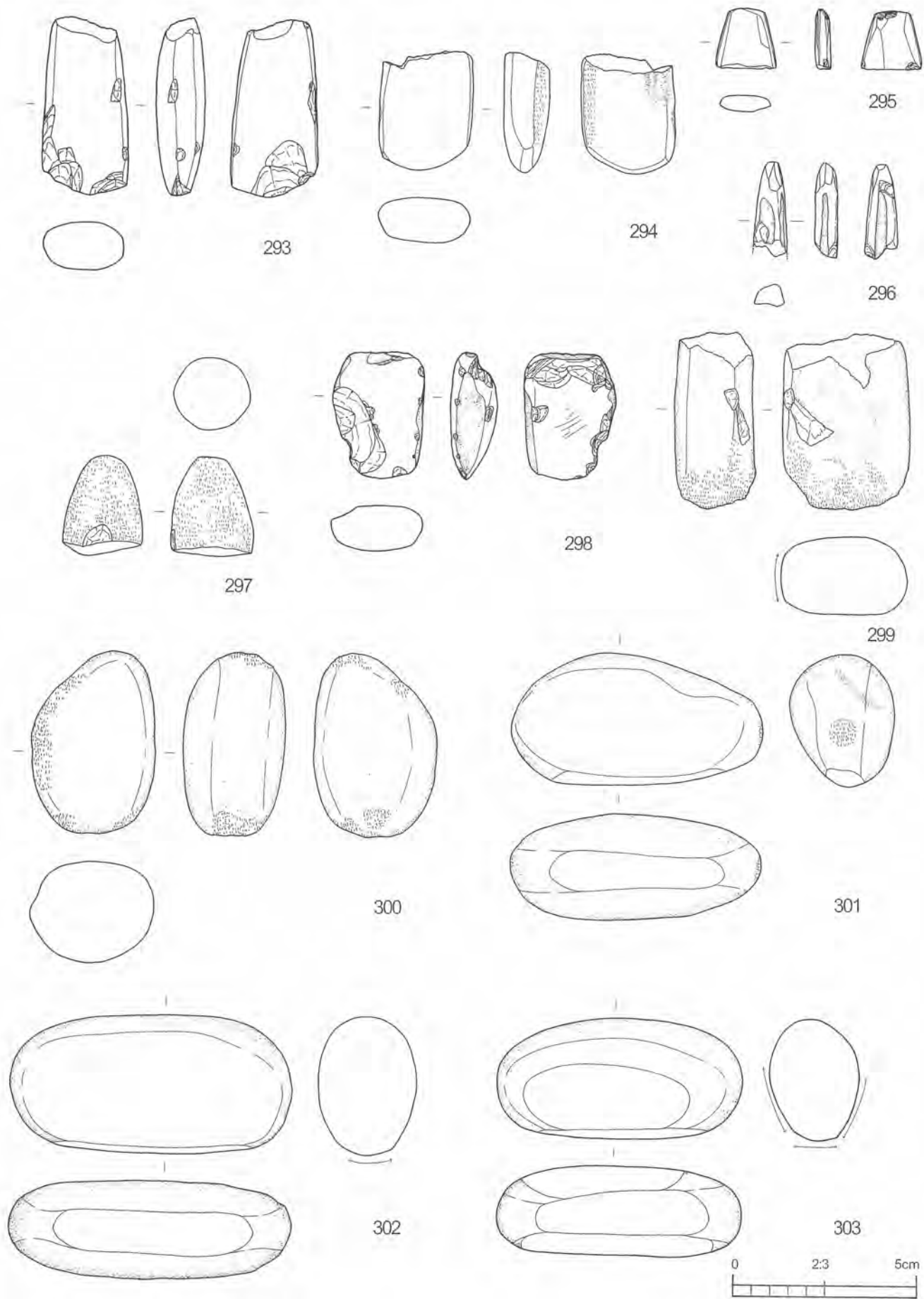
第143図 A-4区遺構外出土遺物・縄文土器 (15)



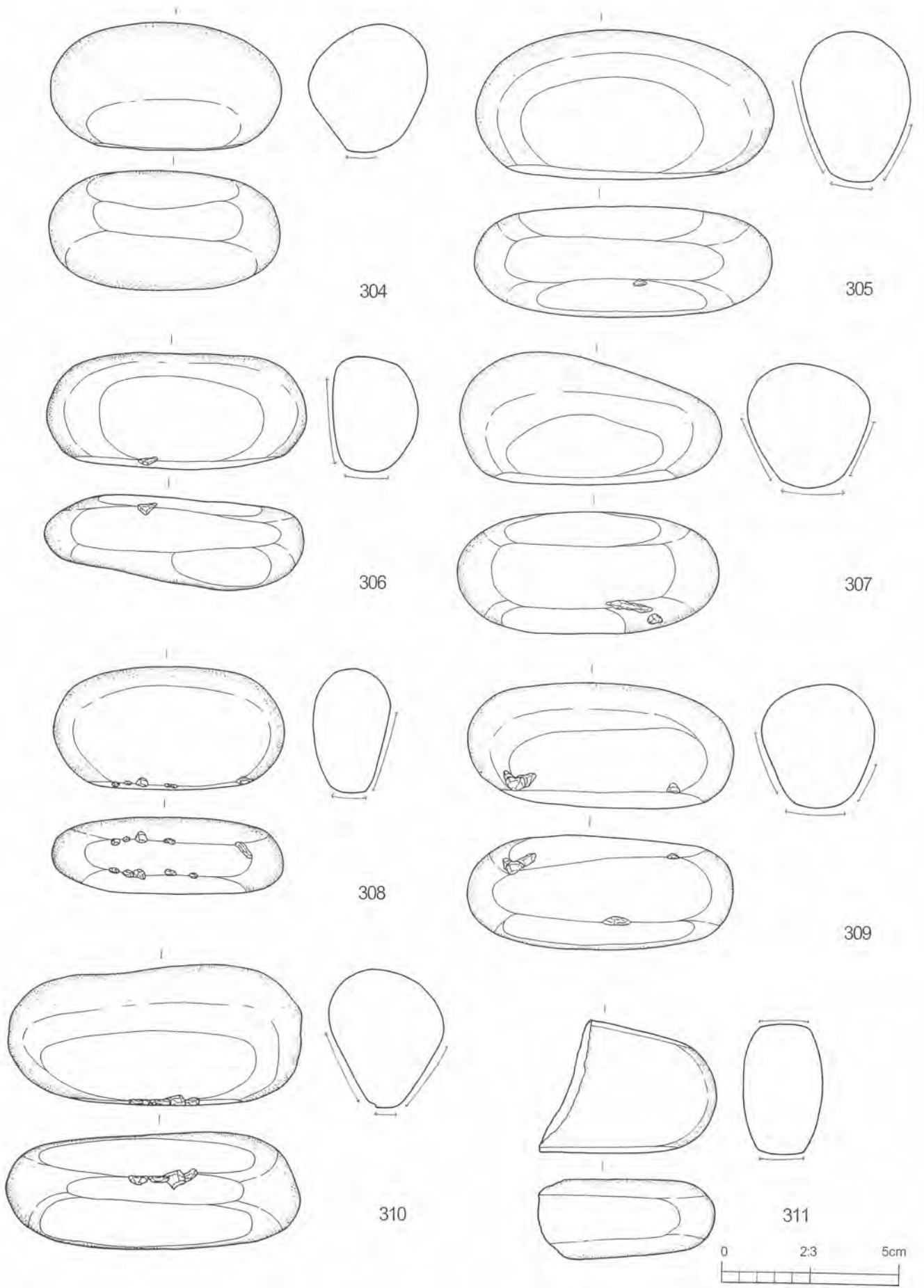
第144図 A-4区遺構外出土遺物・縄文土器(16)



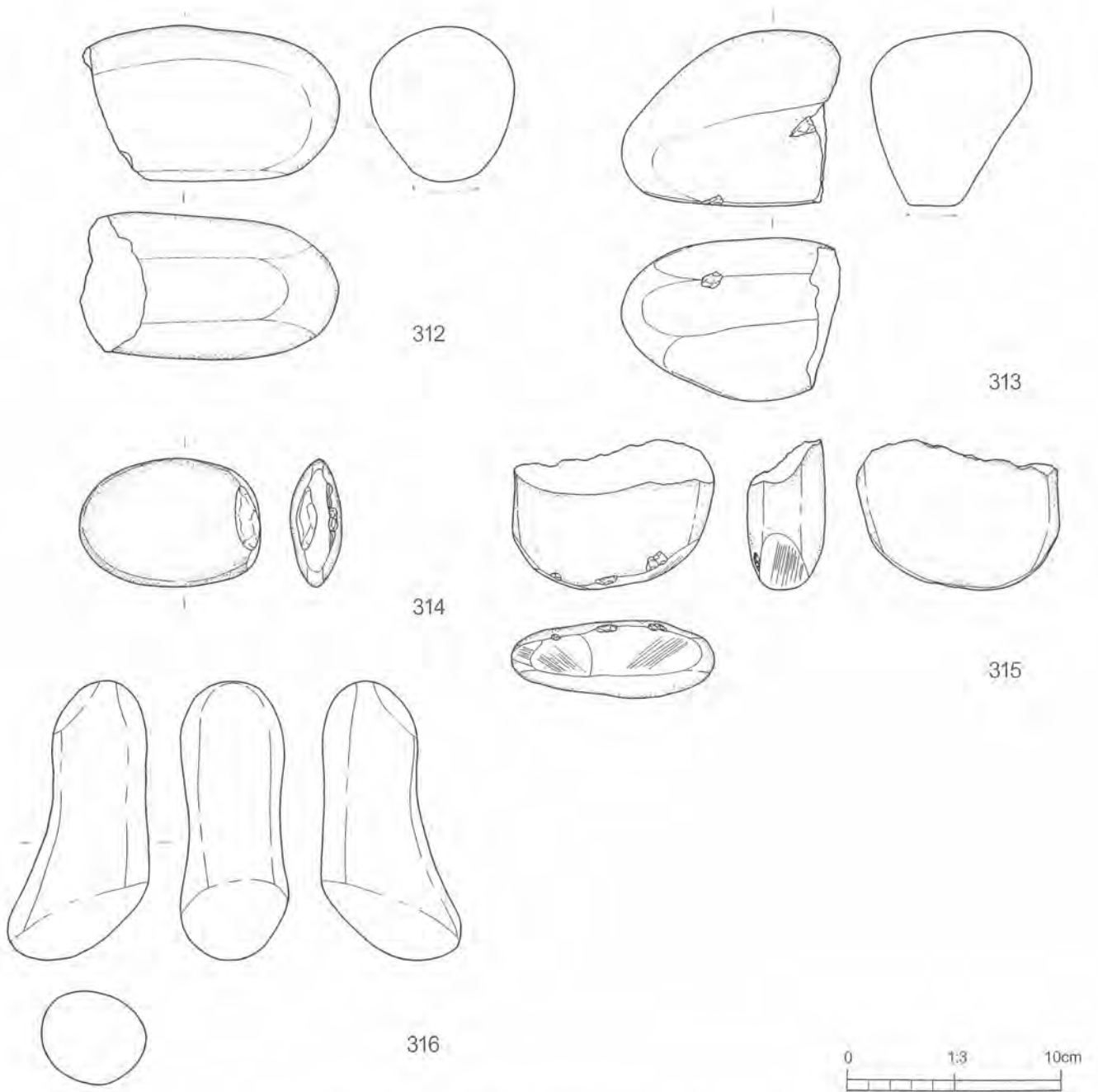
第145図 A-4区遺構外出土遺物・石器(17)



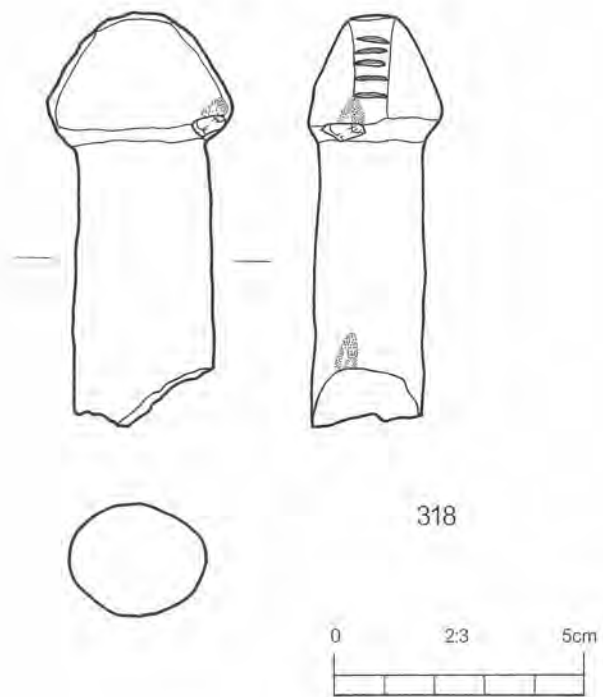
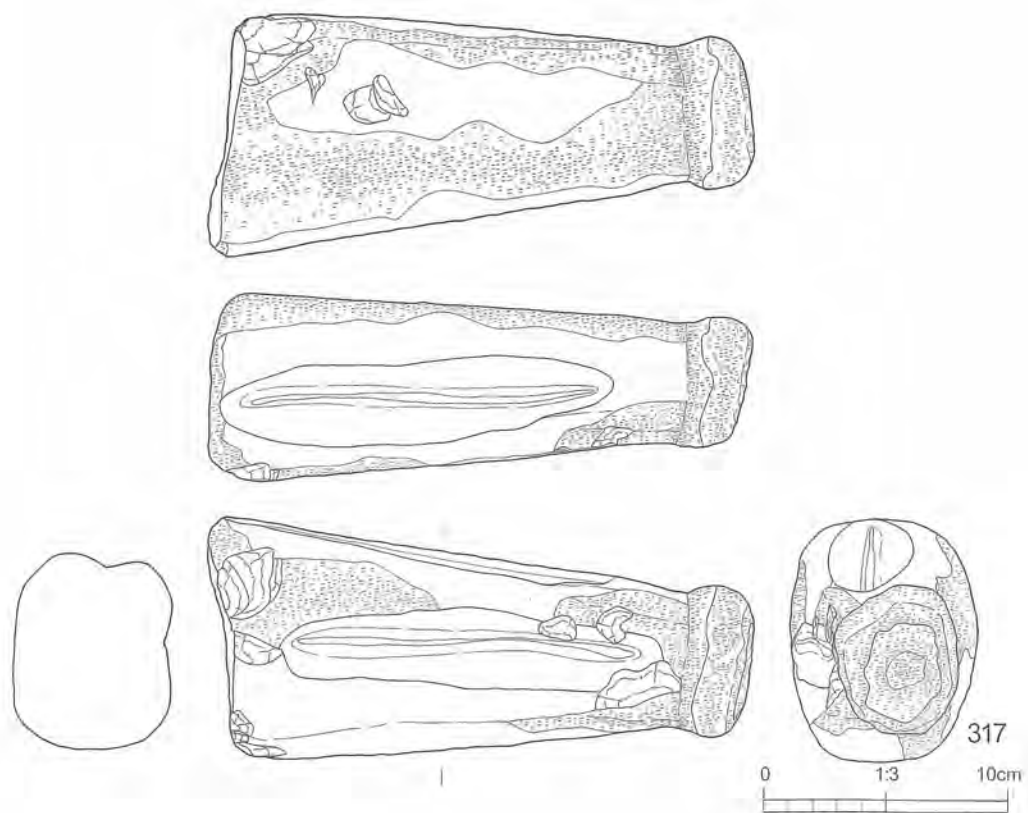
第146图 A-4区遺構外出土遺物・石器 (18)



第147图 A-4区遺構外出土遺物・石器(19)

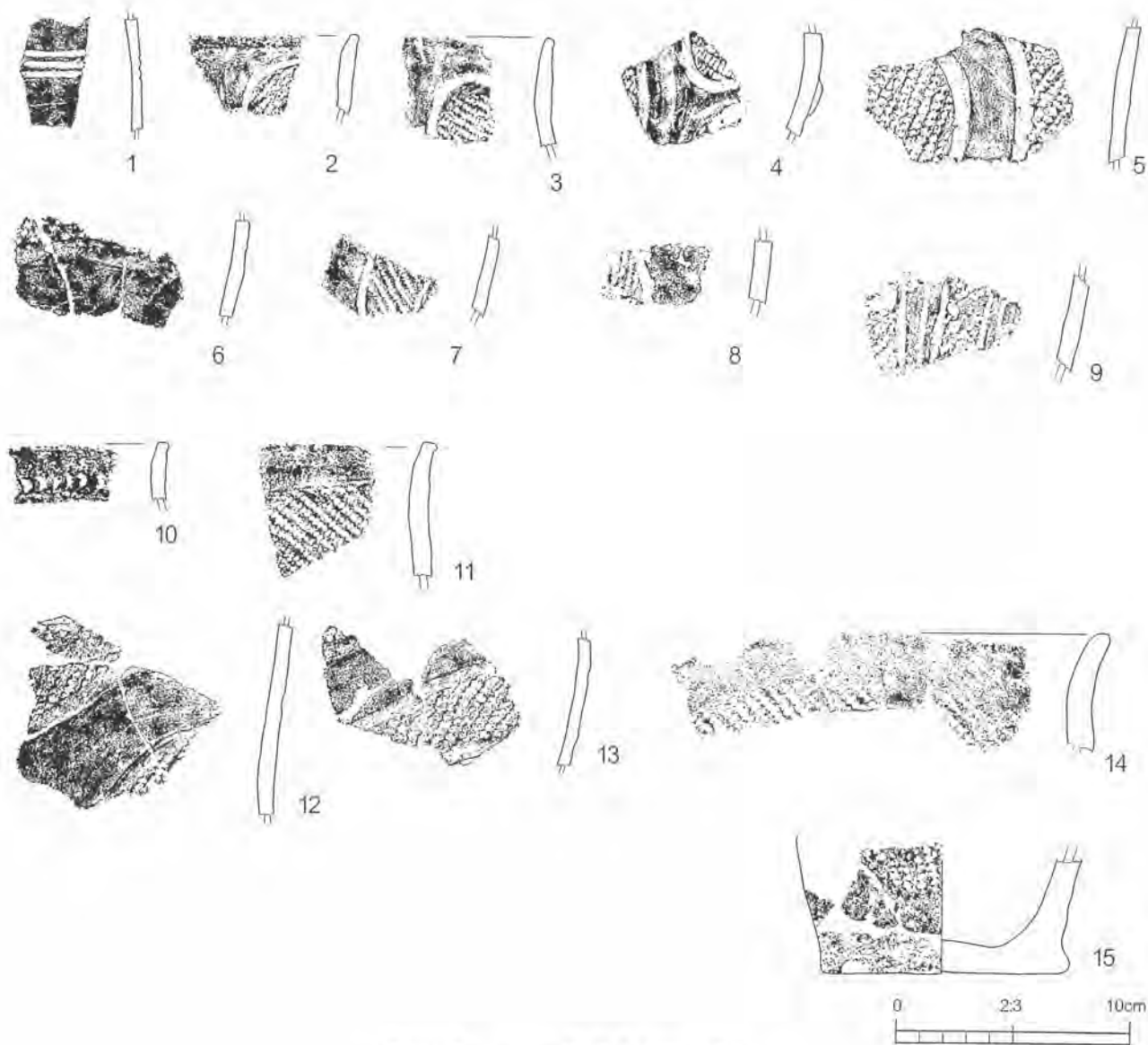


第148図 A-4区遺構外出土遺物・石器(20)



第149図 A-4区遺構外出土遺物・石製品(21)





第150図 A-2区遺構外出土遺物

A-2区遺構外出土遺物（第150図）

1～11は4層の出土である。

1は弥生土器である。高坏の脚部である。平行沈線で施文される。2～8は沈線による区画と磨消を伴う。6は隆起区画文である、9は隆沈線を伴う。10は口縁部に半円刺突列が施され、11は口縁部は無文、単節縄文の縦回転で施文される。

12～15は3層の出土である。

12、13は沈線と磨消を伴う。14は口縁部は無文、単節縄文の縦回転を伴う。15は深鉢の底部である。

b. B区遺構外出土遺物(第151~164図)

1~31は4層の出土である。

1~3は複合口縁である。1は隆帯に円形刺突を施す。2は隆帯を単節縄文の横回転で施文する。3は平行沈線の間を山形沈線で埋める。4は円形の凹みを刻みの入った平行沈線が囲む。5は沈線に刺突を加える。6は口唇部、口縁部に波状、平行の粘土紐を貼付する。7は波状口縁で、平行沈線の上に斜の沈線が入る。8は平行する隆線の上に粘土紐が縦位に貼付される。1~3は大木6式、6は大木4式に伴う。9~28は胎土に繊維を含む。9~14は不整撚糸文で施文され、14は単節縄文の横回転を伴う。15~18は単節縄文の横回転を施し、18は口縁部に押圧を加える。19、20は複節縄文の横回転である。9~14は大木2a式、15~20は大木1式に伴う。21~24羽状縄文を伴う。22は口唇部に切込みが入り、23、24は縄文の回転で施文される。25は撚糸文、26は単節縄文横回転に刺突を伴う。27は不整撚糸文である。28は山形口縁で、口縁部に指頭押圧を加える。羽状縄文を伴う。29は結節縄文の横回転を伴う。30は山形口縁の頂部で、口唇部に刺突が施され、木目状撚糸文を伴う。31は結節縄文の縦回転を伴う。

32~68は3層の出土である。

32~34は粘土紐による施文である。32は頸部のS字もしくは渦巻文の一部である。33は頸部の隆帯に斜の刻みを入れ、その下に細い粘土紐を貼付する。34は頸部の波状の隆帯である。32~34は大木4式に伴う。35は波状の複合口縁で、隆帯に原体圧痕を施す。36、37は平行沈線と山形沈線を伴う。

38~54は撚糸文を伴う。38、41~53は不整撚糸文、39、40は網目状撚糸文である。38~42、44、46は単節縄文の横回転、45は複節縄文の横回転を伴う。54は葺瓦状撚糸文を伴う。38~54は大木2a式に伴う。55は単節縄文の横回転で施文され、口唇部にやはり縄文を回転する。大木1式に伴う。56~60は羽状縄文を伴う。61は口縁部に撚糸文、62は撚糸文と羽状縄文を施文される。63は尖底土器の底部である。64は縄文の横回転に沈線と刺突を伴う。65は組紐による施文である。66、67は結節縄文の横回転を伴い、68は口唇部に刻みが入る。

69~220は2層の出土である。

69~72は弥生土器である。69は高坏で、沈線による区画と磨消を伴う。70は浅鉢で、頸部の沈線を境に体部を縄文で埋める。71は高坏の口縁部で、平行沈線で施文される。72は山形口縁の頂部で、S字状に成形される。

73~82は沈線による区画と磨消部への竹管刺突列の施文を伴う。縄文時代後期初頭に伴う。

83~102は沈線による区画と磨消を伴う。83、84は区画内を撚糸文で施文される。89は縦位のU字区画を伴い、90~97も縦位の楕円区画もしくは縦位の区画を施文される。92は隆起区画文である。83~88は大木10式、89~102は大木9式に伴う。

103~111は隆沈線を伴う。103、106、107、109は口縁部の内反する深鉢で、縦位の渦巻文を伴う。110、111も内反する口縁部に伴う刺突列である。103~111は大木8b式に伴う。

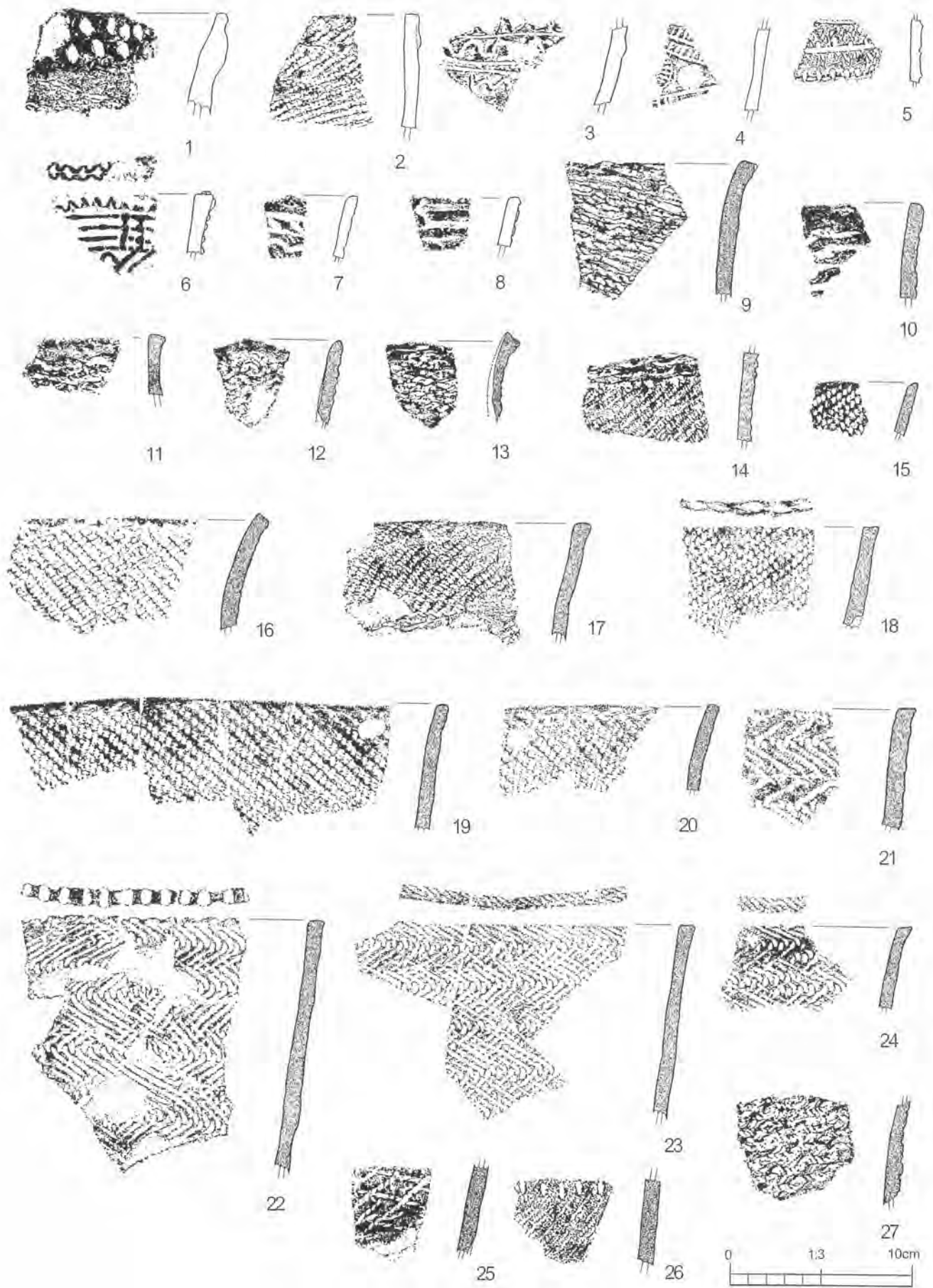
112は口縁部に横位、連弧状の原体圧痕を施す。113は口縁部に渦巻状の隆線と原体圧痕を伴う。114は山形口縁の頂部である。頂部に円形の凹みを設け、その下に横位の刺突列と沈線を施す。頸部に幅広の短い粘土紐を貼付し、縦位の刻みを入れる。その下に再度沈線を施す。115

は山形口縁で、頂部の下に楕円形の粘土紐を貼付し、刺突を加える。116は口縁部に貼付した円形の粘土紐に刻みを加える。隆帯に沿って沈線が引かれる。117～119は山形口縁である。117は頂部に凹みを持つ。縦位、斜位に貼付された粘土紐には刻みが入り、地文は結節縄文の縦回転である。118も頂部から縦位、斜位に貼付された粘土紐には縄文回転が施される。119の頂部は凹状に成形され、両端に円形の凹みをもつ。口唇部には原体圧痕が施され、口縁部に円形の隆線が貼付される。120は口唇部深い溝が入り、口縁部には橋状の飾り付けられ、縦位、横位の原体圧痕が施される。121は山形口縁の頂部に円形の凹みが付けられ、口縁に沿って貼付された隆帯には刻みが入る。隆帯に沿って沈線が引かれ、口縁部内面には隆帯が外面と同じ形で貼付された剥離痕が残る。122は凸状の山形口縁と思われる。口唇部には刻みが入り、口縁部側面には、円形の凹みが付く。頸部に粘土瘤を貼付し、刺突を加える。123は沈線間に貼付した隆帯に刺突を加える。124は横位に3本の隆線が貼付され、上位の隆線には半円の刺突を加える。地文は結節縄文の縦回転である。125は平行沈線間に山形沈線で埋める。126、127は平行沈線間を連続弧状沈線で埋める。128は斜の沈線と沈線間に交互刺突を施す。129は横位、縦位に貼付された隆帯に原体圧痕を施す。130は平行沈線間を山形沈線で埋める。131は平行する隆線の間を山形隆線で埋める。112、113は大木7b式、114～131は大木7a式に伴う。

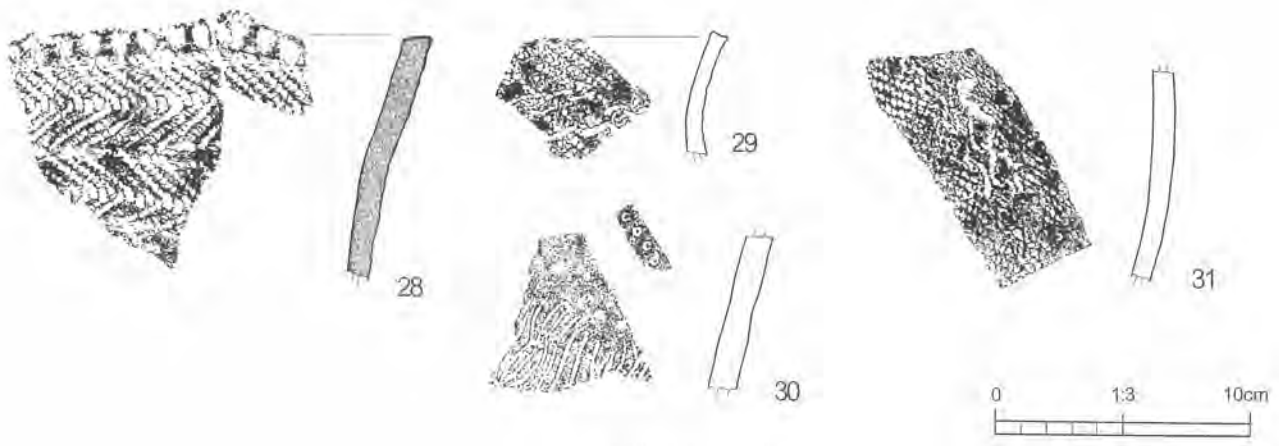
132は口縁部はラッパ状に大きく外反し、口唇部は水平となる。胴部のふくらみは小さい。頸部に細い粘土紐で渦巻文、波文が施される。隆線の上下に刺突列を加える。133は口縁部は短く外反し、胴部はふくらみをもつ。134は口縁部は無文で、口唇部に山形状の粘土紐が貼付される。135は口縁部は外反し、頸部の傾きは少なく胴部はふくらむ。施文は粘土紐による渦巻文、波状文である。136は口縁部内面に波状の粘土紐が貼付される。137、138は口縁部に波状、渦巻状の隆線が貼付される。139は口縁部は大きく外反し、胴部はふくらむ。平行する波状、水平の沈線と竹管による円形刺突列が施文の主体をなしているが、一部に縦位の波状？の隆線が貼付される。地文は結節縄文の横回転である。140～145は135などと同施文の体部片である。146は円形の幅広の隆線に円形の刺突を加える。147、148は、波状の沈線と竹管による円形刺突をともなう。139と同一個体か。132～138、140～146は大木4式に伴う。139、147、148については、おおむね大木3～4式に相当すると思われる。

149～173は胎土に繊維を含む。149～159は不整撚糸文で施文され、149～153は単節縄文の横回転を伴う。160～163は撚糸で施文され、160、161は葺瓦状撚糸文、162は木目状撚糸文である。164～166は単節縄文の横回転で施文される。168～173は羽状縄文である。149～163は大木2a式、164～166は大木1式に伴う。

174は波状の複合口縁で、口縁部の刺突列の下に横位と斜位の沈線を伴う。178は口縁部部の斜の沈線の間を刺突で埋める。176～180は沈線文である。176、178は山形、177、179は平行沈線を伴う。180は平行沈線をジグザグ沈線で連絡する。181、182は竹管による円形刺突を伴う。183は沈線による区画か。184は口縁部に刺突列を伴う。186は撚糸の原体圧痕で施文される。187～191は頸部に隆帯をもつ。いずれも隆帯に刺突を加え、187～189は網目状撚糸文で施文される。192～196は口唇部に刻みもしくは抉りが入る。197は山形口縁の頂部で、ボタン状に成形される。198はV字状の隆帯を伴う。



第151图 B区遺構外出土遺物(1)



第152図 B区遺構外出土遺物(2)

199～212は結節縄文で施文される。212をのぞいて縄文を横回転する。213は櫛目状の沈線で施文される。214は沈線文というよりはヘラミガキ状の調整痕に類似する。215は底部の張出しがなく、縦位の沈線文である。218は小形の深鉢である。単節縄文の横回転で施文される。216、217、219、220は深鉢の底部である。217は周縁部に、219は全面に網代痕を残す。

221～236は1層の出土である。

221は口縁部が内反する深鉢で、隆沈線で縦位の渦巻文を施文する。222は波状口縁で、口縁部は横位、斜位の原体圧痕が施され、頸部からは単節縄文の縦回転である。223は波状口縁で、横位、斜位の原体圧痕を伴う。224は山形の複合口縁で、口縁部の山形の隆線に沿って原体圧痕が施される。225は横位、縦位の沈線に山形沈線が伴う。226は斜位の沈線である。227は口唇部に押圧を加え、無節縄文の縦回転と単節縄文の横回転で施文する。229は口唇部に押圧を加え、網目状撚糸文の施文である。228、230～233は胎土に繊維を含む。228は口唇部に刻みが入り、S字状連鎖沈文と単節縄文の横回転を伴う。230は口唇部に刻みが入り、単節縄文の横回転を伴う。231、232は羽状縄文である。233は単節縄文の横回転に竹管の円形刺突列が伴う。234、235、236は撚糸文を伴う。

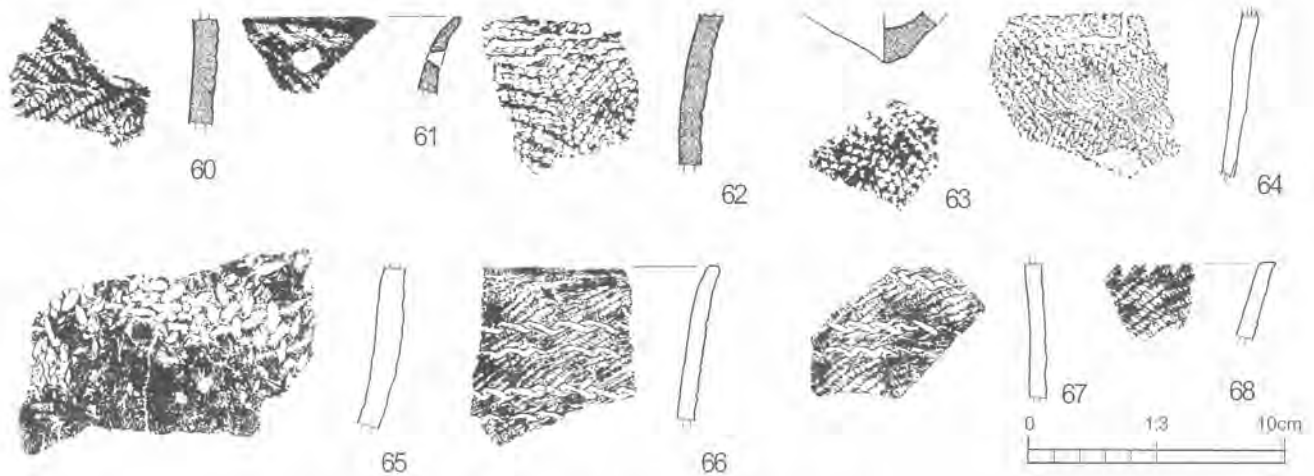
237～276は石器である。

237～242は4層の出土である。

237～239は石鎌である。237、238は凹基で、二等辺三角形型である。237は平側、238はわずかにふくらみをもつ。いずれも片面に未調整の部分を残す。239は凸基、二等辺三角形型である。側縁は平らである。



第153图 B区遺構外出土遺物(3)



第154図 B区遺構外出土遺物(4)

240～242は石匙である。いずれも縦型である。240は両面の全面を加工する。241、242は片面の周縁を加工し、242は刃部に末端を尖らせる。

243、244は3層の出土である。

243は凹基で、正三角形型である。側縁は平らである。244は平基で、鋭角三角形型である。側縁は平らである。

245～264は2層の出土である。

245～253は石鏃である。245～249は凹基であるが、抉りは小さい。いずれも二等辺三角形型である。側縁は、248がふくらみをもつが他は平側である。250、251は平基で、二等辺三角形型である。側縁はいずれも平らである。252、253は比較的大形で、凹基である。鋭角三角形型で、側縁は平側である。

254～259は石匙である。254は横型、255～259は縦型である。255は両面の周縁を加工する。255は片面の周縁と片面の全面を調整し、刃部末端を尖らす。256～258は両面の周縁を加工し、256、258は刃部末端を尖らす。259は両面の全面を調整し、刃部末端を方形に成形する。

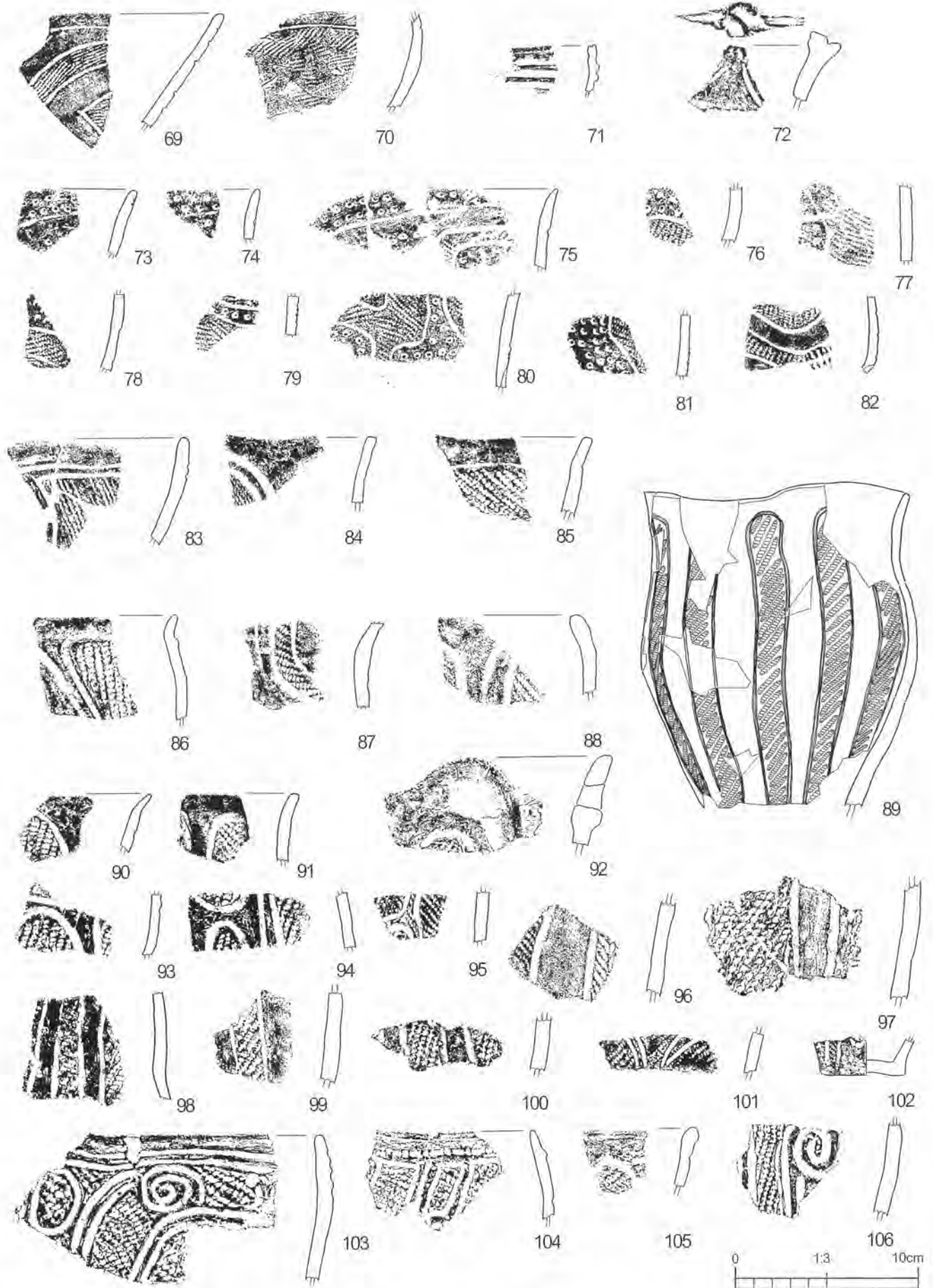
262は石錐と思われる。つまみ部、錐部の境界は不明瞭である。

260、261は楕円形で、両面の周縁を調整し、端部を尖らし刃部をつくりだす。263、264は円形にちかく、両面の周縁を調整し、凸刃をつくりだす。

265～273は1層の出土である。

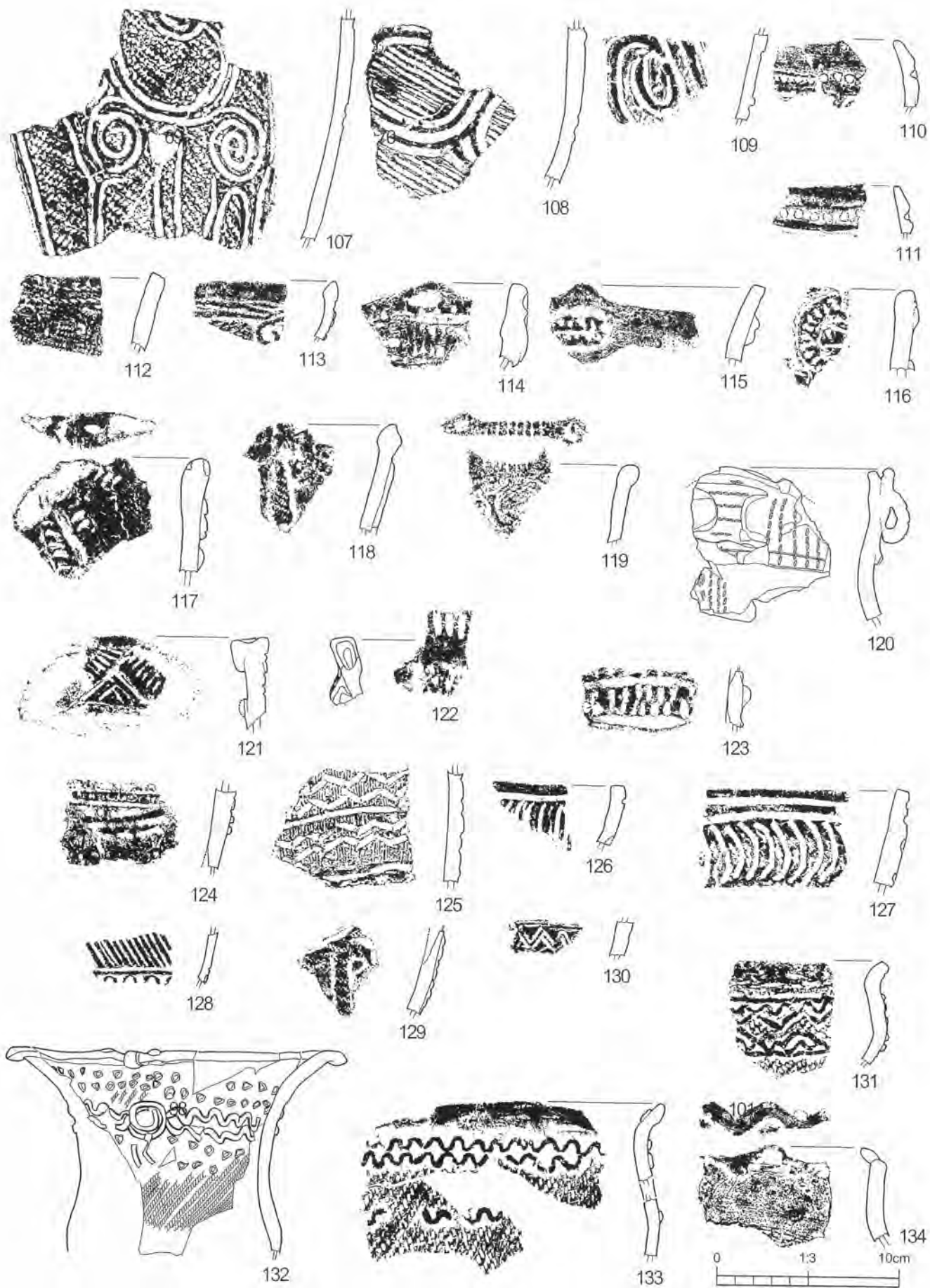
265～271は石鏃である。265～268は凹基である。265は正三角形型で、側縁はふくらみをもつ。266、267は二等辺三角形型で、側縁はまるみをもつ。268は鋭角三角形型で、側縁は平側である。269～271は凸基である。いずれも二等辺三角形型で、側縁は平側である。

272は両面の周縁を加工し、凹刃、凸刃をつくる。273は片面の周縁を調整し、凸刃をつくりだす。

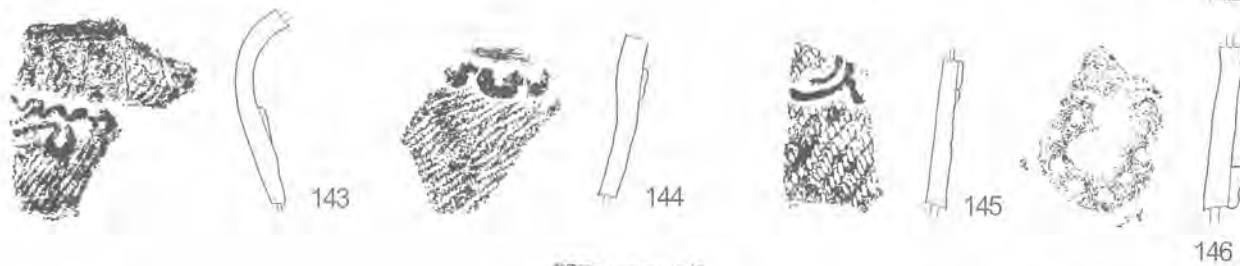
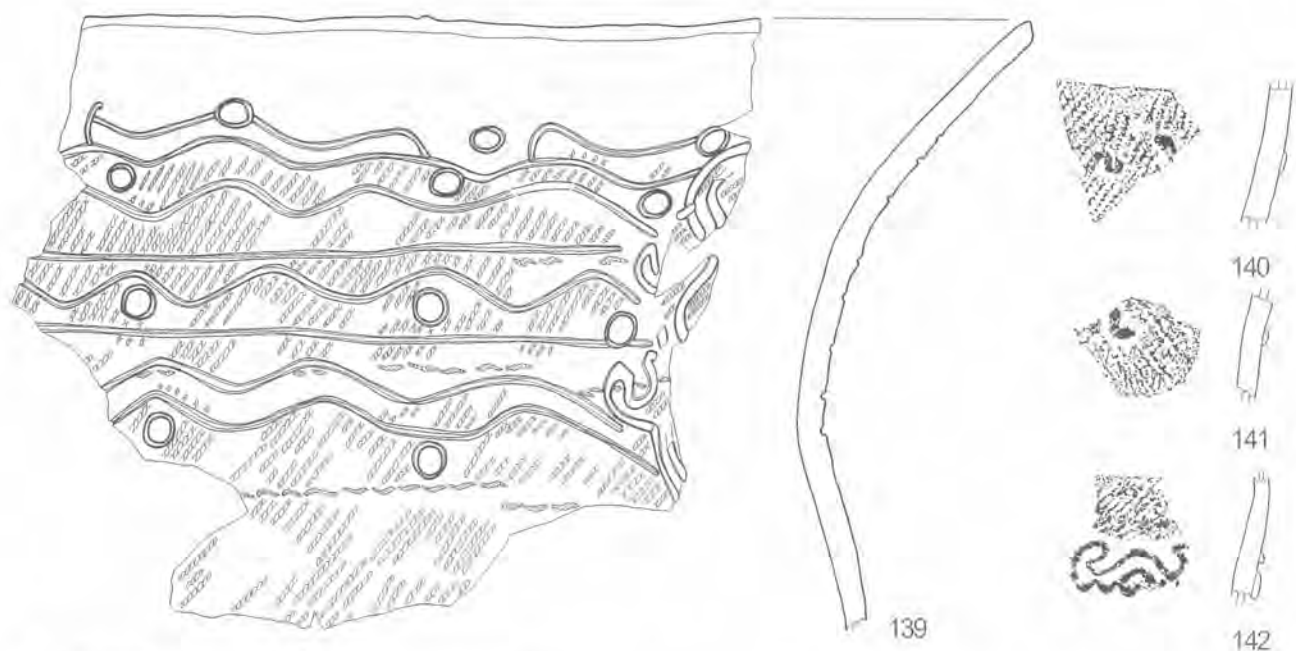
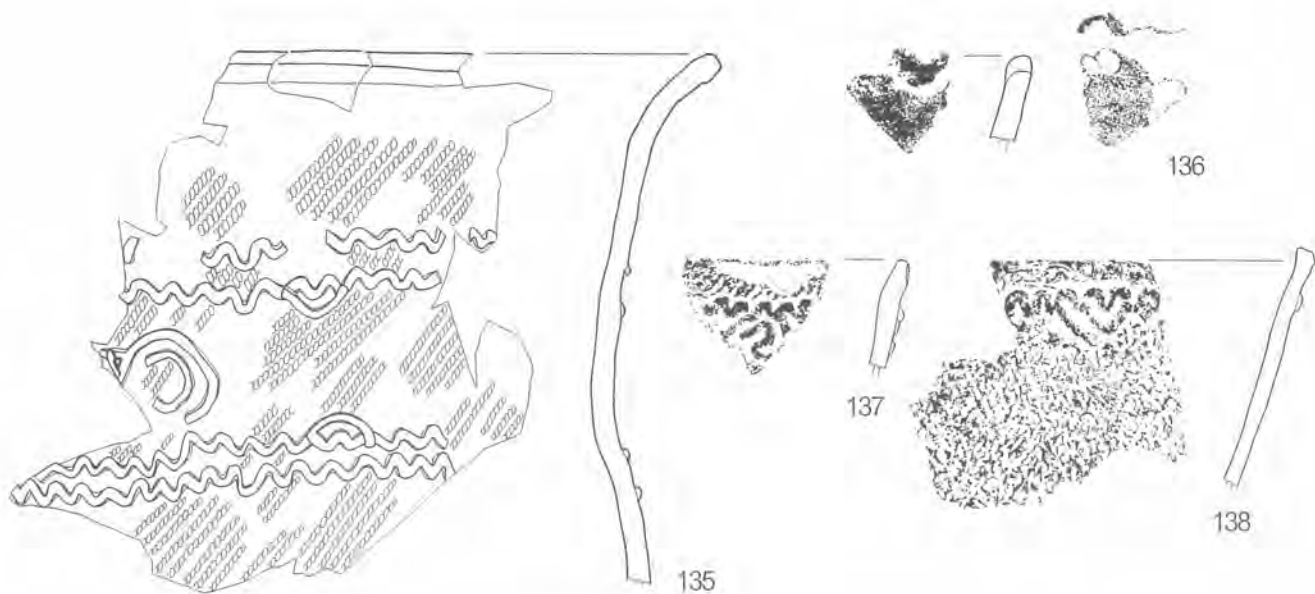


第155图 B区遺構外出土遺物(5)

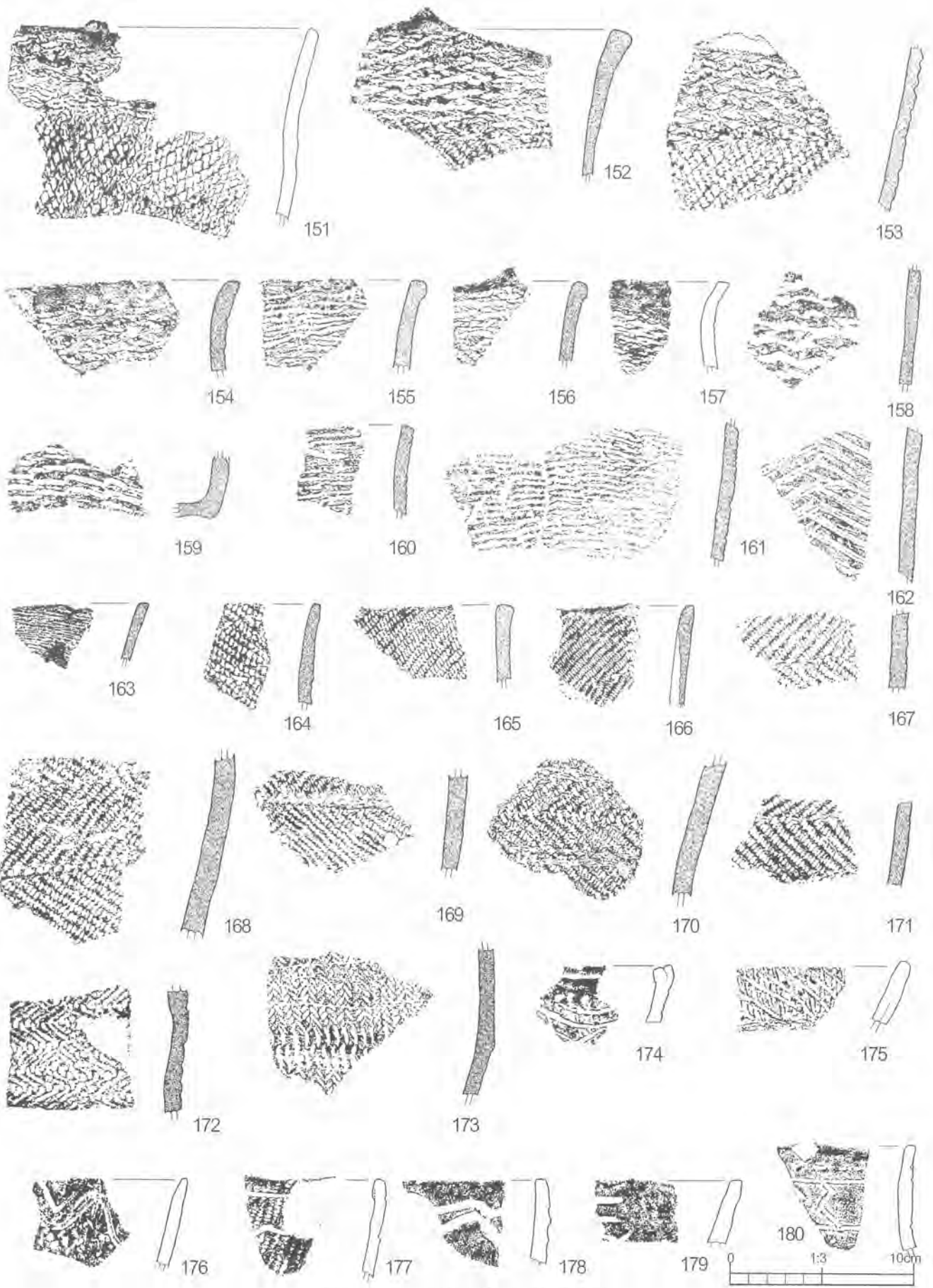




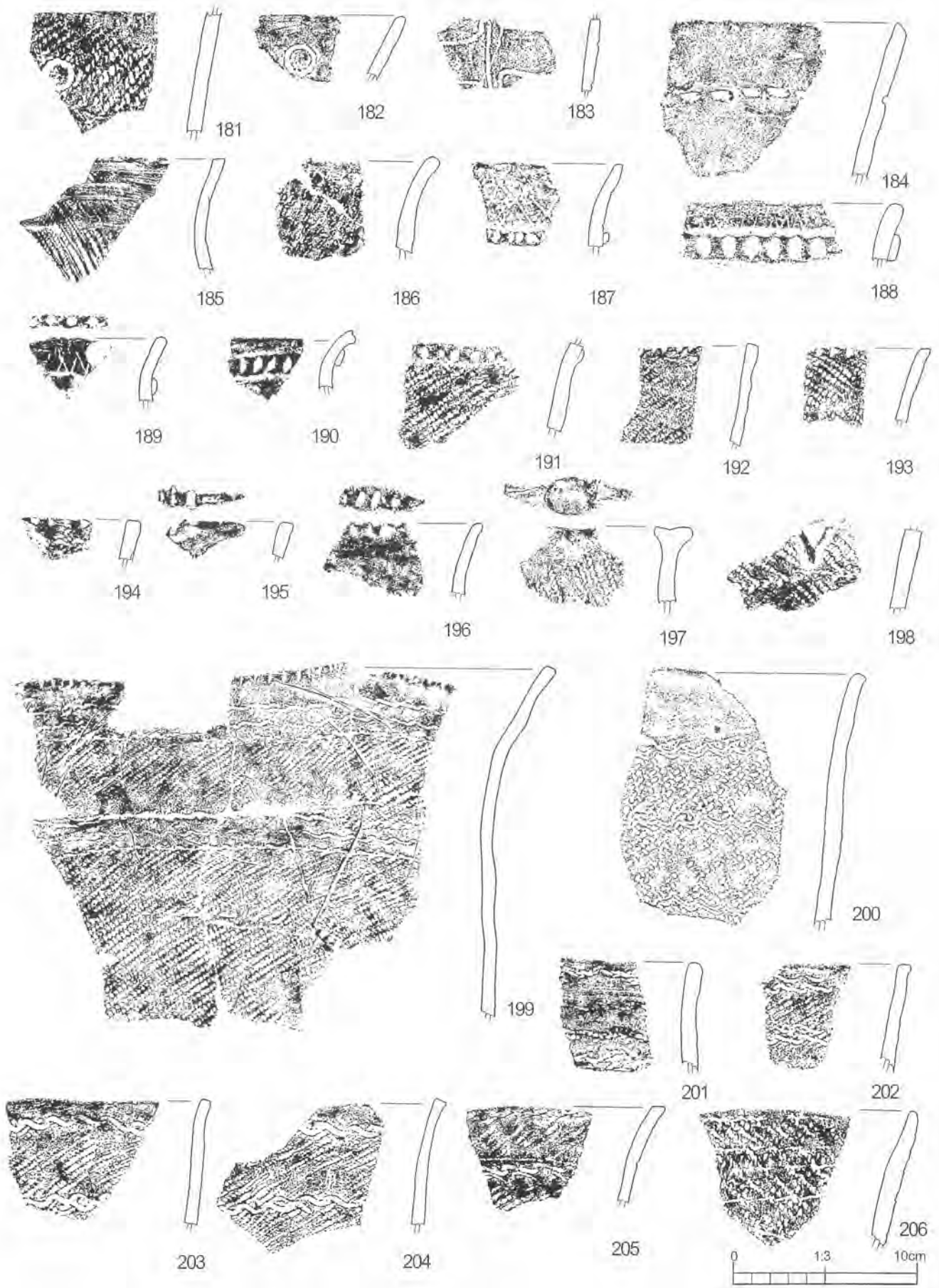
第156图 B区遺構外出土遺物(6)



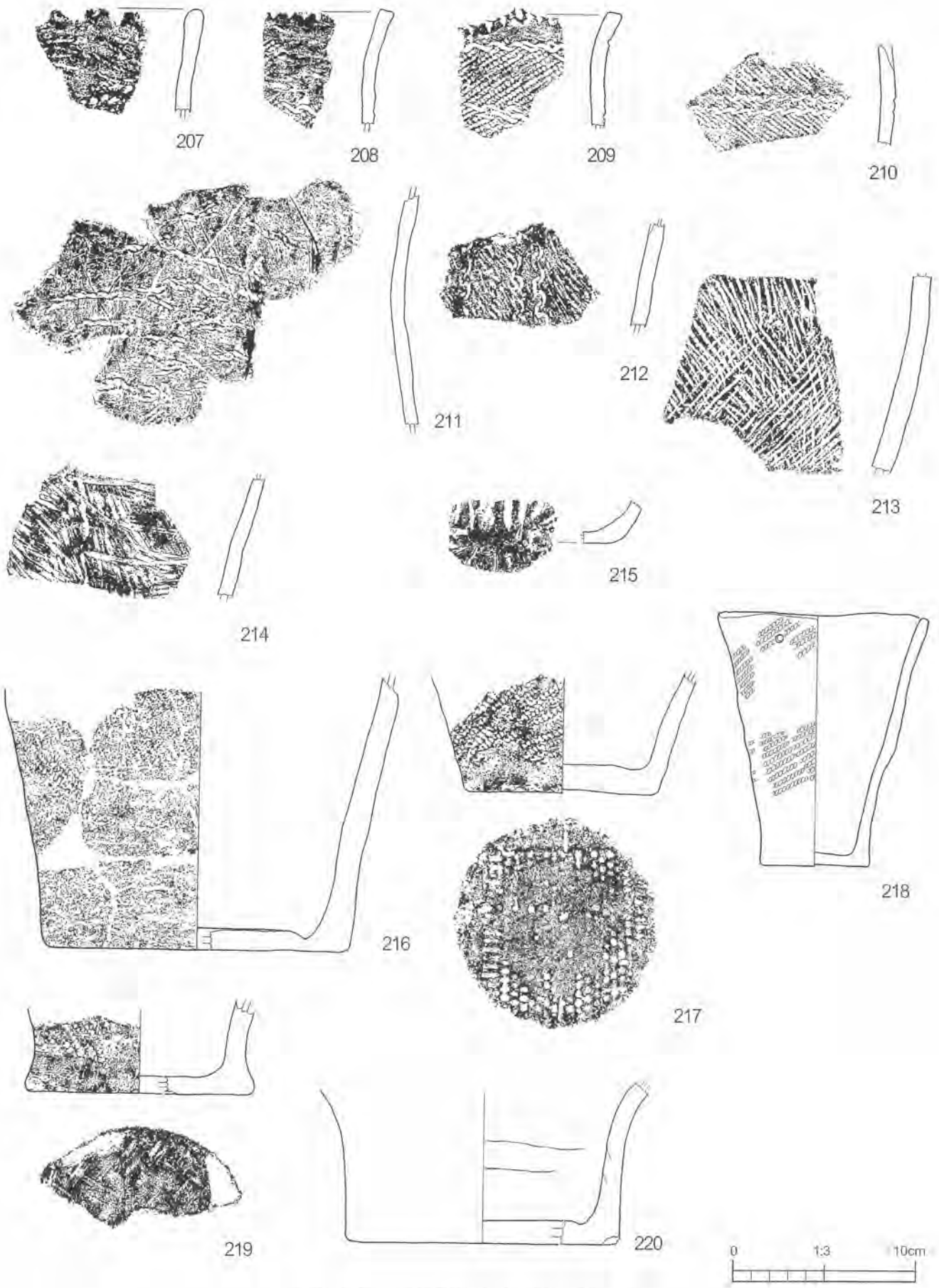
第157图 B区遺構外出土遺物 (7)



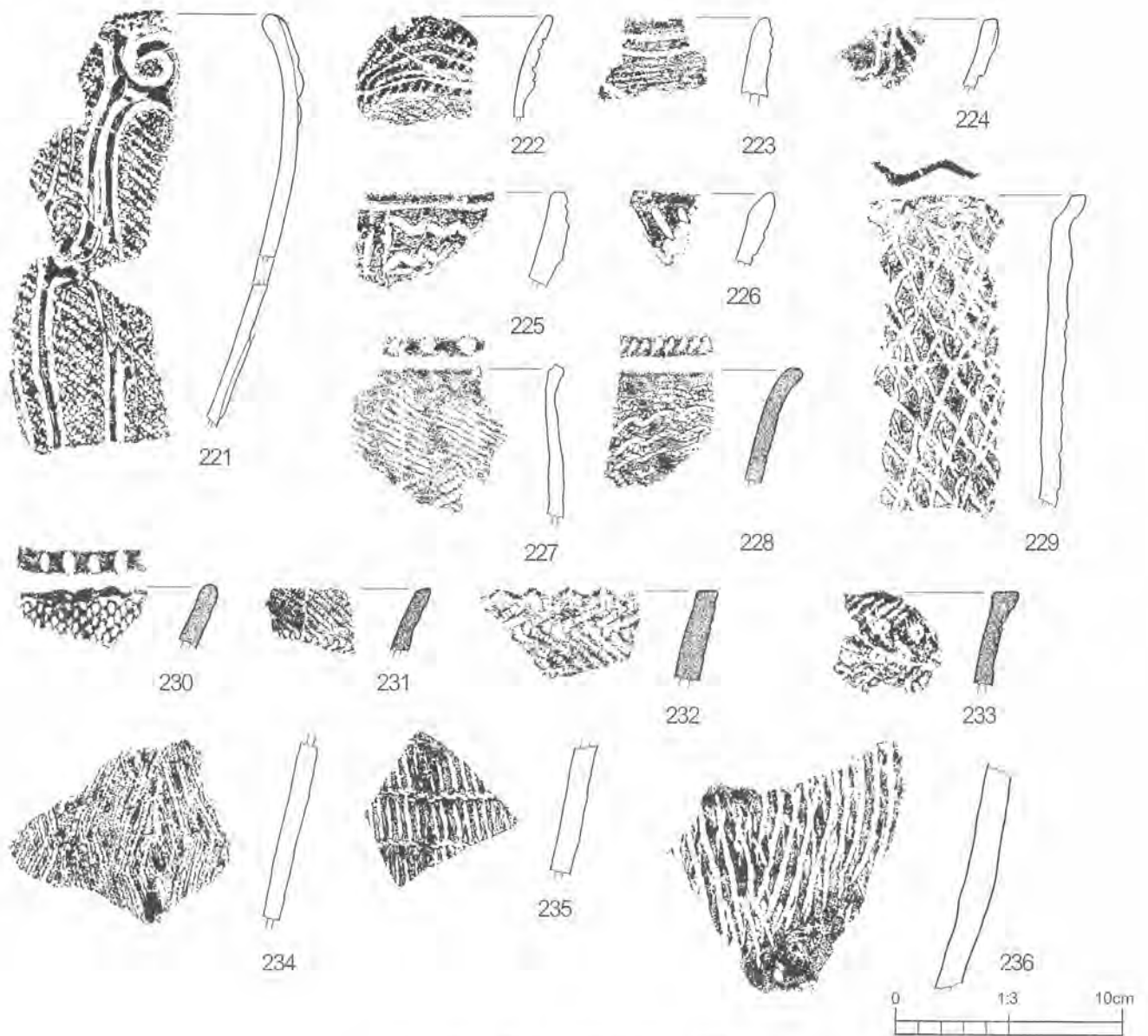
第158图 B区遺構外出土遺物(8)



第159图 B区遺構外出土遺物(9)



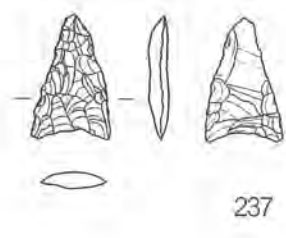
第160图 B区遺構外出土遺物(10)



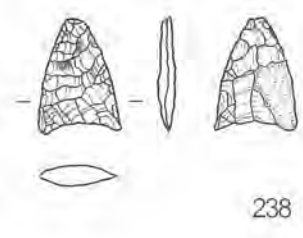
第161図 B区遺構出土遺物(11)

274、275は磨製石斧の頭部である。274は頭部は平らで胴部はややふくらみをもち、断面形は楕円形である。275は頭部は平らで、胴部は広くなる。断面形は、隅丸の方形にちかい。

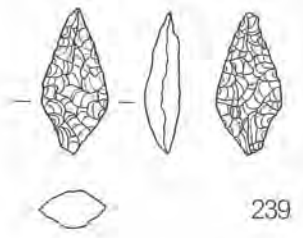
276は石剣である。下位に先細りになり、切っ先に近い部分と思われる。断面形は凸レンズ状である。



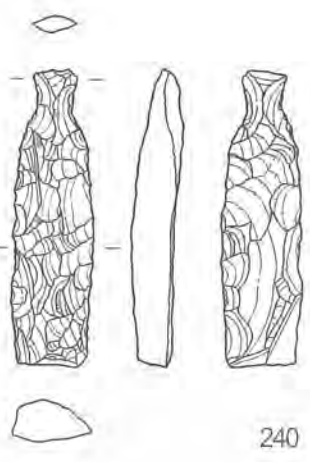
237



238



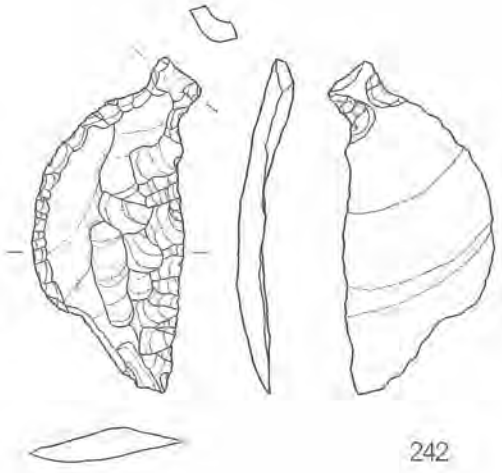
239



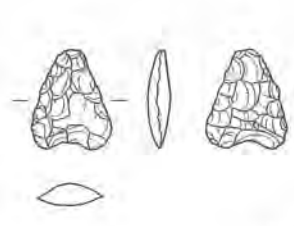
240



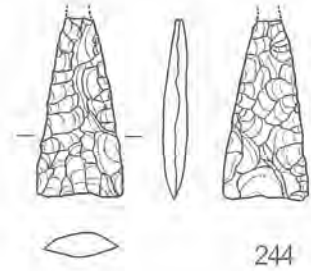
241



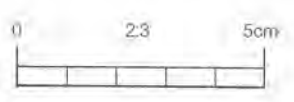
242



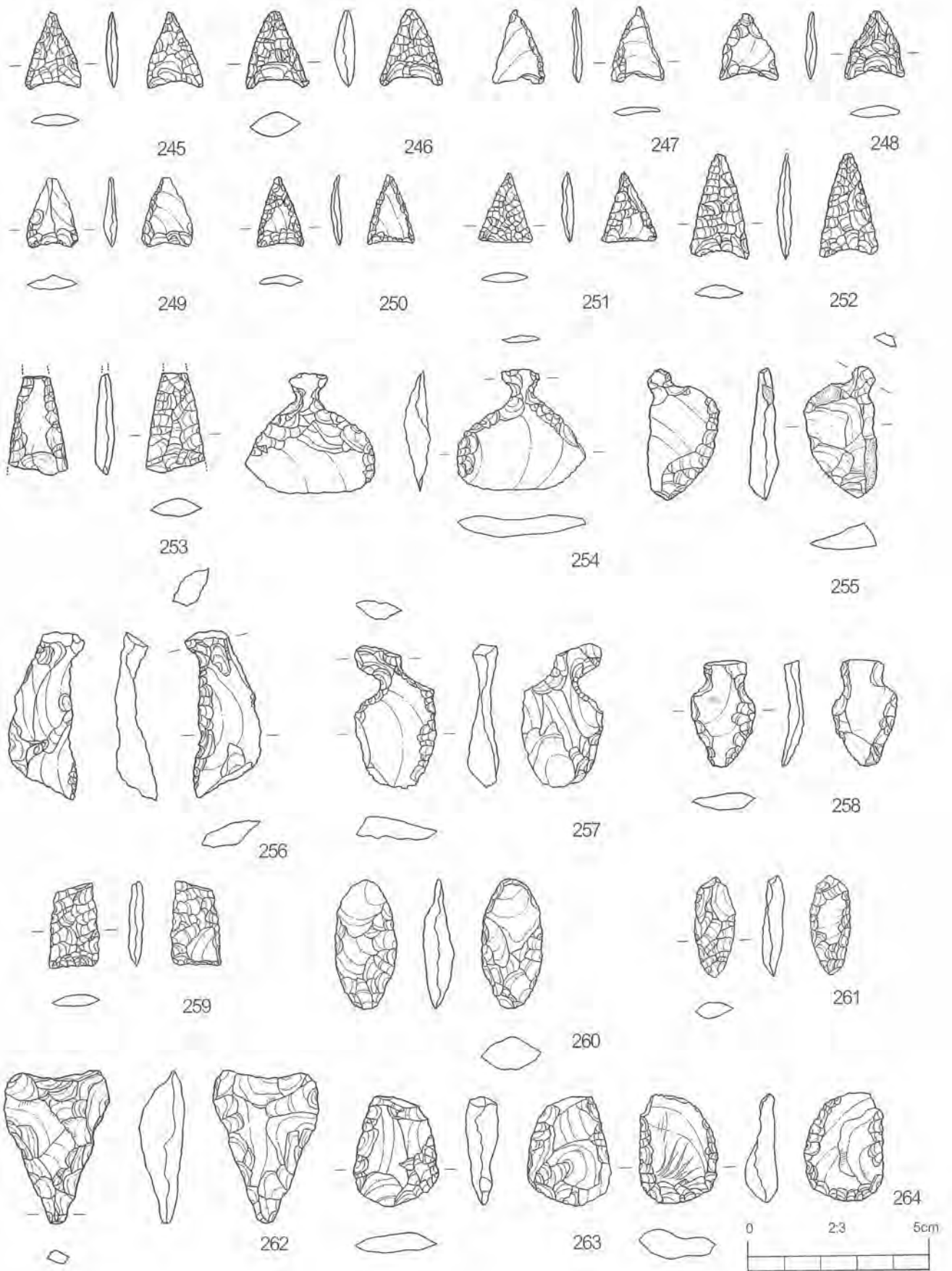
243



244

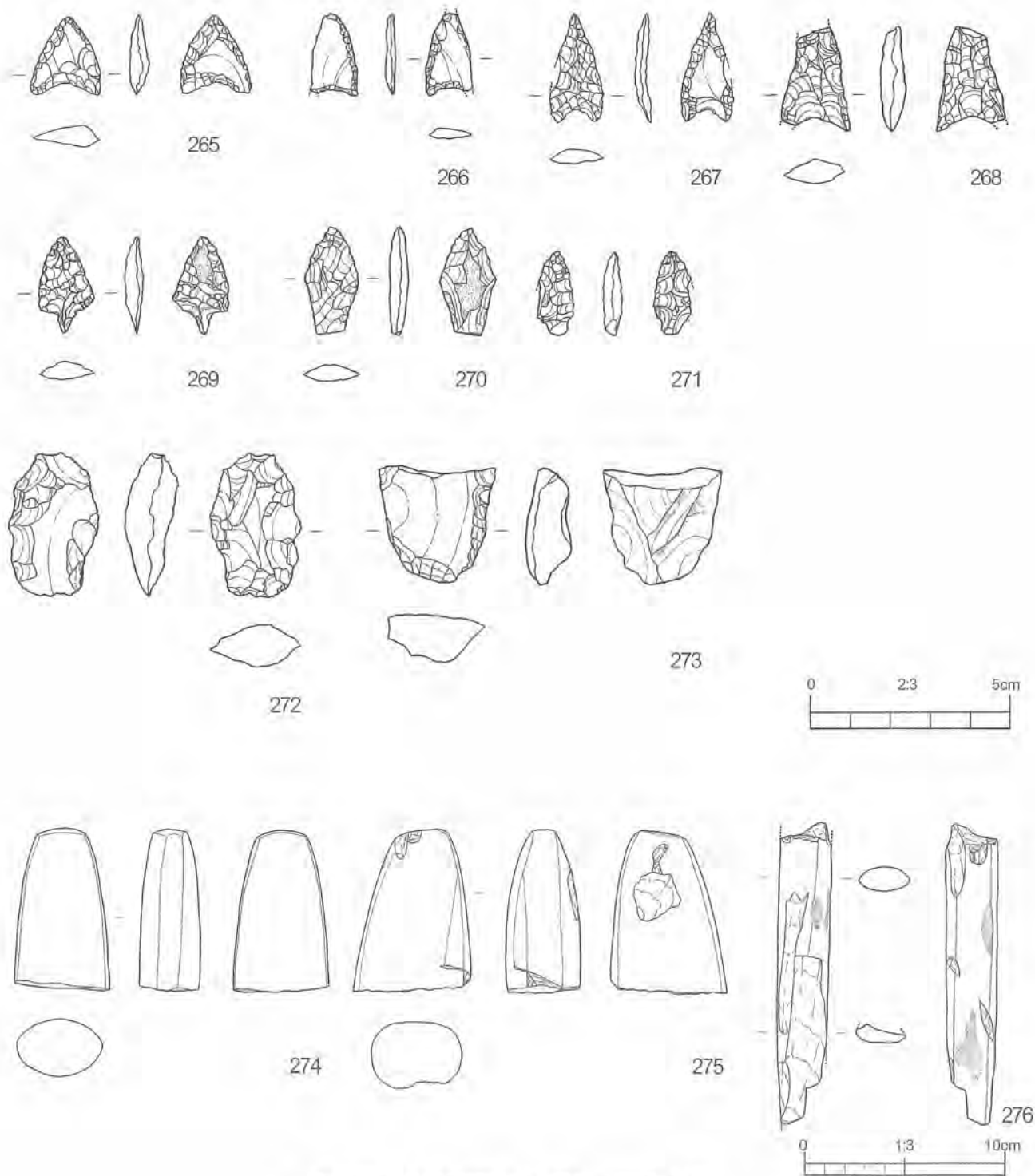


第162図 B区遺構外出土遺物・石器(12)



第163图 B区遺構外出土遺物・石器 (13)





第164図 B区遺構外出土遺物・石器 (14)

c. C、D区遺構外出土置物（第165～196図）

弥生土器（第165～175図）

1～264は6層の出土である。

1～23は壺である。1は口縁部は外反し、胴部中位が丸く張出す。口縁部に隆帯をめぐらし、沈線をいれ2個の粘土瘤が貼付される。外面はミガキ調整される。2は口縁部はわずかに外反し、肩部が強く張出す。口縁部は平行沈線で施文され、粘土瘤が付けられる。外面にはヘラミガキが施される。3は肩部の張りがやや強い。頸部に沈線をめぐらす。外面はヘラミガキ調整される。4も肩部の張りが強めの壺である。上半部に沈線による二段の変形工字文が施文され、連結部に粘土瘤が貼付される。下半部はやはり斜の沈線で羽状の文様を施す。5は胴部中位が丸く張出し、中位に最大径をもつ小形の壺である。外面はヘラミガキ調整される。6はやや直線的に立上がる底部である。外面はヘラミガキ調整される。7～20は口縁部である。7、19がやや強く外反し、他は直またはわずかに外反する程度である。いずれも平行沈線で施文されるが、17～20は粘土瘤を貼付されている。21は、沈線による区画と磨消を伴う。22、23は肩部で、いずれも縄文で施文される。

24～43は浅鉢である。24～28は変形工字文を伴う。26は口縁部に山形小突起をもち、27は口唇部に刻みが入る。29の山形の頂部には交互に抉りが入る。頸部に変形工字文が施文され、粘土瘤を伴う。下半は縄文で埋める。30の山形には抉りが入り、頸部は変形工字文、下半は無文である。31は口縁部は内反気味で、山形小突起をもち、口縁部は貼瘤の変形工字文である。32は頸部に沈線を残し、下半は縄文で施文される。33は縄文のみの施文である。34は口唇部に押圧痕を残し、口縁部に沈線を伴う。35は口縁部は無文、胴部は縄文のみの施文である。36は口縁部と底部に沈線をめぐらす。37、38は口縁部に細い無文帯をもうけ、施文は縄文のみである。39～41はいずれも口縁部は内反気味で、平行沈線で施文される。42は頸部を肥厚させ、口縁部は「く」の字に内反する。

44～156は高坏である。43は沈線による楕円の区画と磨消を伴う。44は山形口縁で、口縁部には平行沈線、胴部には逆さ錨状の文様が沈線で区画され、磨消を伴う。45、47は山形口縁の頂部に抉りが入り、沈線による区画は磨消と列点文を伴う。46、48、49は沈線による区画と磨消を伴う。50～64は平縁で、貼瘤のない変形工字文で施文される。口縁部は50～58は内反もしくは直立し、59～62は外反する。65～72は貼瘤をもつ変形工字文で施文される。口縁部はいずれも内反する。73～100は平行沈線で施文され、口縁部は内反もしくは直立する。101～110は貼瘤された平行沈線で施文される。口縁部は106～108が外反し、その他は内反もしくは直立である。111～118は貼瘤された変形工字文を伴う。119～138は山形口縁である。119～122は直線的に外反し、沈線のみの施文である。122は頂部に抉りが入り、122は貼瘤される。123～134は貼瘤された変形工字文を伴う。135～138は頂部に抉りが入り、口縁部は無文である。139～141は太い、やや雑な沈線で施文される。口縁部は外反もしくは直立で、山形小突起をもち、口唇部には溝が入る。

142～154は高坏の脚部である。直線もしくは波状の平行沈線で施文される。155、156は浅鉢の底部である。平行沈線と縄文を伴う。

157～217は甕である。口縁部は外反もしくは直立し、肩部は張出して、胴部からあまりふくらみをもたずに底部へすぼまる。口縁部は無文で、頸部から下を縄文で埋める。頸部の境に段あるいは沈線をもつことなどを一般的特徴とする甕である。157～194は粗製の甕である。口縁

部には溝をもつもの（187、189～193）、押圧痕をもつもの（188）、山形口縁のもの（192、193）などがある。195～216は細かい縄文で施文され、胎土も密である比較的精製の小形の甕である。205、207、209～216は山形口縁である。205～208は口唇部に溝が入る。213、214は口縁部に平行沈線をともない、213は口縁部も縄文で施文される。215、216は口縁部に変形工字文を伴う。217は平縁で、無節の縄文で施文される。218は山形口縁で、胴部上半に変形工字文を伴う。口縁部には小突起のほかにも大突起が向い合わせに作られ、その一つに動物の頭部が象られている。口、頭部は大きく成形され、目は刺突であげられ、耳は欠損している。「熊」と思われる。219は台付きの甕の底部である。

220～230は交互刺突を伴う土器である。いずれも沈線の上に施されている。221は撚糸文、229は沈線による区画と磨消を伴う。

231～240は複合口縁を伴う。231は隆帯に押圧が加えられ、胴部は平行沈線の間を山形沈線が埋める。器厚は薄い。隆帯に押圧を加えるもの（232、234～236、240）、刺突を施すもの（233、238、239）などがあり、237は縄文を回転させる。231～240は弥生中期に伴う。

241～244は平行沈線で施文され、口唇部にも縄文を伴う。245は口唇部に刻みが入り、口縁部は無文である。246は口縁部に沈線をめぐらし、補修孔をもつ。247は口唇部に抉りが入り、沈線を伴う。248は沈線による区画と磨消を伴う。249は山形口縁と沈線の区画文での施文である。250は横位の山形沈線と交互刺突で施文される。251～258は平行沈線と山形沈線を伴う。259は斜の平行沈線である。260は磨消を伴った台の脚部である。261は鉢？の底部で無節の縄文で施文される。262～264は細かい縄文を施された底部である。264は沈線を残し、浅鉢の底部と思われる。

265～288は5層の出土である。

265、266は壺の口縁部である。貼瘤の沈線を伴う。267～282は高坏である。267～278は変形工字文を伴う。267～269、272、273をのぞいて貼瘤を伴う。279～282は高坏の脚部である。いずれも平行沈線で施文される。286は浅鉢である。頸部に沈線をめぐらす。283～287は甕である。いずれも口縁部は無文で、283は頸部に沈線が入る。288は浅鉢の底部と思われる。細かい縄文で施文される。

#### 縄文土器

289～402は6層の出土である。289～332は磨消を伴う。289～297は沈線によるL字状の区画文を縄文充填などを伴い、大木10式に伴う。298～321は沈線による縦位の楕円状の区画、隆起区画文、楕円区画のなかの刺突列などを伴う。322～327は沈線による縦位の区画を伴い、328～330は隆起区画文で施文される。331は橋状の把手である。332は頸部の刺突列を境に口縁部は無文、胴部は縄文の横回転で埋める。298～332は大木9式に伴う。

333は山形口縁である。333は頂部に抉りが入り、平行沈線による山形に区画する。そのなかに沈線で円、渦巻文などが描かれる。334は複合口縁で、縦位の隆帯上に沈線を施し、横位の隆帯には押圧を加える。335は沈線で円形に区画し、その中を斜の沈線で埋める。沈線に沿う粘土紐には円形刺突が加えられる。336は山形の複合口縁である。口縁部の隆帯には刻み、山形沈

線が入れられる。頂部から半截竹管による縦位の刺突列が施される。337は複合口縁で、口唇部には太い溝が入れられ、隆帯には縦位の刻みが入る。338の頸部の隆帯には斜の刻みが入り、地文は結節縄文である。341の隆帯には縦位の刻みが入る。340の隆帯には縦位の刻みが入り、その下に山形沈線、斜の沈線を伴う。341は複合口縁で、口縁部に沈線の沿った横位の刺突列を施し、その下に沈線で円文を描く。342は山形口縁の頂部である。縦位U字状の隆帯には刻みが入り、U字の中は円形刺突で埋められる。343は口唇部に刻みが入り、口縁部に原体圧痕を伴う。344は山形口縁の頂部で、口唇部には刻みが入り、口縁部に円形刺突列を伴う。345は口縁部に山形の粘土紐が貼付される。346は山形口縁で、口縁部は連続弧状沈線を施文され、そのしたに横位の刺突列と再度連続弧状沈線文を伴う。347は沈線が刺突列を伴う。333～347まで大木7aに伴う。

348～351は細い粘土紐の貼付による施文である。348、349は口縁部内面に波状の隆線が貼付される。350は胴部に垂下される。351の粘土紐には刻みが入る。348～350は大木4式に伴う。

352～360は胎土に繊維を含む。352～354は不整燃糸文で施文され、353、354は単節縄文の横回転を伴う。355は羽状縄文を伴う。356、357は単節斜縄文の横回転である。358は付加条縄文による施文か。359は不整燃糸文による施文と思われる。360は尖底土器の底部で、羽状縄文で施文される。

361～363は複合口縁である。361は隆帯に半円の刺突列が施される。362は太い沈線に円形刺突を加える。363の隆帯は無文である。364は口唇部に二列の刺突列を施文し、頸部に円形の粘土紐を貼付し、斜の隆帯で連絡する。隆帯には円形刺突と刻みが施される。隆帯の下にさらに押し沈線を加える。365～367は複合口縁である。365の隆帯は単節縄文の回転を伴い、366、367の隆帯は原体圧痕を施文する。368は口縁部に原体圧痕を伴う。369は複合口縁で、隆帯には斜位の沈線が施される。370～374は隆帯を伴う。370～372、374は隆帯に円形の刺突を加えられ、373は横位の沈線を伴う。375、376は円形刺突列を伴う。377は横位の沈線、378は平行沈線による施文である。379は山形沈線である。380は山形口縁の頂部で、円形の凹みを付ける。381、382は口唇部に押圧を加える。383は口唇部に挟りが入り、沈線で施文される。384は無節の縄文を伴う。385は山形沈線である。386は円形刺突列を伴う。387～390は燃糸文による施文である。いずれも木目状燃糸文である。391は口縁部はわずかに外反し、胴部はふくらみをもってすぼまる深鉢である。結節縄文の縦回転で施文される。392も391と同施文の深鉢で、底部に木葉痕を残す。393、394は底部に網代痕を残す深鉢の底部である。395は小形の鉢である。わずかに沈線痕を残すが、無文である。炭化物が付着する。336も小形の鉢の底部と思われる。単節縄文の縦回転で施文される。400は沈線を伴う土器の底部である。397、398、401は網代痕、400、402は木葉痕を底面に残す底部である。

403～438は5層の出土である。403～409は沈線による区画と磨消を伴う。404は沈線の横位の刺突が加えられる。以上大木9～10に伴う。410は縦位の隆沈線の施文である。大木8b式に伴う。411は複合口縁で、頸部にも隆帯をもつ。口縁部の隆帯には縦位の刻み、頸部の隆帯には円形の刺突が入る。地文は結節縄文の縦回転である。412は口唇部に溝が入り、平行沈線の間を山形沈線で埋める。413は平行沈線と山形沈線の下にやや大きめ縦位の刺突が入る。4

14は波状口縁で、口縁部に原体圧痕を施し、頸部に先端が鉤状に曲る隆帯を伴う。415は複合口縁で、口縁部に原体圧痕を施す。416は沈線の渦巻文を中心にして両側を連続弧状沈線と斜位に沈線で埋めていく。417は円形の凹みの下に棒状工具で山形沈線を施す。411～415は大木7a、416、417は大木6式に伴う。

418、419は細い粘土紐による施文である。418は梯子状文と波状文、419は波状文を施す。418、419は大木4式に伴う。

420～422は胎土に繊維を含む。420は不整撚糸文、421は単節斜縄文の横回転、422は羽状縄文をそれぞれ伴う。420は大木2式、421は大木1式に伴う。

423は平行沈線の間を山形沈線、424は波状沈線で埋める。425～427は平行沈線の間刺突列を施す。428は磨消に斜の刺突を加える。429、430は単軸絡条体の側面圧痕と思われる。431は口唇部に刻みをいれ、結節縄文の横回転させる。432は複合口縁で、隆帯には刻みがいり、結節縄文を横回転させる。433は口唇部に押圧を加える。434は隆帯に押圧を加え、撚糸で施文する。435は結節縄文の横回転を伴う。436は原体圧痕を施される。437は木目状撚糸文である。438は底面に網代痕を残す深鉢の底部である。

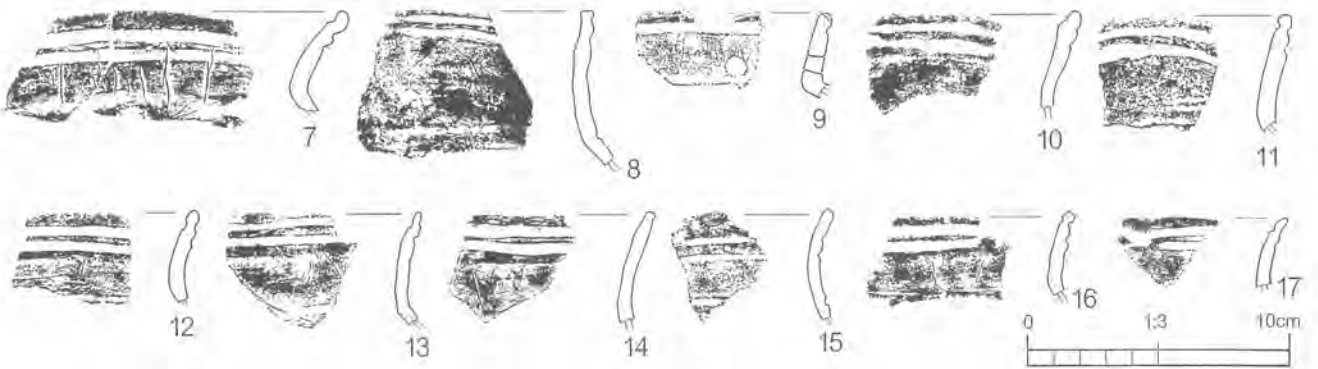
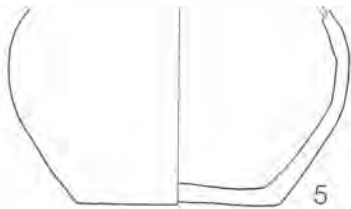
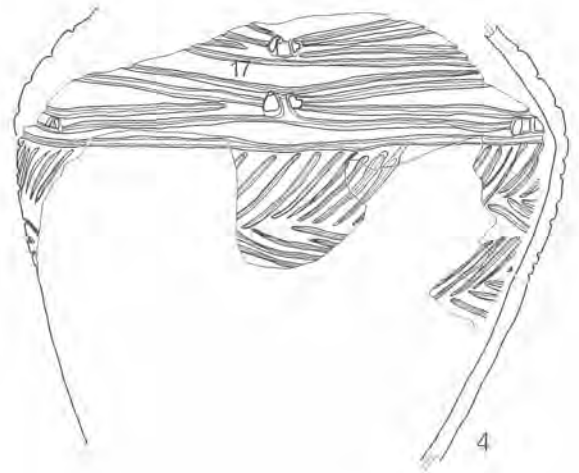
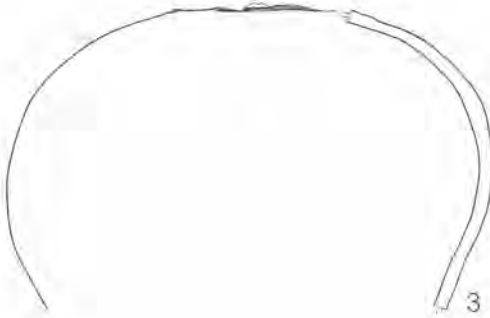
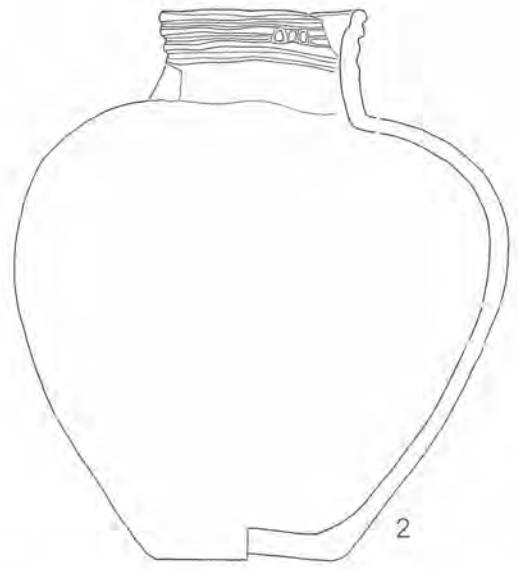
439、440は土製品である。いずれもD区から出土した土偶の脚部である。440は6層下部の出土である。大腿部で、腰部文様の一部が残存する。沈線で区画し、円形刺突で埋めていく。中空で、輪積痕を残す。440は5層の出土である。大腿部から足の部分である。大腿部は沈線で区画され、刺突を施される部分とさらに沈線で三角形が描かれる部分に分れる。中実である。

441～571は石器である。

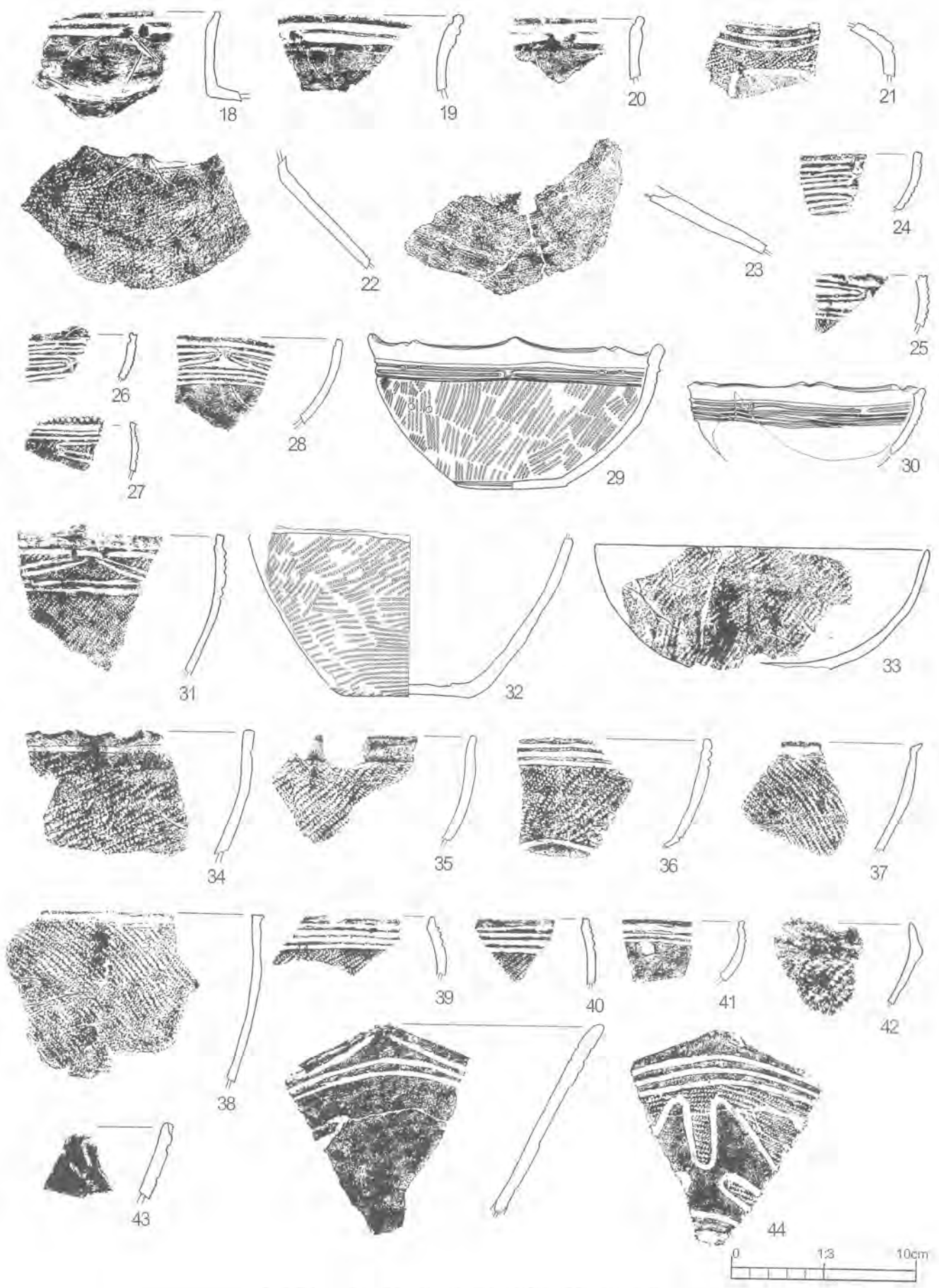
441～533は6層の出土である。

441～463は石鏃である。441～449は凹基である。441～447は二等辺三角形型、448は鋭角三角形型である。いずれも側縁は平側である。449の側縁はふくらみをもつ。450～456は平基である。450～456は二等辺三角形型で、側縁は平側である。455、456は鋭角三角形型で、側縁は丸みをもつ。457～463は凸基である。457～461は鋭角三角形型である。側縁はいずれも平側である。462は側縁がふくらむ二等辺三角形型と判断した。464は二等辺三角形型で、平側である。両面の周縁に調整痕を残す。

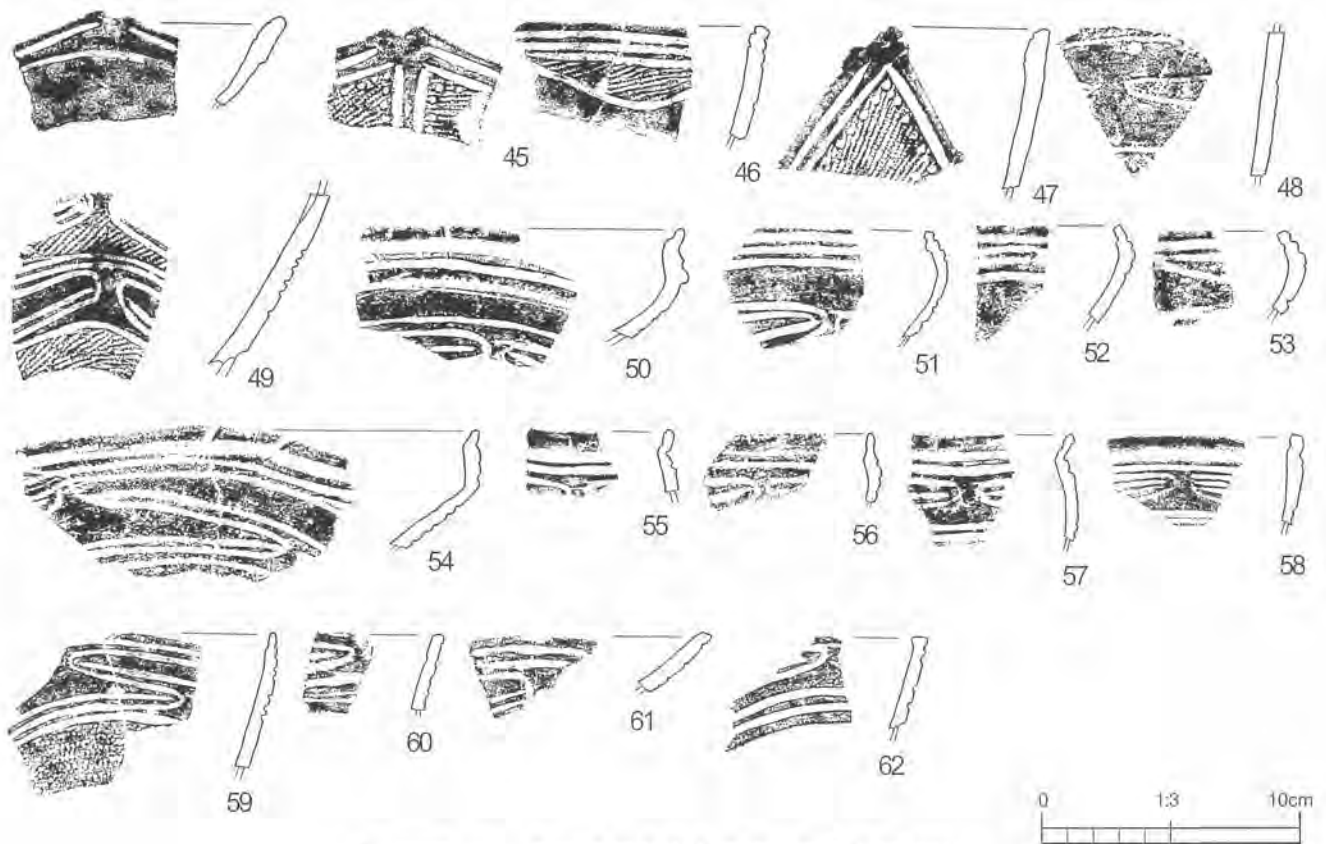
464～470は石錐である。464～466は長い錐部をもつ。467、468はつまみ部を欠損し、469はつまみ部、錐部の境界が不明瞭である。470は短い錐部をもつ。



第165图 C、D区遺構外出土遺物・弥生土器(1)



第166圖 C、D遺構外出土遺物・弥生土器 (2)



第167図 C、D区遺構外出土遺物・弥生土器(3)

471～479は石匙である。471～476は縦型、477～479は横型である。472、475は片面の全面、片面の周縁を調整し刃部をつくりだし、刃部の末端を尖らす。他の縦形は両面の周縁を加工し、やはり刃部の末端を尖らせる。477～479は両面の周縁を加工し、477は刃部末端を尖らせる。

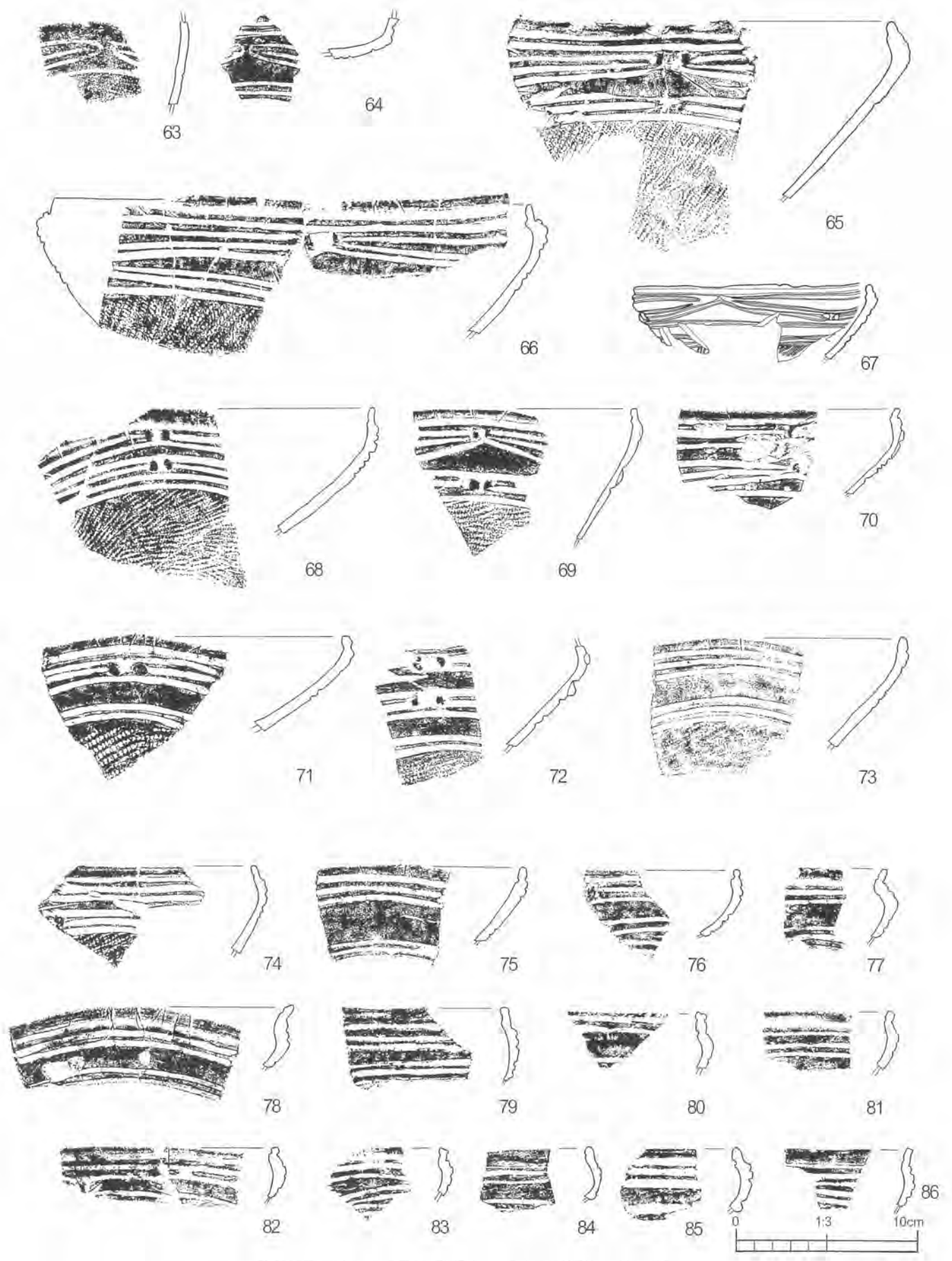
480～485は石筥である。480は底部はふくらみ、丸みをもつ。両面の周縁を加工する。481は撥形で、やや角張る。両面の周縁を調整する。482は底部が丸みをもち、両面の周縁が加工される。483～485は全体が角張る。483は片面の周縁、484、485は両面の周縁を調整する。

486～496は不定形の石器である。486～490は凸刃をつくり、刃部末端を尖らせる。491は弧状の端部に凸刃をつくりだす。492、493角張っては厚みのある石器である。492は凹刃と直刃、493は凸刃と直刃をつくりだす。494、495は凸刃をもち、刃部の末端を尖らせる。497は周縁に調整痕を残すが、明瞭な刃部は認められない。

497は石製品である。块状耳飾りである。挟りと孔の一部を残す。挟り部の磨面は一面のみで、擦痕は全体で観察された。

498～511は磨製石器である。498は頭部は丸みをもち、刃部は胴部より幅広になり、断面は不整楕円形である。刃縁は丸みをもち、凸刃である。499は刃部である。胴部よりやや幅が広くなる。断面形は隅丸方形である。刃縁は丸みをもち、凸刃である。500も刃部である。全体に調整痕を残す。刃部と胴部の幅は同じである。断面形は楕円形である。刃縁は丸みをもつ。50

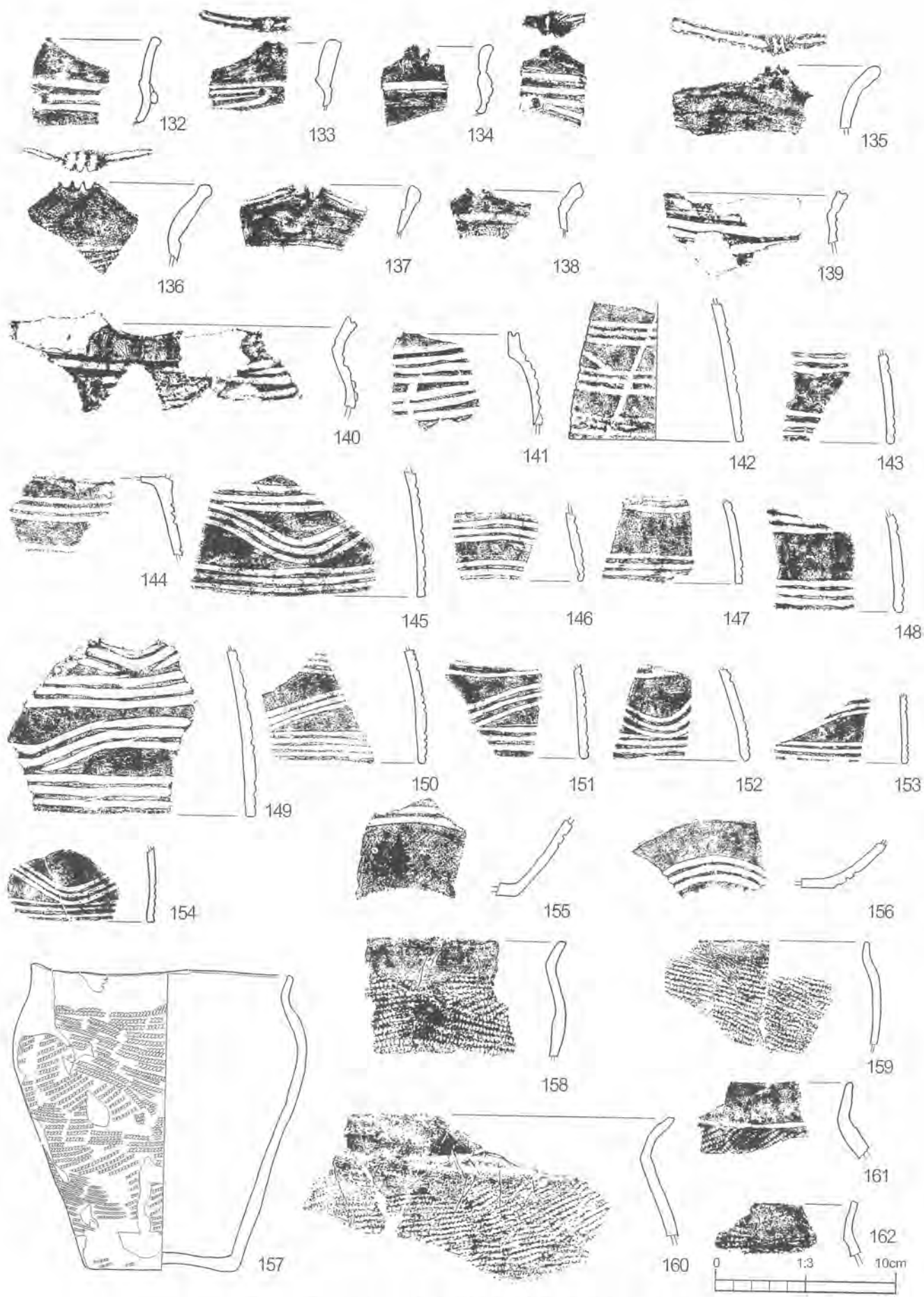




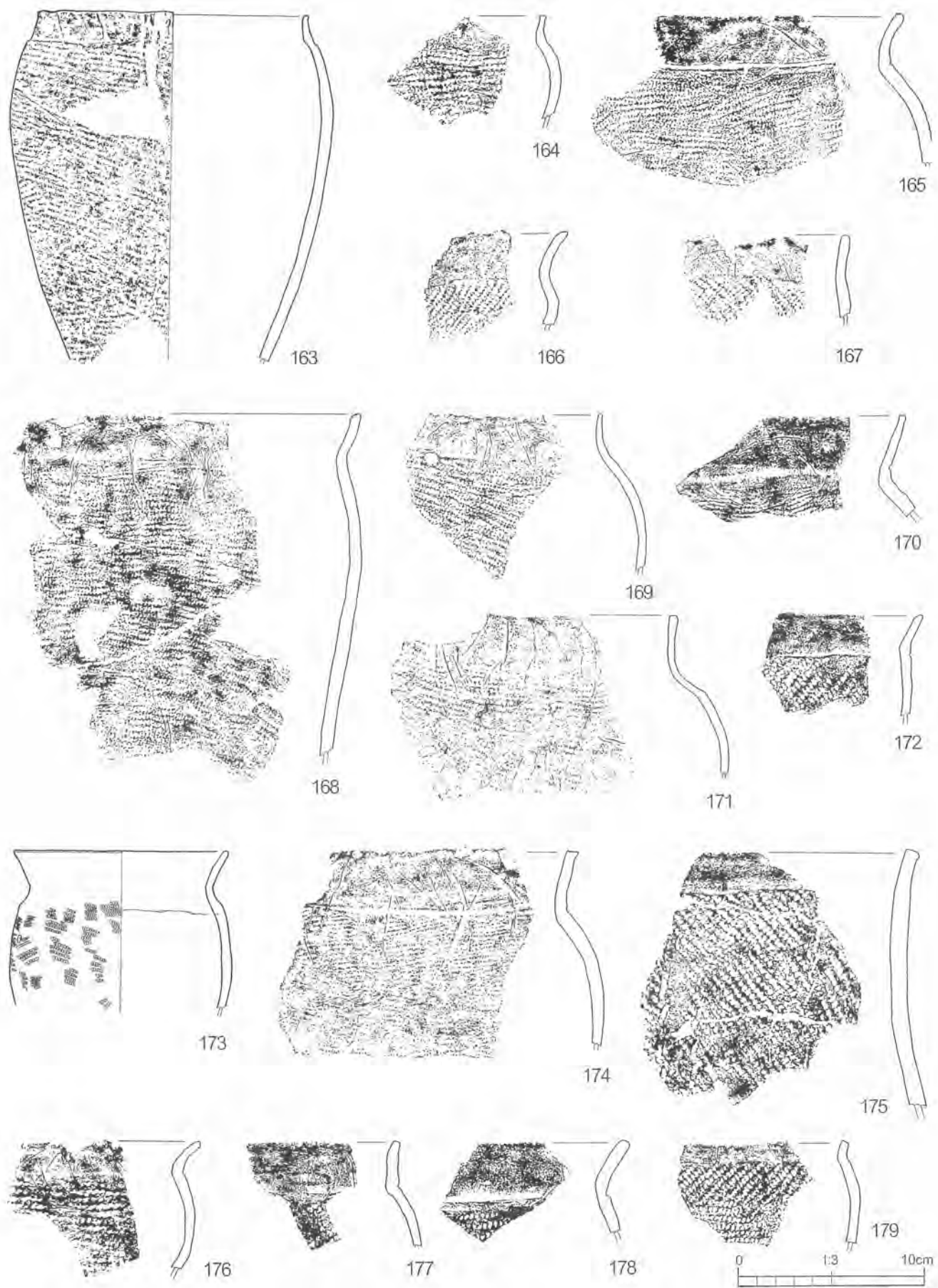
第168图 C、D区遺構外出土遺物・弥生土器 (4)



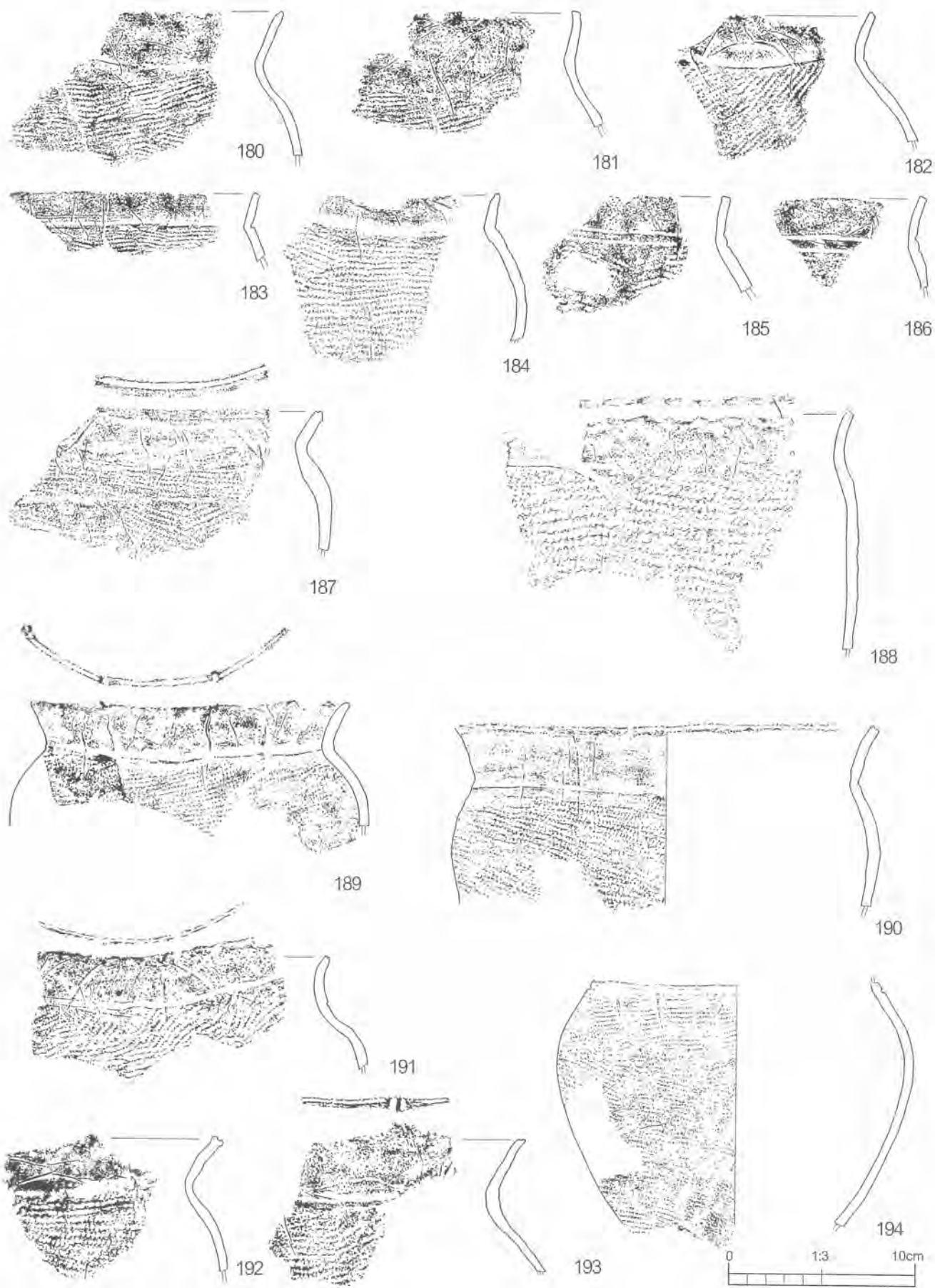
第169图 C、D区遗構外出土遺物・弥生土器(5)



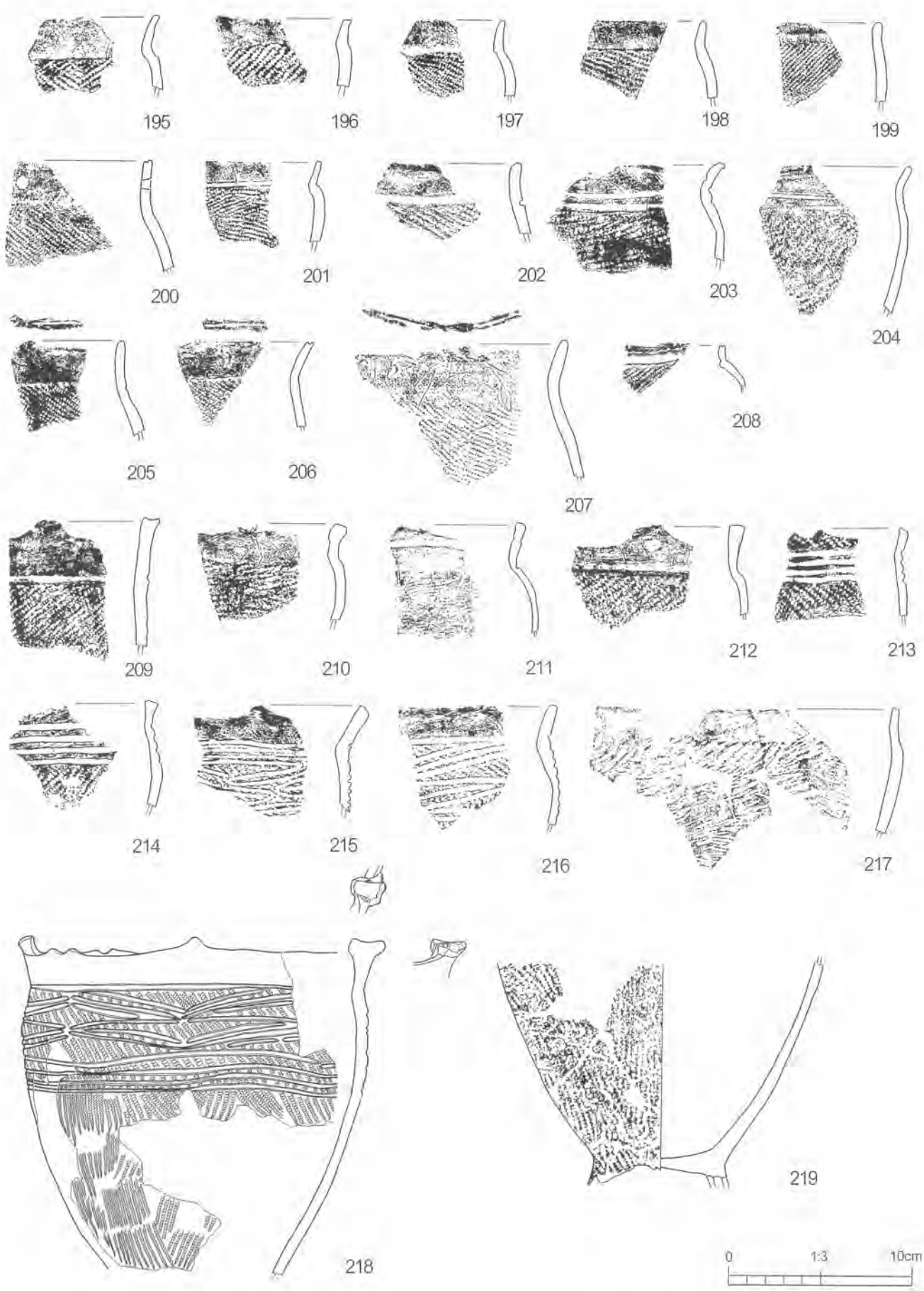
第170图 C、D区遺構外出土遺物・弥生土器(6)



第171图 C、D区遺構外出土遺物・弥生土器(7)



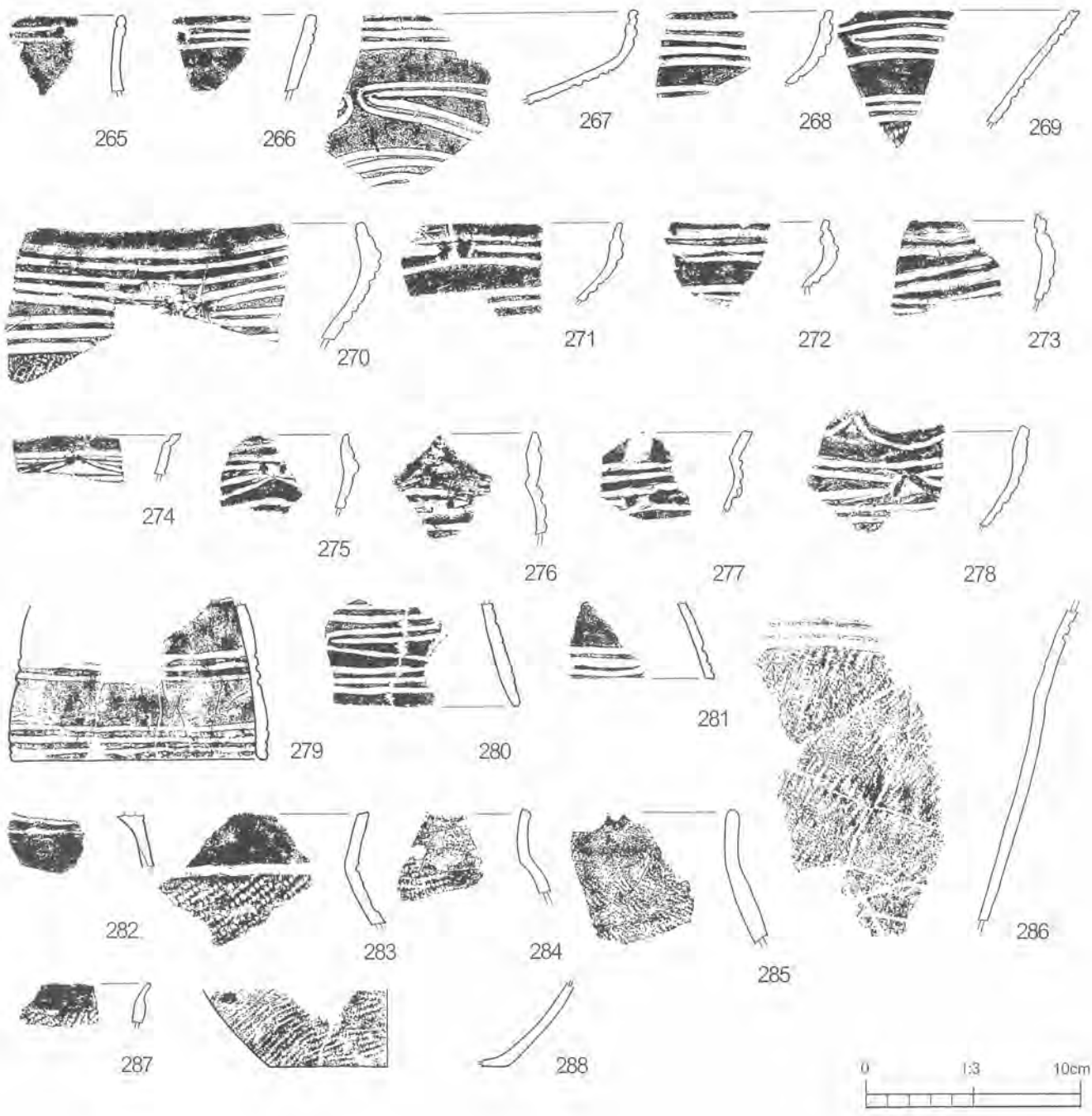
第172图 C、D区遺構外出土遺物・弥生土器 (8)



第173图 C、D区遺構外出土遺物・弥生土器 (9)

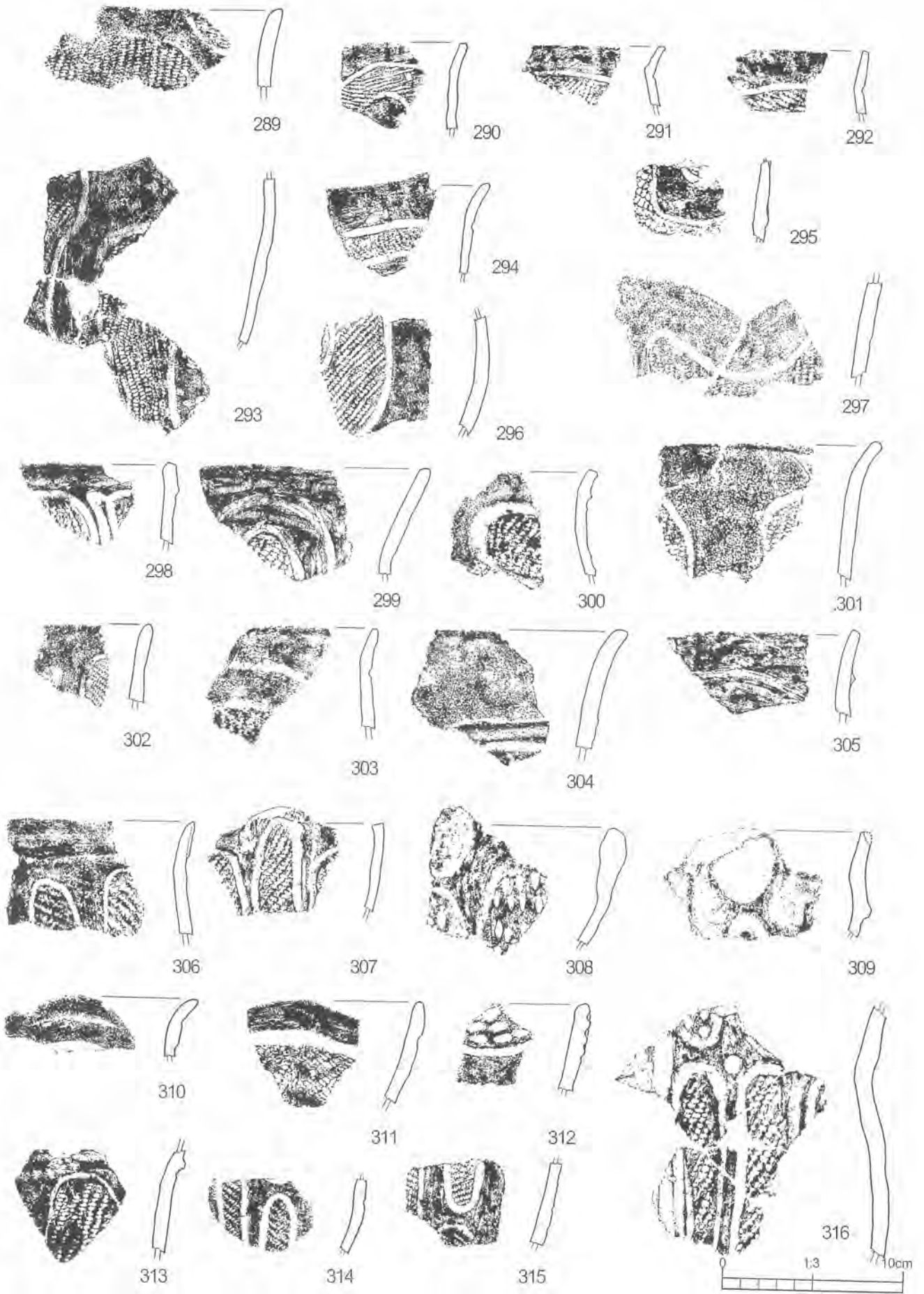


第174图 C、D区遺構外出土遺物・弥生土器 (10)

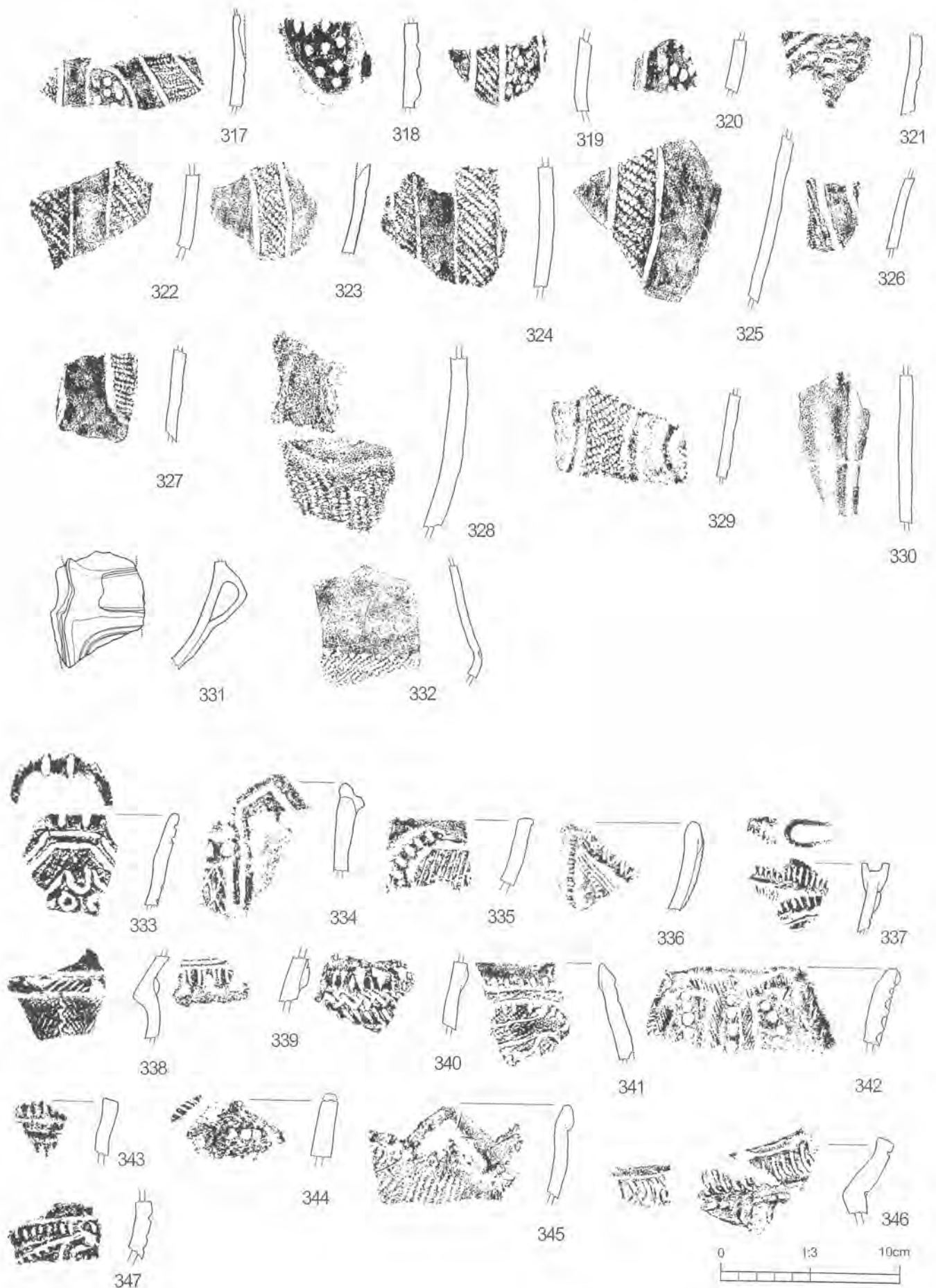


第175图 C、D区遺構外出土遺物・弥生土器 (11)

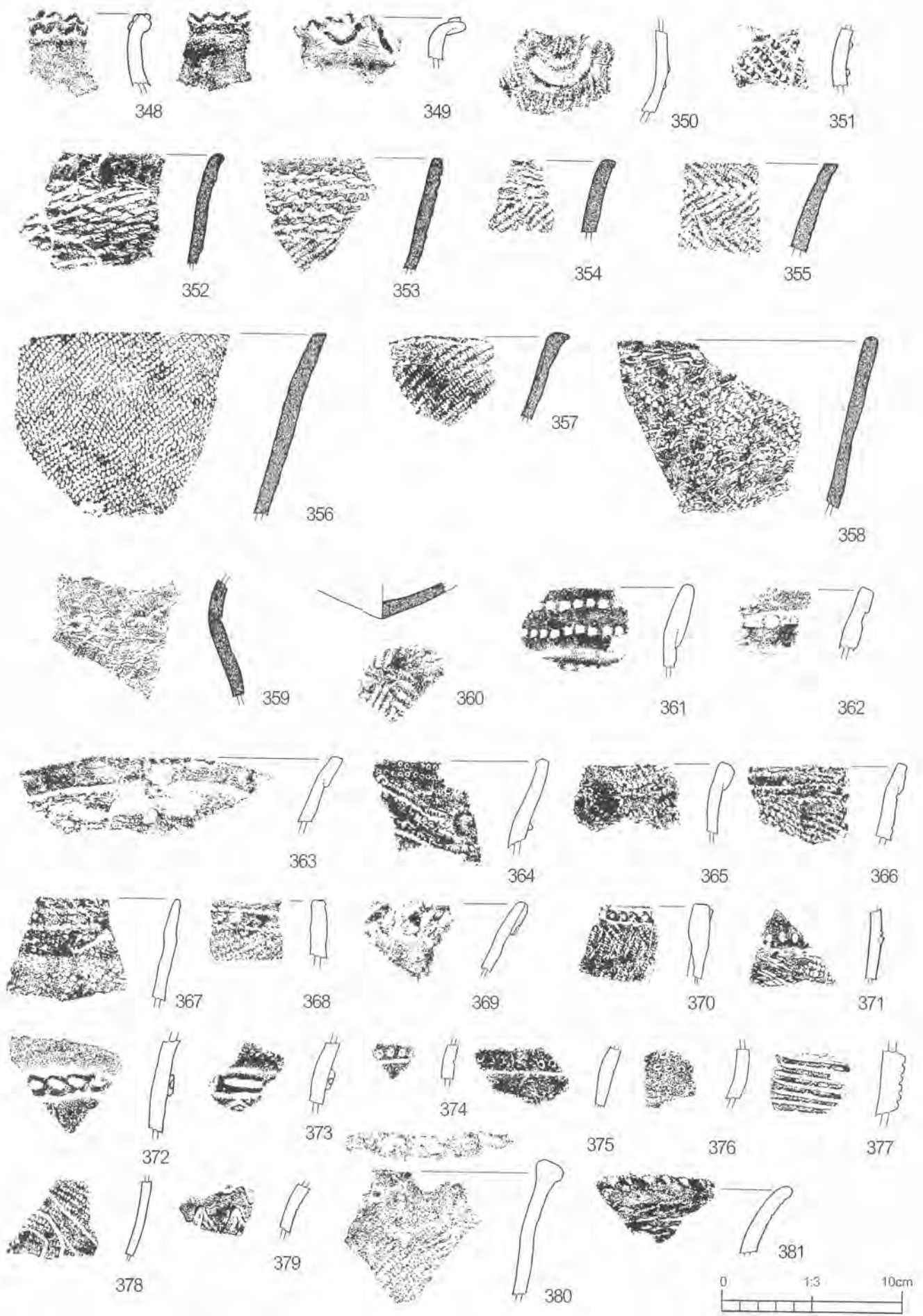




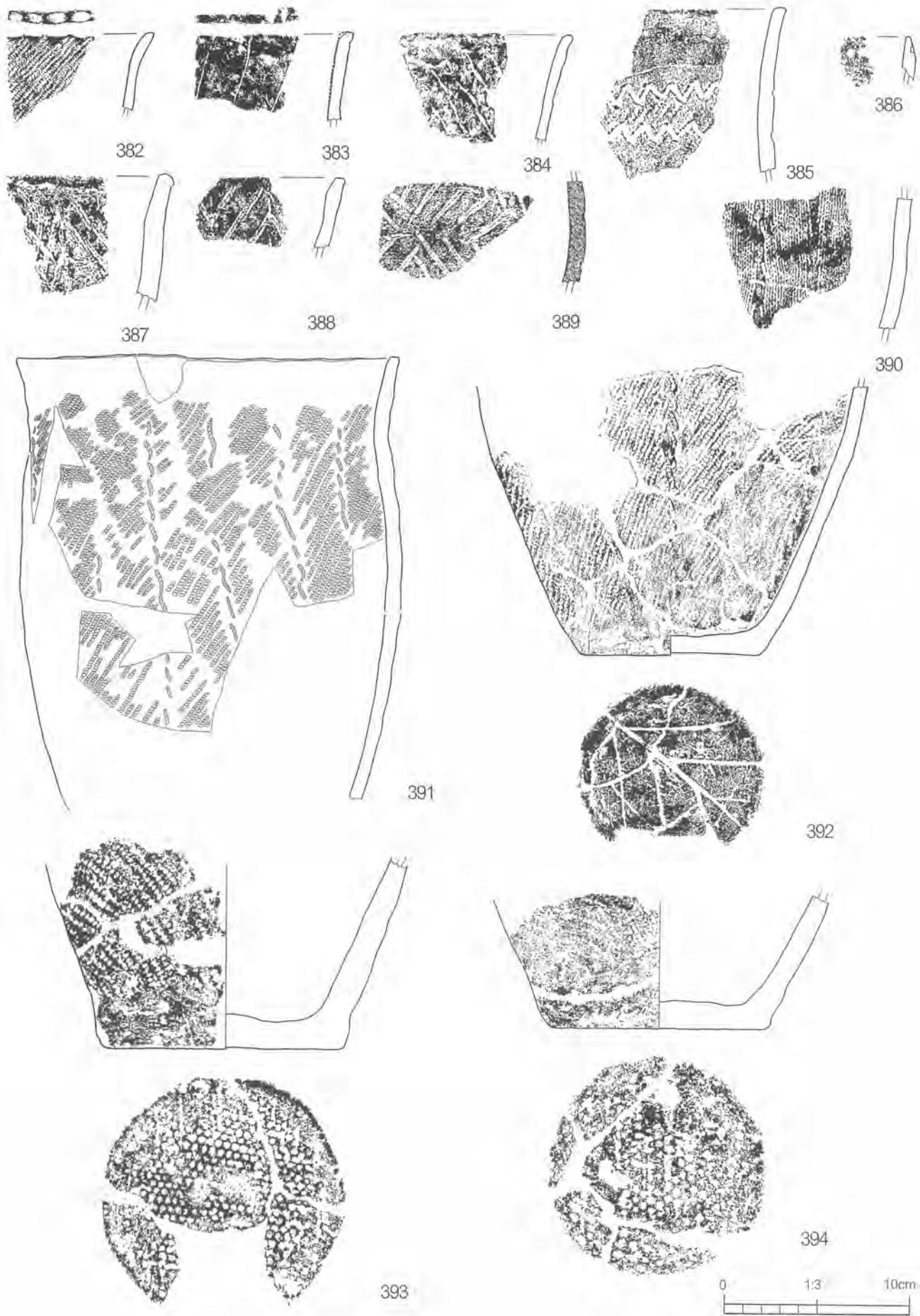
第176图 C、D区遺構外出土遺物・縄文土器 (12)



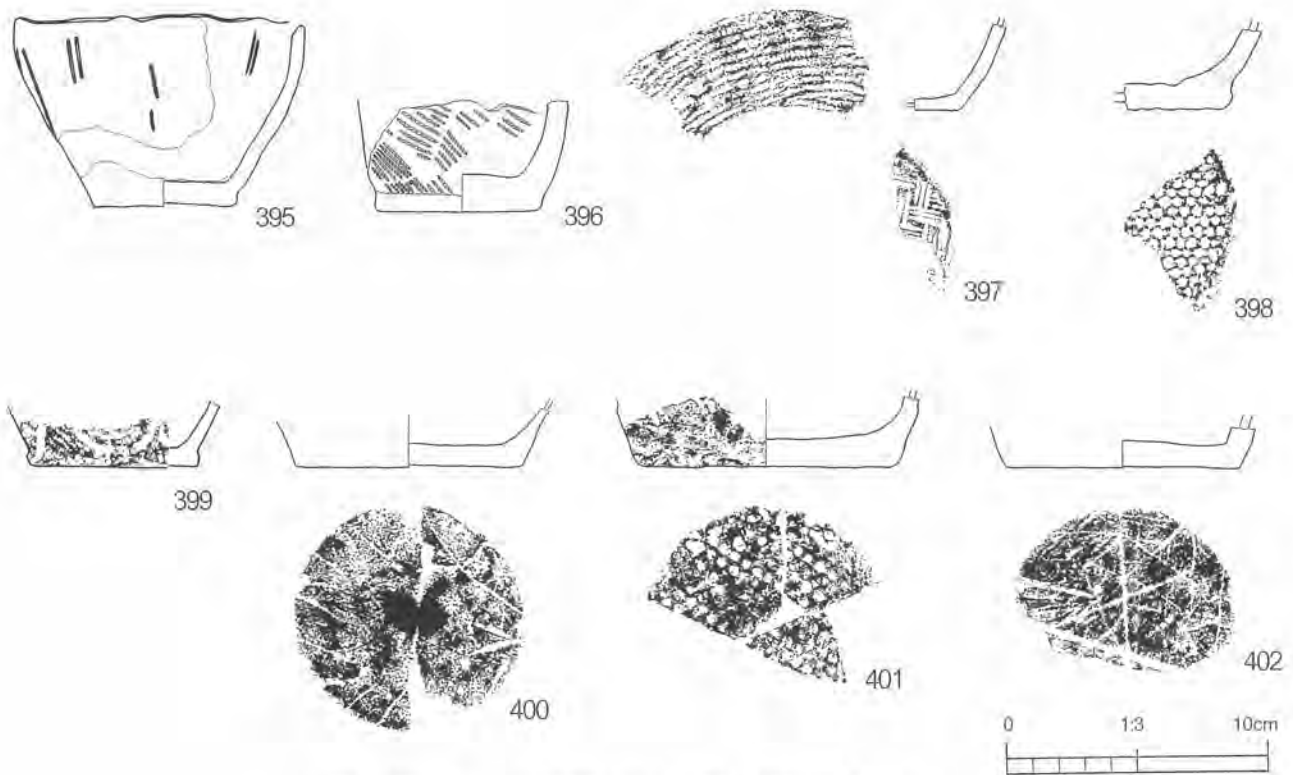
第177図 C、D区遺構外出土遺物・縄文土器 (13)



第178図 C、D区遺構外出土遺物・縄文土器 (14)



第179図 C、D区遺構外出土遺物・縄文土器(15)



第180図 C、D区遺構外出土遺物・縄文土器 (16)

1は頭部は平たく、刃部は胴部より幅が広がる。断面は円形である。刃縁は欠損し形状は不明であるが、円刃と推定される。502～504は頭部である。502は丸みをもち、断面形は円形である。504は平らで、断面形は隅丸方形である。505は頂部を平らにし、断面形は不整楕円形である。505は刃部であるが、片面に剥離痕を残す。二次利用したものか。506は一部に磨面を残して、剥離痕で覆われる。505と同様に二次利用の跡か。507～510はB区から一括で出土した打製石斧である。形態はいずれも短冊形で、末調整部を残している。

512～522は敲打磨石である。512、519は機能面のほかに調整磨面をもつ。518は端部に敲打痕を残す。

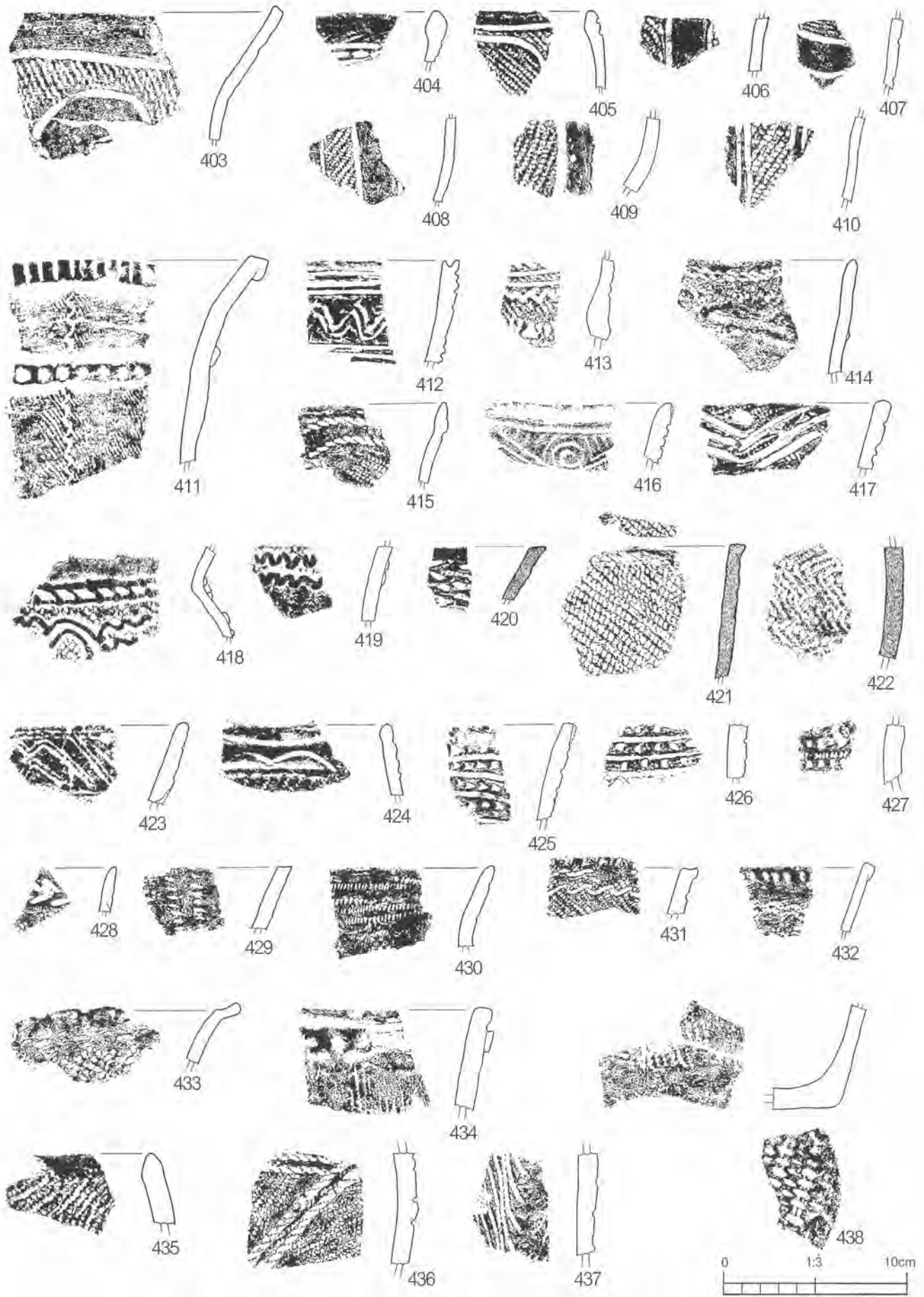
523～528はすり石である。523、524、526、528は円礫の側縁を擦面とし、525、527は楕円礫の端部を擦面とする。

529～531は敲石である。いずれも円礫の側縁に敲打痕を残す。

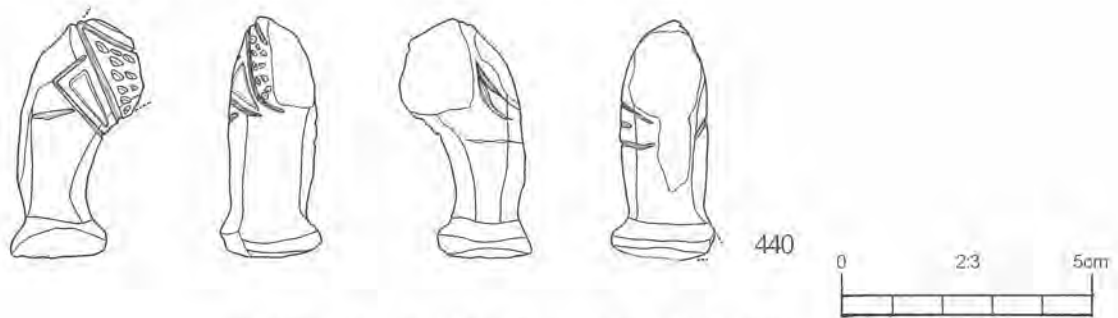
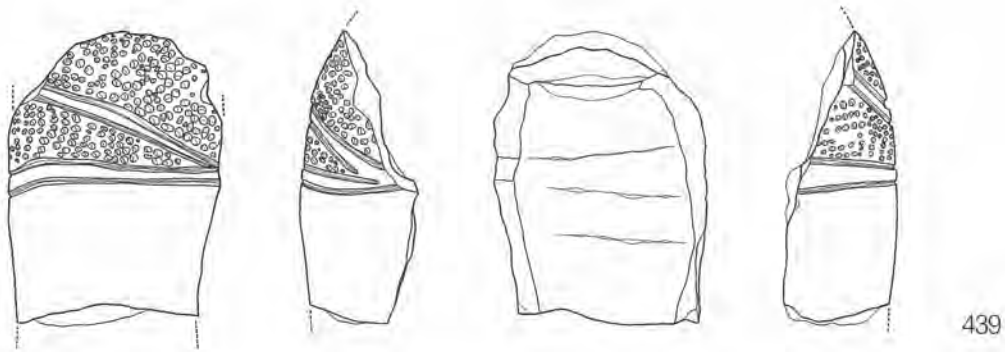
532、533は石皿である。533は中央部の擦減りが顕著である。

534～571は5層の出土である。

534～544は石鏃である。534～536は凹基である。534、536は鋭角三角形型で、側縁は平らである。535は二等辺三角形型で、側縁は平側である。537～541は平基である。537は鋭角三角形型で、平側である。538～541は二等辺三角形型で、538、539は平側、540、541は円側である。542～544は凸基である。542、543は茎が明瞭ではないが形状から判断した。側縁はいずれも円側である。



第181图 C、D区遺構外出土遺物・縄文土器 (17)



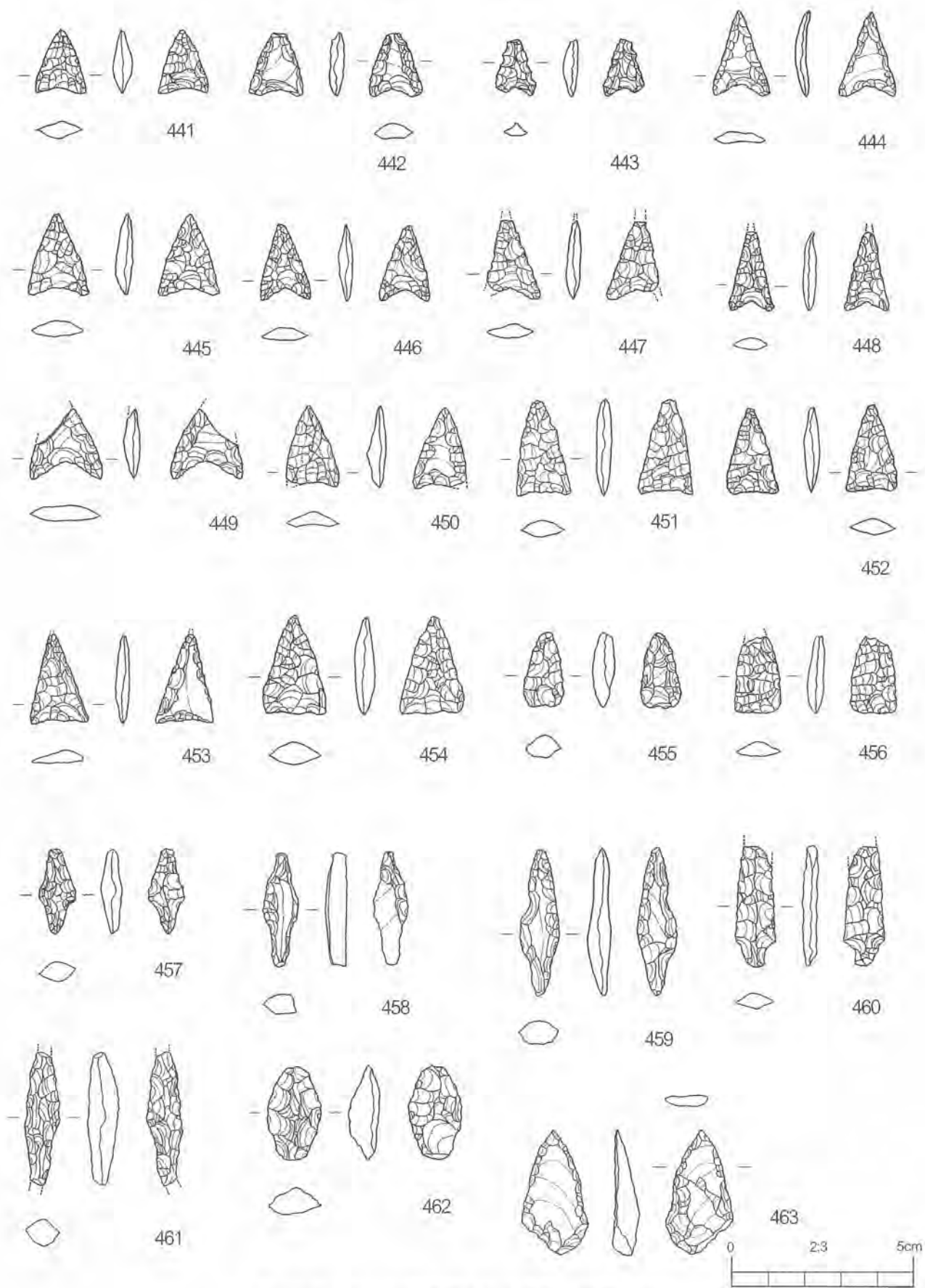
第182図 C、D区遺構外出土遺物・土偶（18）

545～547は石匙である。545は横型、546、547は縦型である。545、546は両面の周縁、547は片面の周縁と片面の全面を加工する。546は刃部の末端を尖らす。548～550は筥状の形状をもち、両面の周縁を調整して刃部をつくる。551～553は尖頭部に凸刃をもつ。554は長辺に直刃をつくる。555は凸刃を鋭角面につくる。

556～558は磨製石斧である。556は頭部と刃部を欠損する。刃部は胴部より幅広になり、断面形は、隅丸の方形にちかい。557は尖頭形の頭部で、断面形は楕円形である。558は刃部を欠損する。刃部はやや丸みをもち、胴部は幅広になる。断面形は円形である。

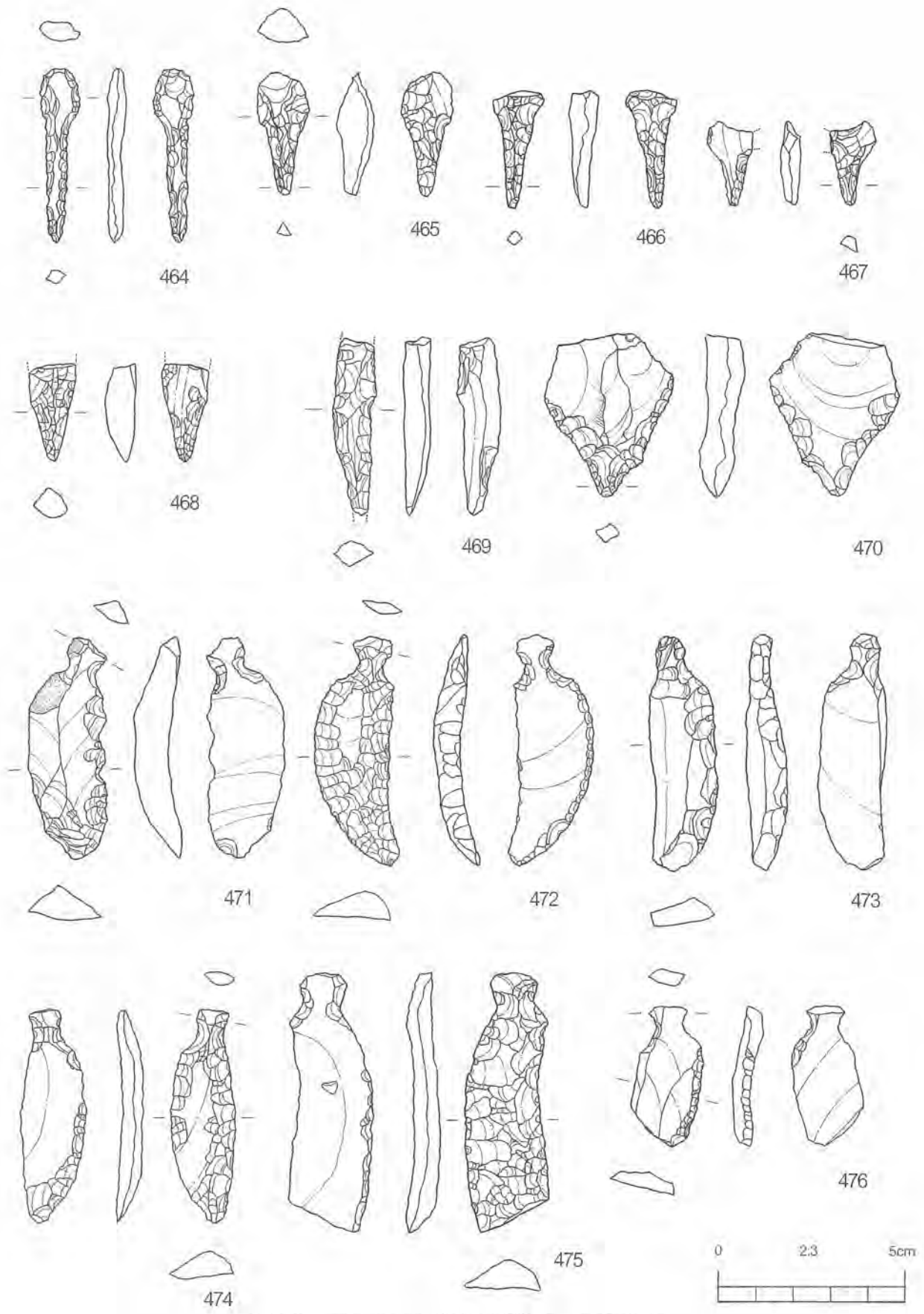
559～569、571は敲打磨石である。561、563、565、566、569は機能面のほかに調整磨面をもつ。571は端部に敲打痕を残す。

570はすり石である。円礫の全周を擦面とする。

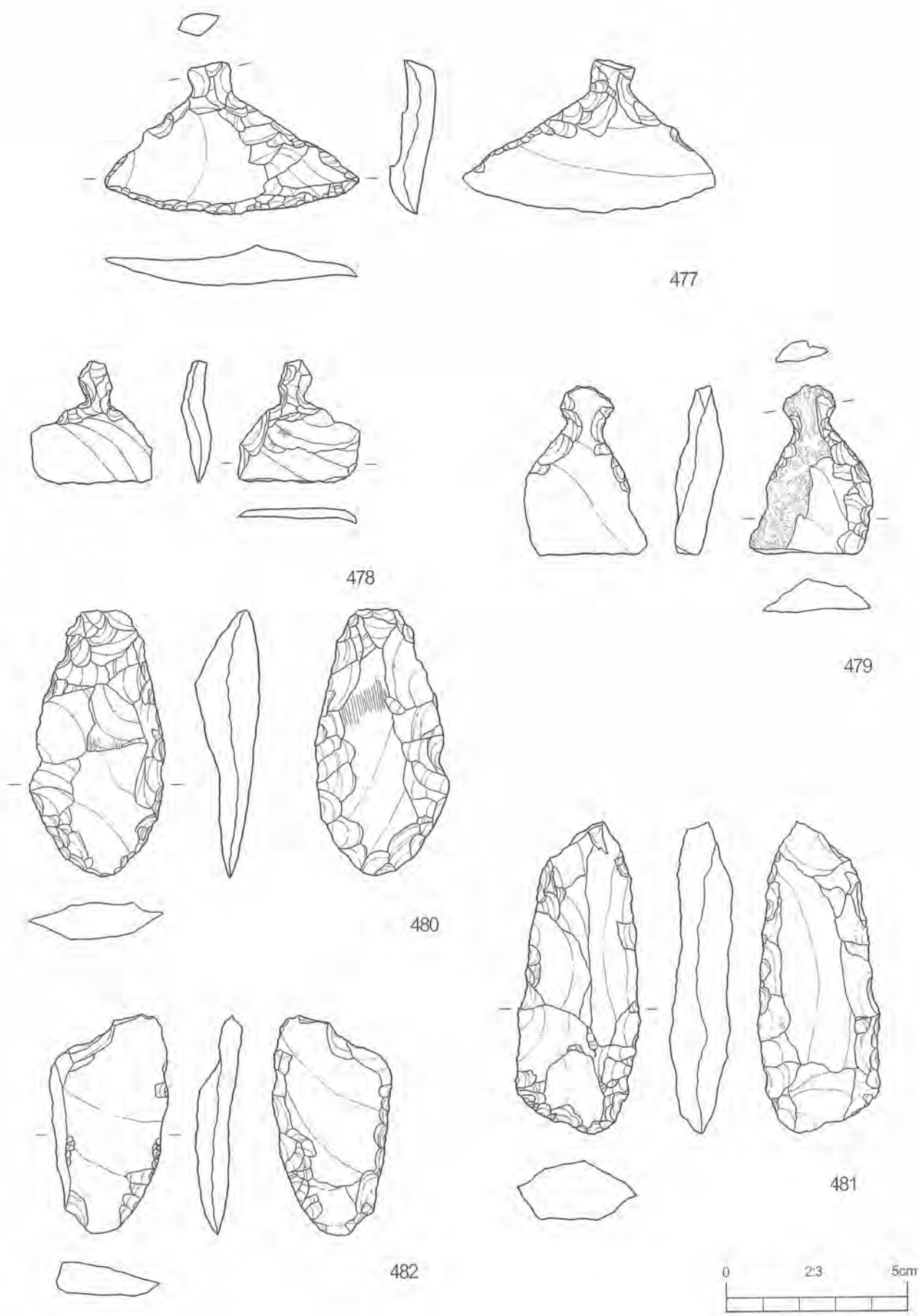


第183图 C、D区遺構外出土遺物・石器 (19)

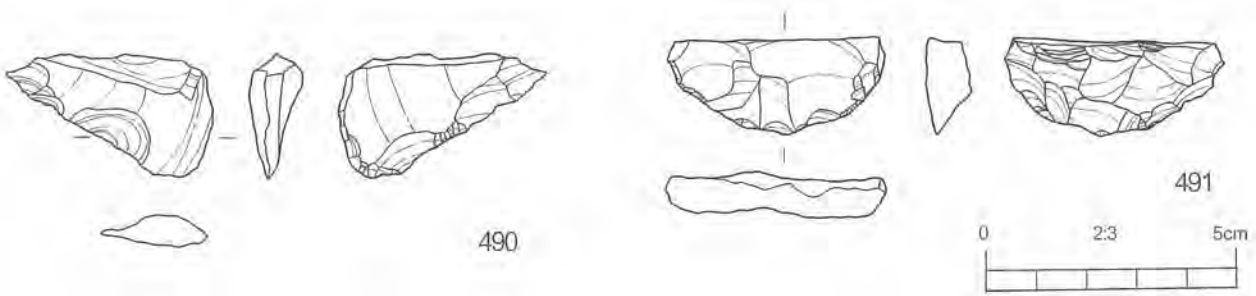
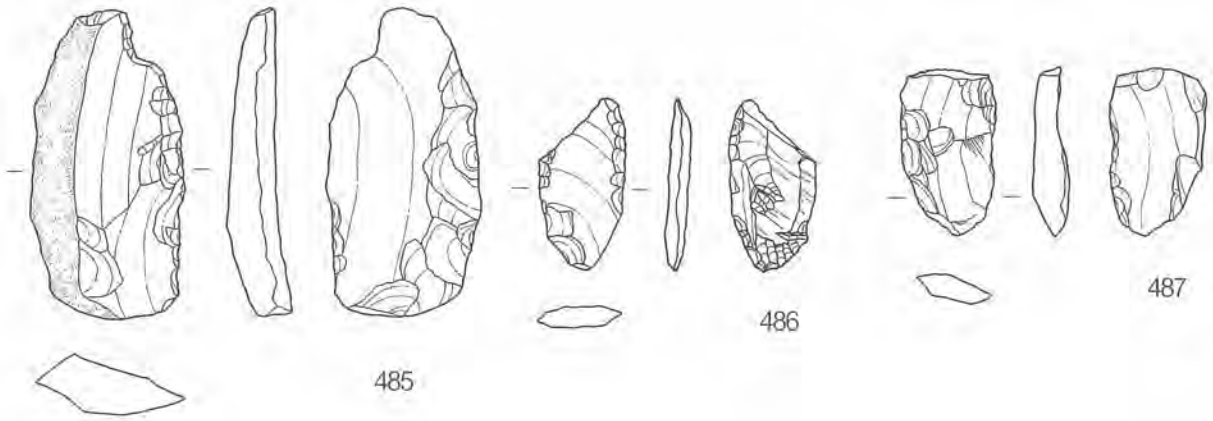
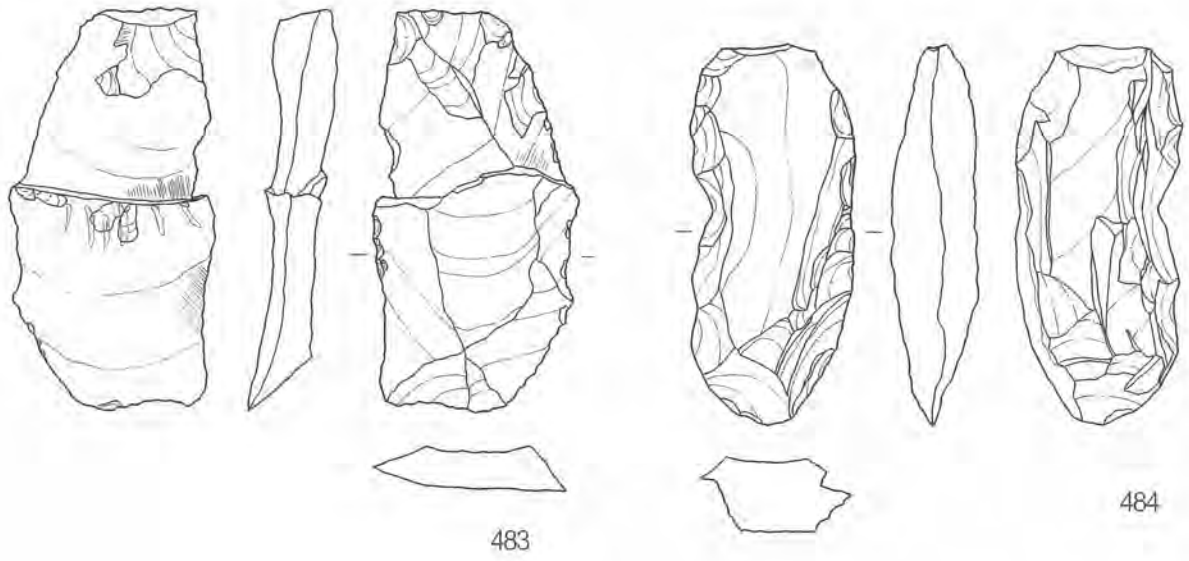




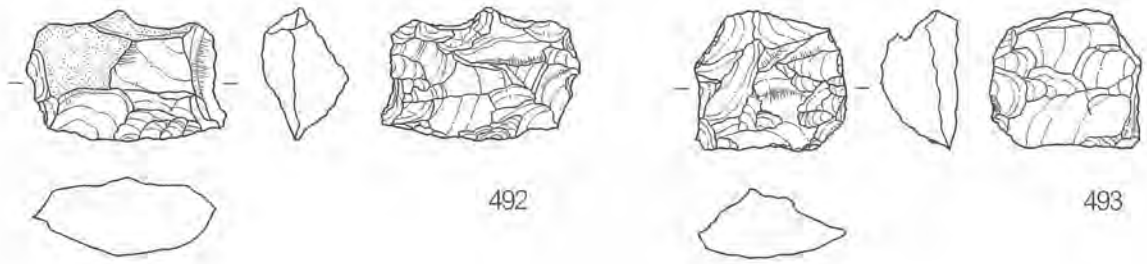
第184图 C、D区遺構外出土遺物・石器 (20)



第185图 C、D区遺構外出土遺物・石器 (21)

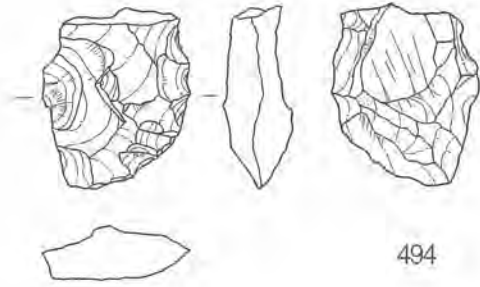


第186图 C、D区遺構外出土遺物・石器 (22)

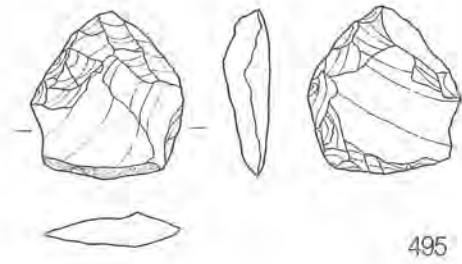


492

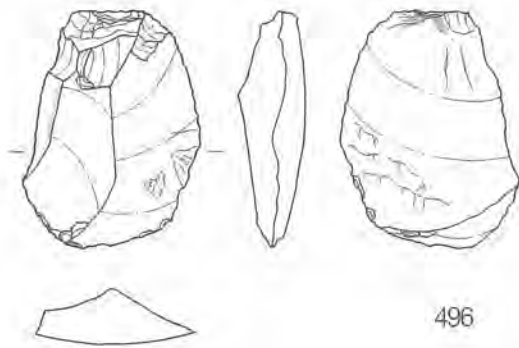
493



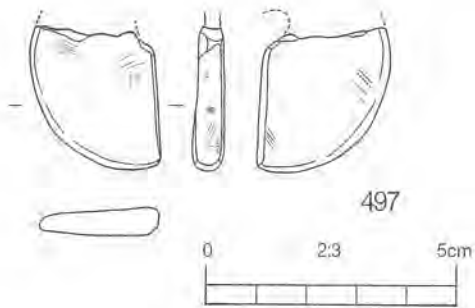
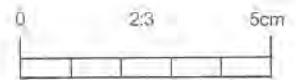
494



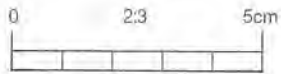
495



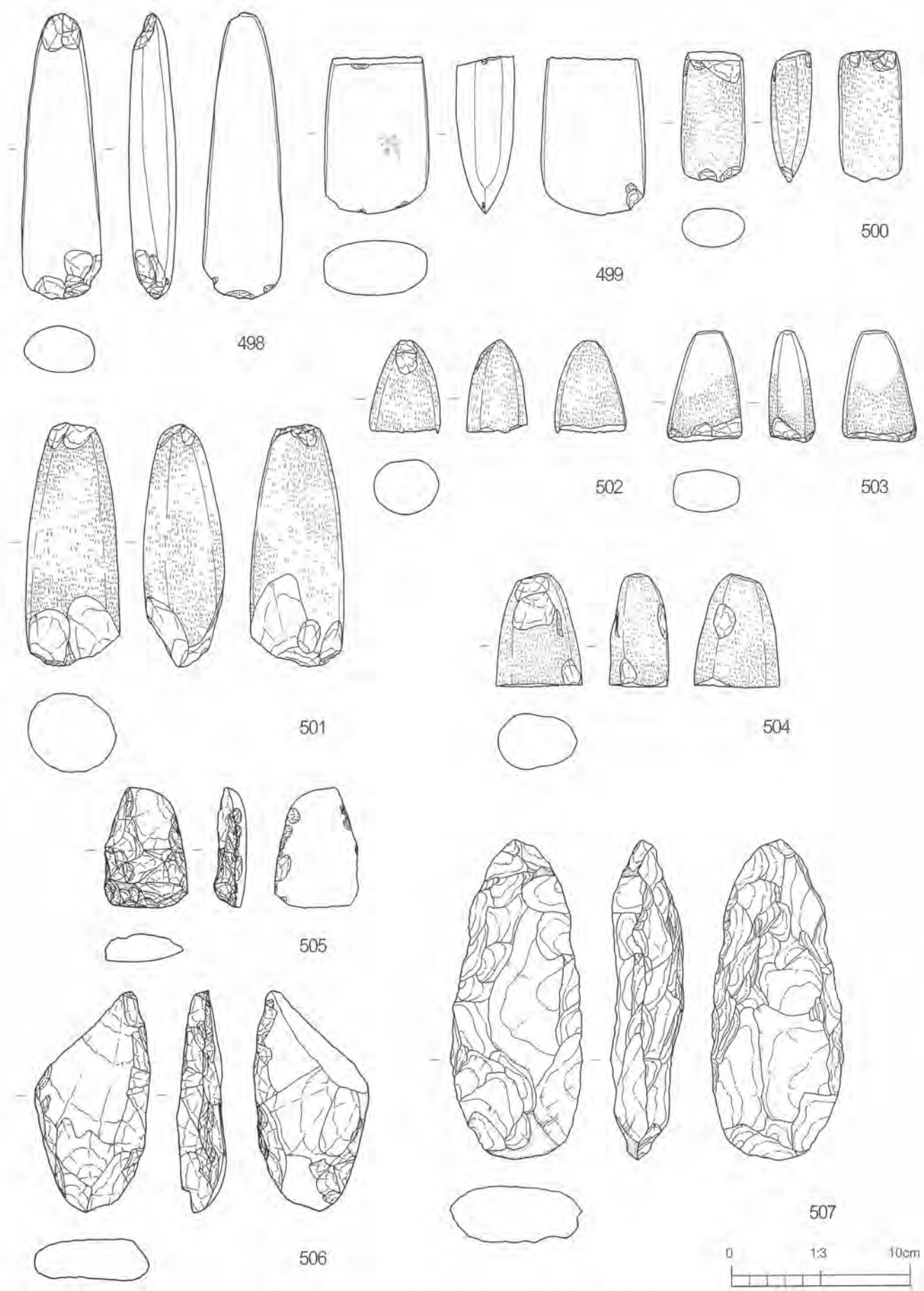
496



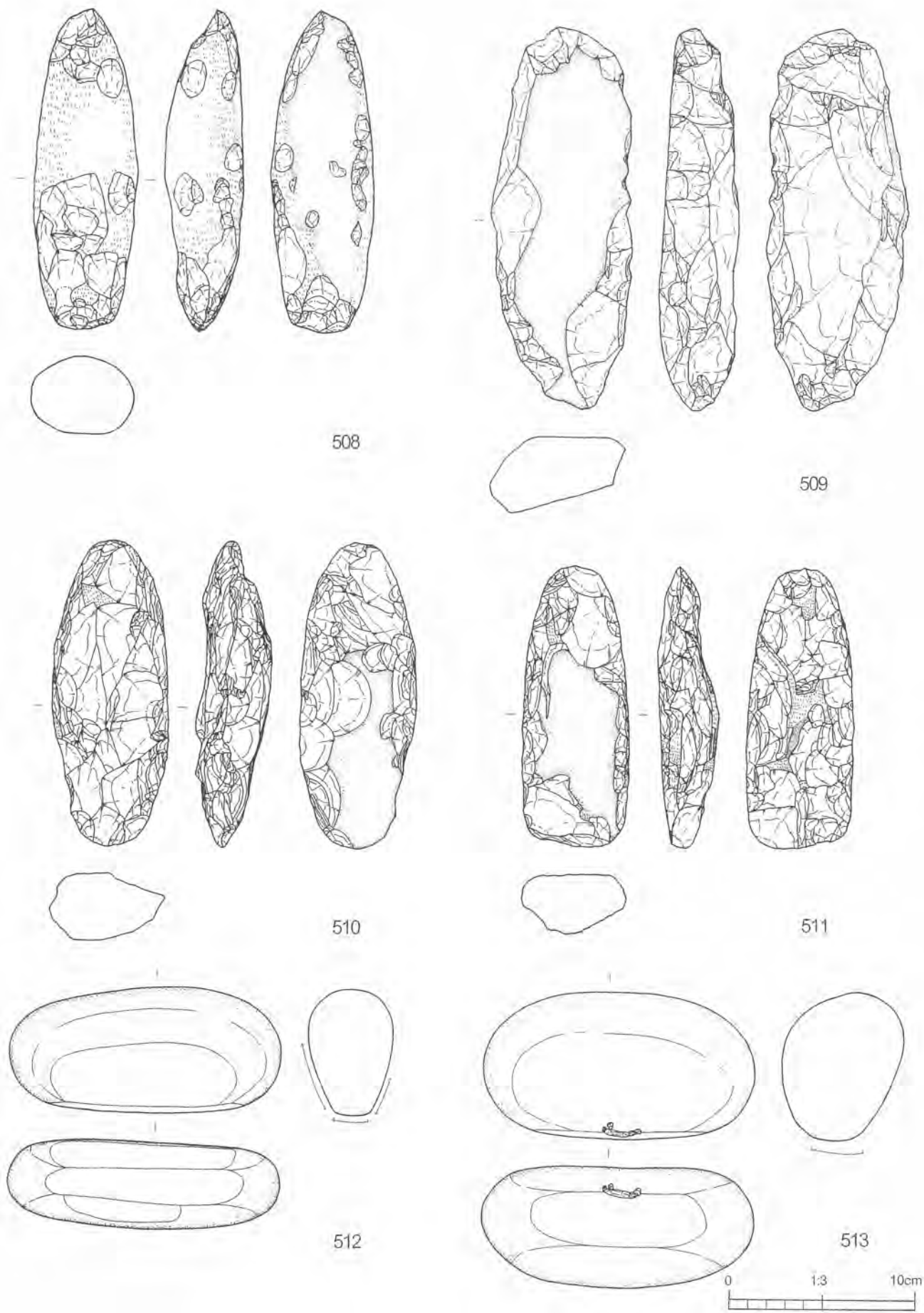
497



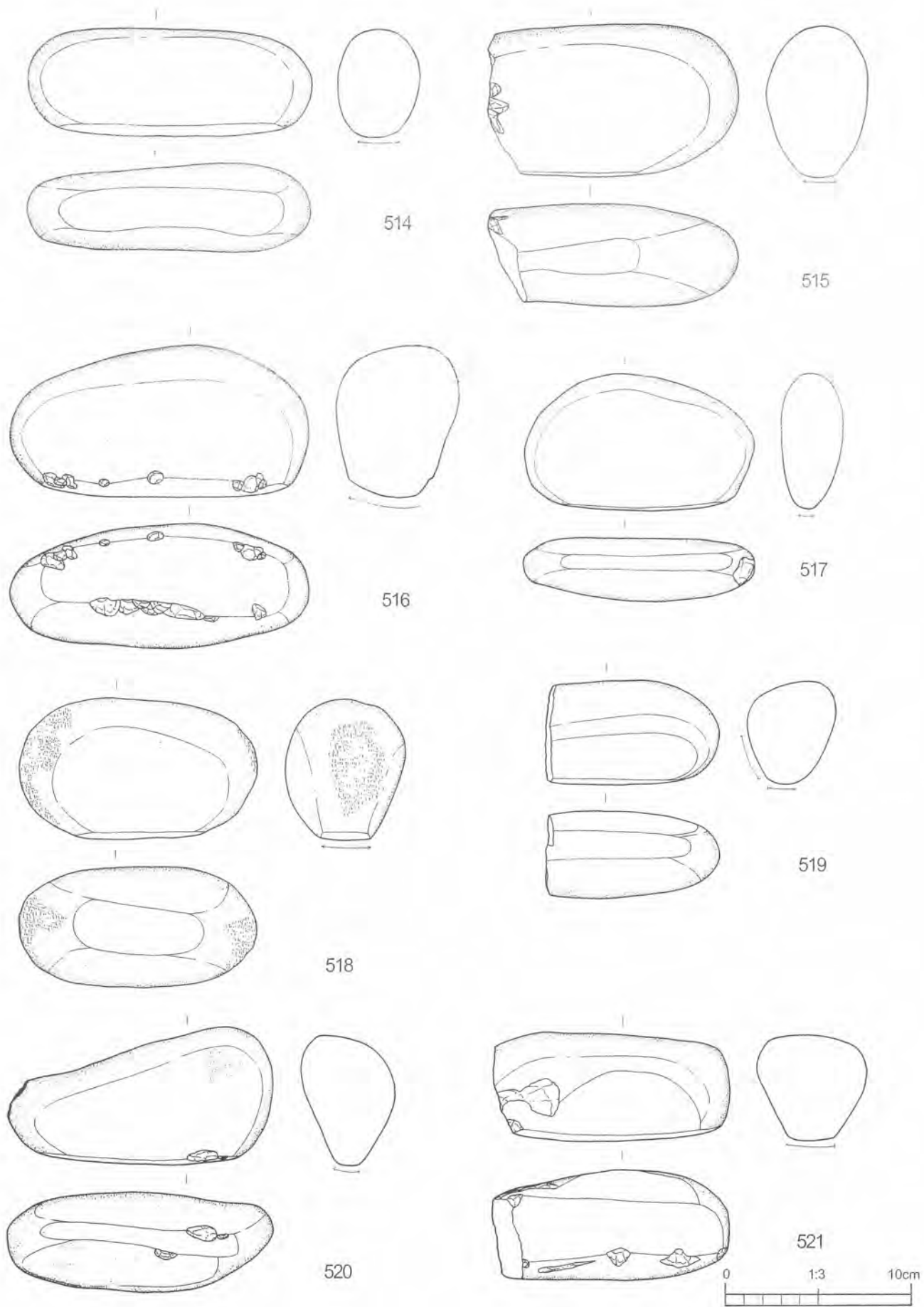
第187図 C、D区遺構外出土遺物・石器・石製品(23)



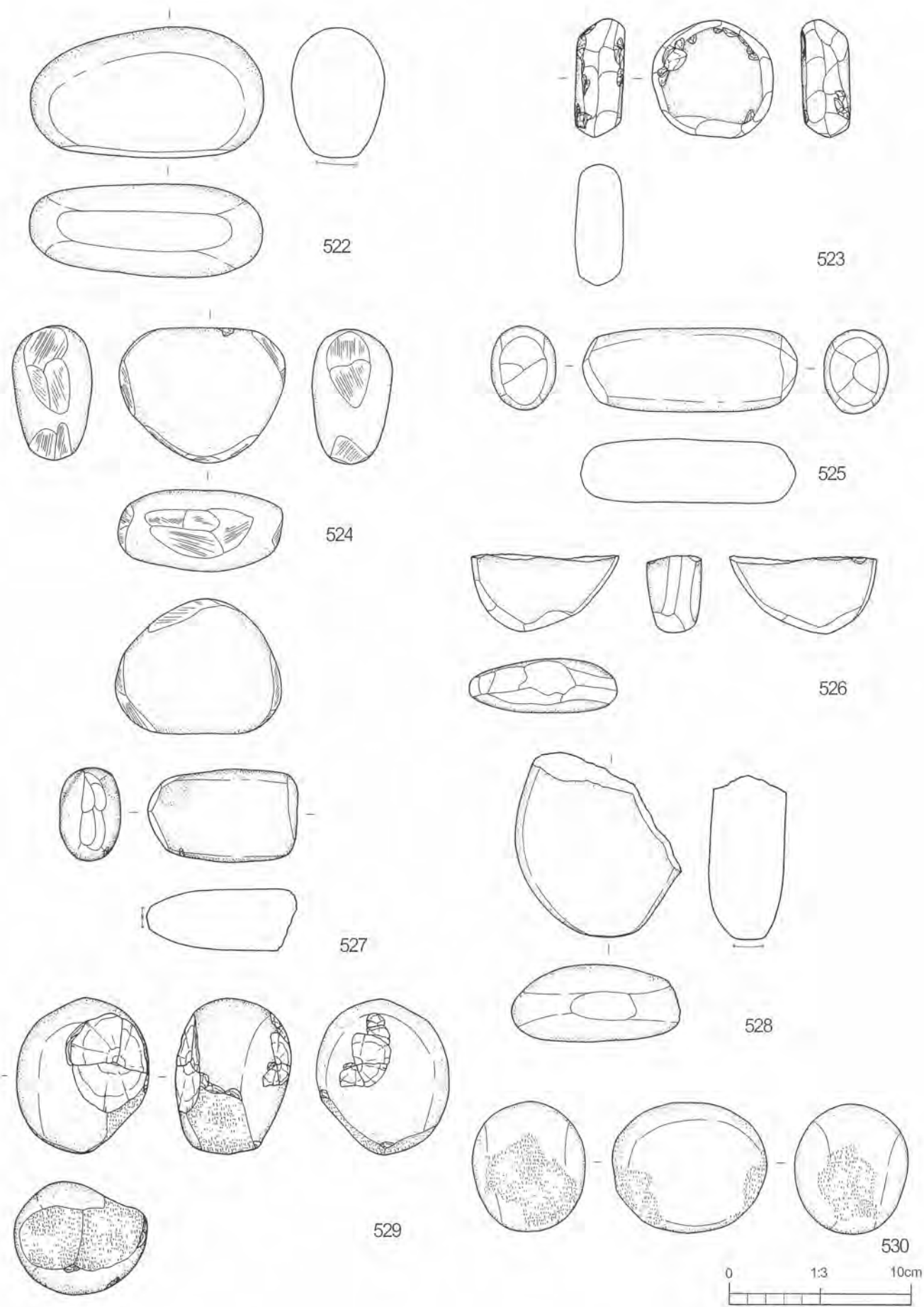
第188图 C、D区遺構外出土遺物・石器 (24)



第189图 C、D区遺構外出土遺物・石器 (25)

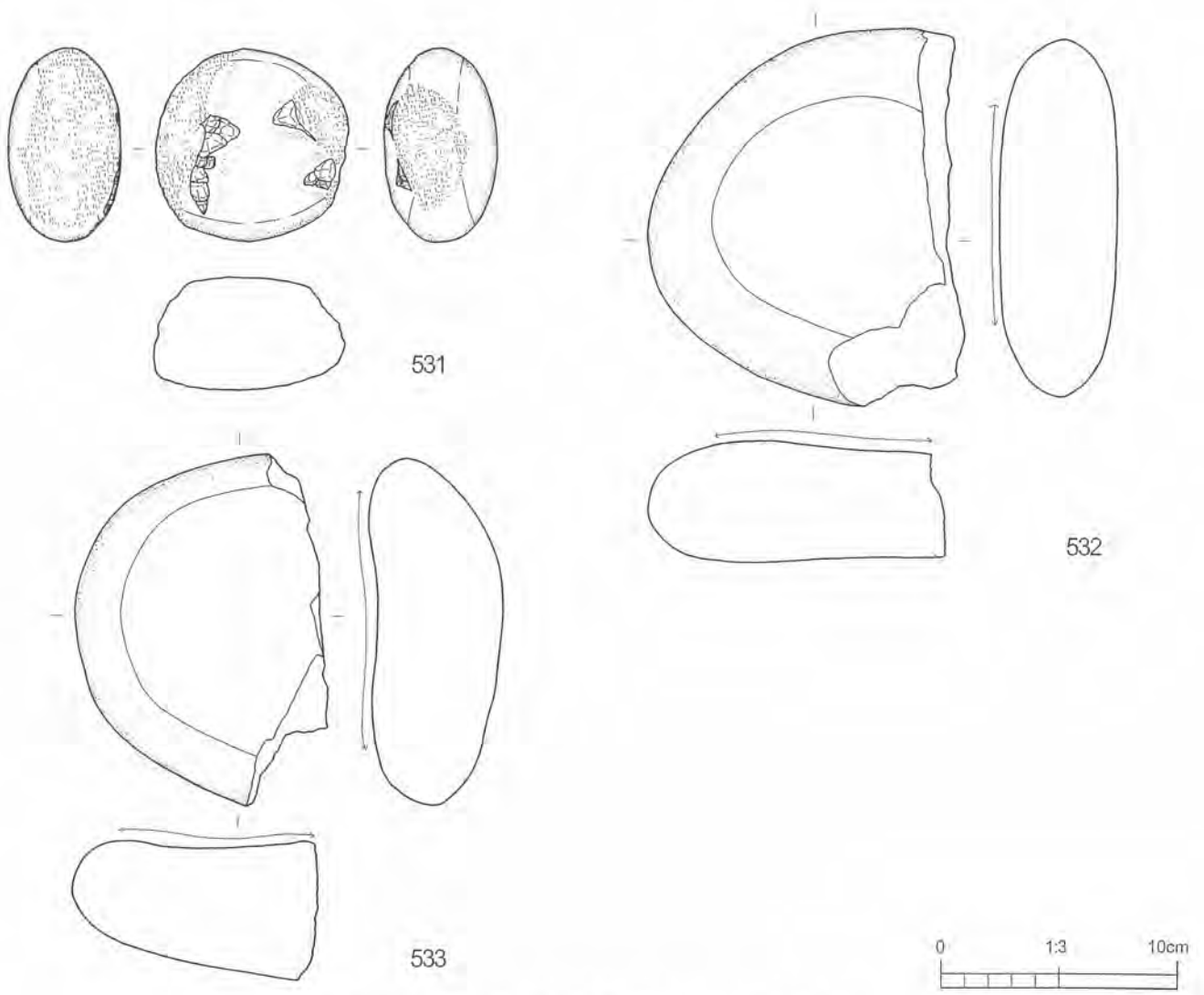


第190图 C、D区遺構外出土遺物・石器 (26)

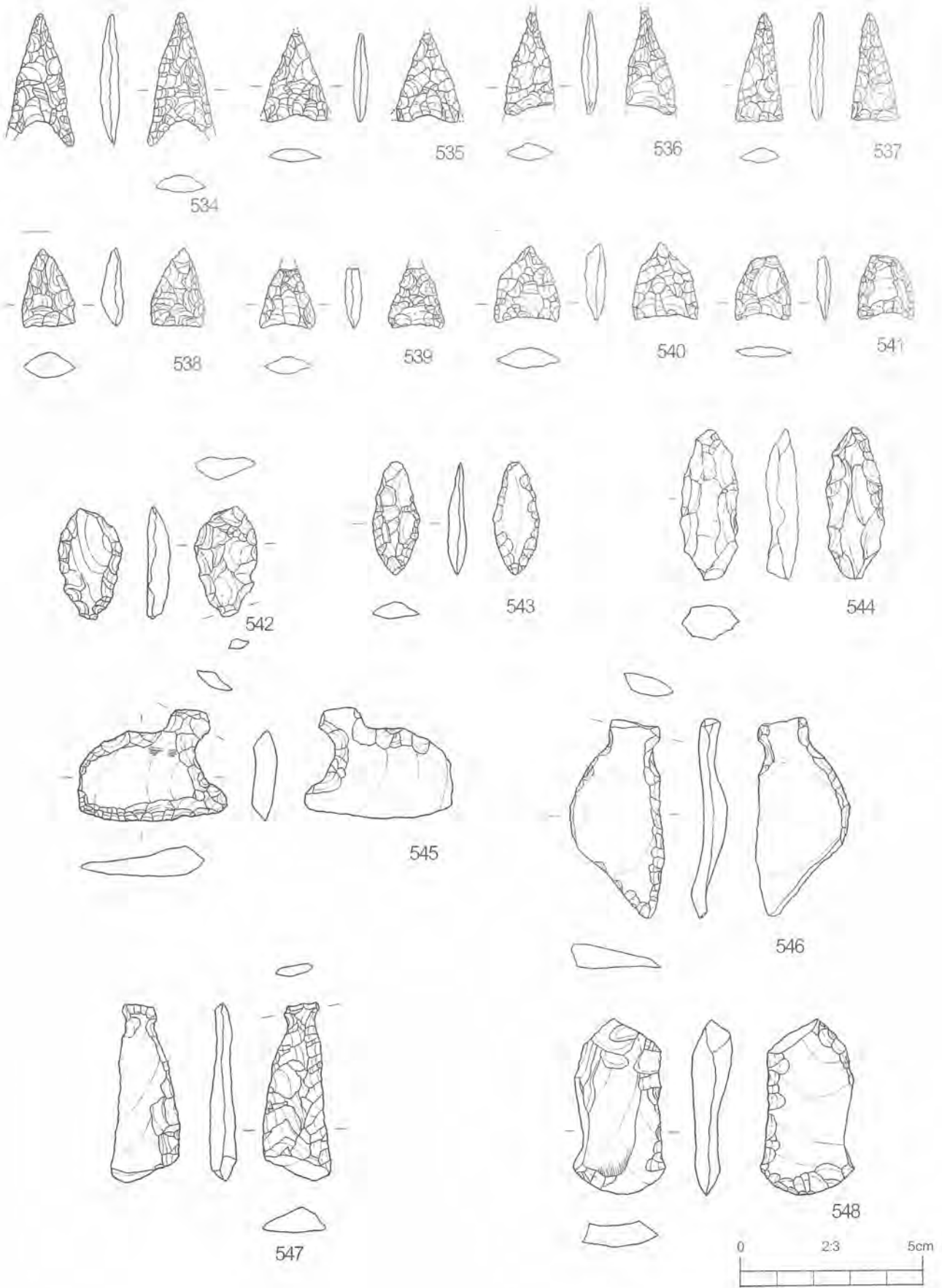


第191図 C、D区遺構外出土遺物・石器 (27)

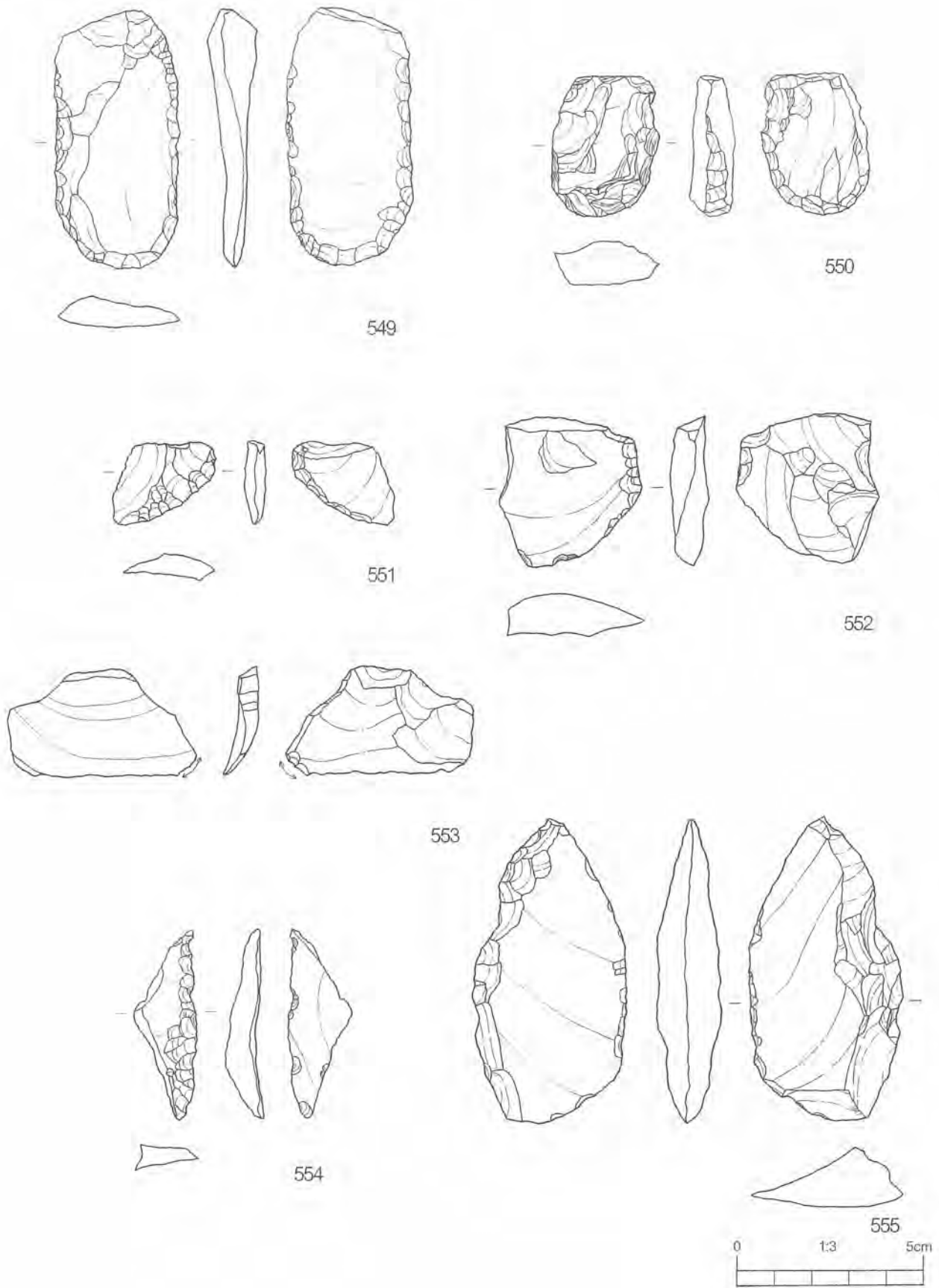




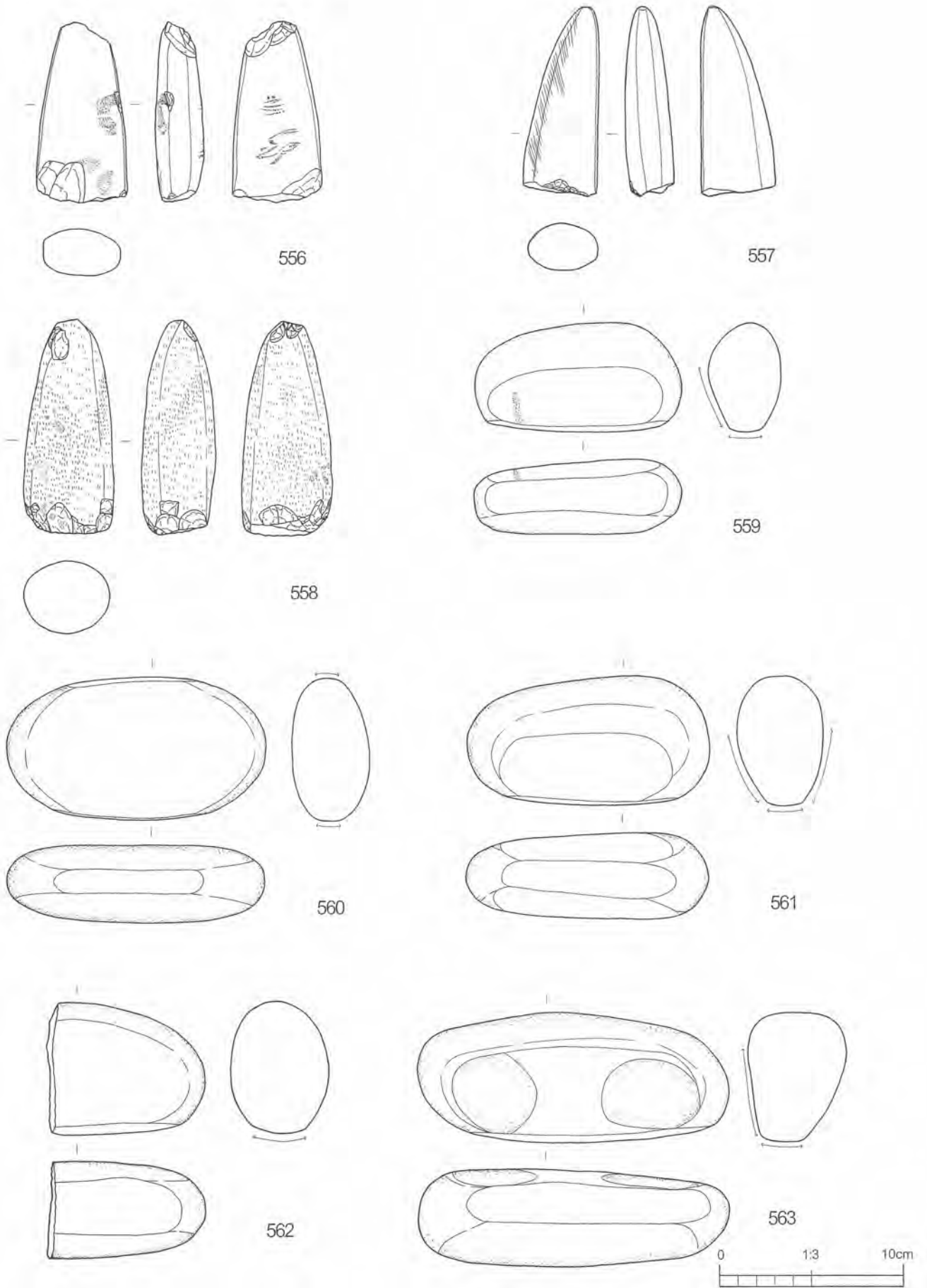
第192図 C、D区遺構外出土遺物・石器 (28)



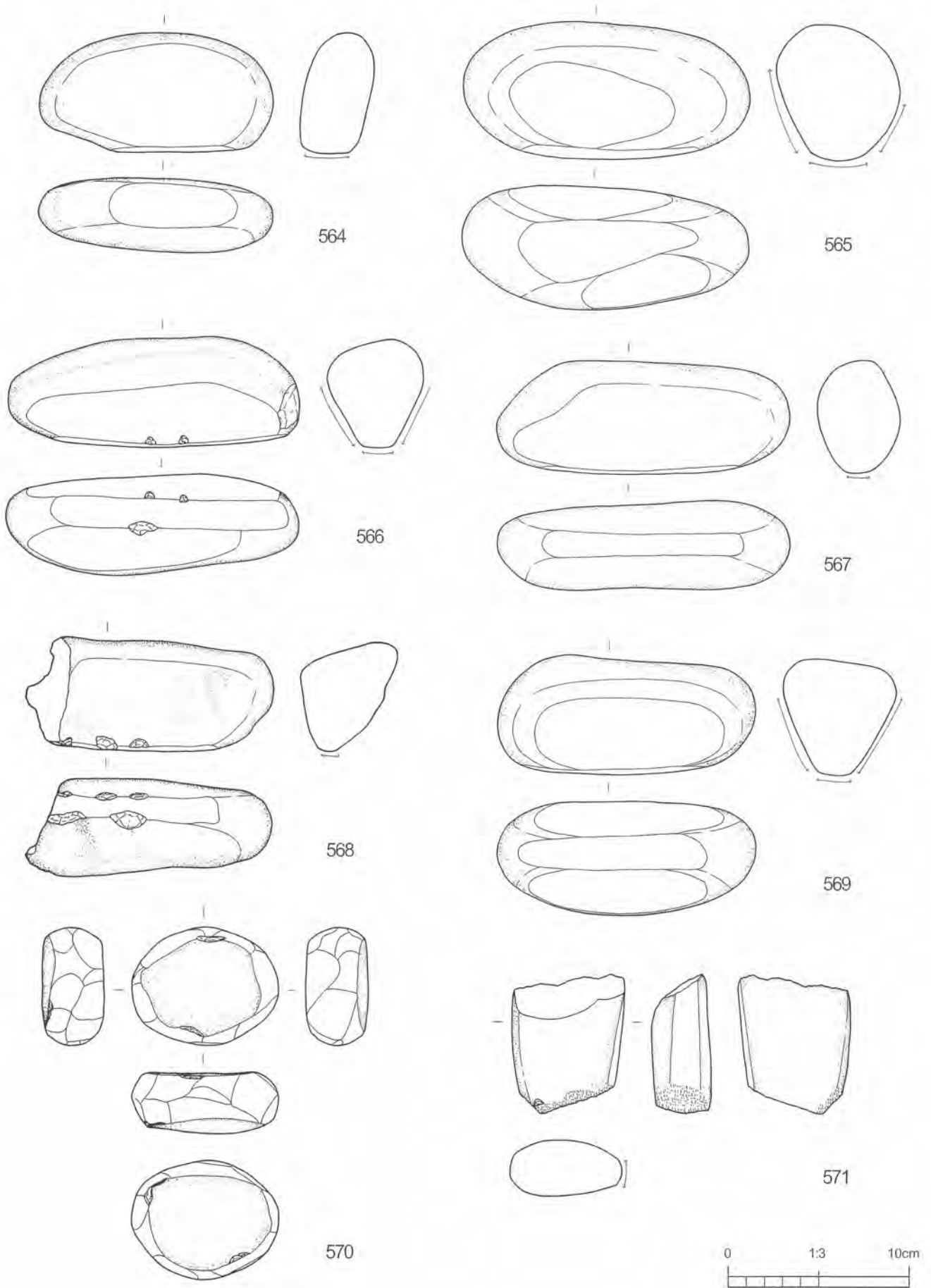
第193图 C、D区遺構外出土遺物・石器 (29)



第194图 C、D区遺構外出土遺物・石器 (30)



第195图 C、D区遺構外出土遺物・石器 (31)



第196图 C、D区遺構外出土遺物・石器 (32)

#### d. D区谷包含層出土遺物（第197～228図）

上述したように包含層は4層に大別され、7～9層からは大量の土器が出土している。記述は9層～7層の順序で行った。

1～27は9層の出土である。1～9は深鉢である。1は平縁で口縁部は外反し、胴部上半が強く張出し、底部はすぼまる。口縁部は、平行沈線の間を波状沈線で埋め、胴部は結節縄文を縦回転させる。2は山形口縁で、口縁部は外反する。口唇部を肥厚させ、口縁部は平行沈線の間を半截竹管による刺突列で埋める。3は複合口縁の山形口縁である。頂部にボタン状の粘土を貼付する。1～3は大木6式に伴う。4、6は縦方向の羽状縄文で施文された胴部、底部である。5は山形口縁で、4単位の頂部をもつ。口縁部は大きく外反し、胴部は強く張出し、底部ではあまりすぼまない。口縁部内面に円形刺突列、外面に原体圧痕を施し、胴部はRL単節縄文の縦回転である。7は網目状撚糸文で施文される。8は短い口縁部は外反し、胴部は少しふくらむ。口唇部には刻目と4単位の抉りが入る。頸部の隆帯には刻目がはいり、胴部は撚糸文で施文される。9は口縁部はやや内反し、胴部は少しふくらむ。口唇部には押圧が加えられ、胴部は網目状撚糸文で施文される。10は隆帯に押圧を加え、胴部は羽状縄文の縦回転である。11は撚糸文で施文された外反する口縁部である。12は結節縄文の縦回転と思われるが、結節部のみ施文されたものか。器面、胎土は粗い。13～19は胎土に繊維を含む。正整の撚糸で施文される18をのぞき、不整撚糸文もしくは縄文を伴って施文される。13～19は大木2a式に伴う。

20は山形口縁で、頂部に抉りが入る。頸部の隆帯には刺突が施され、胴部は結節縄文を縦回転させる。21は口唇部に刻目が入り、網目状撚糸文で施文される。22は口唇部に刻みが入り、口縁部は無文である。23は口唇部に隆帯が貼付され、隆帯に刺突が加えられ、口縁部は無文である。24は山形沈線による施文である。25は櫛目状の施文痕をもち、26は多軸絡条体で施文される。27は網代痕を底面に残す深鉢の底部である。

28～72は8b層の出土である。28～44は深鉢である。28は平縁で複合口縁である。口縁部は外反し、胴部のふくらみはわずかである。口唇部には2個もしくは3個一対で6単位の切込みが入り、口縁部は沈線の上下に縦位の刺突列を加える。胴部はRL単節の縦回転である。29は複合口縁である。口唇部は4単位の山形突起をもつが、頂部には抉りがはいり、口縁部は外反し、胴部はふくらみはわずかで、ずんどうにちかい。口縁部には横回転、胴部には縦回転の縄文が施される。30は29、28と31は同一個体と思われる。32は平縁で複合口縁である。口唇部には4単位の抉りが入り、口縁部は抉りの下に楕円形の凹みをいれ、凹みの間を縦位の刺突列で埋める。胴部には沈線による「X」字状の文様が描かれる。33は山形口縁で、複合口縁である。口縁部は外反し、胴部は若干ふくらむ。口縁部は4単位の頂部は凹みをもち、隆帯は無文である。胴部は単節縄文の縦回転である。以上大木6式に伴う。34は口縁部は平縁で複合口縁である。口縁部は外反し、胴部はわずかにふくらむ。口縁部は無文、胴部は、撚糸文で施文される。35は口縁部は平縁で、直に立上がり、胴部のふくらみもごくわずかである。口唇部には押圧が加えられ、頸部の隆帯には円形の刺突が施される。地文は単節縄文の縦回転である。36は口縁部は内反し、胴部のふくらみはほとんどなく、底部ですぼむ。口唇部に押圧を加え、頸部の隆帯には円形刺突を加える。付加条による施文と思われる。37は口縁部が外反する点をのぞいて、口縁部と押圧と隆帯の施文は36と類似する。地文は、LR単節、RL単節を交互に縦回転させて、羽状の文様に施文したものである。38、39は無文の深鉢である。口縁部は直かわずかに外反し、胴部はほとんどふくらみが

ない。器形は土師器に類似し、当初土師器と疑った土器である。38は口唇部に、2個一對の抉りを4単位でもつ。いずれも器厚は厚めで、胎土は粗く、焼きしまらず、大きさのわりに重い。40は口縁部は外反し、肩部が張出し胴部のふくらみはない。口縁部に山形状小突起をもち、地文は単節縄文の縦回転である。41は山形口縁の小形の深鉢で、4単位の突起をもち、胴部は撚糸文で施文される。42も41と同じ4単位の山形をもち深鉢であるが、無文である。43は口縁部が外反し、肩部は張りだし胴部にふくらみはない。施文は縦位の結節痕だけである。器面、胎土が粗く、重いことは38と類似する。44は口縁部が長めで外反し、胴部のふくらみは弱い。地文は単節縄文の横回転である。

45～47は複合口縁である。45は、粘土紐は縦位、横位に貼付され、横位の粘土紐には棒状工具で横位の沈線が引かれる。46は山形口縁で、頂部に抉りが入り、その下にボタン状の貼付をもち、頸部の隆帯には押圧が加えられる。47は口唇部に抉りが入り、口縁部は無文である。45～47は大木6式に伴う。48は波状口縁で、口縁部に2列の刺突を伴う。剥離部分に同様の刺突文施された円形の貼付が考えられ、大木5式に伴うものと思われる。49は細い粘土紐で梯子状の施文がなされ、50は円形の粘土紐に円形刺突が施される。49、50は大木4式に伴う。51は山形口縁の頂部で、頂部は凹状に成形される。52～54は網目状撚糸文で施文される。55～61は頸部に隆帯をもち、55の隆帯には横位の刺突、56、57には縦位の刺突が施され、58～61の隆帯には押圧が加えられる。62、63の口唇部には押圧が加えられる。64は口唇部に刻目がはいり、撚糸で施文される。65は結節縄文を横回転させ、66は結節縄文の縦回転と磨消を伴う。67は縦位の平行沈線の間にはやはり平行沈線で半円文が描かれる。68は原体圧痕を伴う。69は口唇部に押圧を加え、縄文の圧痕と横回転で施文する。70、71はS字状連鎖沈線で施文され、71は単節縄文の横回転を伴う。72は胎土に繊維を含む。口縁部に沈線をめぐらし、羽状縄文で施文される。69～71は大木2b式、72は大木2a式に伴う。

73～153は8a層の出土である。73～106（104を除く）は複合口縁である。73～75、77は、口縁部は外反し、胴部は強く丸くふくらみ、底部は細くすぼむ。球胴形の深鉢である。73は複合口縁部に縦位の粘土紐が貼付され、頸部を山形平行沈線が横走する。胴部にボタン状粘土が貼付され、そこから斜方向に沈線が引かれる。地文は単節縄文の横回転である。74は口唇部は2単位で凹状に抉られ両脇の粘土紐が貼付される。口縁部を隆帯をめぐらす。頸部は、平行沈線の間をやはり沈線による同心円、山形文で埋める。地文は単節縄文を横走させる。75、77は同一個体である。75口縁部に山形状小突起をもち、凹状のボタン状粘土が貼付される。ボタン状粘土の間を隆帯で結び、隆帯には棒状工具で沈線が施される。頸部から底部にかけて細い沈線でX字状の文様が描かれる。76は口縁部は外反し、胴部のふくらみは弱い。山形の突起をもち口縁部は、頂部に抉りが入り、抉りの下には棒状工具で横位の沈線、その両脇に斜方向の沈線が施される。頸部の隆帯には斜方向の刻目が入る。地文は単節縄文の横回転である。80の口縁は外反し、肩部は強く張出し、底部へいきいきにすぼまる。口縁部は4単位の山形口縁で、隆帯は無文である。地文は単節縄文を横走させる。78は口縁部が外反する。隆帯は無文で、頸部は山形沈線で施文される。79は山形口縁である。頂部にボタン状粘土が貼付され、頸部は直、山形の沈線で施文される。81の山形口縁の頂部には抉りが入り、隆帯には円形刺突列が施される。地文は単節縄文の横回転である。82は山形口縁の頂部に抉りが入り、隆帯は無文である。地文は結節縄文の縦回転である。83は山形口縁の頂部に円形の凹みが付けられ、両側を斜方向の沈線で施文する。84は山形口縁

の頂部に縦位の粘土紐の剥離痕を残す。隆帯の横位の沈線の上下に円形刺突列を施す。頸部には縄文原体圧痕を施文する。85は口縁部は外反し、胴部はわずかにふくらむ。山形口縁で、頂部を凹状に挟り、隆帯にボタン状粘土を貼付し、沈線で連絡する。沈線の下に縄文圧痕を伴う。頸部の隆帯には縄文圧痕が施される。地文は単節縄文の横回転である。86は波状口縁である。隆帯には棒状工具で横位の沈線が施され、頂部の下にボタン状粘土が貼付される。頸部には横位の結節が認められる。87、88はいずれも山形口縁で、頂部にボタン状粘土が貼付される。87は頸部に横位の山形沈線が施文される。89は山形口縁で頂部に3点の挟りが入る。隆帯は無文で、頸部は横位の櫛目状の沈線で施文される。90は口縁部が直線的に立上がる。隆帯は無文で、地文は単節縄文の縦回転である。91は口縁部は外反し、胴部はやや張出す。隆帯は無文で、地文は単節縄文の縦回転である。92は山形口縁、93は平縁で、いずれも隆帯は無文で、地文は結節縄文の縦回転である。94は口縁部は外反し、胴部はわずかにふくらんで底部へすぼまる。4単位の山形口縁の頂部には挟りが入る。隆帯は単節縄文の横回転で施文され、胴部は縦回転である。95は平縁で、隆帯は縄文圧痕が施され、胴部は単節縄文の縦回転である。96も平縁で、口唇部に挟りが入る。隆帯は単節縄文の横回転、胴部は縦回転でそれぞれ施文される。97は平縁の口縁部で大きく外反する。隆帯には半円の刺突列が加えられ、頸部に隆帯の剥離痕を残す。胴部は無文である。98は口縁部は外反し、胴部はまるみをもってすぼまる。平縁で、2箇所には挟りが入る。隆帯は無文で、体部は多軸絡条体で施文される。99は山形口縁である。粘土紐は、頂部に縦位、両側に横位に貼付される。横位の粘土紐には、棒状の工具で、円形の凹みと沈線が施される。地文は単節縄文の縦回転である。100は山形口縁で、口縁部の隆帯には棒状の工具で沈線が施される。地文は結節縄文を縦回転させる。101は口縁部は外反し、胴部はふくらみをもたずすぼまる。平縁で、隆帯には原体圧痕が施され、地文は単節縄文の縦回転である。102は口縁部は外反し、胴部はやや強く張出す。平縁で、隆帯は無文と思われる。地文は無節の縄文を縦回転させている。103は口縁部はわずかに外反し、胴部は若干の丸みをもってすぼまる。4単位の山形口縁で、頂部には挟りが入る。隆帯は単節縄文の横回転、胴部は縦回転で施文される。104は口縁部は外反し、胴部はわずかにふくらみ、ずんどうにちかい。口縁部は無文で、胴部は、単節と無節の縄文を交互に縦回転させ、羽状に施文する。105は口縁部は外反し、胴部はやや強くふくらんですぼまる。波状口縁で、4単位の頂部に挟りが入る。隆帯には横位の楕円形の凹み、あるいは沈線が施される。地文は単節縄文の縦回転である。106は口縁部は外反し、胴部はわずかに丸みをもってすぼまる。4単位の山形口縁で、頂部は凹みをもつ。隆帯には棒状工具で沈線が施される。地文は単節縄文の縦回転である。107は口縁部は外反し、胴部わずかに丸みをもってすぼまる。口縁部に4単位の山形小突起をもつ。地文は結節縄文の縦回転である。108は口縁部は外反し、胴部はやや丸みをもってすぼまる。器形は平面形が大きく楕円形に歪む。口唇部に押圧痕をもち、地文は単節縄文の横回転である。109～111は、器面、胎土が粗く、器厚が厚く、重いなどの点が共通する。また上述の12とも類似する。109は直線的に立上がり、口縁部でわずかに外反する。無文である。110は口縁部は外反し、胴部は丸みをもってすぼまる。口唇部には3個一対の切込が4単位で入る。無文である。これは当初土師器ではと疑った土器である。111は口縁部がわずかに外反するだけのずんどう形である。施文は結節縄文の縦回転である。112は口縁部は内反し、胴部はふくらむ。施文は結束縄文によるものと思われる。

113は口縁部は外反し、胴部はややふくらみをもってすぼまる。山形口縁で、頂部に挟りが入



る。縦位のジグザグ沈線で施文される。114は波状口縁で、口唇部に刺突列が入る。口縁部に波状の沈線と113と同じ縦位のジグザグ沈線を施す。113、114は大木5式に伴う。115、116はいずれも細い粘土紐で施文される。115は平行隆線と波状の隆線を組み合わせ、116は梯子状の文様を描く。115、116は大木4式に伴う。

117～120は弥生土器である。117は壺の口縁部で、平行沈線で施文される。118は高坏の口縁部で、変形工字文を伴う。119は浅鉢の口縁部で、口縁部を平行沈線がめぐる。120は壺の底部と思われる。無文で、全面にミガキ調整痕を残す。

121は山形口縁の頂部である。複合口縁で、沈線で渦巻状の文様が施文される。122はボタン状粘土が貼付された口縁部である。粘土は凹状で、口唇部とともに縄文回転で施文される。123は山形口縁の頂部である。口縁部に縦位の4本の粘土紐が貼付され、さらにその上に横位に貼付される。頸部は沈線を横走させ、全面を単節縄文の縦、横の回転で施文する。124は口縁部に凹状の粘土瘤が直交して貼付される。胴部は撚糸文で施文される。125は横位の沈線と結節縄文の縦回転で施文される。126は縦位の平行沈線とジグザグ沈線を伴う。127は結節縄文の縦回転で、磨消を伴う。128～135は撚糸文で施文される。128～133は網目状、134、135は木目状である。136、137は山形口縁の頂部である。136はボタン状、137は凹状に成形される。138、139は隆帯に円形刺突を加える。140～142は口唇部に押圧を加え、143は刻目が入る。

144～152は胎土に繊維を含む。144～149は不整撚糸で施文され、144、145、149は単節縄文の横回転を伴う。150、151は単節縄文を横走させ、152は羽状縄文で施文される。144～149は大木2a式に伴い、150、151は大木1式に伴う。153は底面に網代痕を残す深鉢の底部である。

154～261は7層の出土である。154、155、157は、口縁部は外反し、胴部は丸く張出し、底部へ細くすぼまる球胴形の深鉢である。154は、山形口縁で、口縁部に山形の平行沈線をめぐらす。頂部下の弧状に曲る楕円形の粘土紐を貼付し、傍らに同心円の沈線が並ぶ。その下には平行沈線を横走させ、沈線の間を縦位の刺突でうめる。口縁部には沈線を伴った逆さL字形の粘土紐が縦位に貼付される。胴部は単節縄文の横回転で施文する。155は口縁部は平縁で玉縁状に成形し、頸部に隆線で楕円、方形の二重の区画をつくり、そのなかを山形隆線で埋める。地文は単節縄文の縦回転である。157は山形口縁で、頂部にボタン状粘土を貼付し、棒状工具による沈線で連絡する。頸部は山形沈線を横走させる。胴部は、ボタン状粘土を中心にX字形の沈線が施される。地文は単節縄文の縦回転である。156は縦位、斜位の沈線に横位の刺突列、山形沈線が伴う。地文はLRの単節縄文を縦回転させるが、一部はRLを加えて羽状に施文する部分をもつ。158～193（166をのぞく）は複合口縁である。158は口縁部は外反し、胴部はややふくらみをもつ。平縁で、隆帯には斜の沈線が施される。頸部は山形沈線の下に平行沈線を配す。地文は結節縄文の縦回転である。159は口縁部は外反し、胴部のふくらみはない。山形口縁で、隆線と頸部には原体圧痕が施される。地文は横位の羽状縄文である。160は外反する口縁部である。隆帯には上向き、下向きの連続弧文が施される。頸部は山形沈線である。地文は単節縄文の縦回転である。161、162は沈線間を縦位の弧状沈線で埋めている。162は山形口縁で、頂部には刺突を伴った縦位の粘土紐が貼付される。164、165の隆帯は山、谷の沈線で施文される。163は口縁部は外反し、胴部のふくらみはわずかである。隆帯には原体圧痕が施され、地文は単節縄

文の横、斜回転である。166は口縁部は反りは小さく、胴部の張りも弱い。山形口縁で、頂部には挟りが入り、口縁部には原体圧痕がほどこされる。167～170はいずれも隆帯に施文される。167～169は単節縄文の横回転、170は原体圧痕である。171は口縁部が内反気味で、胴部はわずかにふくらむ。隆帯には単節縄文の横回転が施され、地文は結節縄文の縦回転である。172、173も隆帯に単節縄文の横回転で施文されるが、172は横位の沈線を伴う。174、176～178は隆帯に刺突が加えられる。174、177は半截竹管による刺突列、176、178は円形刺突列である。175は反りのない口縁部で、隆帯はわずかに押圧痕を残す。179は口縁部は外反し、胴部はわずかに丸みをもって底部へすぼまる。4単位の山形口縁で、隆帯は無文である。地文は単節縄文の縦回転である。180、181は隆帯に刺突が加えられる。180は縦位、181は横位の刺突列である。182は山形口縁である。頂部に円形の凹みをつくり、その下に縦位の刺突列と沈線をめぐらす。さらに楕円形の粘土紐を貼付し、縦位の刺突を施し、その両側を半円の刺突列で埋める。183は山形口縁で、頂部は凹む。隆帯には円形の刺突列が施され、頸部に原体圧痕を伴う。184は山形口縁の頂部で、隆帯は無文である。頸部に横位の沈線を伴う。185は口縁部は外反し、胴部のふくらみは小さい。縦位、横位の粘土紐を交互に4単位で貼付する。横位の粘土紐には棒状工具で沈線と丸い凹みが施される。地文は単節縄文の横回転である。187の口縁部は185に類似する。縦位と横位の粘土紐を貼付し、横位の粘土紐には棒状の工具で、円形の凹みをいれてから沈線を引く。186は185とほぼ同形である。口縁部には縦位の沈線が並列し、胴部は撚糸文で施文される。188は山形口縁であるが、186と同施文で、頸部に沈線を伴う。189、190は、棒状の工具で沈線を施した粘土紐を口縁部に貼付し、190は頸部に横位の沈線を伴う。191は山形口縁の頂部で、円形の凹みをもち、頸部に沈線を伴う。192は隆帯を凹状に二分し、上部には円形の凹みが付き、下部には斜方向の刻みが入る。193は口縁部に角押しの列がめぐり、その下に山形沈線を伴う。

194、195はX字状の沈線を伴い、196は弧状沈線文と縦位の羽状縄文で施文される。197は口縁部に連続弧状沈線文、頸部に横位の沈線、胴部に縦位の沈線が施される。198は横位の隆帯に沈線を加え、地文は結節縄文の縦回転である。199は横位の平行、波状沈線に単節縄文の横回転が伴う。200は口縁部に横位の沈線、地文は縦位の羽状縄文である。201は横位の刺突列の下に平行沈線、結節縄文の縦回転が伴う。202も結節縄文の縦回転である。203は小形の深鉢である。口縁部はわずかに外反し、胴部のふくらみは小さい。複合口縁で、頸部に沈線をめぐらす。口縁部と沈線上に隆帯の渦巻文を貼付する。地文は単節縄文の横回転である。

204～208は細い粘土紐の貼付による施文である。204は渦巻文、205と206は波状文で、204は円文を垂下させる。207は渦巻文、208は山形文で、粘土紐に刻目が入る。209は円形刺突文である。204～206は大木4式、207～209は大木3式に伴う。

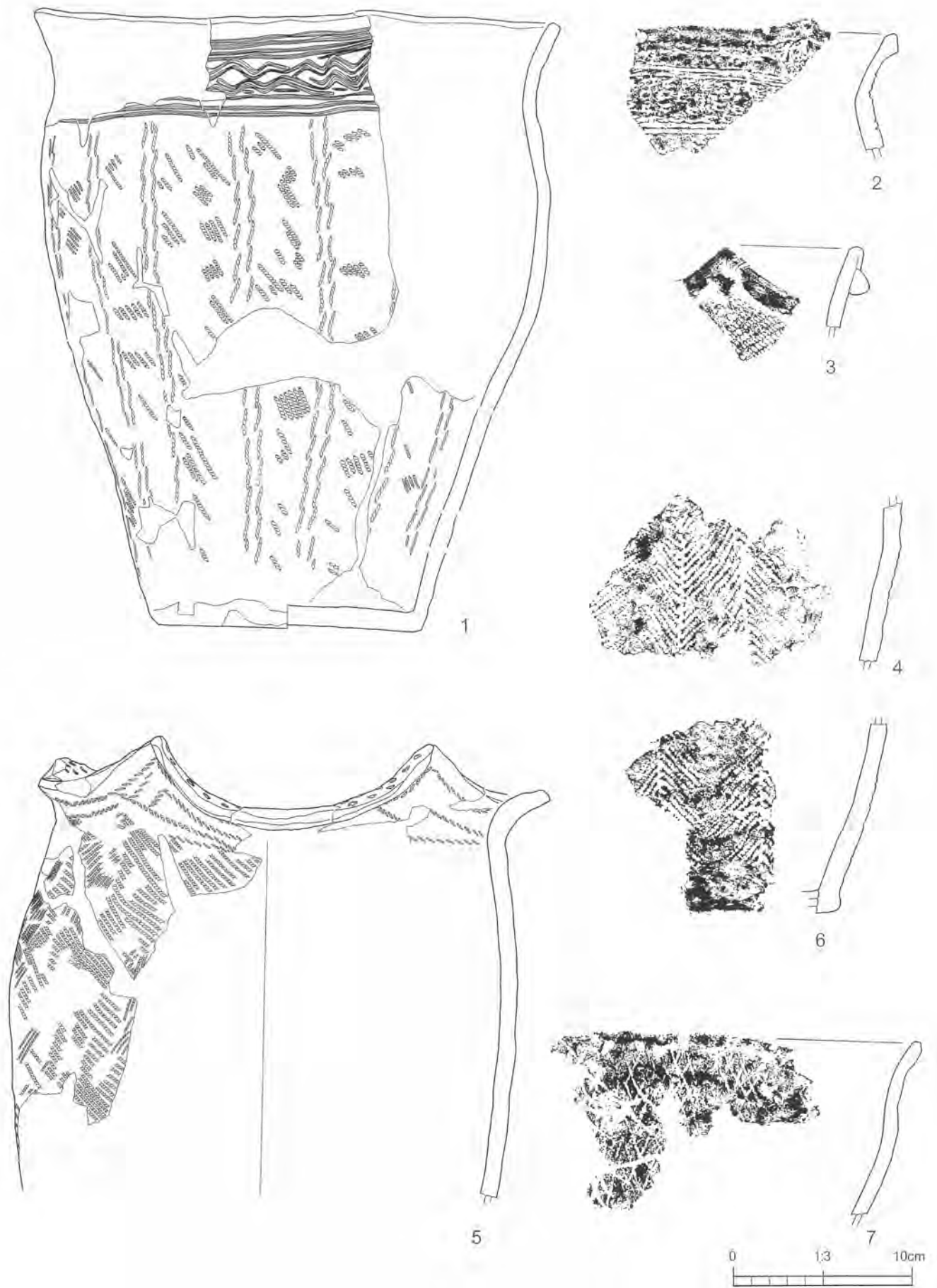
210～218は胎土に繊維を含む。210、211は不整撚糸で施文される。212、213は単節縄文の横回転を伴い、214～216は羽状縄文で施文される。217、218は尖底土器の底部である。219は貝殻腹縁圧痕を伴う。210、211は大木2a式、212、213は大木1式にそれぞれ伴う。

220は器形不明の土器である。垂直に立上がり、わずかに丸みをもって大きく外反する。外面は撚糸文で施文され、底部は無文である。内面はハケメに似た調整痕があり、器面は底部も含めて滑らかである。胎土は焼成はあまりよくないが、密である。当初蓋とも考えたが、大き過ぎること、

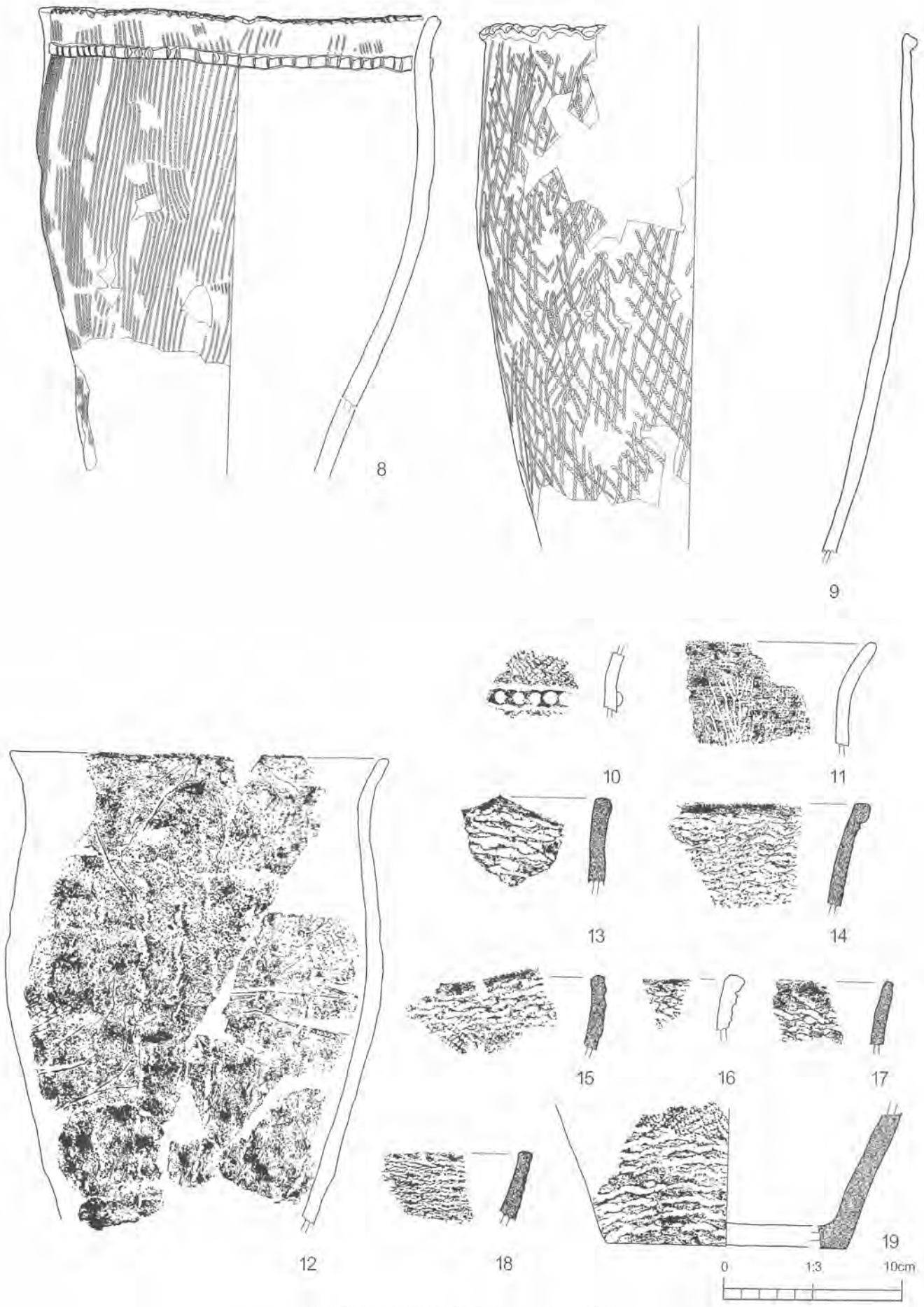
把手の器形が一般的な「凹型」と異なることなどから、球胴形深鉢の底部の可能性をとり、とりあえず底部として載せた。

221～224は複合口縁の口縁部である。221は地文のみで、隆帯も一部施文される。原体は結束縄文と思われる。222は口縁部に押圧が加えられ、隆帯は無文である。223は隆帯に沈線による横位の楕円区画と縦位の沈線を伴う。224は山形口縁で、原体圧痕を伴う。225～228は隆帯を伴う。225は円形の刺突が加えられ、山形沈線を伴う。226は隆帯に刻みが入り、波状沈線を伴う。227、228は隆帯に円形刺突が加えられ、228は山形沈線を伴う。229は山形隆帯、230は平行沈線を伴う。231は縦位、横位の平行沈線、232は平行沈線とジグザグ沈線を伴う。233は無文の深鉢である。口縁部は外反し、肩部がやや張出し、いっきにすぼまる。器面、胎土は粗い。110の無文土器に類似する。234、235は平行沈線を伴い、236は斜方向の沈線がはいる。237は沈線による区画に磨消を伴う。238は撚糸文に円形の沈線文が施文される。239は山形口縁の頂部で、円形の凹みと溝を伴う。地文は撚糸文である。240は口縁部に粘土紐を円形に貼付し、木目状撚糸文で施文する。241は口縁部に円形の凹みをもつ突起が付けられる。243、244は頸部の隆帯に円形刺突が加えられ、口縁部に山形の小突起をもつ。244は山形口縁で、頂部に抉りが入る。245は押引文を伴う。245～247、249～253は撚糸文で施文される。247は口縁部に押圧痕をもち、252、253は頸部に刺突を加えられた隆帯をめぐらす。248は口縁部が外反し、胴部がわずかにふくらむ深鉢である。口縁部には抉りが入り、胴部は無節縄文の縦回転で施文される。

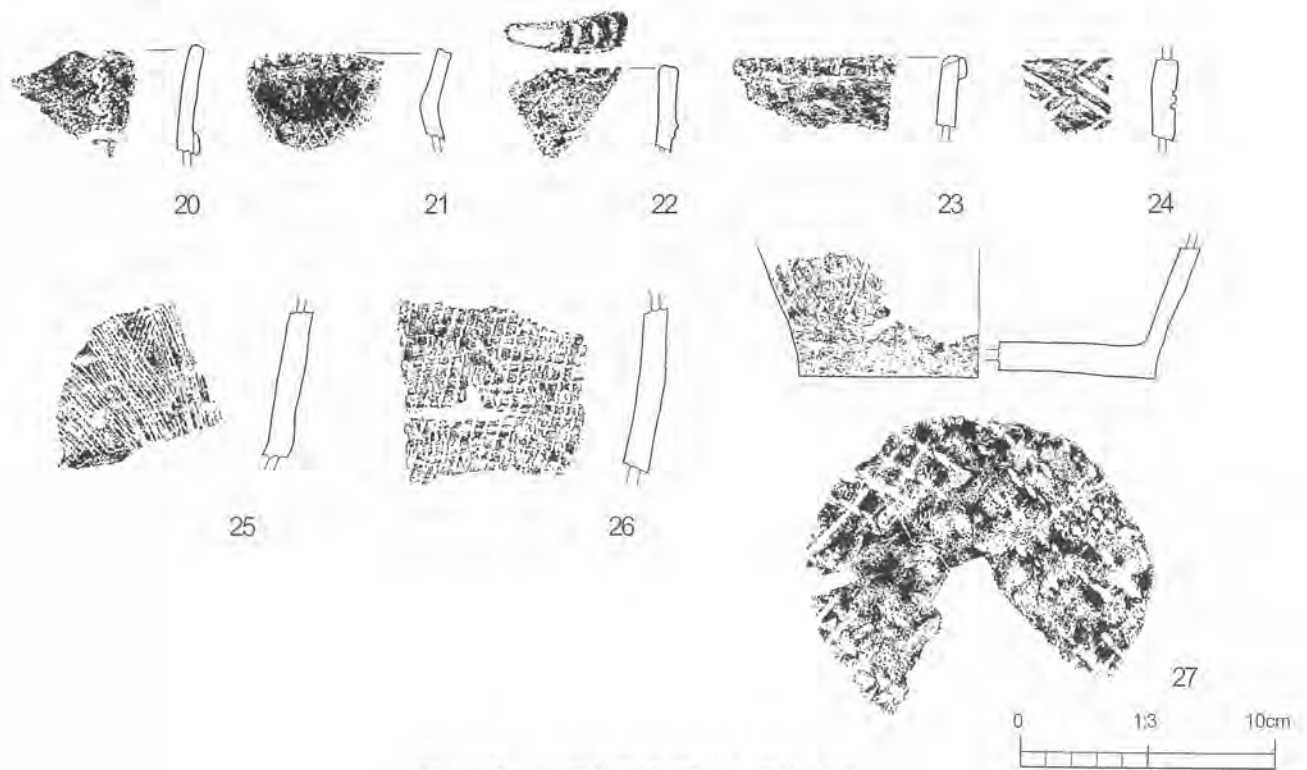
256は結節縄文の横回転を伴う。255、257、259～261は口縁部に押圧痕を残す。258は刺突痕である。254は底面全体に網代痕を残す深鉢の底部である。



第197图 D区谷包含层出土遗物 (1)



第198图 D区谷包含層出土遺物 (2)



第199図 D区谷包含層出土遺物(3)

262～291は表土(1層)の出土である。

262は隆起区画文、263、264は沈線による区画と磨消を伴う。265、266は隆沈線を伴い、265は隆線で渦巻文を施文される。267、268、271～278は複合口縁である。267は沈線による渦巻文である。268～270は棒状の工具による縦位の連続弧状沈線文で、横位の沈線を伴う。271は隆帯に半截竹管の刺突列を伴う。272は隆帯に円形刺突を施し、地文は結節縄文の縦回転である。273は隆帯を沈線で凹状に二分し、上下の隆帯に円形刺突を加え、さらに単節縄文の横回転で施文する。274、277は隆帯を縄文で施文され、278は口唇部に刻みが入る。276は山形口縁の頂部で、隆帯は無文である。278は口縁部にボタン状粘土が貼付され、連続弧状沈線文を伴う。279は横位と斜位の沈線の間を連続弧状沈線文を埋める。280は細い粘土紐による波状文である。281、282は胎土に繊維を含む。いずれも不整燃糸文と単節縄文の横回転で施文される。283は頸部に円形刺突を伴う隆帯をもち、284は口唇部に刻みが入る。285、286は燃糸文で施文される。287は抉りの入る波状口縁で、288は平行沈線による施文である。

289はジグザグ沈線を伴う山形沈線で、290は押引文を伴う。291は貝殻腹縁圧痕文を伴う。

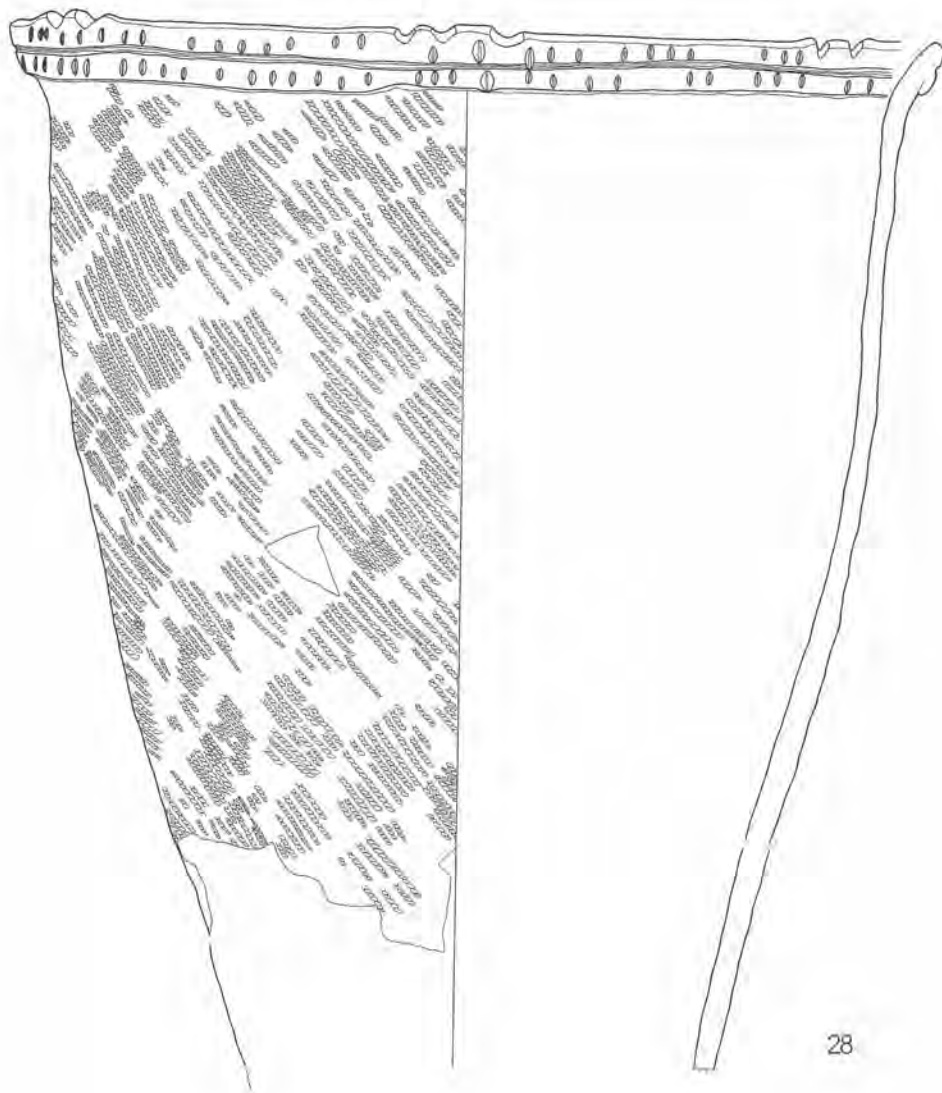
292～364は石器である。

292～296は9層の出土である。

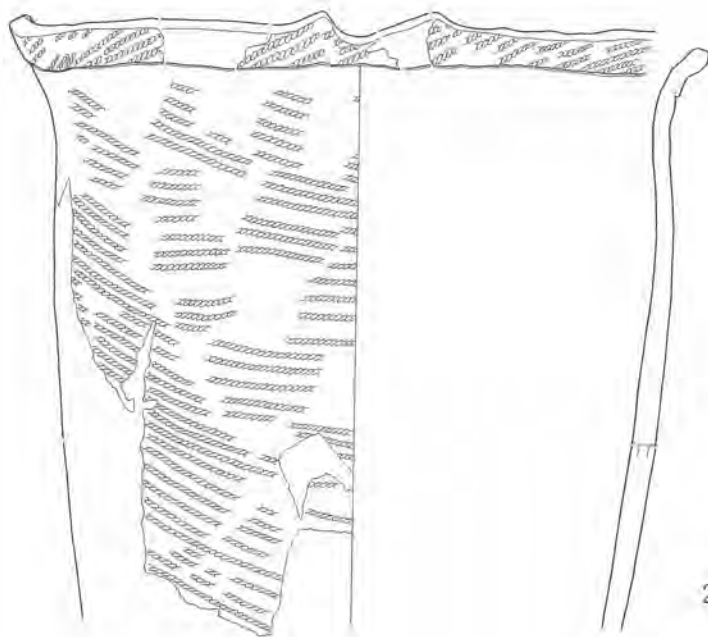
292～294は石鏃である。292、293は平基である。正三角形型で、側縁はふくらみをもつ。294は端部を欠損する。抉りの形状から、凹基と思われる。側縁はわずかに丸みをもつ。

295は凸基である。二等辺三角形型で、側縁は平らである。

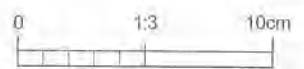
296は石匙である。両面を全面加工し、刃部末端は尖らない。



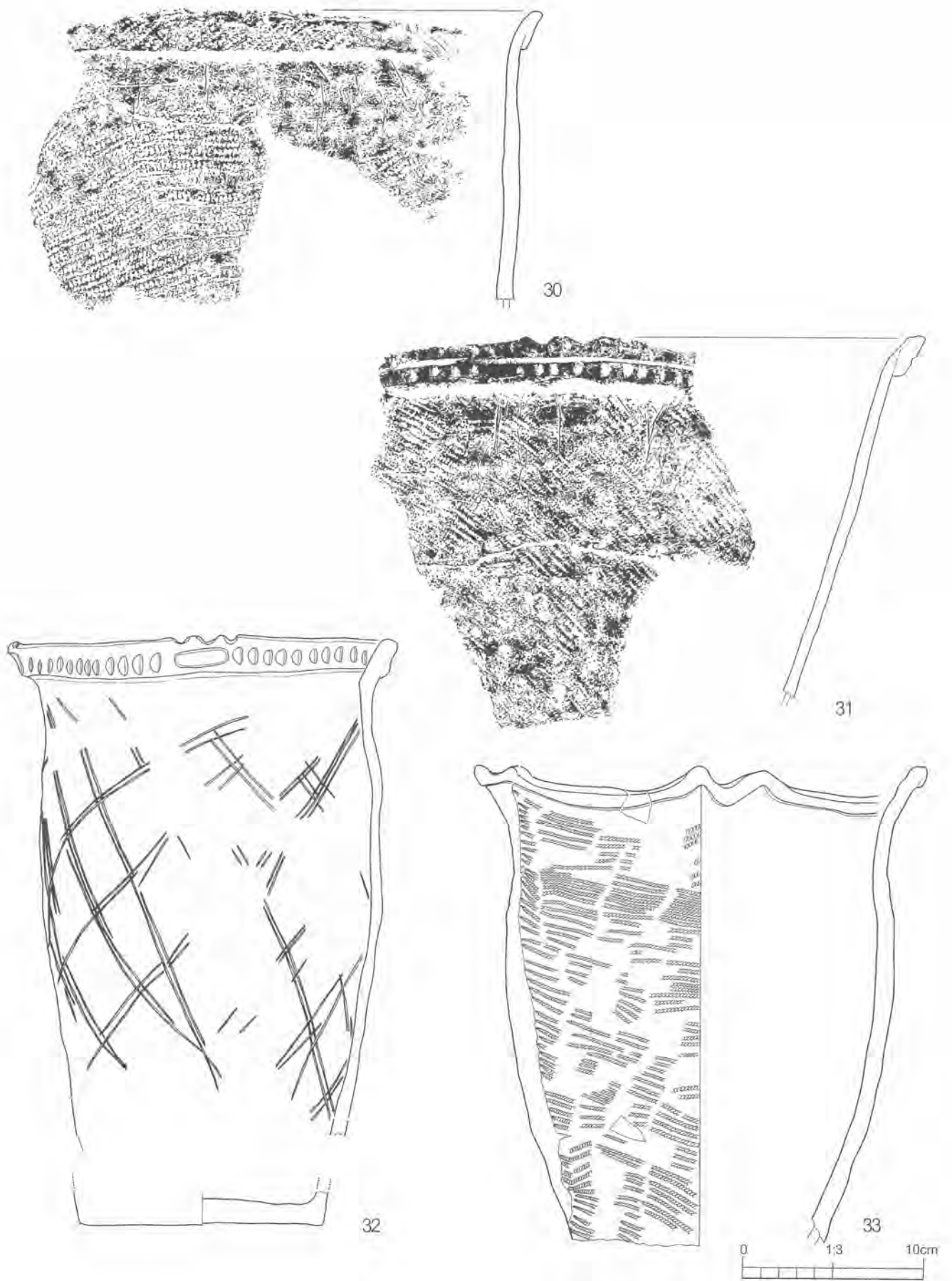
28



29

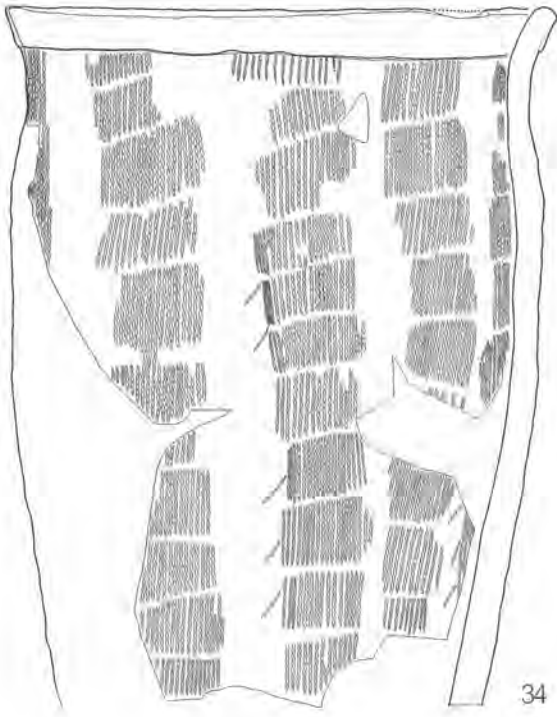


第200図 D区谷包含層出土遺物(4)



第201图 D区谷包含層出土遺物 (5)

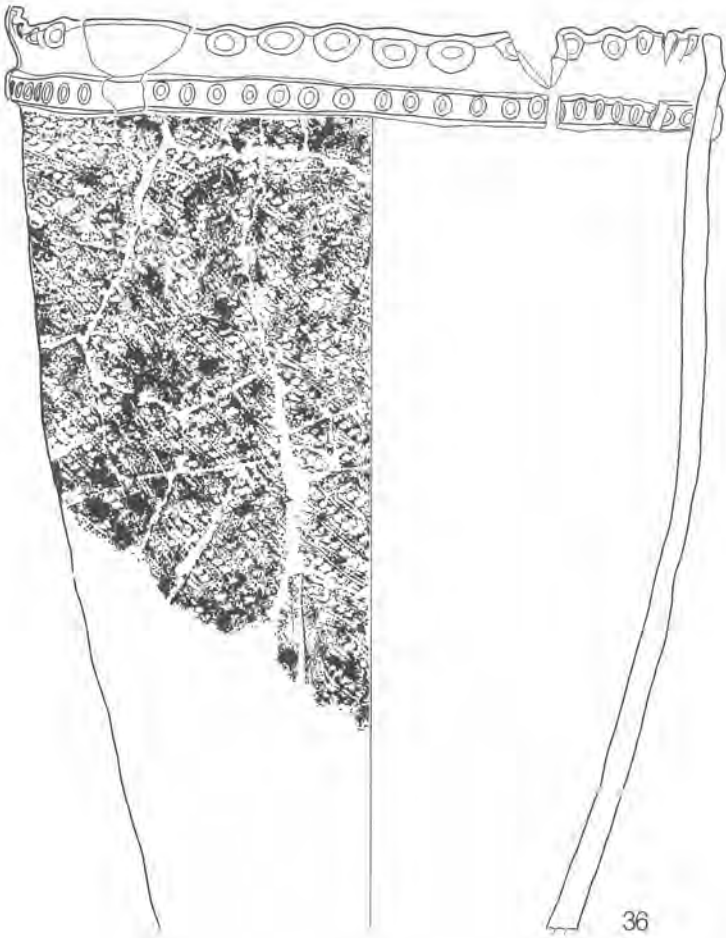




34



35



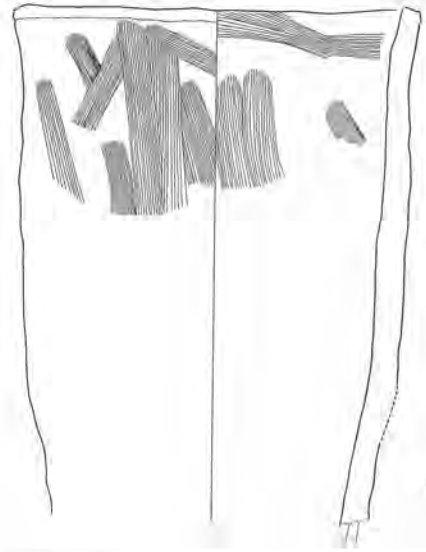
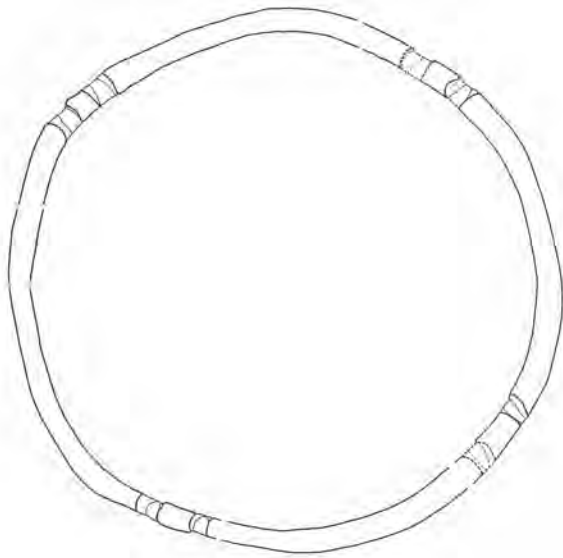
36



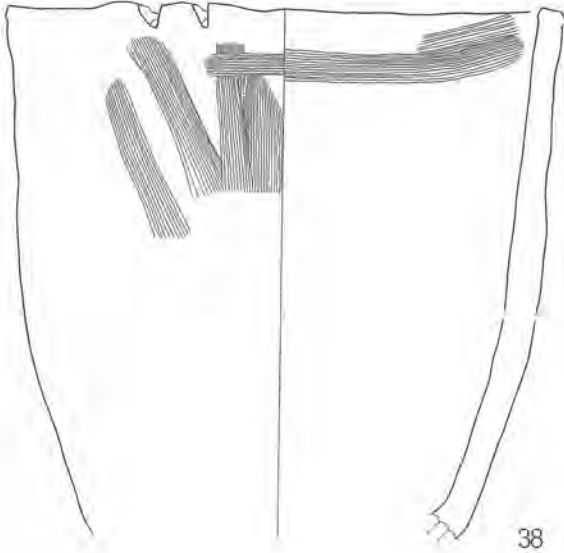
37



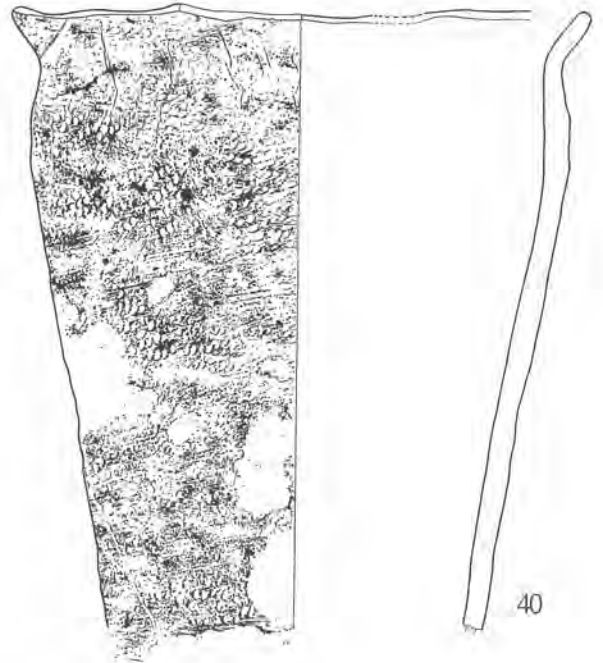
第202図 D区谷包含層出土遺物 (6)



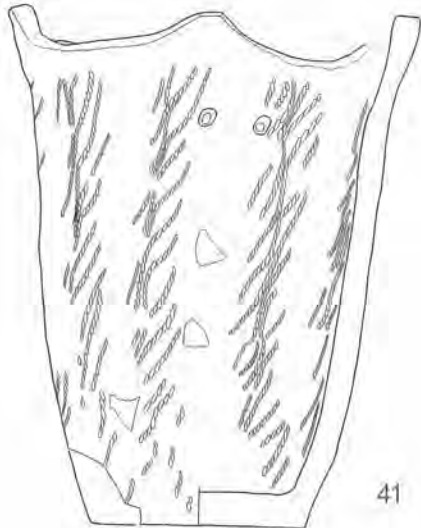
39



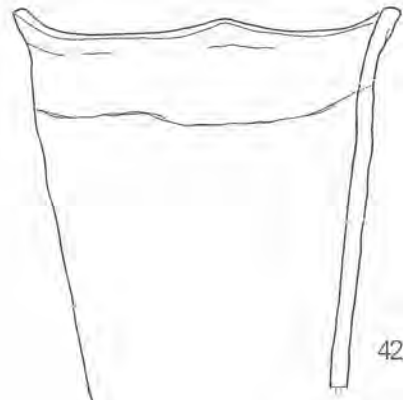
38



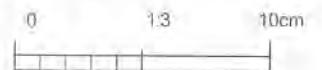
40



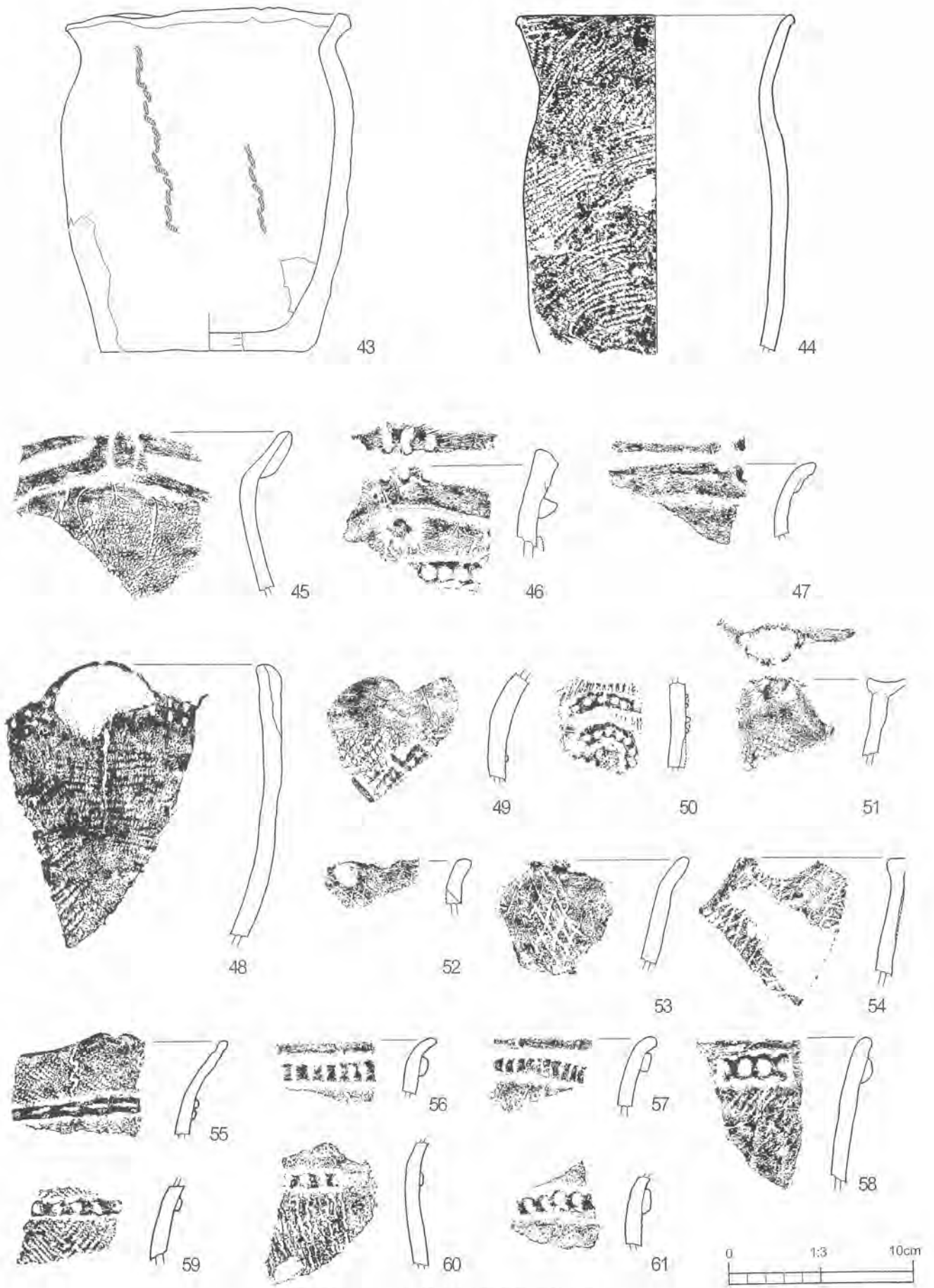
41



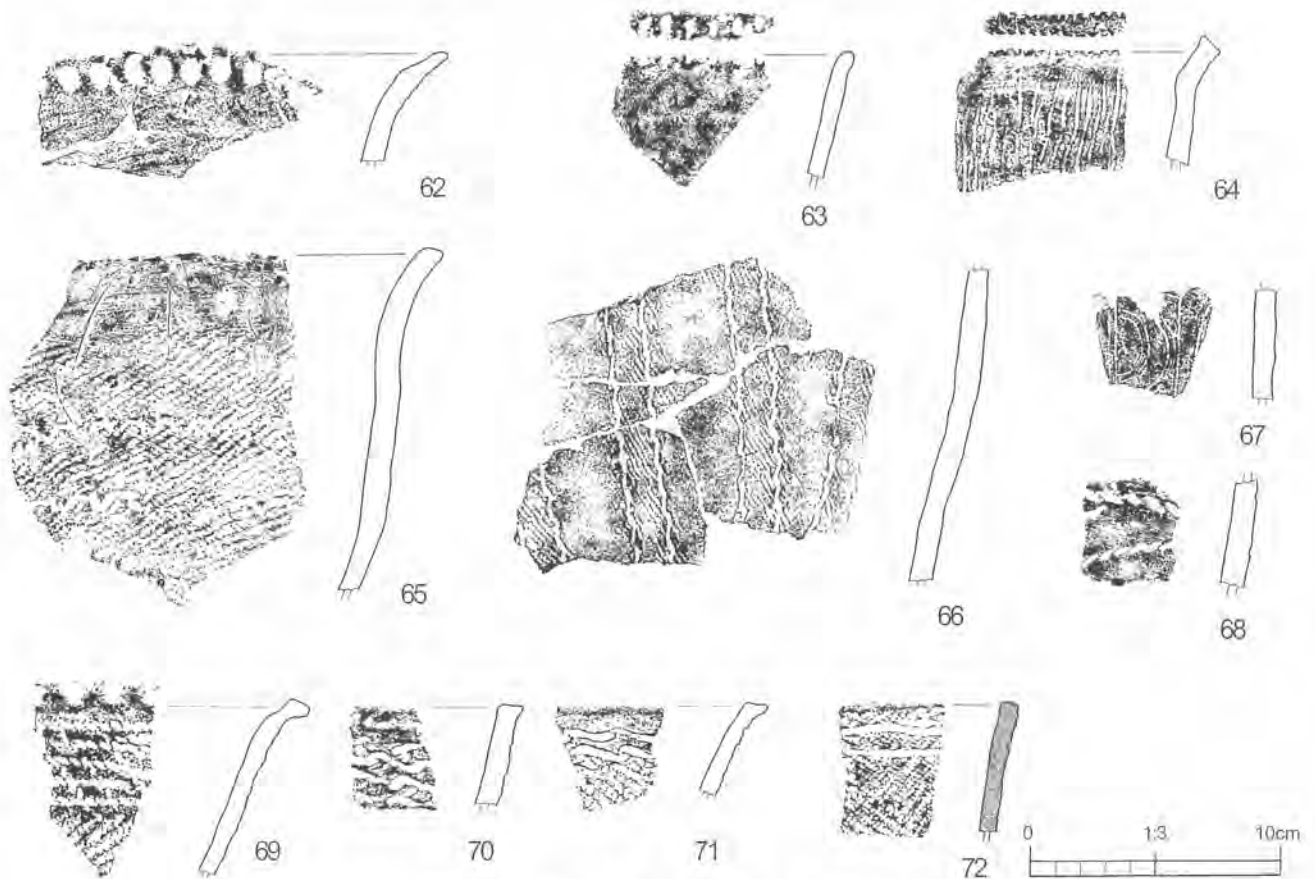
42



第203图 D区谷包含層出土遺物 (7)



第204图 D区谷包含层出土遗物(8)



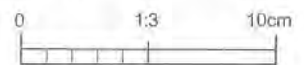
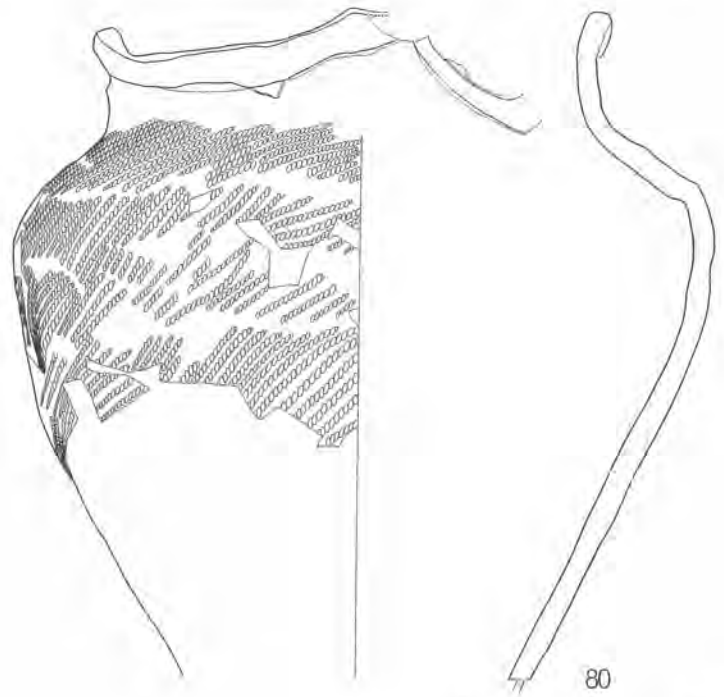
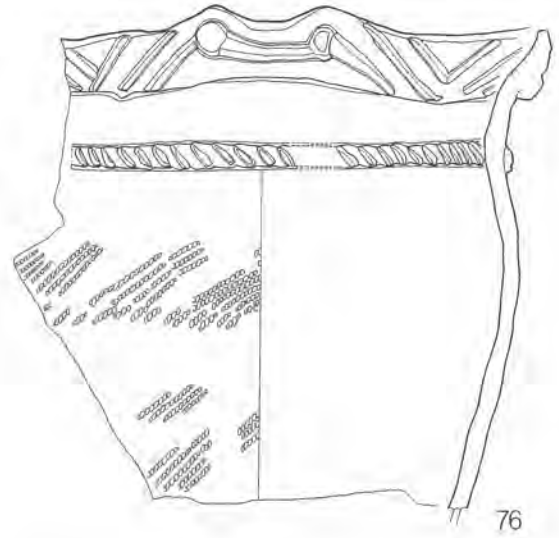
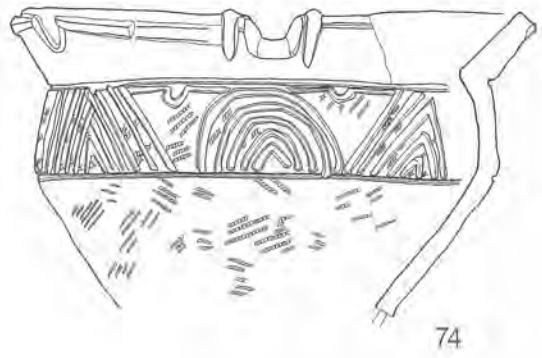
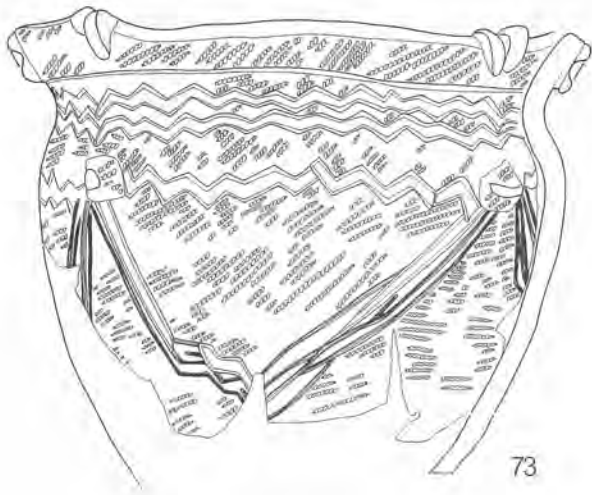
第205図 D区谷包含層出土遺物 (9)

297～349は8層の出土である。

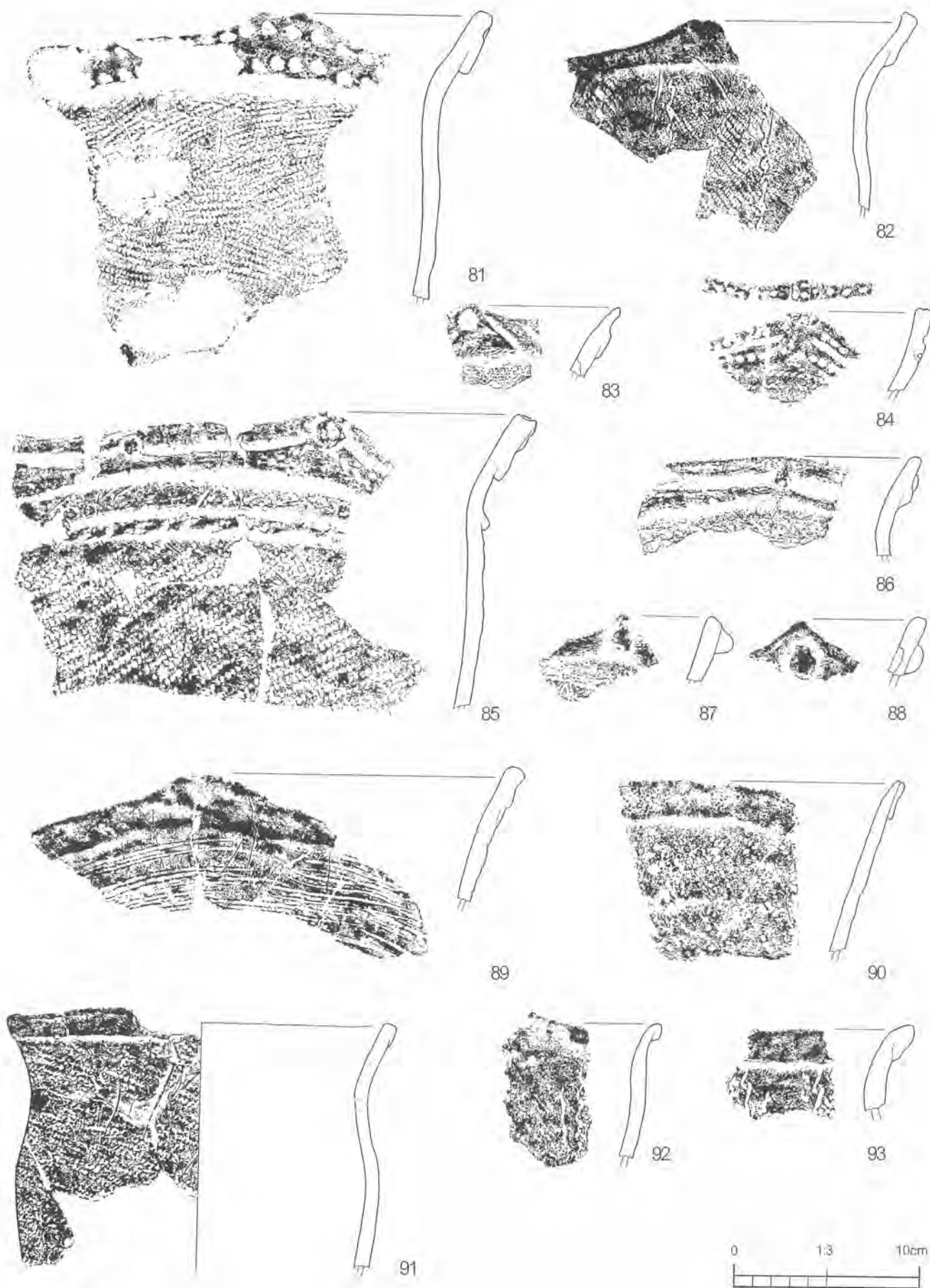
297～327は石鏃である。297～302は平基である。297、298は小形の正三角形型で、298は側縁がわずかにふくらむ。299～302は二等辺三角形型で、301の側縁は丸みを持ち、他は平らである。303～312は凹基であるが、抉りは小さい。302～310は二等辺三角形型で、側縁は平らである。311～314は比較的大形で、311は二等辺三角形型、312は鋭角三角形型である。側縁はいずれも平らである。313、314は鋭角三角形型である。315、316は大形である。いずれも凹基で、鋭角三角形型と推定され、316の側縁の一方がやや凹む。317～325は凹基で、抉りが比較的大きい。317～319は正三角形型で、側縁は平らである。320～322は二等辺三角形型で、側縁は320、321は平らで、322はわずかに丸みをもつ。323～325は大形の鋭角三角形型で、側縁は平らである。326、327は大形の石鏃である。326は凹基で、327は平基である。いずれも二等辺三角形型で、側縁は丸みを持ち、両面の周縁に調整痕を残す。

328～336、339、340は石匙である。326～334は縦型である。いずれも両面の周縁を加工し、327、331、332は刃部末端を尖らせる。339、340は横型である。339は両面の周縁、340は全面を加工する。

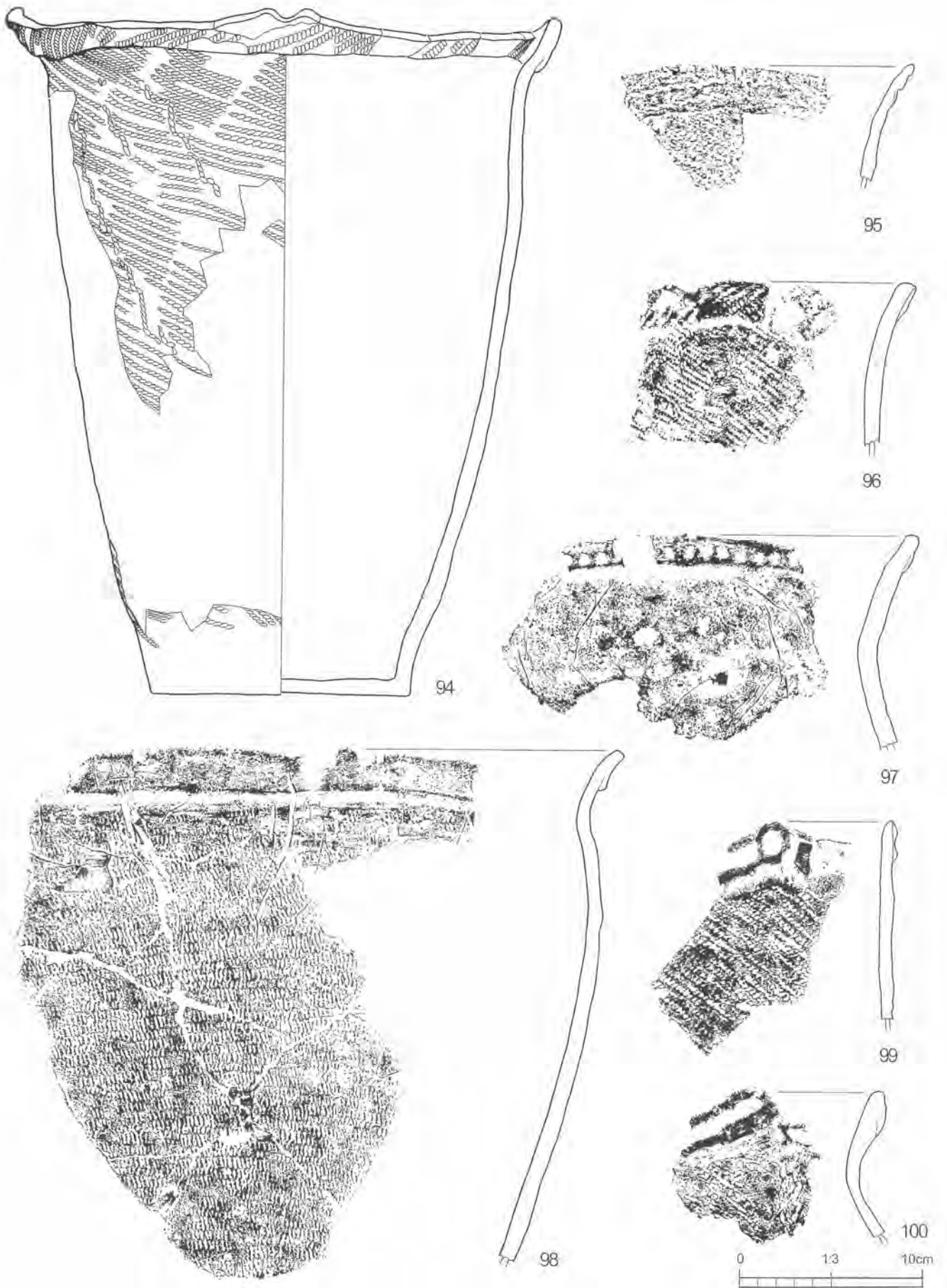
337、338は石錐である。いずれもつまみ部、錐部の境界はあまり明瞭ではない。



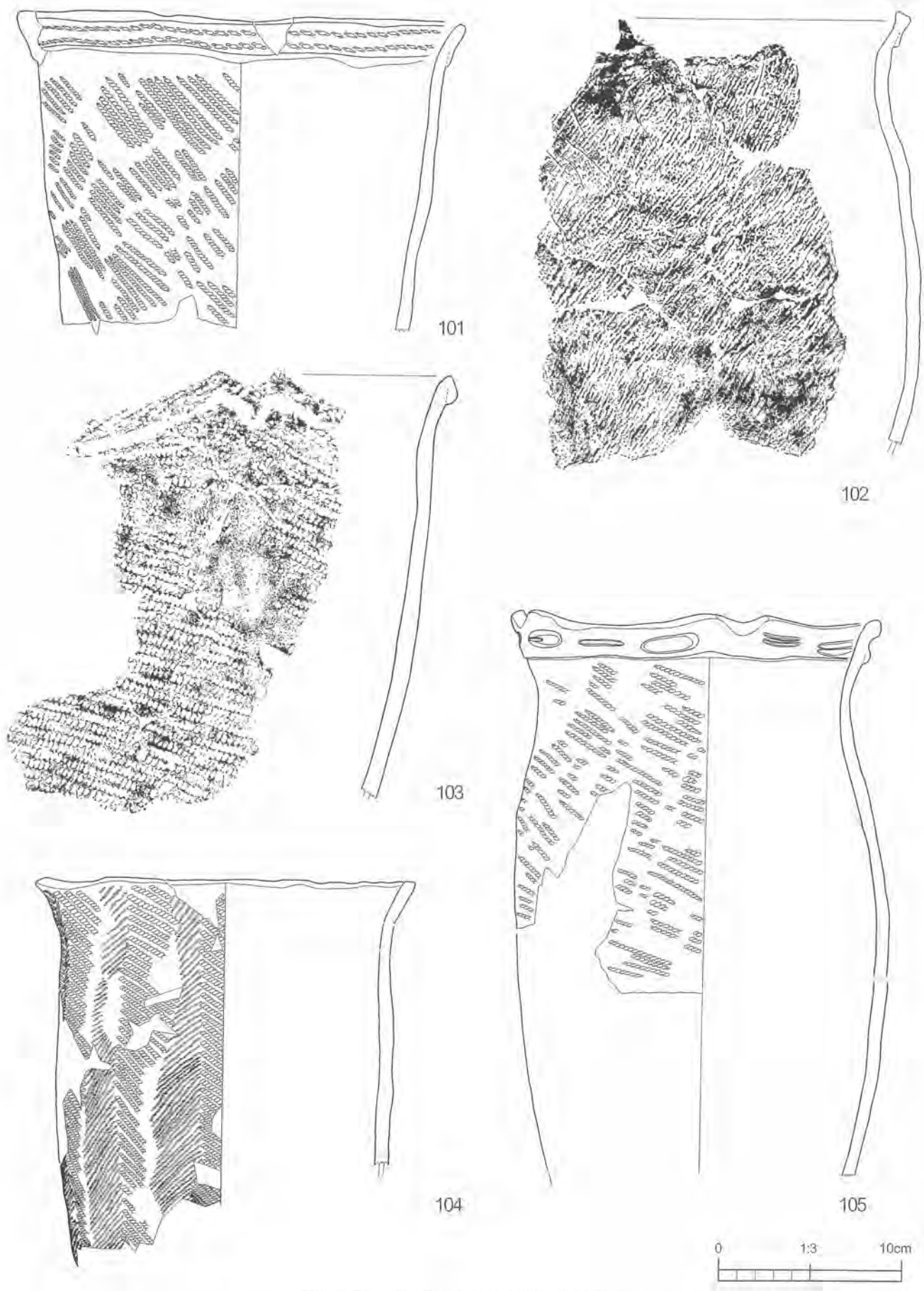
第206图 D区谷包含層出土遺物 (10)



第207图 D区谷包含层出土遗物 (11)



第208图 D区谷包含層出土遺物 (12)

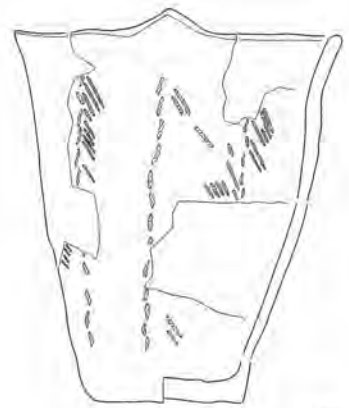


第209图 D区谷包含層出土遺物 (13)

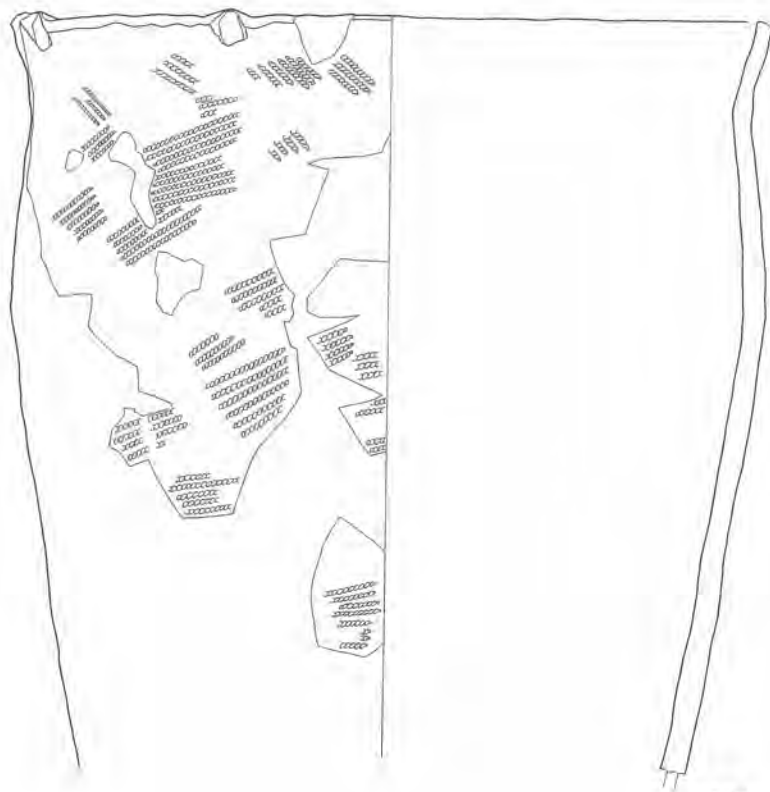




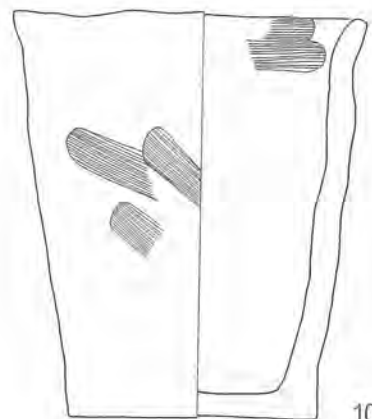
106



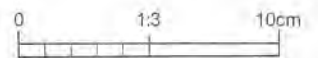
107



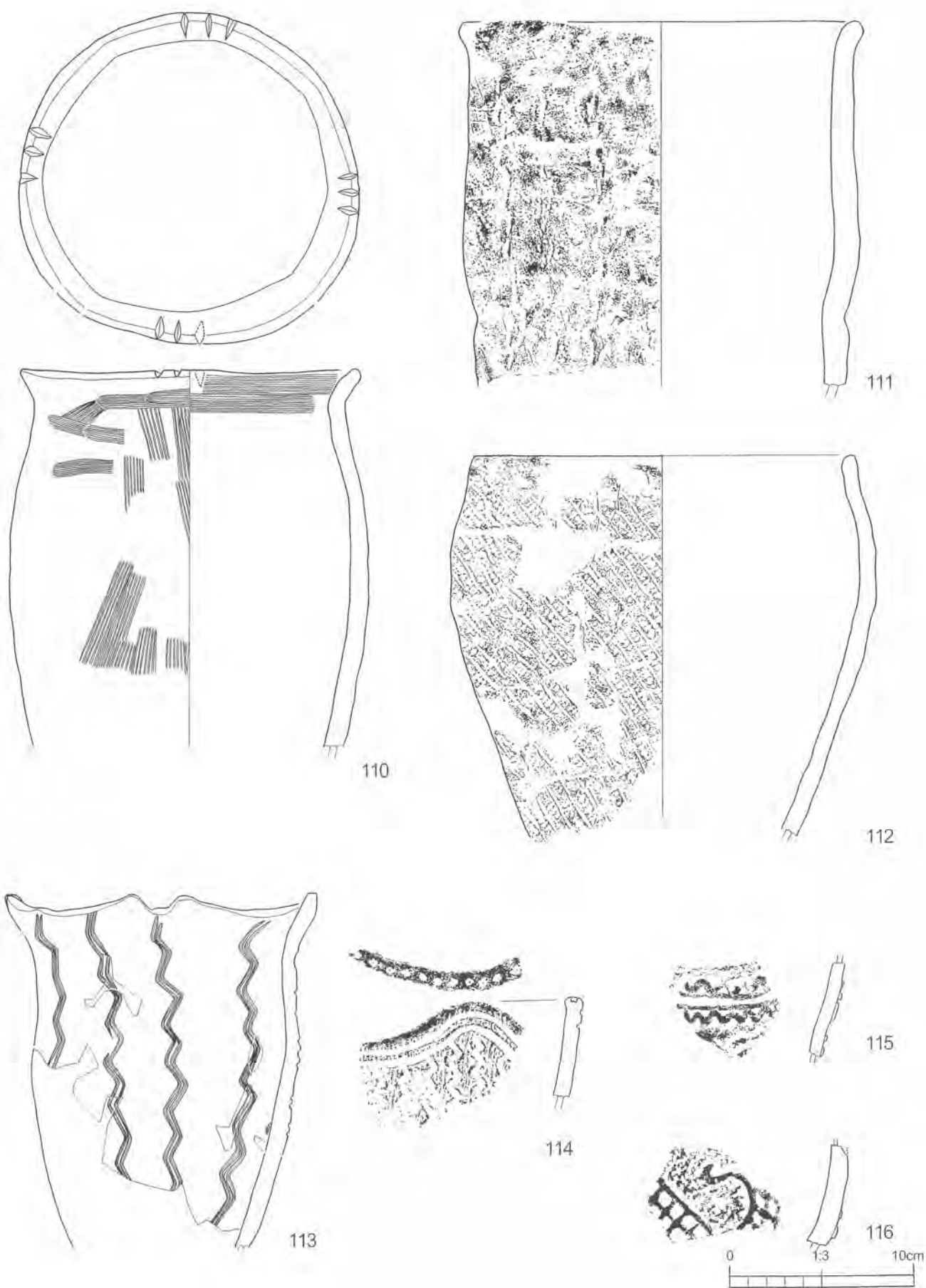
108



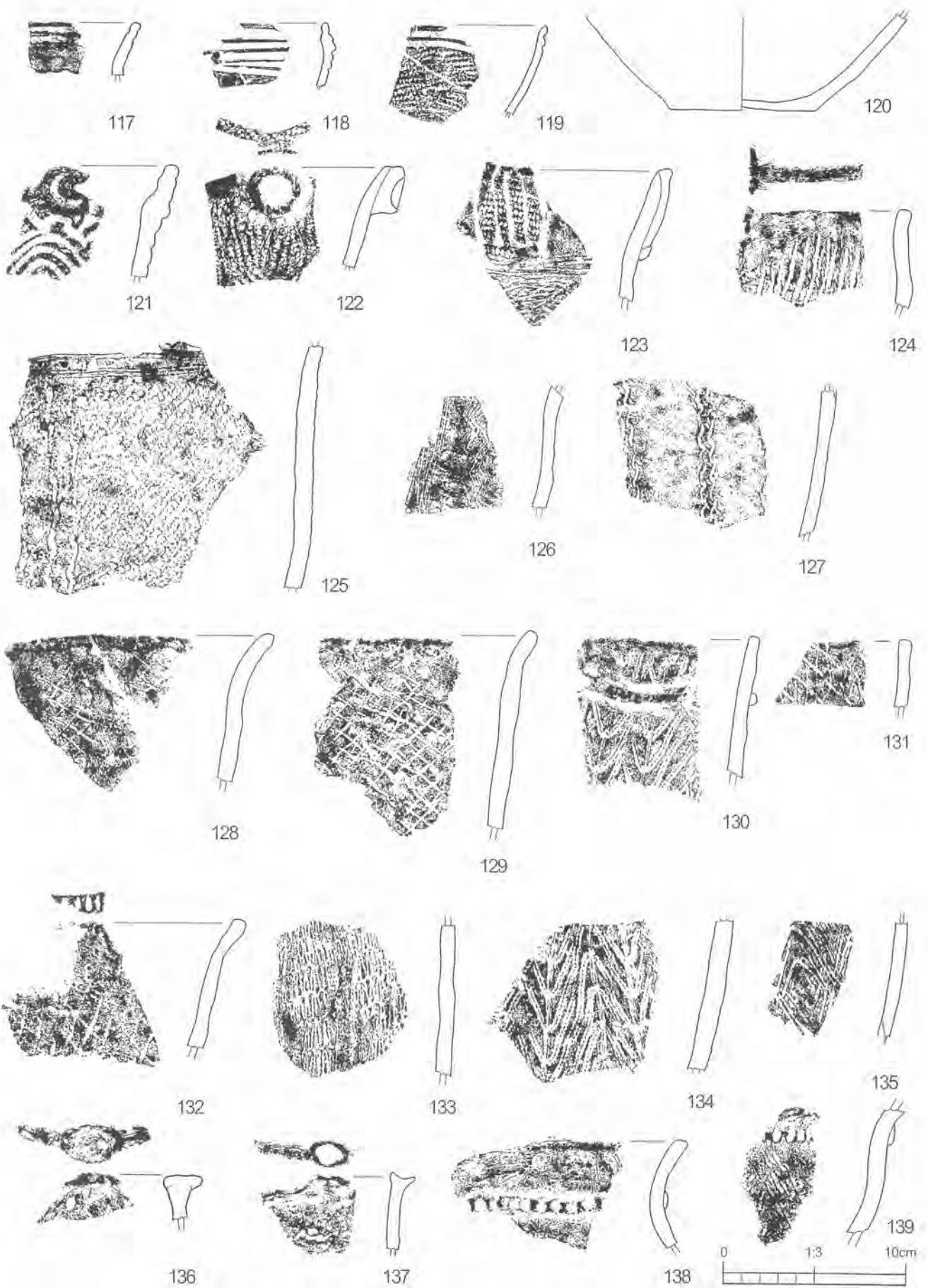
109



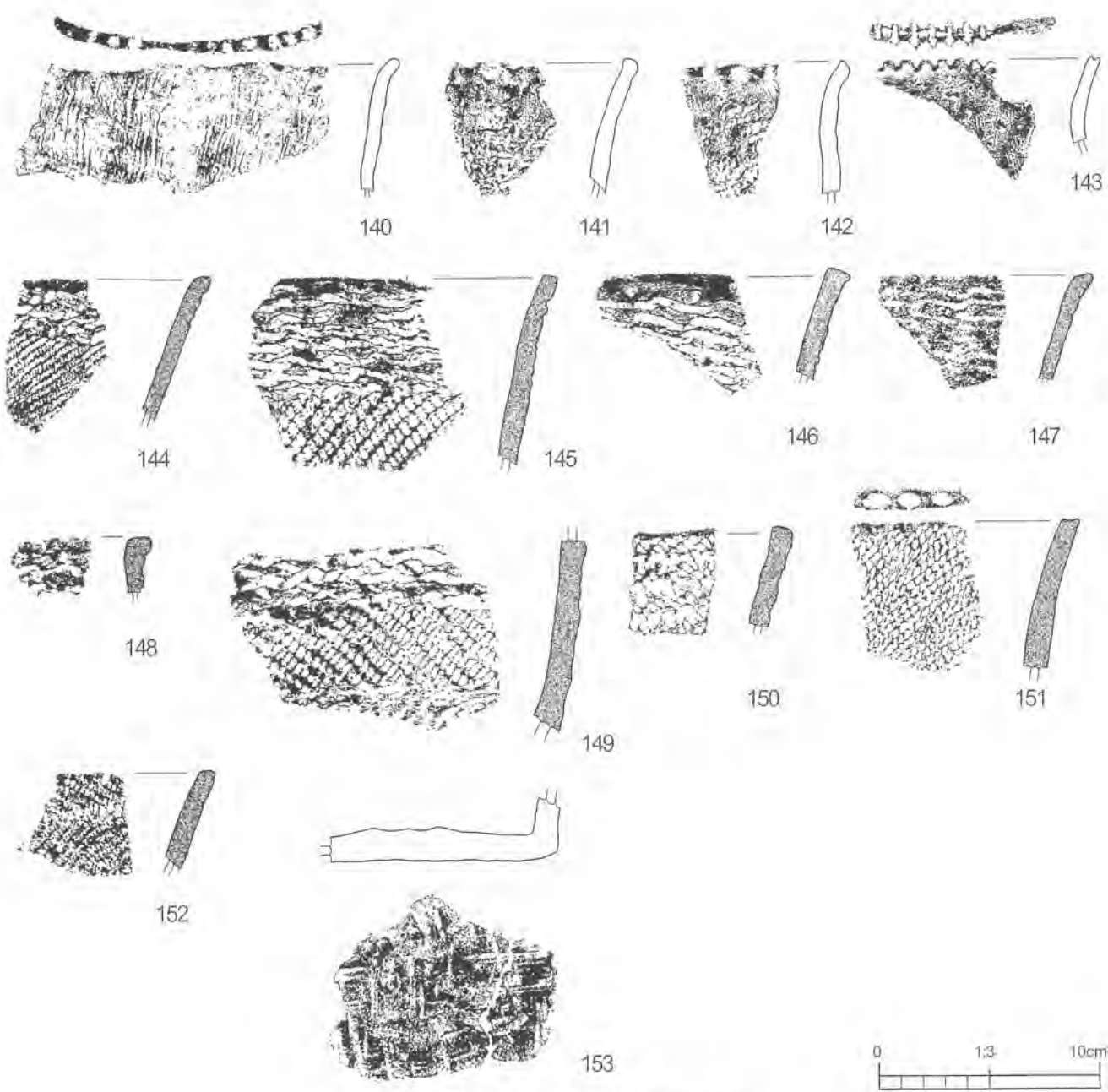
第210図 D区谷包含層出土遺物(14)



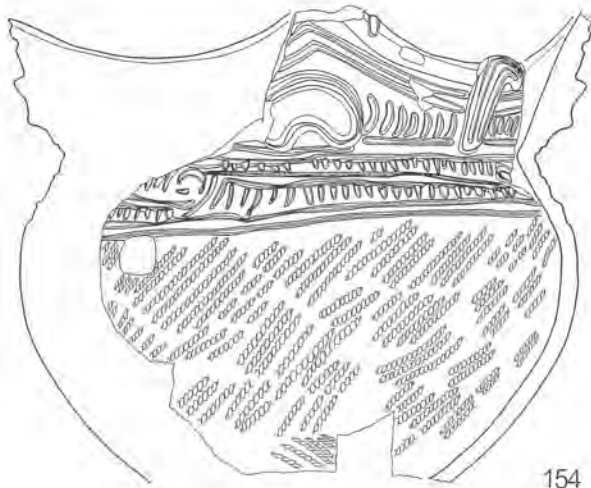
第211图 D区谷包含层出土遗物 (15)



第212图 D区谷包含层出土遗物 (16)



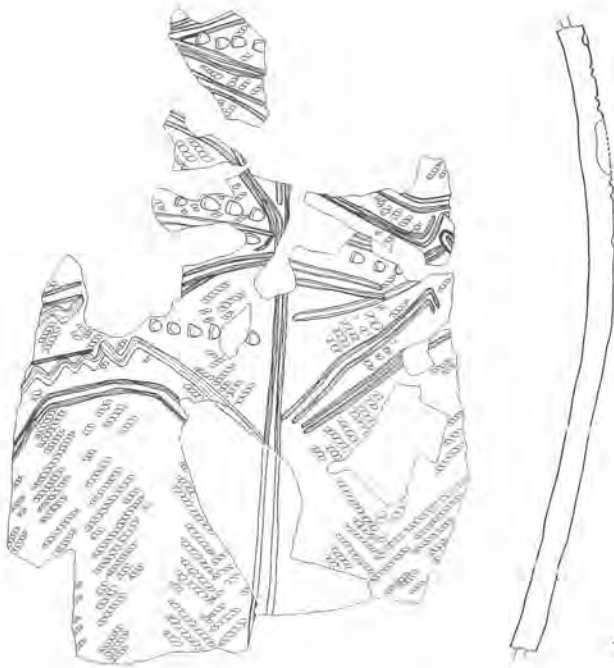
第213图 D区谷包含層出土遺物 (17)



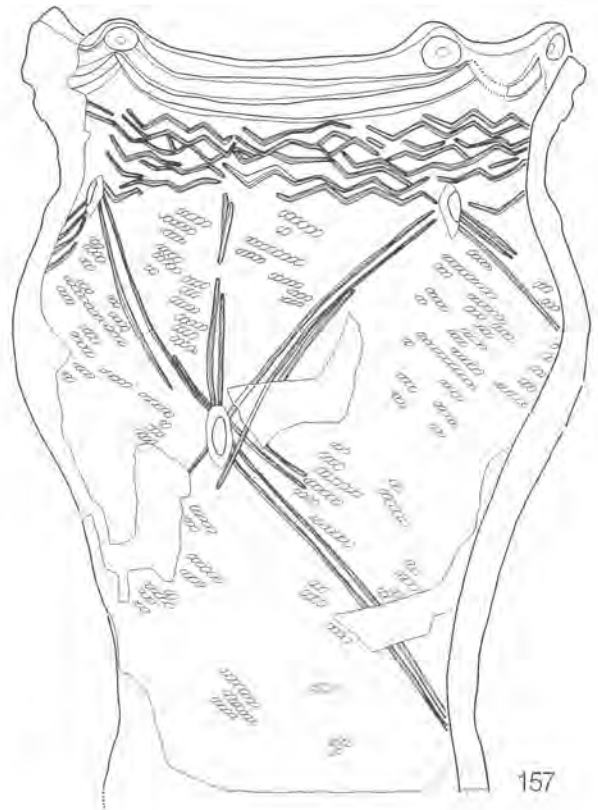
154



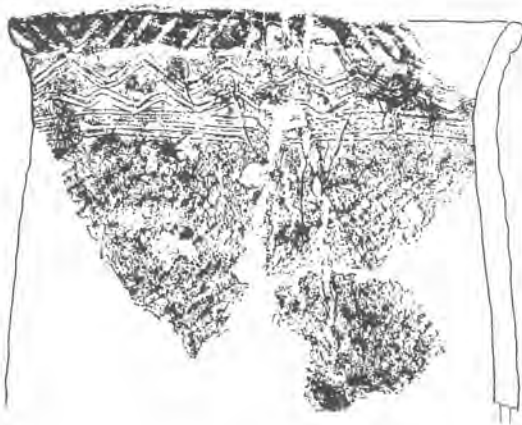
155



156



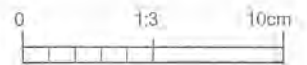
157



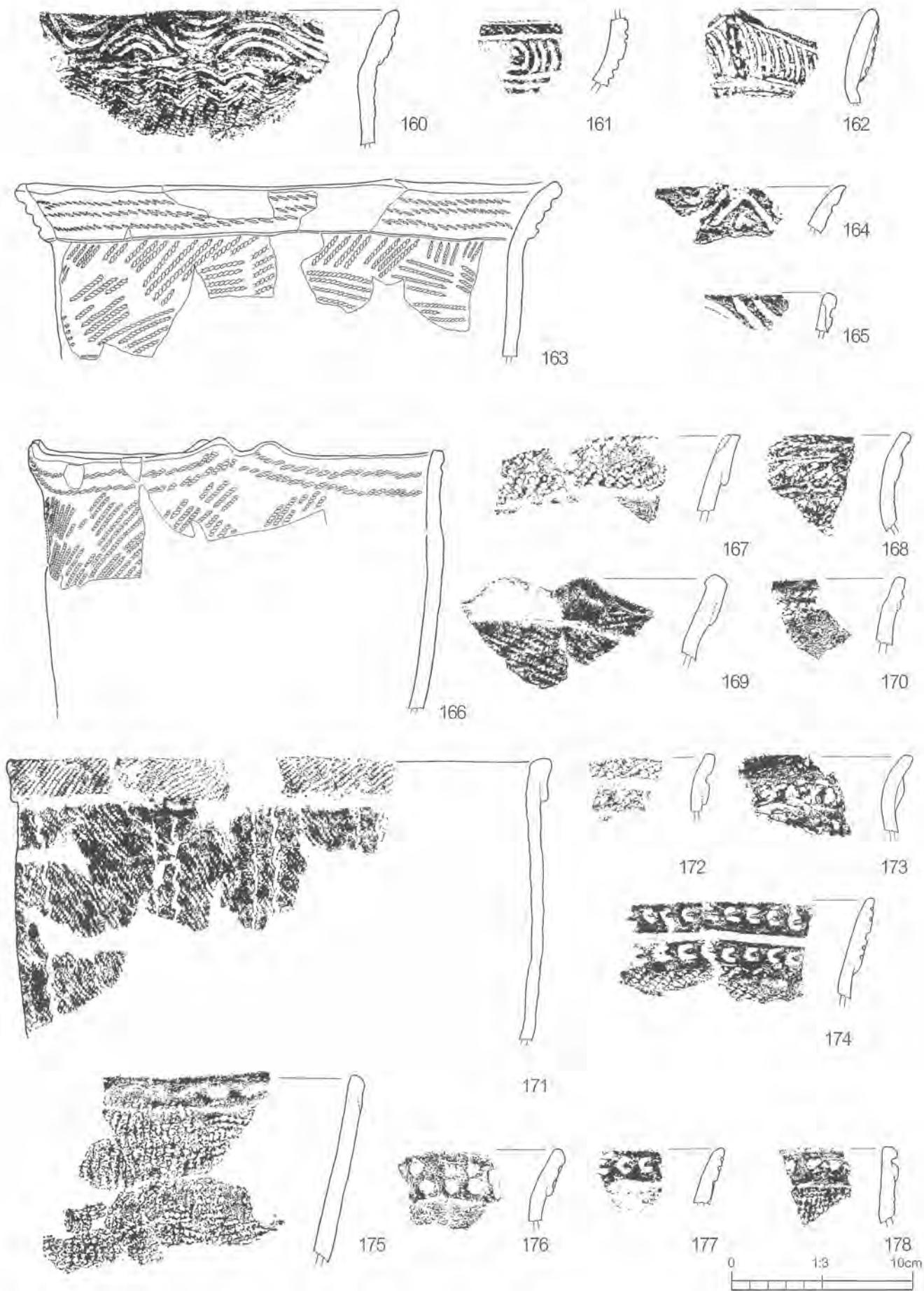
158



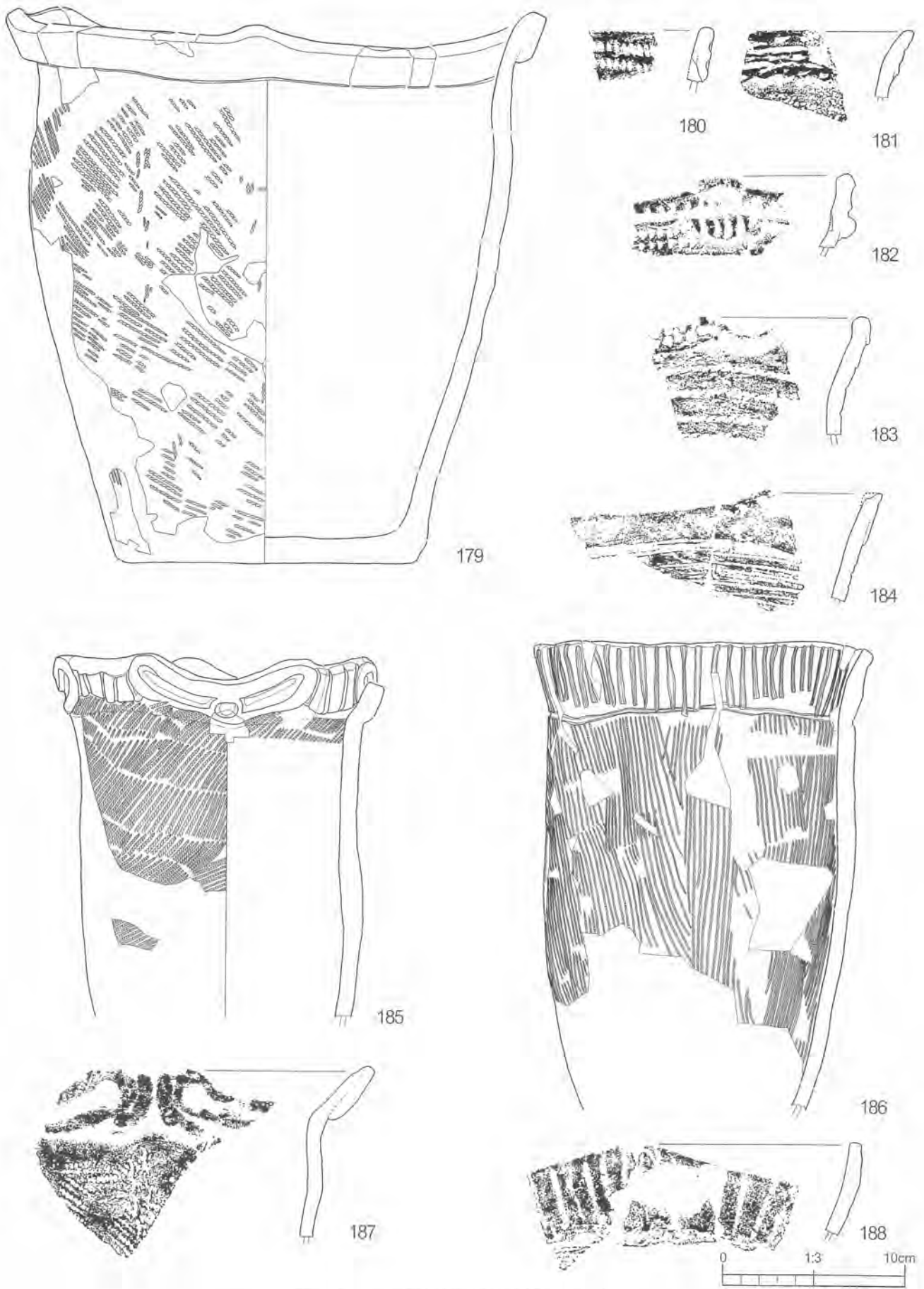
159



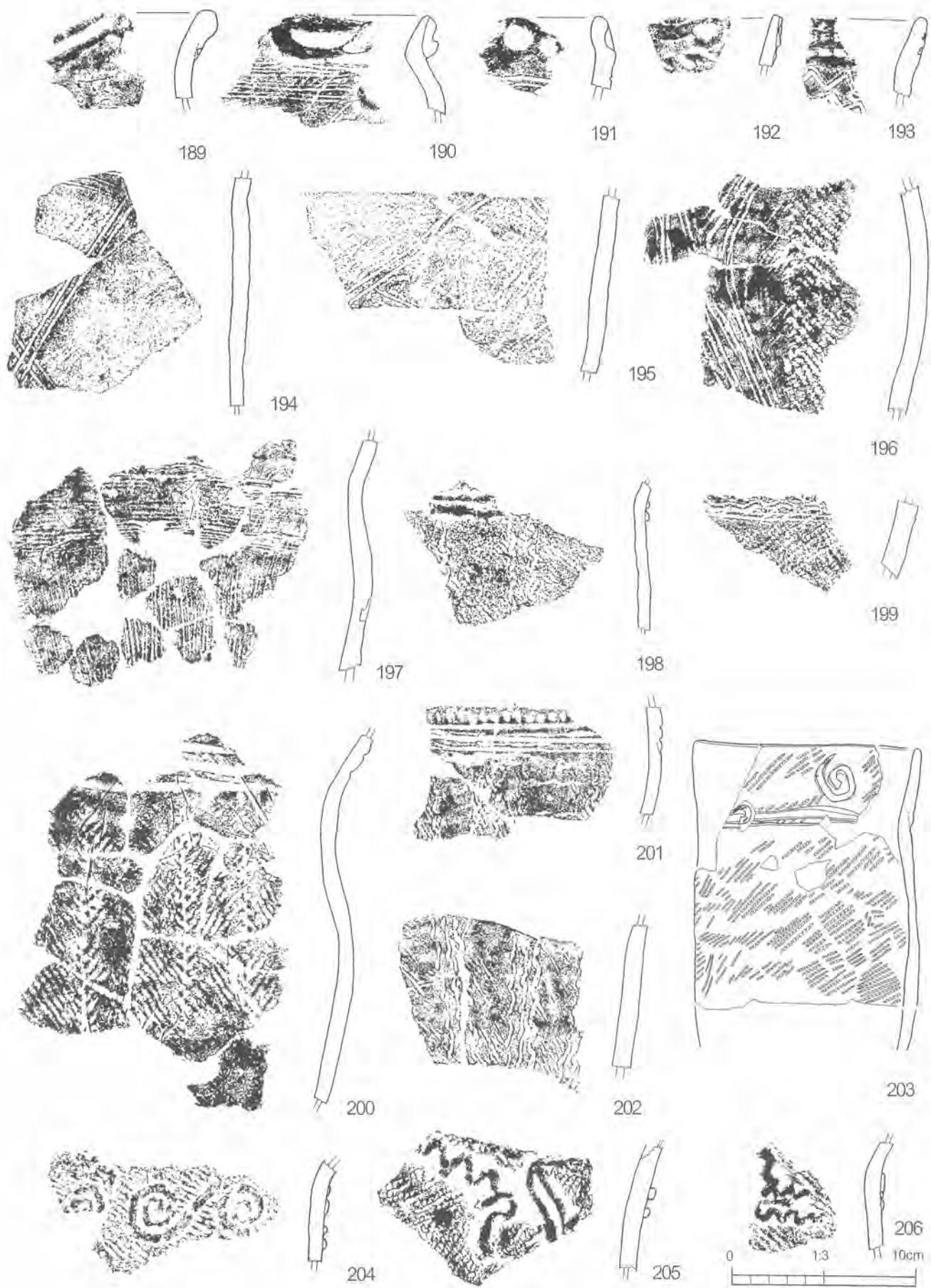
第214图 D区谷包含層出土遺物 (18)



第215图 D区谷包含层出土遗物 (19)

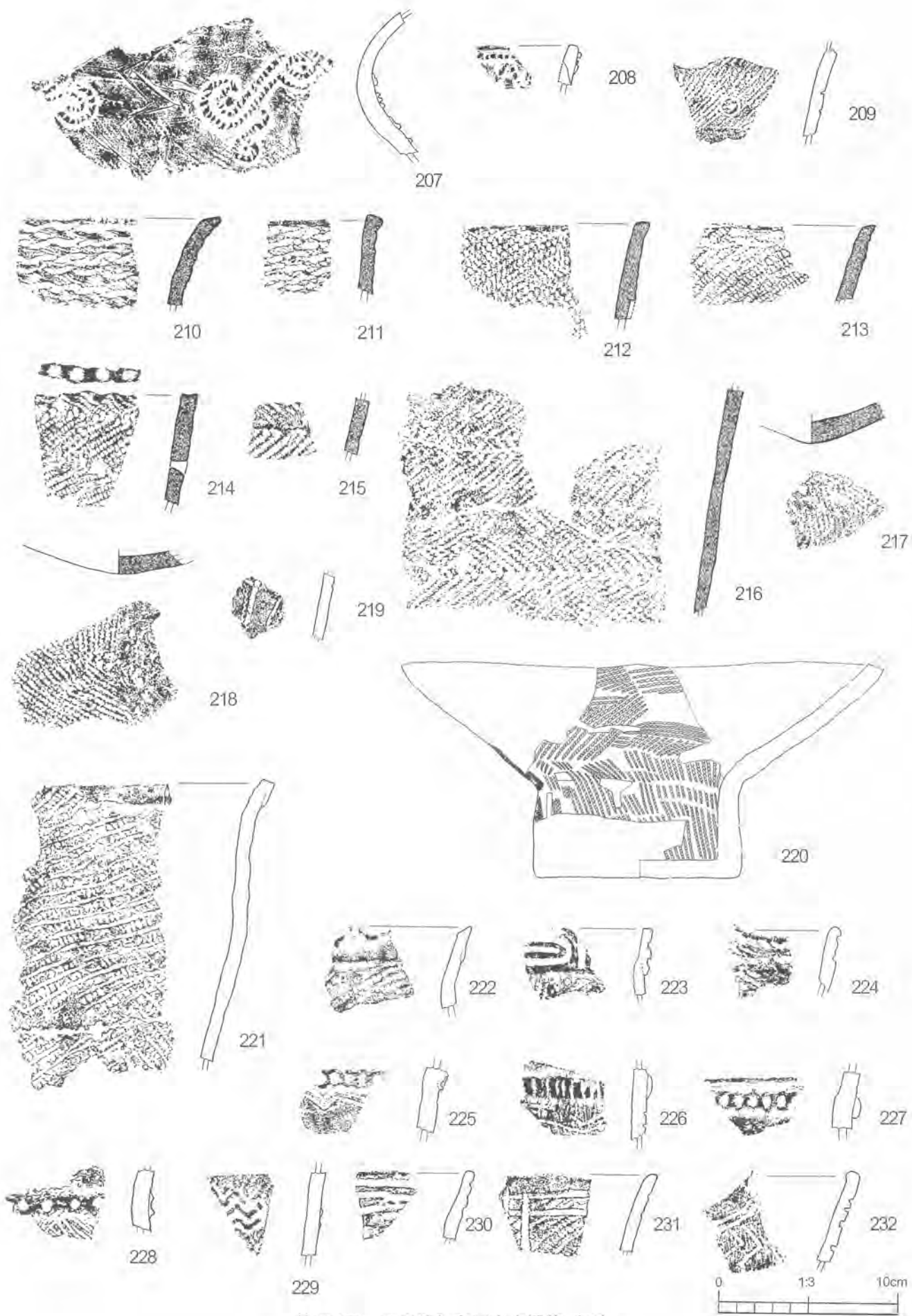


第216图 D区谷包含層出土遺物 (20)

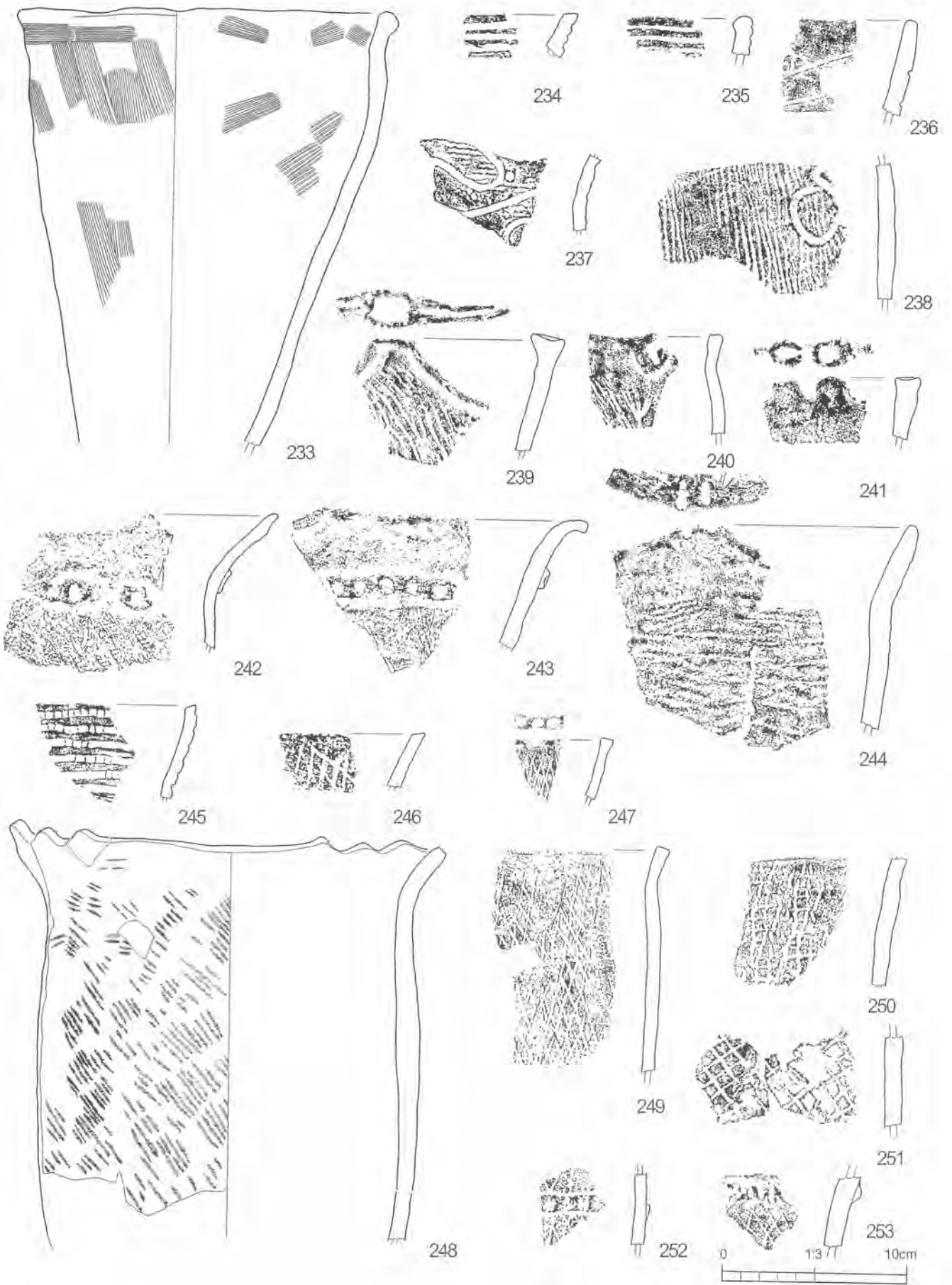


第217图 D区谷包含層出土遺物 (21)

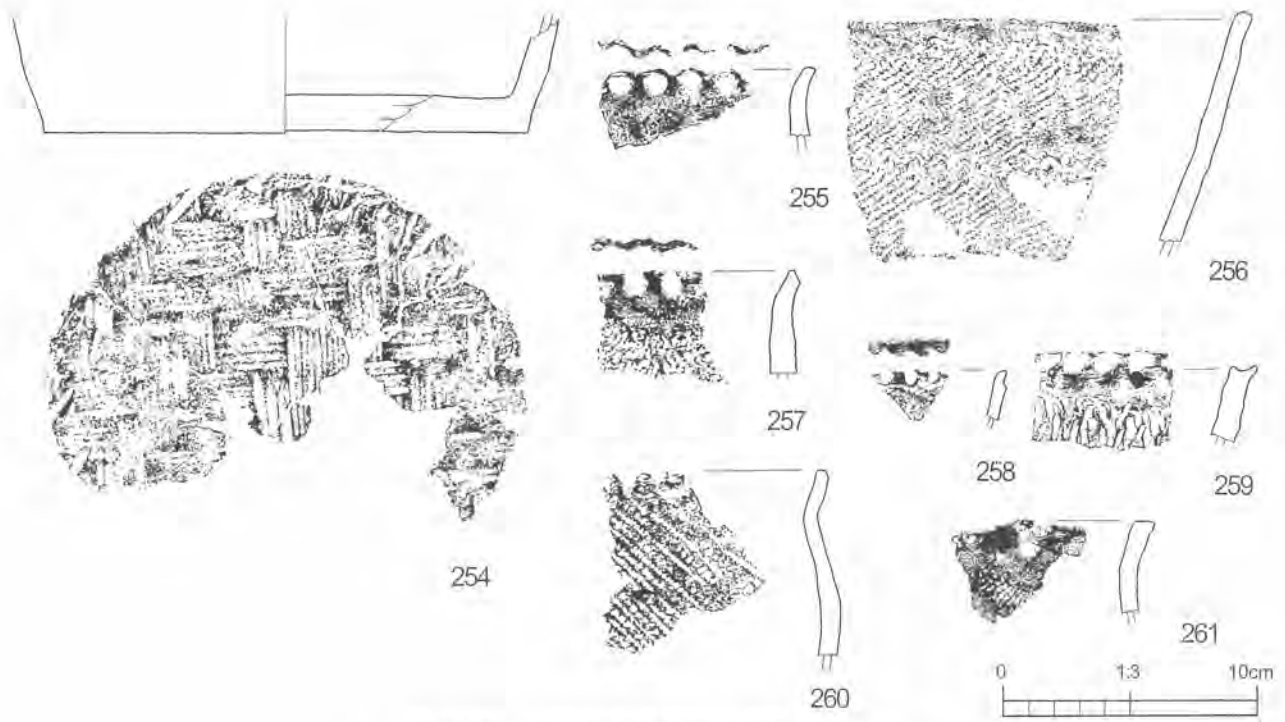




第218图 D区谷包含层出土遗物(22)



第219图 D区谷包含層出土遺物 (23)



第220図 D区谷包含層出土遺物 (24)

341～349は不定形の石器である。341～345は逆三角形の形状をもち、斜辺を加工して刃部をつくりだす。346、347はU字状の一侧縁を加工して直刃をつくりだす。348は方形で、底辺と一侧縁に凹刃と直刃をつくりだす。349は楕円形で先端を尖らし、底辺に凸刃をつくりだす。

350～356は7層の出土である。

350～352は石鏃である。いずれも凹基であるが、扱りは小さい。350、351は正三角形型で、352は二等辺三角形型である。いずれも側縁は平らである。

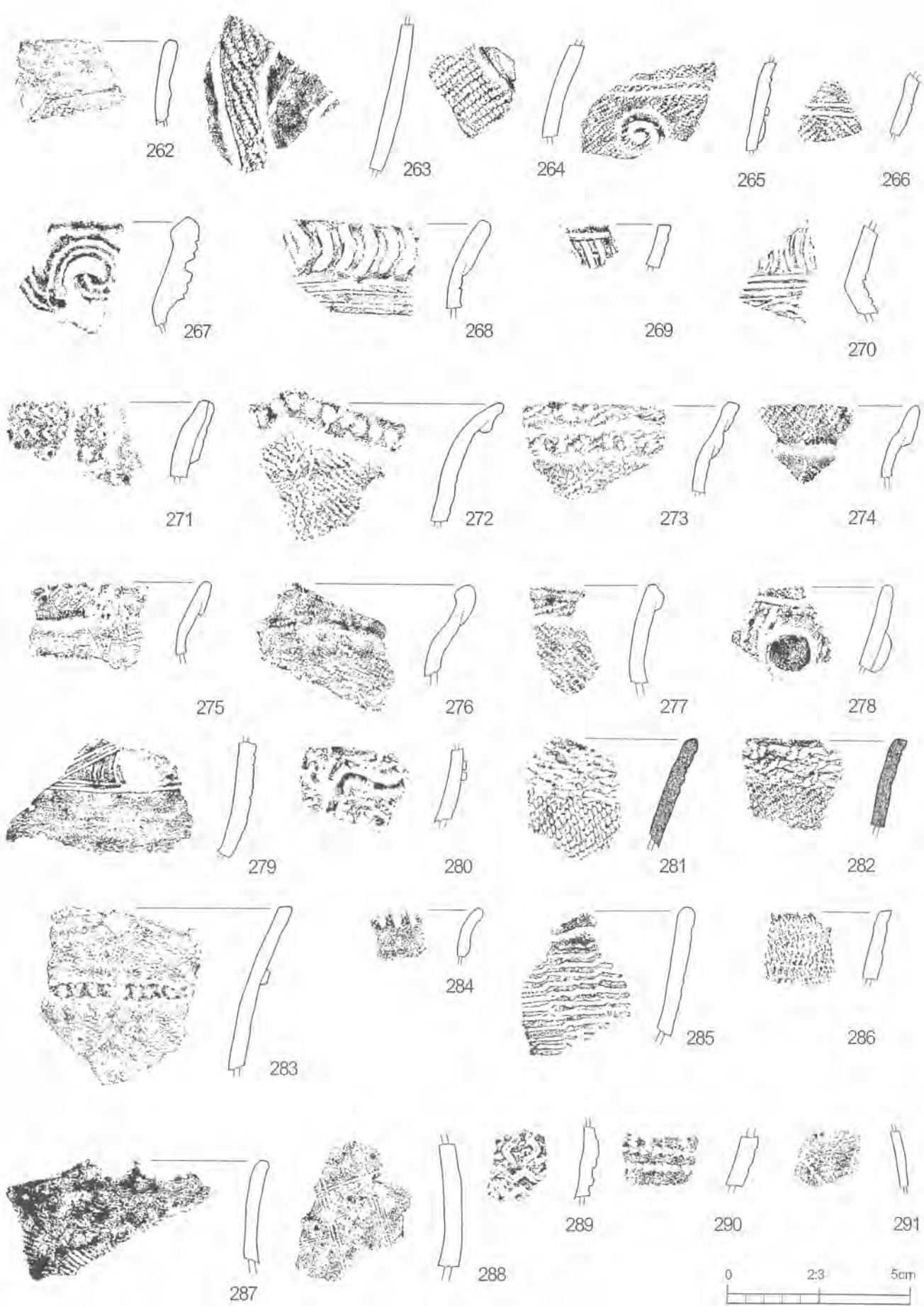
355は石匙である。縦形で、刃部末端を尖らす。片面を全面加工する。

353、354、356は逆三角形に近い形状で、先端部を尖らす。両面の周縁あるいは全面を加工して刃部をつくる。

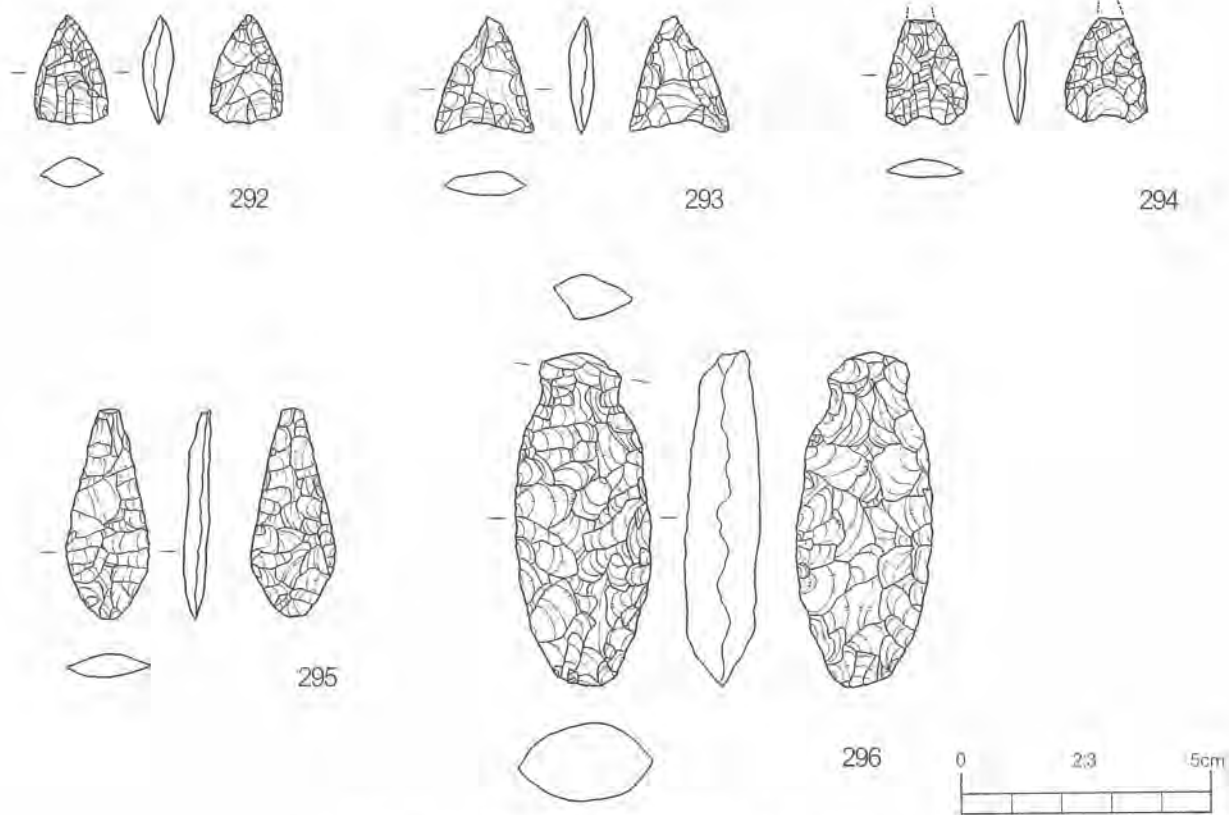
357～360は磨製石斧である。357は頭部は平らで、胴部のふくらみは小さく、刃部は胴部より幅広になる。断面は不整隅丸方形である。刃縁はやや丸みをもち、刃面は凹刃である。358は357とほぼ同形であるが、刃部を欠損する。359も刃部を欠損するが、剥離調整痕を残す。二次利用したものか。頭部はやや丸みをもち、胴部と刃部の幅は変らない。360は平らな頭部で、断面は方形である。一部に擦痕を残す。

362～363は敲打磨石である。363は機能面のほかに調整磨面をもつ。

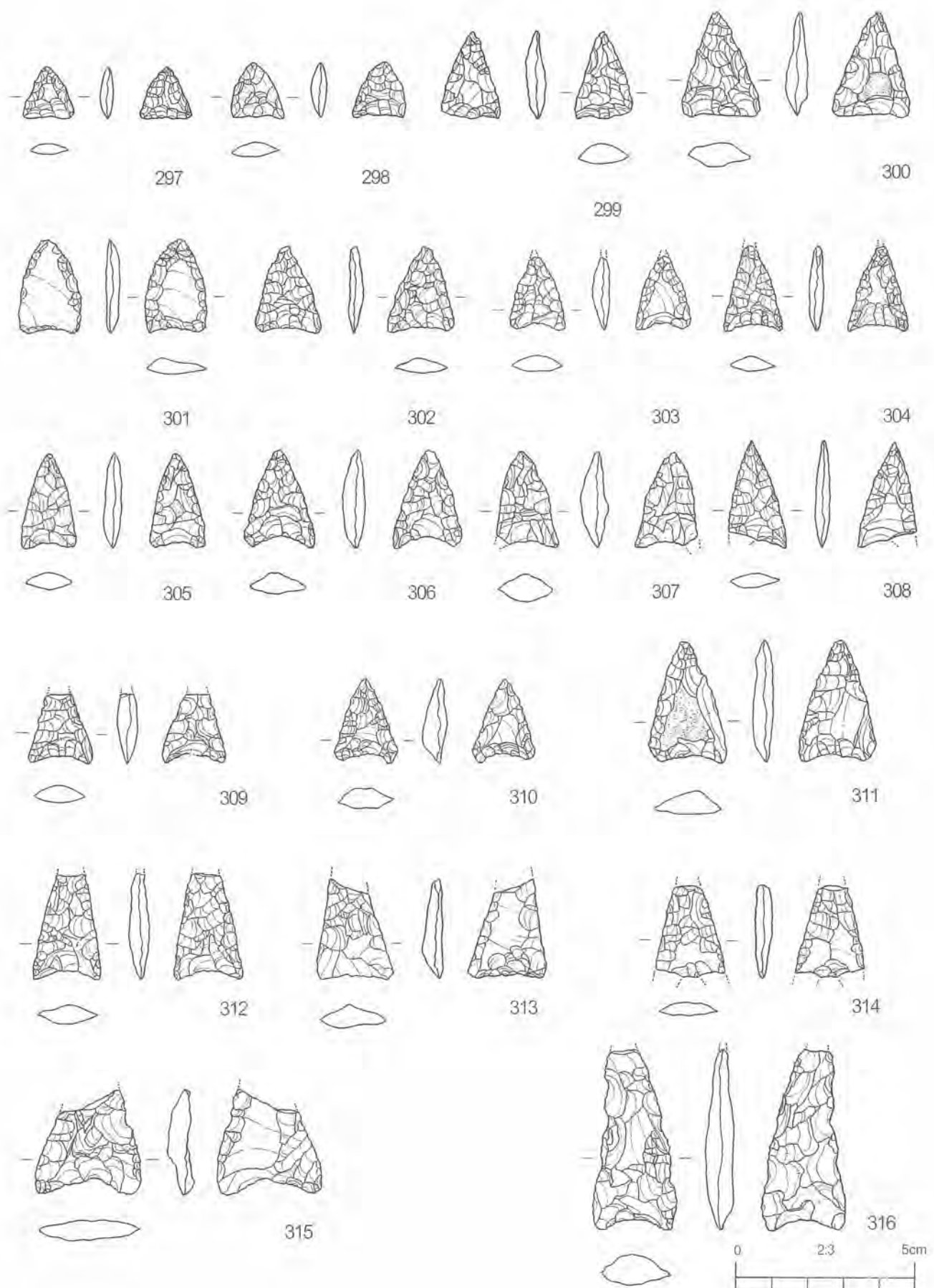
364は8層から出土した塊状耳飾りである。形状は、やや縦長の楕円をなすと思われる。孔部、扱りは前後二方向からの磨面をもつ。また全面に擦痕が認められた。



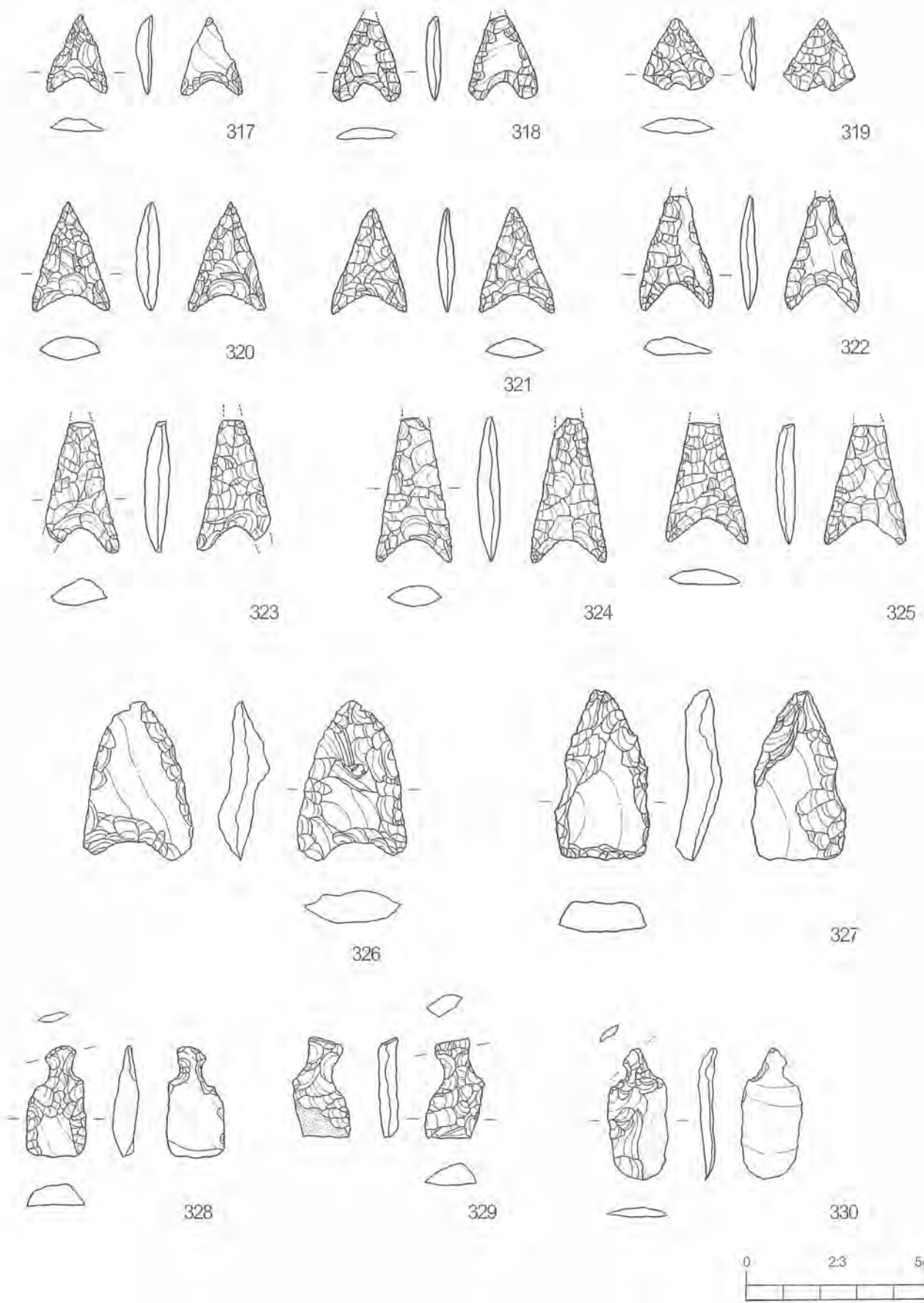
第221图 D区谷包含层出土遗物 (25)



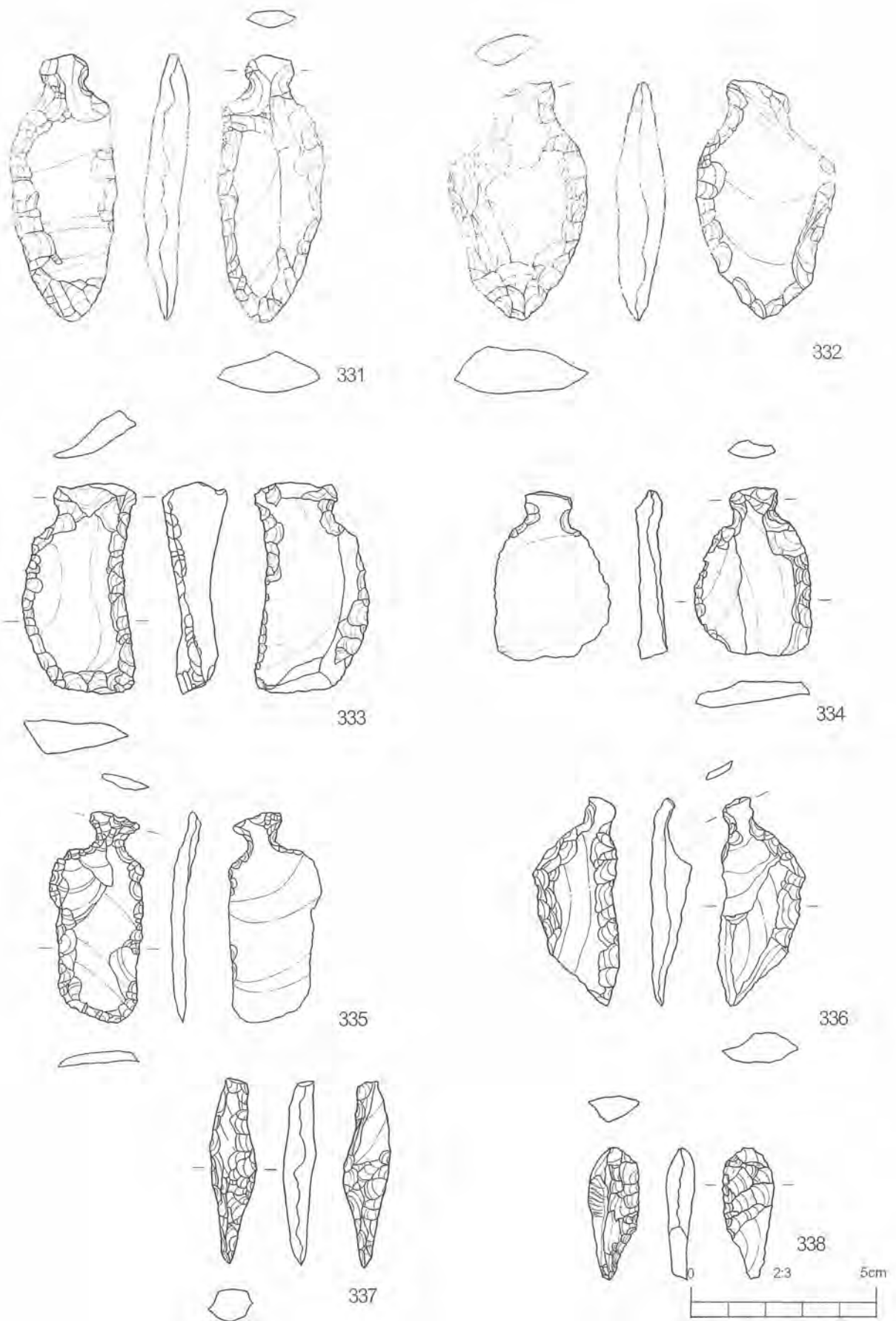
第222图 D区谷包含層出土遺物・石器 (26)



第223图 D区谷包含层出土遗物·石器(27)

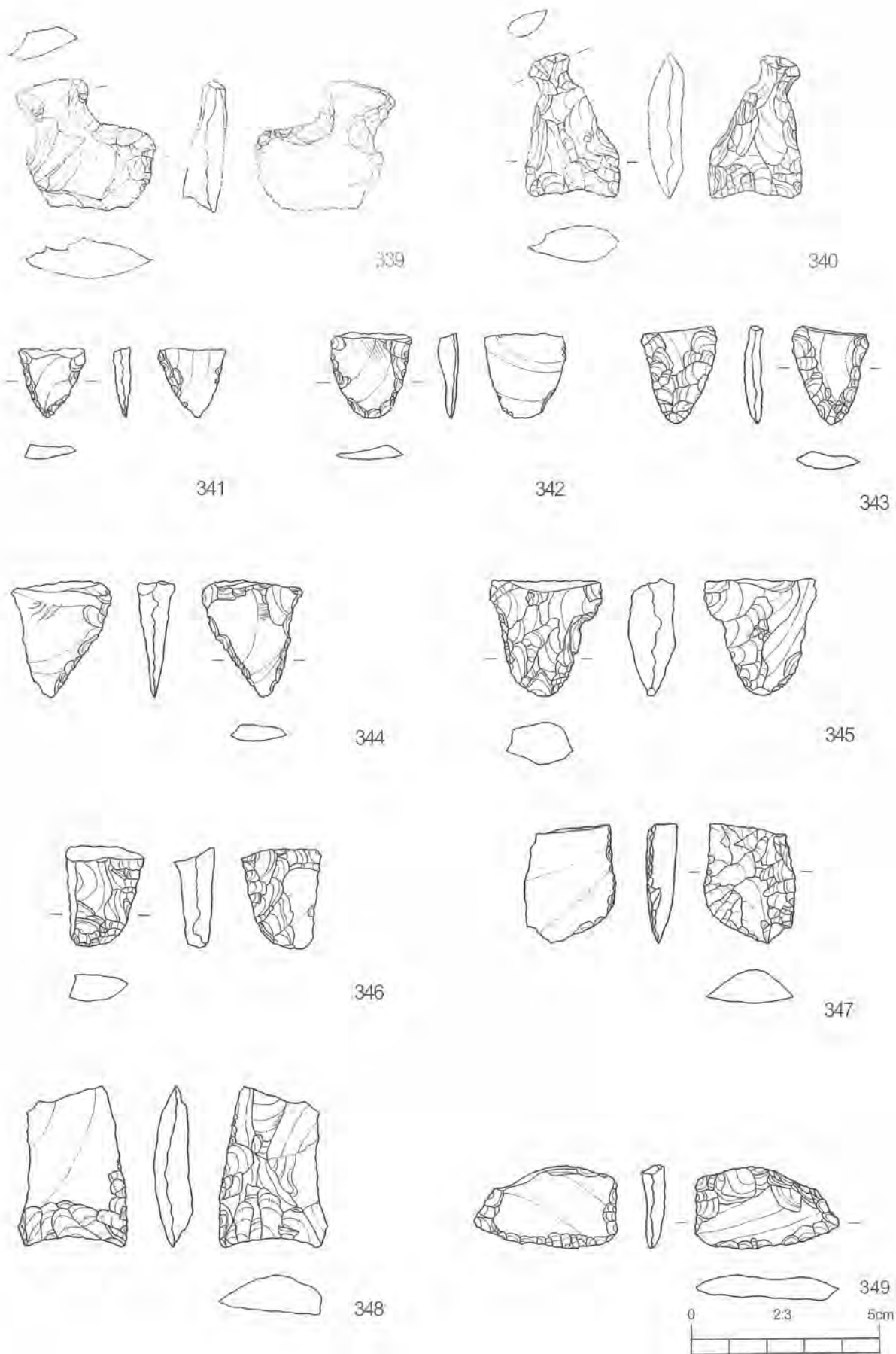


第224图 D区谷包含層出土遺物・石器 (28)

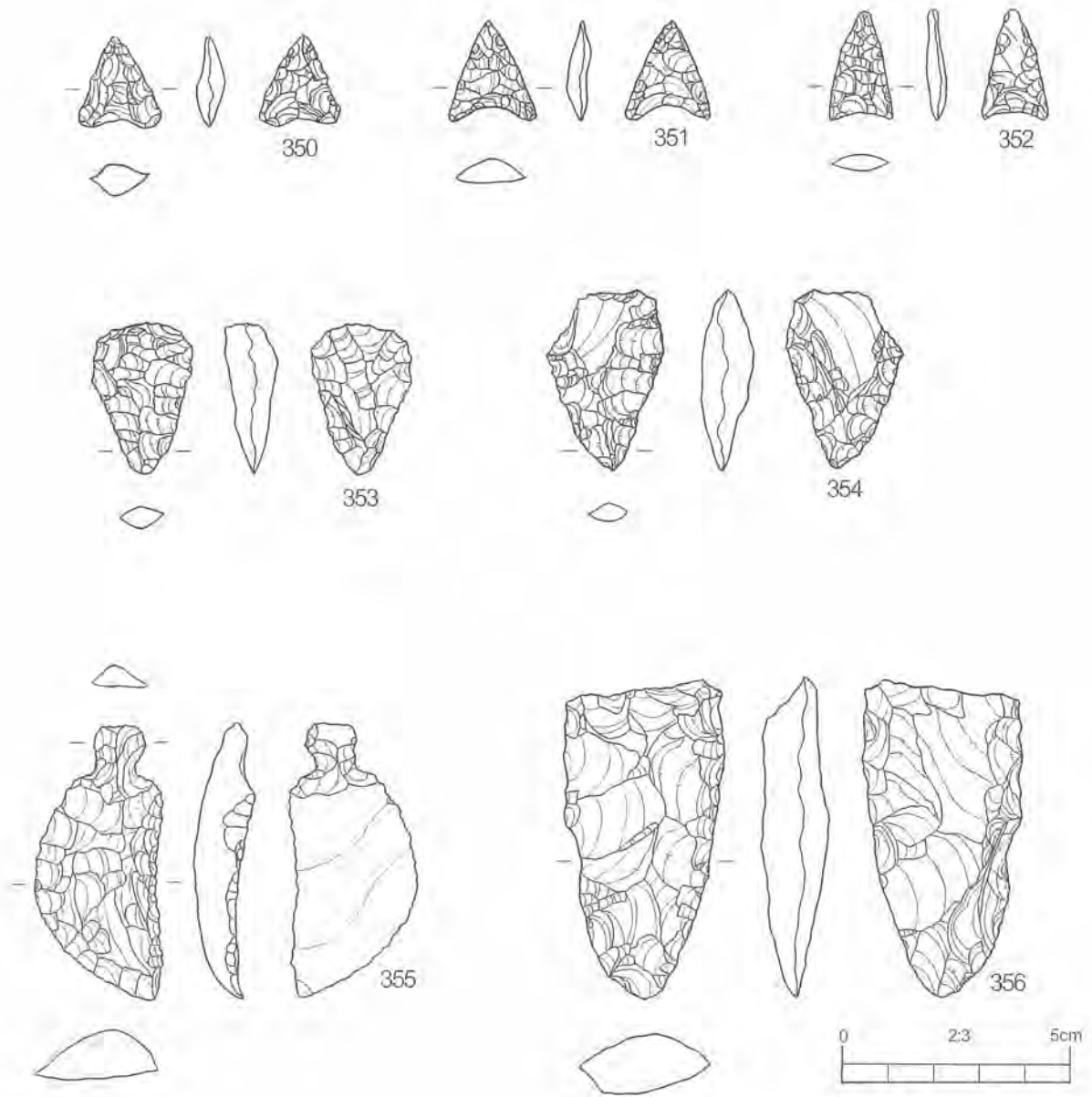


第225图 D区谷包含層出土遺物・石器 (29)

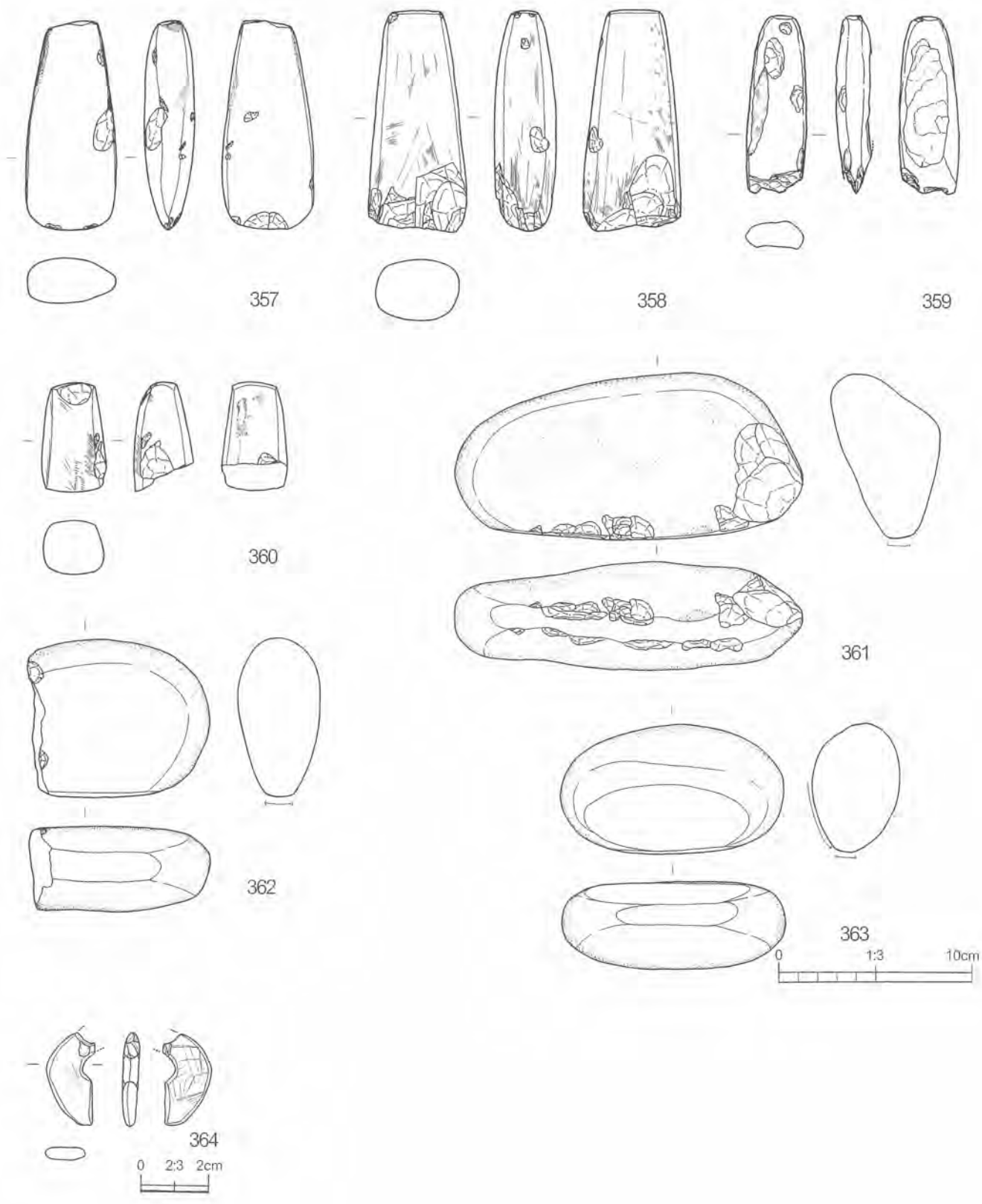




第226图 D区谷包含層出土遺物・石器 (30)



第227图 D区谷包含層出土遺物・石器 (31)



第228図 D区谷包含層出土遺物・石器・石製品 (32)

e. D区礫層出土遺物（第229～231、233図）

D区谷包含層の南側の礫層（11層）である。

15、24、31は旧表土層、その他は黒色礫層からの出土である。

1～4は細い粘土紐による施文である。1は平行隆線の中に山形隆線、2、3は波状の隆線である。4は円形である。1～4は大木4式に伴う。5は円形刺突と波状の沈線を伴う。6は隆帯に円形刺突が加えられる。7は沈線による楕円の区画に円形刺突を施す。8は撚糸文、9は平行沈線である。10、12は同一個体と思われる。頸部の隆帯に押圧を加え、地文は網目状撚糸文である。11は口縁部は外反し、胴部はわずかにふくらみをもってすぼまる。口縁部には袂りが入り、地文は単節縄文の横回転である。13～16は撚糸文で施文される。17は隆帯の一部が残存し、地文は結節縄文の縦回転である。18は頸部に円形の刺突を加えられた隆帯をもち、地文は多軸絡条体で施文される。

19～49は胎土に繊維を含む。19～31は不整撚糸文で施文され、19～27は縄文の横回転を伴う。以上大木2a式に伴う。32は原体圧痕を施文される。33～41は単節縄文の横回転で施文される。42～48は羽状縄文を伴う。49はS字状連鎖沈文で施文された底部である。33～41は大木1式に伴う。

50～57は石器である。

50、51、53は石匙である。いずれも縦型である。50、51は両面の周縁を加工し、刃部の先端を尖らす。53は片面の全面、片面の周縁を加工し、刃部の先端を尖らす。52は石錐の錐部である。錐部は短い。54は石匙の一部か。両面の周縁を加工する。

55～57は表土の出土である。

55、56は磨製石斧である。55は胴部と刃部の幅は同じで、断面形は円形である。胴部に調整痕を残す。刃縁は直刃で、刃面はやや凸状である。56は胴部で、下半の幅が広がる。断面形は隅丸方形である。全面に擦痕を残す。

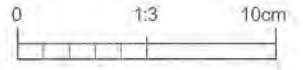
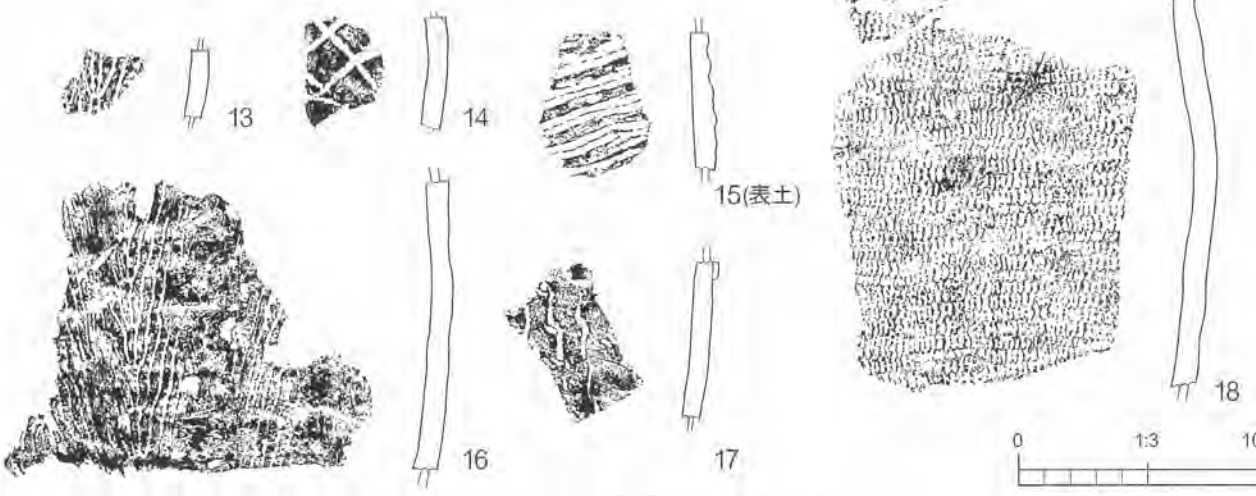
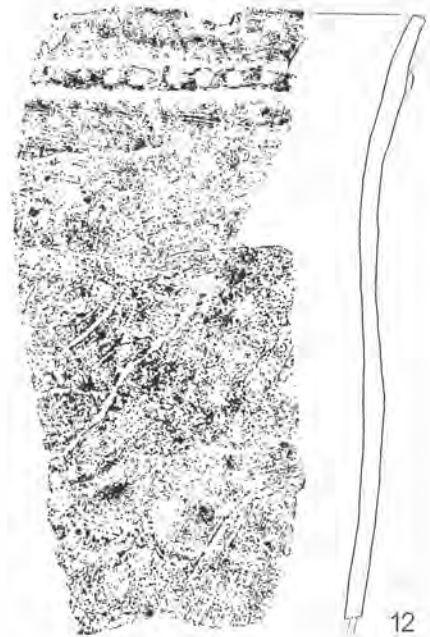
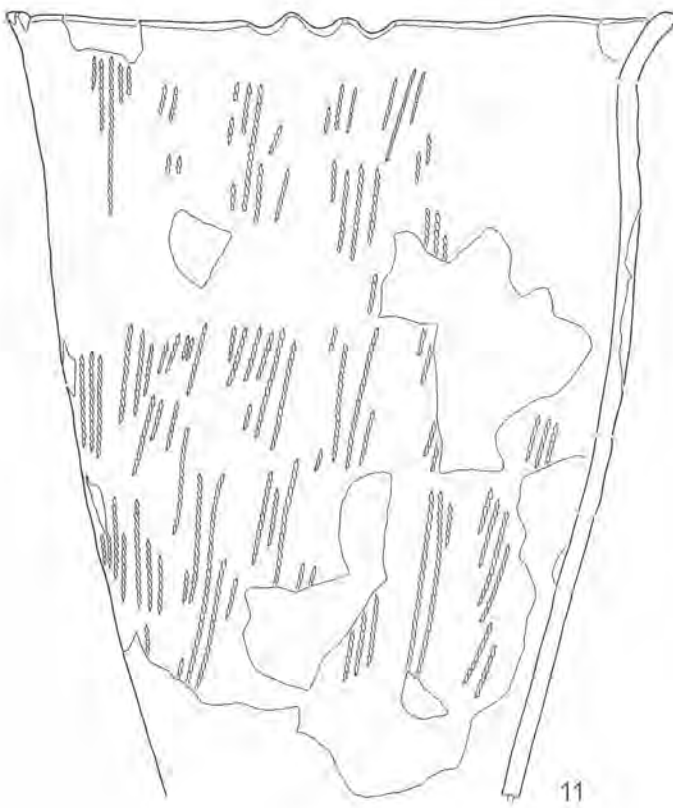
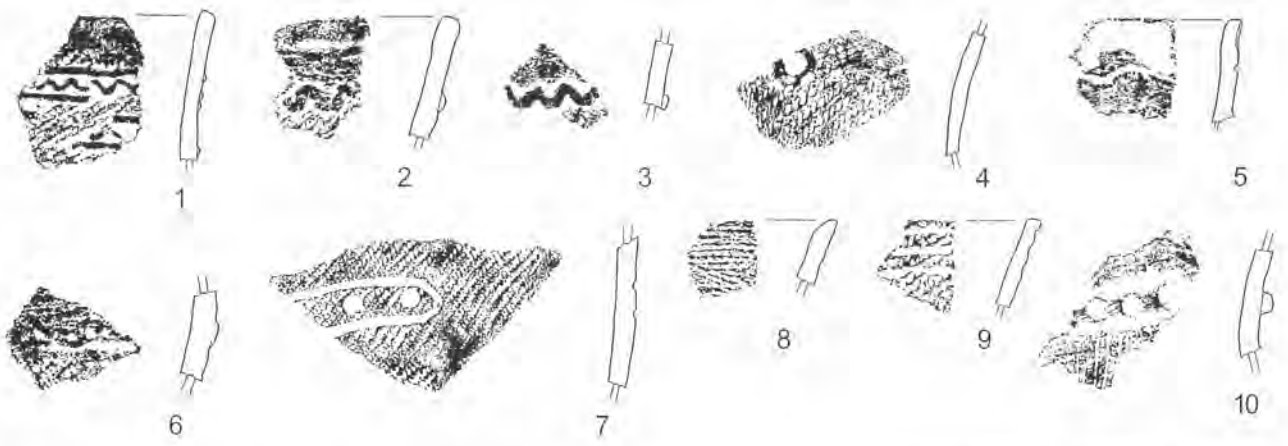
57は敲打磨石である。二側縁を機能面とする。

f. E区遺構外出土遺物（第232図）

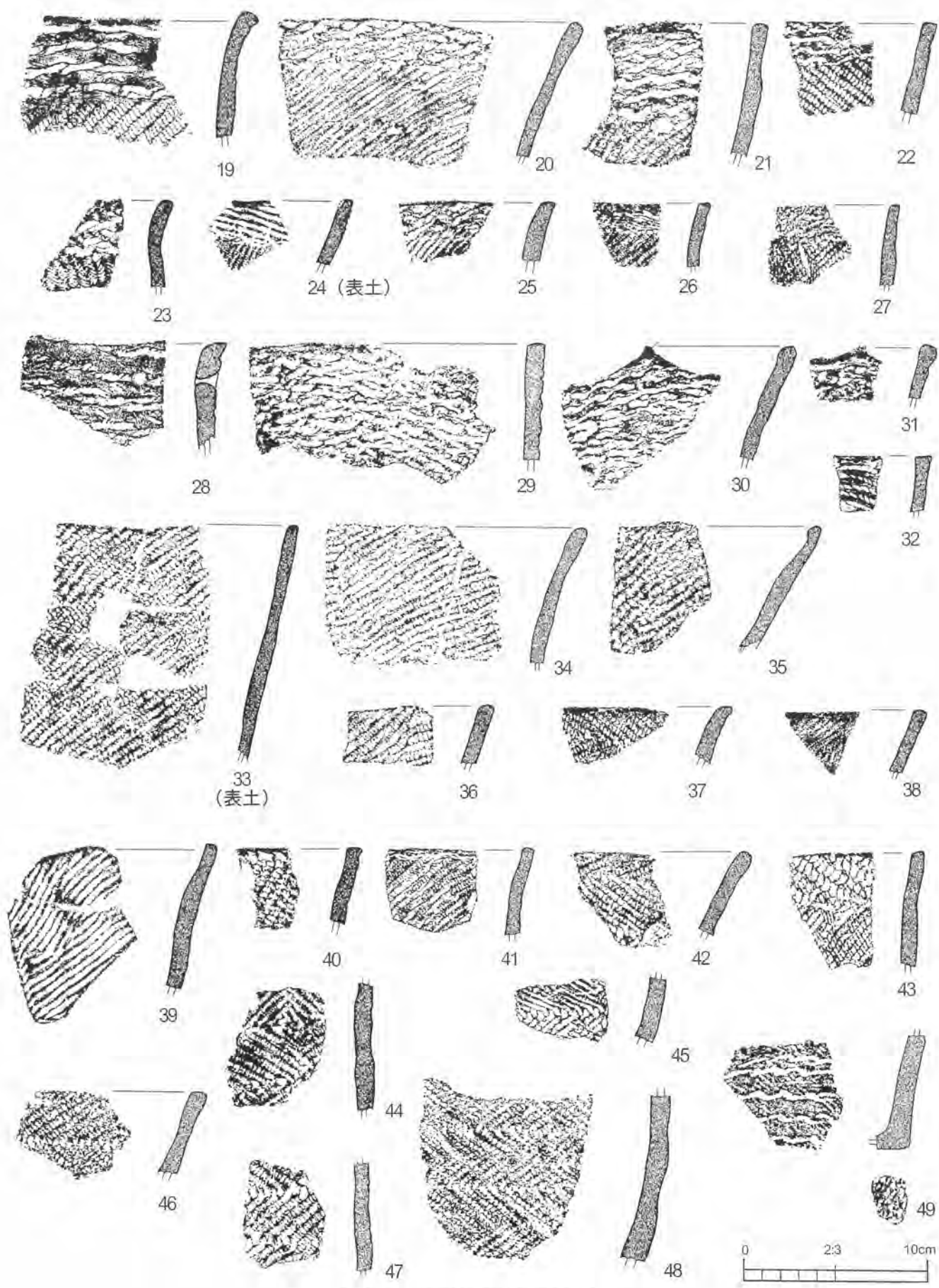
1～6は盛土層、7は9層の出土である。1は沈線と磨消を伴う。2は口唇部に刻みが入り、口縁部は連続弧状沈線で施文する。3は平行沈線を伴う。4は口縁部は外反する。甕か。5は口縁部は無文、地文は単節縄文の縦回転である。6は木目状撚糸文を伴う。7は壺あるいは浅鉢の底部である。細かい縄文が施文される。

g. G区遺構外出土遺物（第234図）

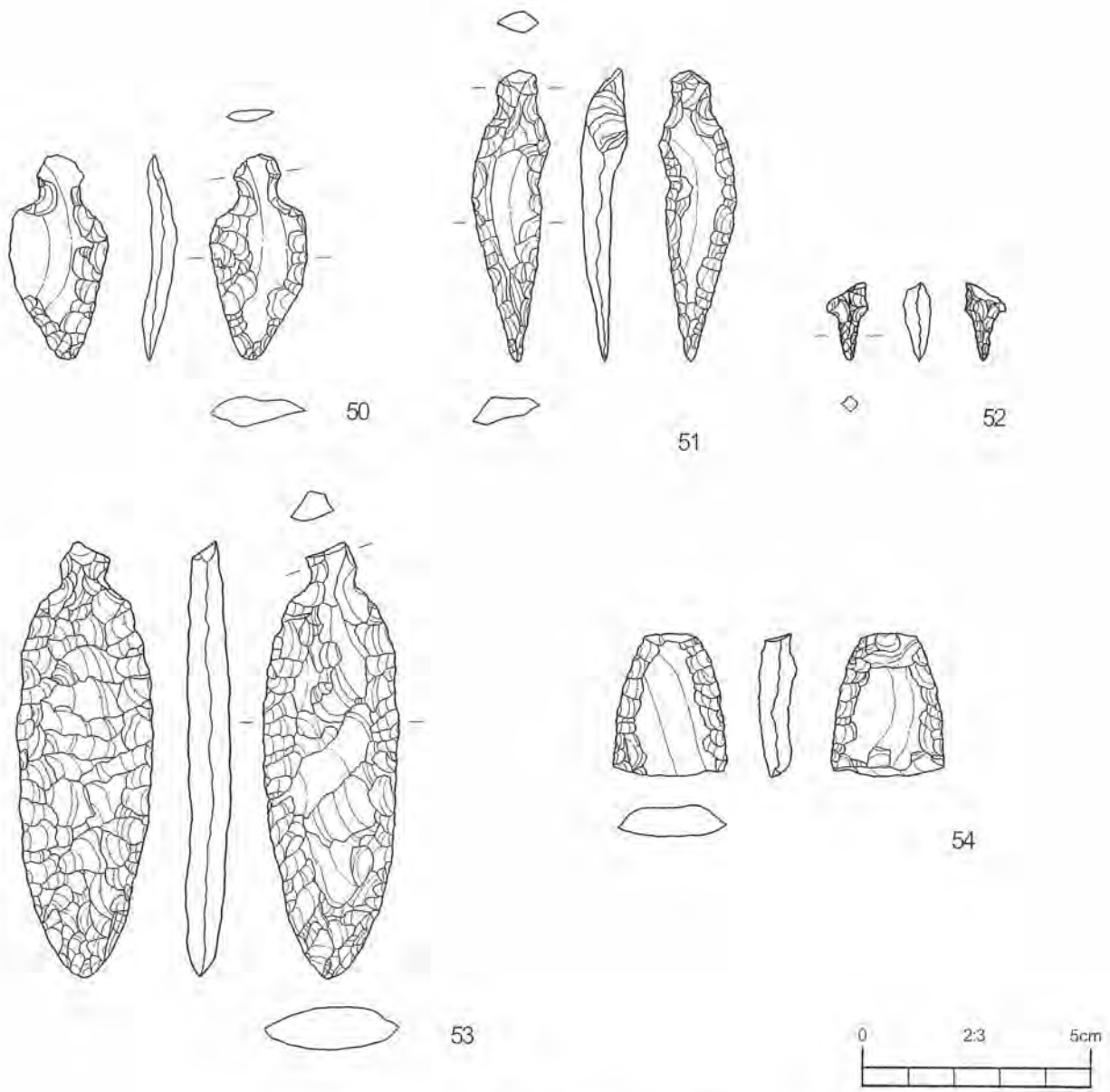
1は敲打磨石である。



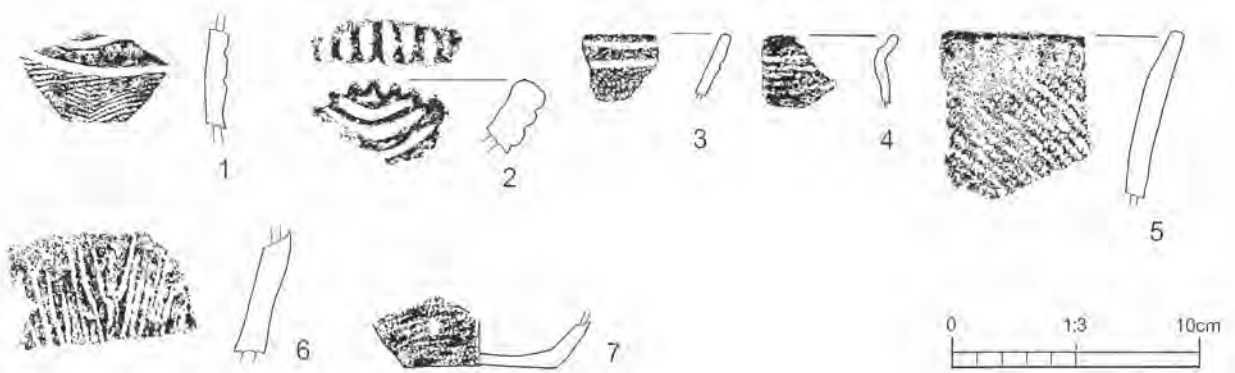
第229图 D区礫層出土遺物(1)



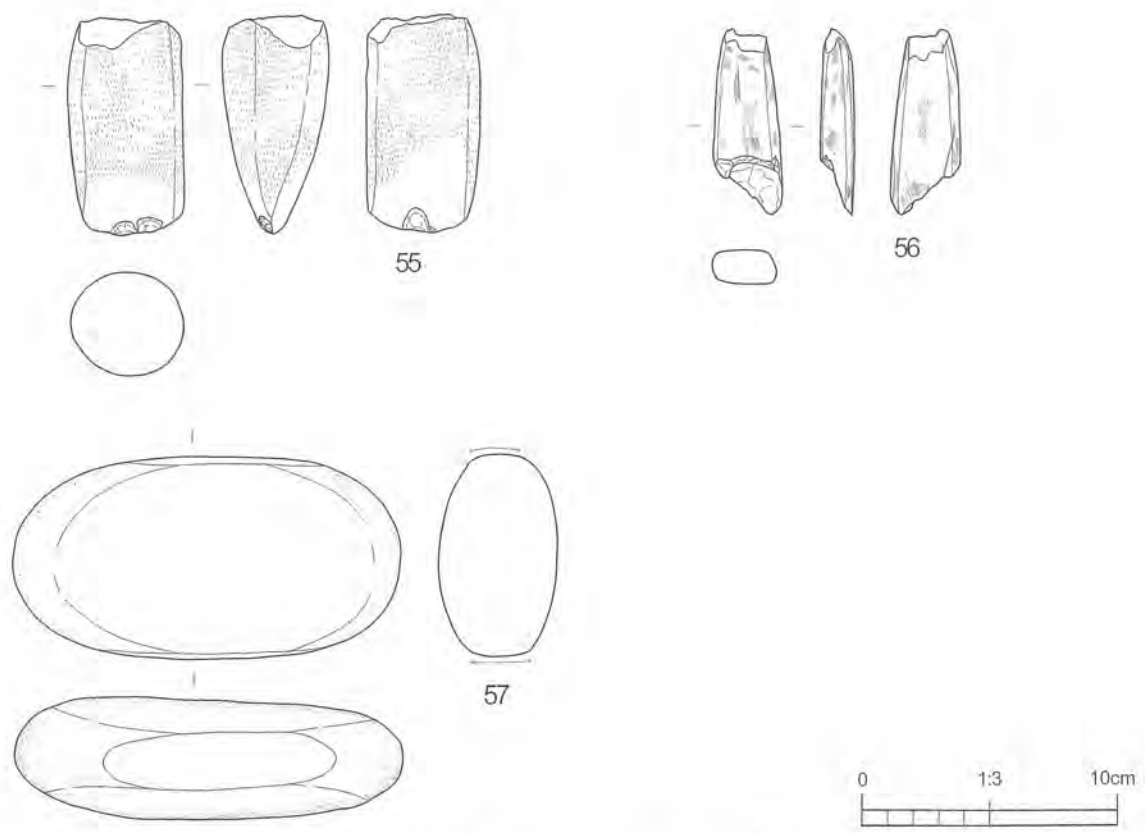
第230图 D区礫層出土遺物 (2)



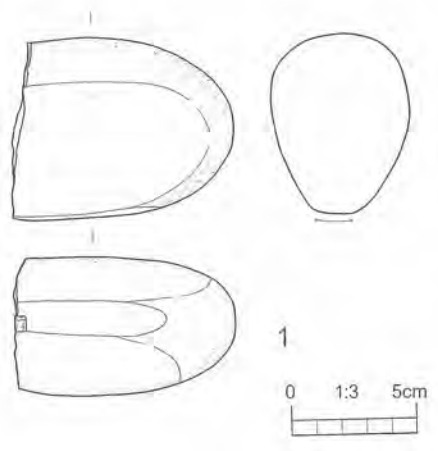
第231图 D区礫層出土遺物 (3)



第232图 E区出土遺物



第233图 D区礫層出土遺物(4)



第234图 G区遺構外出土遺物



## 4 調査のまとめ

### 4-1. 竪穴住居跡

#### a. 弥生時代

竪穴住居跡は5棟出土している。3棟は低地に位置し、まとまりをもつが、1棟はやや離れた高台に位置する。いずれも住居跡の半分のみを検出である。

竪穴の平面形は、低地の4棟は円形、高所の1棟は不整形である。正確な規模は不明であるが、D-1号、D-2号が径約4m、B-1号が南北4m、C-1号が径5m以上と推定される。

柱穴については、C-1号をのぞけば、支柱穴に当るような床面の土坑跡は少ない。C-1号では、柱痕をもつやや規模の大きい土坑跡が周溝にそって検出している。

炉跡は、いずれの竪穴でも検出しているが、C-1号ではすでに壊され、D-2号では炉石が抜かれていた。D-1号、D-2号、D-3号の炉跡は、掘り方をもち、円形に石を組んだ石囲炉である。規模もほぼ同じである。A-4区で出土した炉跡も同形、同規模の石囲炉である。B-1号の炉跡は掘り方をもち、石を据えただけの炉である。

以上のことからB-1号とC-1号は他の竪穴の一郡とは若干構造が異なっていることがわかる。D-1号、D-2号、D-3号の一群、C-1号、B-1号の三つに分れるわけであるが、C-1号がD-1号、D-2号と同時期の土坑跡に切られていることから、若干古いことが確認できるが、B-1号についても遺物が少なく、位置づけが難しい。

D-1号、D-2号は弥生初頭に伴う土器を出土しており、ほぼ同時期に存在した可能性がある。

北のA-4区の谷からは弥生初頭の土器を主体にし大量の土器が出土している。A区は上述の住居跡とは沢で区切られたような位置にあり、背後は山裾である。南の住居跡、北の遺物の出土状況から、山麓に広がる弥生初頭の大きな生活圏を予想させる。その生活圏のなかではこれらの住居跡は、南は礫層で覆われていたことから周縁部に位置していたことが推定される。

市内で当該時期の住居跡は、上村貝塚<sup>1</sup>、赤前IV八枚田遺跡<sup>2</sup>で出土している。上村貝塚の住居跡はやや規模が大きい、竪穴、炉跡の形状などは類似する。赤前遺跡の住居跡については規模は不明であるが、竪穴、炉跡の形状についてはやはり類似している。また狐崎遺跡では、弥生前期と推定される大形の住居跡が出土している。尾根上に立地する珍しい例である<sup>3</sup>。田代地区芋野I遺跡においては、弥生前期～後期の遺物包含層が出土しており<sup>4</sup>、当地方での弥生期の面的な広がりが確認され始めたところである。

#### b. 縄文時代

##### 縄文時代中期

B区を頂点とする緩斜面がD区まで続いている。上位で2棟（B-2号、B-3号）、中位で1棟（C-4号）、低位の平坦面で、5棟（C-3号、C-2号、D-5号、D-6号、D-4号）、都合8棟が検出している。縄文中期後葉大木式10式に伴うものが2棟（C-2号、D-4号）、大木9式に伴うものが1棟（D-5号）、大木9～10式のものが2棟（C-4号、D-6号）、大木7b式に伴うものが、1棟（B-2号）、大木7a式に伴うものが1棟（B-3号）、不明のものが1棟（C-3号）である。

平面形は、円形のものがD-5号、隅丸方形のものがC-2号、C-4号、C-3号、不整形長方形

のものがB-2号である。規模は確認できたなかでは、B-2号が6.2m×4.2m、C-2号が5.5m×5.5mと大形で、D-5号が径4.5mと中型、C-4号が2.7m×2.5mと小型である。

柱穴は、C-2号、D-5号、C-4号では床面周縁部で、柱痕が確認されたやや規模の大きい土坑が検出しており、B-2号では小規模ではあるが対をなして長辺に沿って並ぶ土坑が確認されている。

炉跡は、複式炉（C-2号、C-3号、D-5号、D-6号、D-4号、C-4号）、円形もしくは方形の石囲炉（B-2、B-3号）に分れる。C-4号の炉跡については、とくに前庭部として掘り込みは認められなかったが、石囲炉の南の若干の空間を前庭部とみなしたこと、炉がやや南壁寄りに位置することなどから判断した。

複式炉の構成は、次の通りである。

A型 <Ⅰ部>石囲炉+<Ⅱ部>掘込炉+<Ⅲ部>前庭部の三部で構成される。

B型 <Ⅰ部>石囲炉+<Ⅱ部>前庭部の二部で構成される。

A型はC-2号、C-3号、D-5号であり、B型はC-4号、D-4号、D-6号である。1号住居跡の炉はⅡ部の掘込炉が埋設した石で仕切られ、Ⅱa、Ⅱbに分れる。C-2号住居跡には旧炉跡が残存しており、その構造は新炉跡と規模も含めて変化していない。

炉跡の規模は、長軸方向でC-2号が2.3m、D-5号が2.0m、D-4号、D-6号が1.5m、13号が1.4m、10号が1.0mである。炉の規模は、住居の規模に比例しているようにみえる。市内白石遺跡<sup>5</sup> 1988と早稲栃Ⅱ遺跡<sup>6</sup> ではC-2号、D-5号住居跡に併行するやはり複式炉を備えた住居跡が検出している。白石遺跡の1号住居跡は、本遺跡のC-2号と同時期であり、複式炉の規模は長軸方向で2.3m、竪穴の規模は6.0m×7.0mが推定されている。早稲栃Ⅱ遺跡の3号住居跡は本遺跡のD-5号と同時期であり、複式炉の規模は1.9m、竪穴の規模は径4.5mである。

これらのことからある程度の比例関係は想定した場合、C-3号、D-4号、D-6号住居跡についても、円形と仮定して径4m弱の竪穴が考えられる。

複式炉については、「トロノ木Ⅰ遺跡」の考察のなかで<sup>7</sup>、前庭部の「特別な空間」という想定がなされ、上述の白石遺跡においても前庭部への三角柱状の立石が報告されている。本遺跡においては特別な施設などは認められなかったものの、C-2号住居跡の炉Ⅰの前庭部付近でヒスイが出土したこと、炉の反対側の周溝が一部途切れていることなどがあげられ、前庭部の機能を考えるうえで一つの大きな材料となると思われる。

B-2号、B-3号住居跡は、縄文時代中期前葉～中葉、大木7b～8a式に伴う竪穴住居跡である。ロングハウスに似た方形の竪穴で、長辺に沿って対をなす柱穴が掘られていること、円形の石囲炉を持つことなどが、特徴としてあげられる。B-3号については、大木7a式に伴うものと考えられるが、かなり雑なつくりで、床面に突出する自然礫をそのままにしているだけでなく、自然礫を利用して石囲炉を組んでいる。長期の利用を考えた施設ではないように思われる。

市内高根遺跡では、ほぼ当該時期に併行する住居跡が出土している<sup>8</sup>。7棟の住居跡が確認されているが、形状、規模ともさまざまである。そのなかで長楕円、方形の竪穴が3棟確認されている。長方形の竪穴で、中央部に石囲炉をもつ住居跡を一つのタイプを想定できるのではないかと考える。

## 縄文前期

D区で縄文時代前期中葉大木4式に伴う竪穴住居跡、同区の谷遺物包含層では大木6式を主体とする大量の土器が出土している。土器については後述するので、ここではD-7号竪穴住居跡についてまとめる。

平面形は方形、規模は約10.5m×4.5m。周溝跡から三度の建替えが確認された。Ⅲ期は、床面の二箇所焼土遺構が確認され、二基の大形土坑跡が出土した。柱穴は長辺に沿って並ぶが、規模は小さい。単体の規模の大きな柱穴は少なく、大きく不整形、楕円形に掘り込んで、何度か柱を据え替えたような土坑が目立つ。Ⅱ期では、東の床面で、上述の土坑を囲むような溝跡、小土坑群が検出している。焼土遺構は確認されていない。柱穴は周溝の角、南北の周溝の midpoint あたりで、やはり小規模な土坑跡を検出しただけである。

宮古市では当該時期の住居跡は初見である。山田町沢田Ⅰ遺跡(1996)、遠野市新田Ⅱ遺跡(1998)で縄文時代前期前葉の住居跡が出土している。実見したところでは、形状は同じであるが、周溝、柱穴の規模が本遺跡のものより大きいという感じをうけた。竪穴の規模では、幅はほぼ三遺跡とも同じであるが、長さでは、本遺跡の竪穴は短いほうである。上記の二遺跡では、いずれも住居床面に大形の土坑跡をもつことはない。新田Ⅱ遺跡では、床面の数箇所焼土遺構を、沢田Ⅰ遺跡では複数の複式炉を確認している。方形の住居内での多様な構造、変遷を予想させる。今後の資料の蓄積を待ちたい。

## 4-2. 土器について

今回の調査で出土した土器は、弥生時代から縄文時代前期にわたり15群に分類される。とくに出土量の目立ち第1群とした弥生土器、層位的にまとまりをもって出土した7群、9群とした土器群、すなわち大木6式、大木4式に伴う土器については集成を試みた。縄文土器についてはほぼ大木式土器の分類に従った。

### 第1群(挿図1~3)

弥生土器である。器種別にみてみたい。

壺(1~10)。中~小型である。器形は、胴部に丸みをもつものと(1)、肩部が張出すものがある(2)。施文は、口縁部は隆線もしくは沈線による平行線をめぐらし、2個一対の貼瘤をもつものもないものに分れる(1、2、3、4)。体部は、無文(1、2)、縄文(7)、縄文と頸部への隆線もしくは沈線(3)、上半部への変形工字文と下半部への縄文(3、4、5、6)、変形工字文と沈線による羽状文(6)、沈線による区画と磨消(9、10)などがある。1~8は弥生初頭~前葉、9、10は弥生中期に伴う。

高坏(11~39)。口縁部は、平縁、山形口縁に分れる。平縁は内反(11、24)、直立(12)、外反(13)するものなどがあり、山形口縁は外反する(26、27)。施文は、上半と下半を分け、上半に平行沈線もしくは変形工字文、下半は縄文という例が多いが、下半は無文のものもある。沈線には貼瘤付きとそうでないものがある。山形口縁には、頂部に挟り、口唇部に溝が入るものがある。高坏の脚部は平行沈線と波状沈線で施文される。

31~39は沈線による区画と磨消、33、34は列点文を伴うグループである。

11~30は弥生初頭~前葉、31~34は弥生中期に伴う。

鉢(39~48) 平縁と挟りの入った小突起をもつものがある。文様帯は口縁部もしくは上半

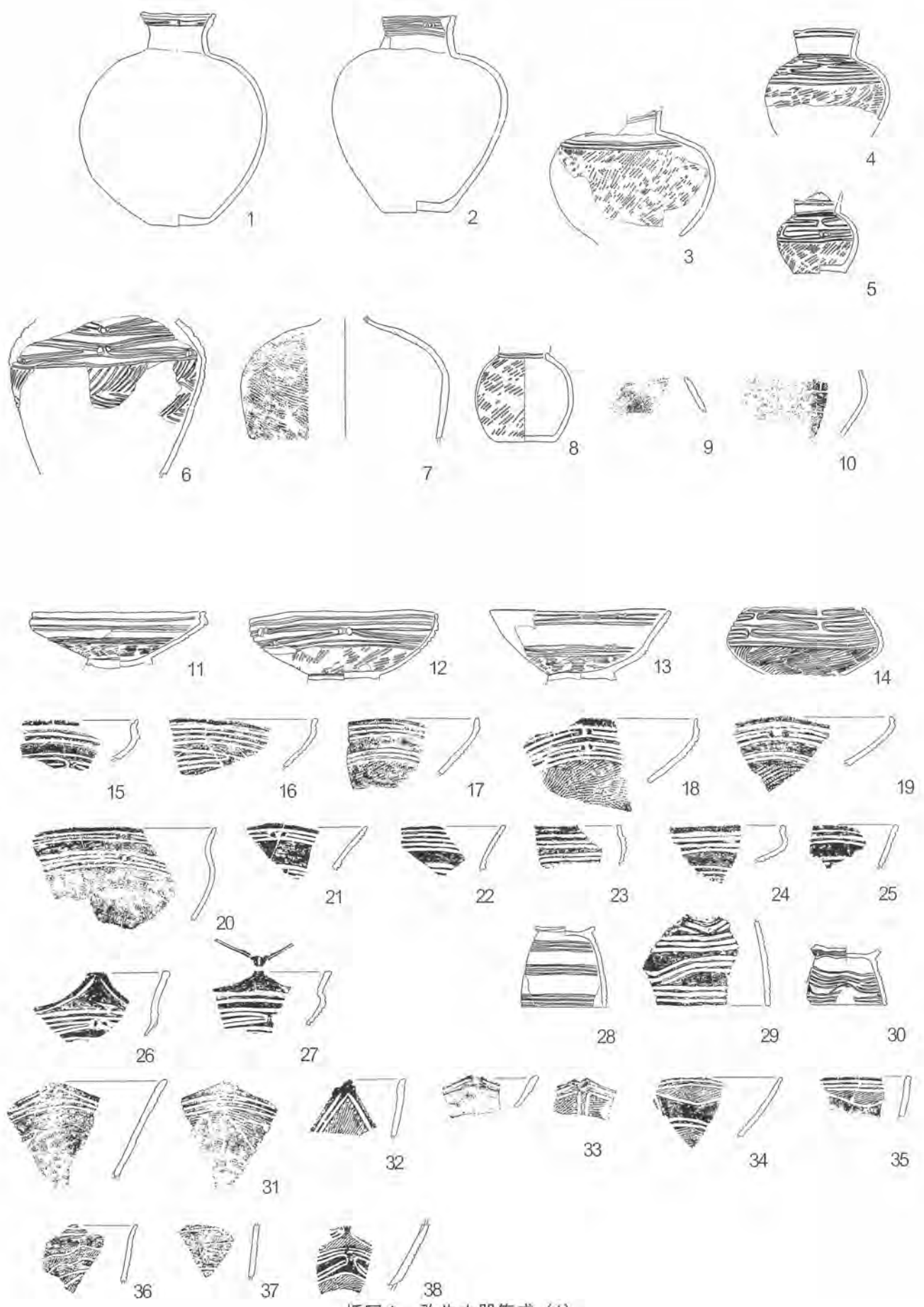


插图1 弥生土器集成(1)

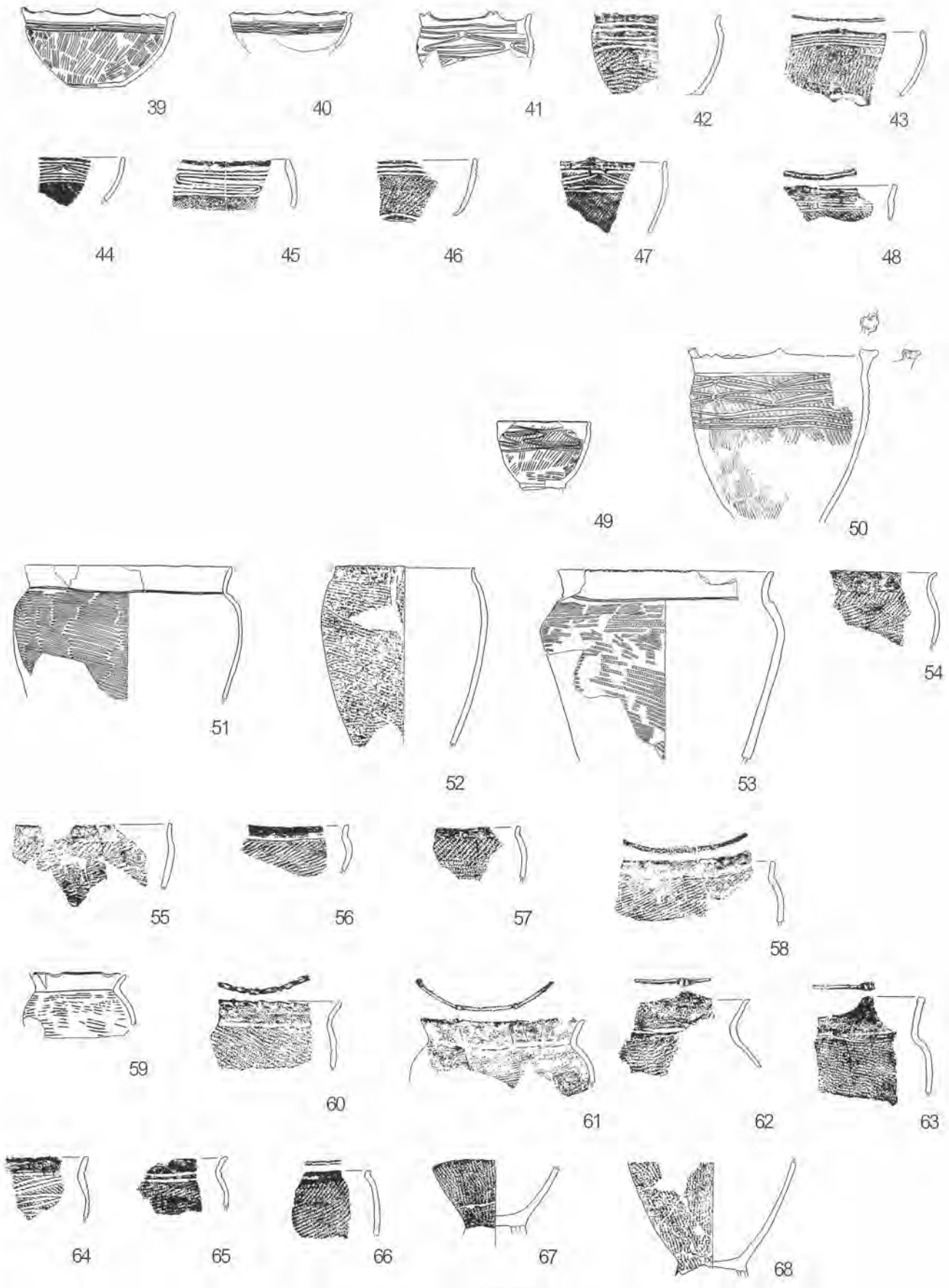


插图2 弥生土器集成(2)



挿図3 弥生土器集成(3)

に集中し、変形工字文、平行沈線などを施文する。台付き(49)や頂部に動物の頭部を象ったもの(50)も出土している。

甕(51~68)口縁部は直立もしくは外傾し、肩部は強く張出す。口縁部は無文、頸部から下を縄文で施文し、頸部の境界に段あるいは沈線をもつことなどを一般的な特徴とする一群である。口縁部は平縁が多いが、山形口縁(63)もあり、抉り(59)、押圧(60)、縄文の施文(53、58)を施したのものもある。大部分が粗製であるが、小形のもので比較的精製のものがあり、口縁部を沈線などで施文される(64~66)。また台付のものもある(67、68)。51~48は弥生初頭~前葉に伴う。

69~79は複合口縁の甕の一群である。隆帯には押圧もしくは刺突が加えられる。69は平行沈線と山形沈線を伴う。80~90は沈線に交互刺突を加えたグループである。

69~79は「岩手の弥生式土器編年試論」<sup>9</sup>でⅢ期、80~90は同試論でⅤ期に分類された一群に伴い、前者は弥生中期、後者は弥生後期に伴うものと思われる。

#### 第2群(142図235~243、144図273、274)

A-4区で数点出土した土器である。器種は浅鉢と甕である。浅鉢は口縁部に刻みが入り、口縁部は沈線で施文されるか無文である。甕は口縁部に抉りが入り、口縁部は無文あるいは沈線で施文される。縄文晩期、大洞C2式に伴うと思われる。

#### 第3群(143図241~246、144図276)

D-9号土坑跡の深鉢を代表とするが、数点しか出土していない。橋状の把手の付いた胴張りの深鉢で、倒卵文を伴う。縄文後期初頭に伴う。

#### 第4群(37図1、38図17、50図1、124図1、5、176図289~297)

C-2号住居跡、D-4号住居跡に伴う一群である。沈線による「ノ」字状などの区画と磨消を伴う胴張りの深鉢である。A区の包含層を含めほぼ全域で出土している。大木10式に伴う。

#### 第5群(55図1、74図29~33、35~37、155図89~102)

D-5号住居跡の遺物を代表とする。沈線による縦位の楕円区画、磨消、隆起区画文などを伴う深鉢である。ほぼ全域で出土する。大木9式に伴う。

#### 第6群(76図72、141図210~213、143図253~255、155図103~111、161図221)

A-4区10a層出土の深鉢を代表とする。隆沈線で渦巻文などが施文されるキャリパー形深鉢、

同施文の波状口縁の深鉢である。A-4区で一括で出土したほかは、B~D区での出土量はかなり少なく遺構に伴うものはない。大木8b式に伴う。

#### 第7群

B-3号住居跡、D区谷包含層などから出土するが点数は少ない。

a類 山形口縁の頂部へ縦位あるいは円形の粘土紐を貼付し、刻みを加え、周りを山形沈線、刺突、圧痕などで施文するもの。(74図42~44、81図1~3、156図112、113~131、177図333~347など)

b類 隆帯に縄文圧痕を施すもの。(41図77、73図1、74図39~41、156図112、113)

出土数は少ないが全区から出土する。a類は大木7a、b類は大木7b式に伴う。

#### 第8群 (挿図4、5)

大木6式に伴う一群である。C区の谷の包含層からまとまって出土している。

1~8は球胴形の深鉢である。二類にわかれる。

a類(1~5) 口縁部へのボタン状の粘土紐あるいは縦位の粘土紐を貼付。頸部を横走る山形沈線。胴部のX字文などを特徴とする。

b類(6~8) 文様帯は上半に集中する。6は粘土紐による区画と山形の施文、7は沈線間を弧状、縦位の沈線で埋め、8は沈線による山形、同心円文で埋める。

a類、b類は「大木式土器にみられる球胴形深鉢について」<sup>10</sup>のなかで、それぞれA種Ⅱ群2類、B種Ⅰ群4類と分類されたものに相当するものと思われる。A種は大木系、B種は他系統の土器であり、本遺跡のb類については十三菩提式系統のものであることが指摘されている。

9~19は複合口縁の深鉢である。隆帯への施文は、棒状工具での沈線(10~13、24)、刺突(14、17、20、21、27)、弧状沈線(15)、平行沈線と山形沈線(28)、同心円文(16、18)、縄文(26、29)などがある。

谷包含層からは口縁部を原体圧痕で施文された一群の土器が出土している(95、101、159、163、166、183)。これらは従来大木7b式に伴うものとして捉えられてきたが、今回の出土状況からみて大木6式に伴う可能性も否定できないように思われる。また同包含層から出土した土師器に類似した無文土器(110など)については、この一群に伴うものと考えたい。

#### 第9群 (103図322、204図48、211図113、114)

大木5式に伴うものと思われるもので、D-7号埋土から1点、C区谷包含層から3点出土している。縦位のジグザグ文と口縁部への刺突を特徴とする。

#### 第10群 (挿図6)

大木4式に伴う一群である。D-7号住居跡とその埋土層及びB区から出土したものである。

a類 口縁部がラッパ状に外傾する深鉢で、口縁部内面、頸部あるいは胴部に細い粘土紐を波状に貼付する。(31~37)

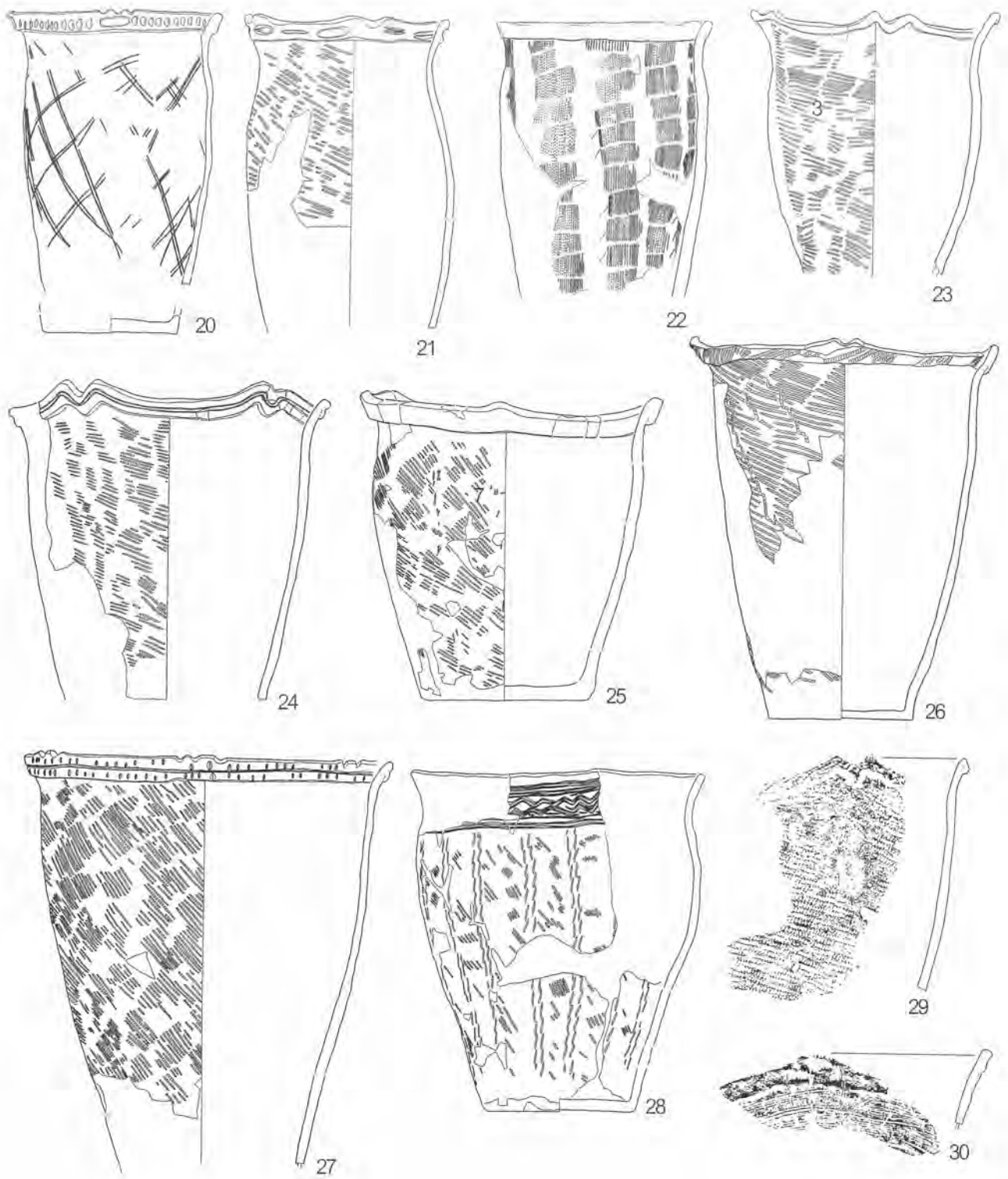
b類 口縁部はくの字もしくは直に外傾し、胴部は強くふくらむ球胴形と思われる深鉢である。口縁部の内面に波状の粘土紐が貼付され、胴部には渦巻文が施文される。施文は細い粘土紐を使用するもの(38、39)、刺突を施したやや幅広の粘土紐を使うものがある(40~42)。

c類 口縁部は外反し、凸状の突起をもつ。口縁部に39と同じ粘土紐で渦巻文などを施す。(43~46)



挿図4 縄文土器集成(1)





挿図5 縄文土器集成(2)



挿図6 縄文土器集成 (3)

d類 器形は不明であるが、口唇部には粘土紐が貼付され、頸部の隆帯には斜の刻みが入られる。(40~42)

a類の35については、沈線と竹管円形刺突が主体となって粘土紐をともっており、大木3b式とすべき土器かと思われる。

第11群 (37図13、95図102~106、98図206~208、115図1)

大木3式に伴う土器であるが、出土数は少ない。細い粘土紐に刻みの入れられたものと竹管による円形刺突を施されたものがあげられる。

**第12群** (92図42～46、93図47～51、95図107～119、99図209～227、102図308～313、106図370～385、151図9～14、153図38～54、158図151～162、198図13～19、230図19～32)

大木2式に伴う一群である。A、E～G区をのぞいた区域から出土している。平縁もしくは山形の口縁部をもつ深鉢で、胎土に繊維を含むものが多い。不整撚糸文、不整撚糸文と縄文で施文されたものがほとんどであるが(上記の一群)、S字状連鎖沈文を施されたものも出土している(99図228～230)。前者は大木2a式、後者は大木2b式に伴う。

**第13群** (93図52～64、95図122～130、99図234～238、100図239～251、103図315～320、107図386～394、115図2～8、151図15～27など)

大木1式に伴う土器群である。12群よりは少ないが、A区、E～G区をのぞいてほぼ全区から出土している。胎土に繊維を含み、単節あるいは複節斜縄文のみの施文がほとんどであるが、ループ文、刺突を加えたものなども出土している。これらは千鷄遺跡で「千鷄Ⅱ式」と設定された土器群である<sup>11</sup>。

**第14群** (58図86、93図65)

器形は不明であるが、胎土に繊維を含み縄文の原体圧痕で施文される一群である。上川名Ⅱ式に伴う土器群である。

**第15群** (第93図71～75など)

貝殻腹縁圧痕を施された土器群である。器形は不明である。

#### 4-3. 土偶について

土偶はD区から3点出土し、いずれも脚部である。施文は沈線と刺突が用いられ、2点が中空、1点が中実である。「東北地方における縄文時代末期以降の土偶の変遷と分布」<sup>12</sup>において結髪形土偶、刺突文土偶、終末期土偶について考察がなされ、結髪形土偶、刺突文土偶は大洞A'式に伴う亀ヶ岡文化圏の産物と結論づけられている。そのなかで結髪形土偶の諸特徴があげられている。その特徴のなかでも腰部に刺突文でパンツ状の文様帯をつくる、基本的に中空である、基本施文技法としては、沈線・キザミ・破線・円形竹管・刺突が用いられる、大洞A'期前後の土器を共伴することなどは本遺跡の土偶の形状、出土状況と一致している。肝心の頭部、体部を欠いているので、結髪形か刺突文のどちらであるかは不明のままとしても、大洞A'期に伴うものと考えたい。

表採資料などにより千鷄遺跡群では、縄文時代早期から後期までの遺跡が想定されている。昭和62年の千鷄遺跡の調査では、縄文時代前期初頭の集落が確認され、今回の調査では縄文時代前期中葉、中期前葉、後葉、弥生前期に伴うの住居跡が出土し、集落が海岸から山麓は移動していることが確認されたわけである。

検討すべき多くの課題を抱えながその多くを果し得ないまま報告書となってしまったが、過誤の訂正も含めて今後の課題としていきたい。

註記

- 1 小田野哲憲・高橋義介 1990 「上村貝塚発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団
- 2 阿部豊 1999 「赤前Ⅲ遺跡、赤前Ⅳ八枚田遺跡、赤前Ⅴ柳沢遺跡 赤前Ⅳ釜屋沢遺跡  
小堀内Ⅲ遺跡」宮古市教育委員会
- 3 盛台義信 1990 「狐崎遺跡」 宮古市教育委員会
- 4 高橋憲太郎 1992 「細越Ⅰ遺跡 芋野Ⅱ遺跡」 宮古市教育委員会
- 5 高橋憲太郎 1988 「崎山遺跡群Ⅱ」 宮古市教育委員会
- 6 高橋憲太郎・三浦千秋 1995 「宮古市内遺跡発掘調査概報Ⅰ」 宮古市教育委員会
- 7 高橋憲太郎 1989 「トロノ木Ⅰ遺跡」 宮古市教育委員会
- 8 鎌田祐二 1992 「高根遺跡」 宮古市教育委員会
- 9 小田野哲憲 1987 「岩手の弥生式土器編年試論」 岩手県立博物館研究報告 第5号
- 10 稲野彰子 1991 「大木式土器にみられる球胴形深鉢について」 北上市博物館研究報告第8号
- 11 鎌田祐二 1989 「千鷲遺跡」 宮古市教育委員会
- 12 会田容弘 1979 「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」  
山形考古 第3巻 第2号

参考文献

- 熊谷常正 他 1982 「岩手の土器」 岩手県立博物館
- 奥野義一 1967 「大木式土器理解のためにⅠ～Ⅳ」 考古学ジャーナル
- 戸田哲也 他 1983 「縄文文化の研究－施文原体」 雄山閣

# 写真図版





D-1号竖穴住居跡

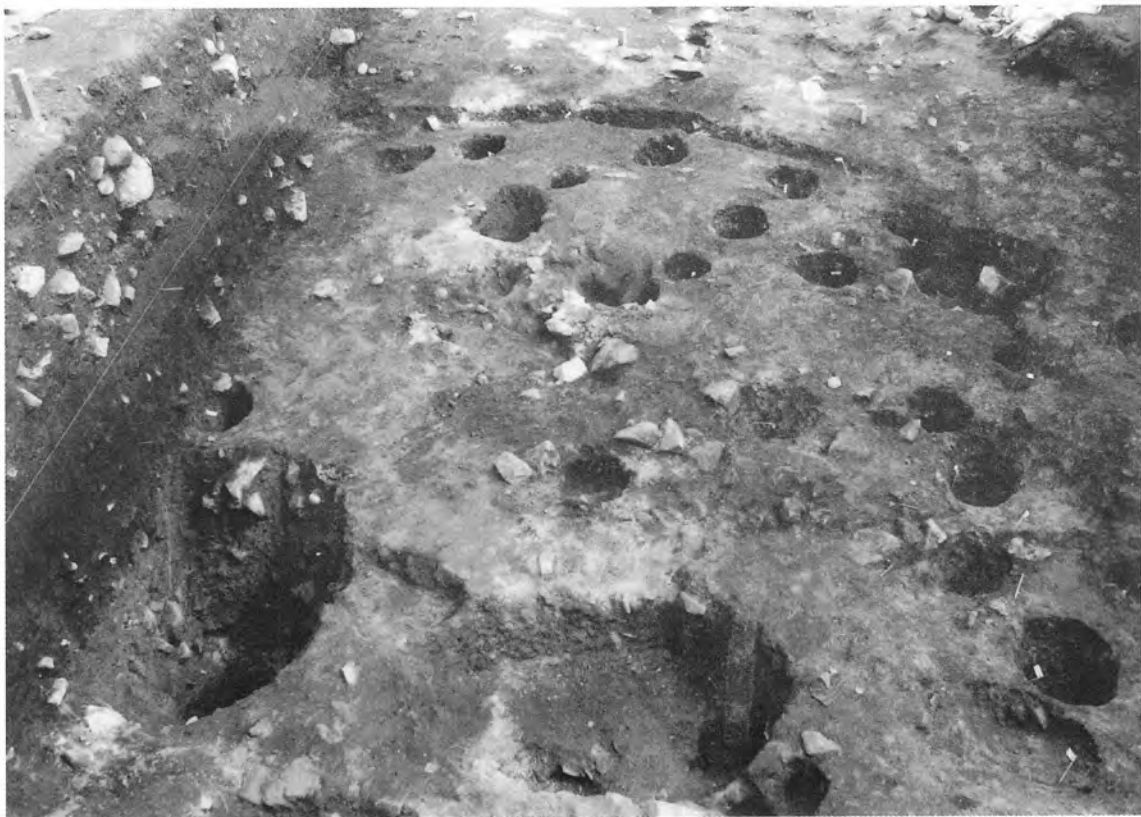


D-2号竖穴住居跡

写真図版 2



D-3号竖穴住居跡



C-1号竖穴住居跡



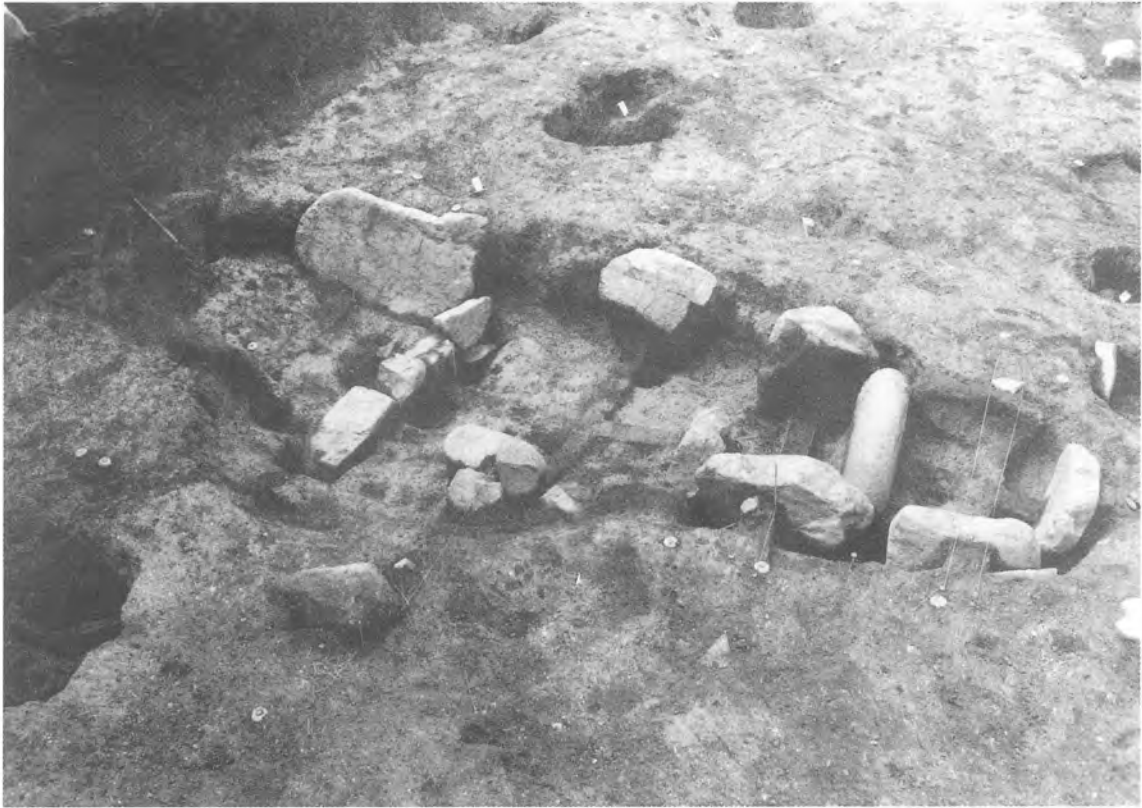


B-1号竖穴住居跡



C-2号竖穴住居跡

写真図版 4



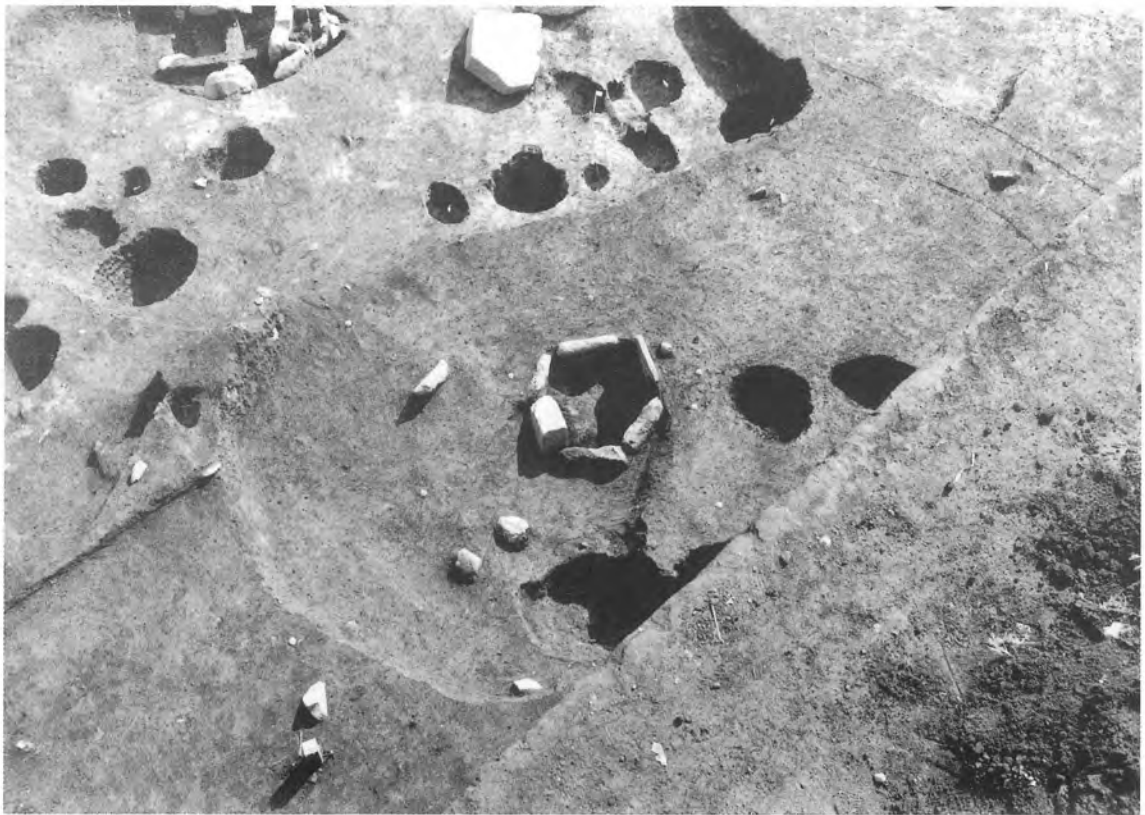
C-2 号竖穴住居跡炉 I



D-4 号竖穴住居跡



D-5号竖穴住居跡



D-6号竖穴住居跡

写真図版 6



C-3号竖穴住居跡



C-4号竖穴住居跡

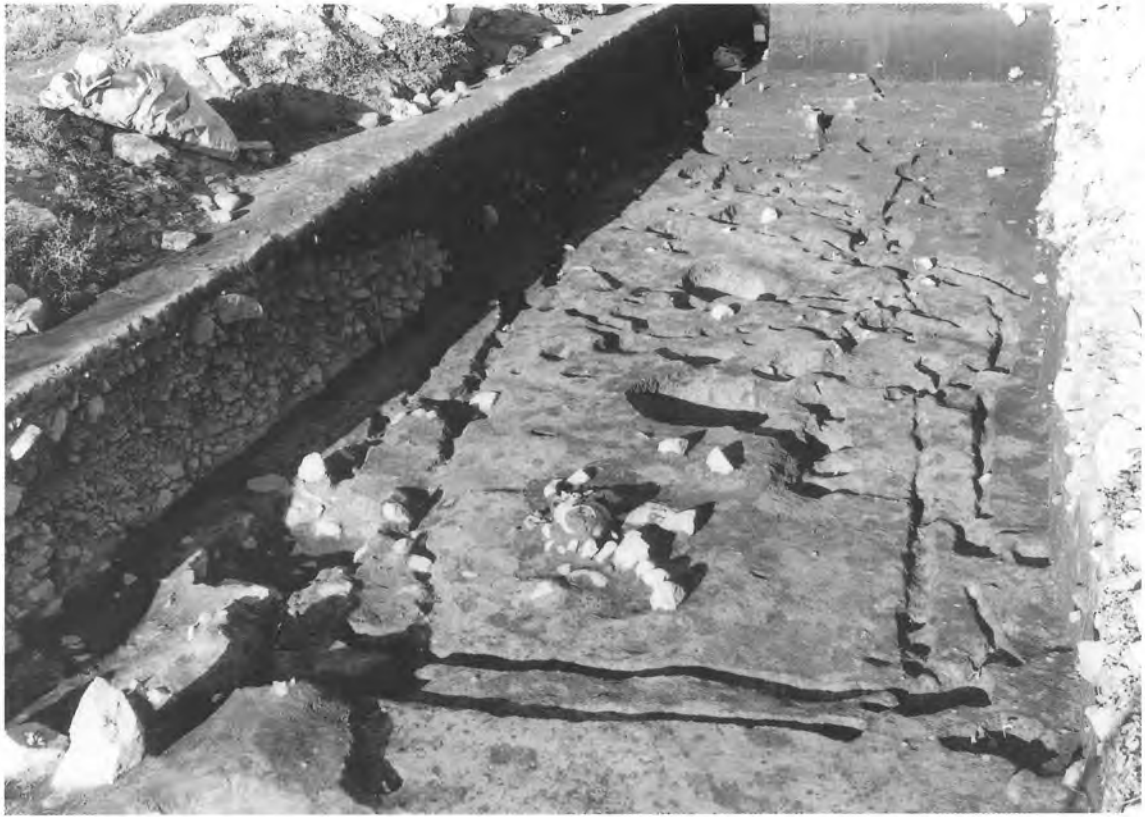


B-2号竖穴住居跡



B-3号竖穴住居跡

写真図版 8



D-7号竪穴住居跡（南から）



D-7号竪穴住居跡（北から）



D-7号竖穴住居跡 焼土遺構Ⅱ



D-7号住居土坑跡 (P79)

# 写真図版10



D-7号竖穴住居土坑跡 (P78)



C-8号土坑跡 玦状耳飾り出土状況





C区土坑群



D-12号、D-13号土坑跡

## 写真図版12



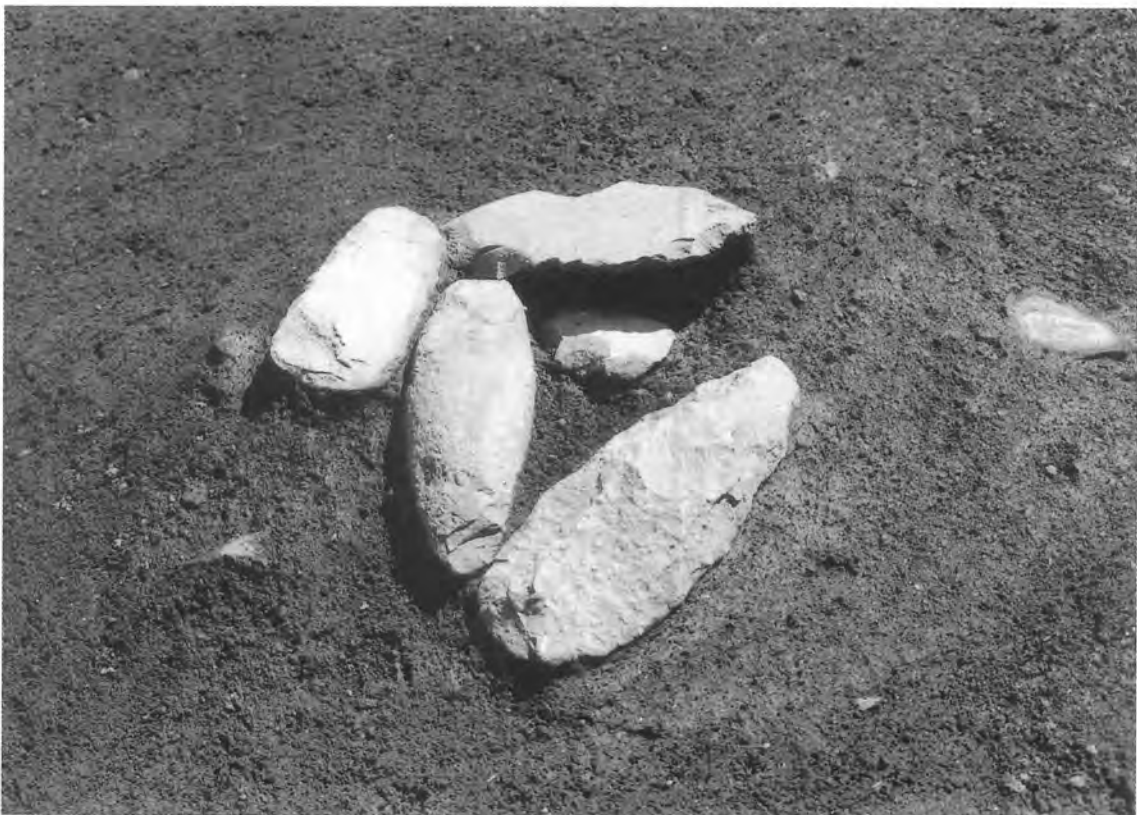
A-4区遺物包含層



A-4区遺物包含層



D区谷遺物包含層



D区 石斧出土状況

# 写真図版14



第37图 1



第43图 119



第50图 1



第55图 1



第73图 1



第76图 72

B-2号、C-2号、D-4号、D-5号出土土器

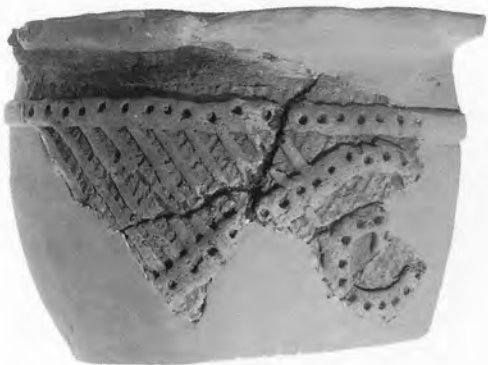
写真図版15



第24図 1



第90図 1



第90図 7



第90図 7の平面写真



第91図 13



第91図 16

D-11号土坑跡、D-7号竖穴住居出土土器

写真図版16



第97図 156



第97図 158



第104図 347



第129図 1



第129図 4



第129図 5

D-7号竖穴住居跡・A区出土土器

写真図版17



第130图 27



第130图 28



第130图 37



第133图 77



第138图 172



第141图 209

A区出土土器

# 写真図版18



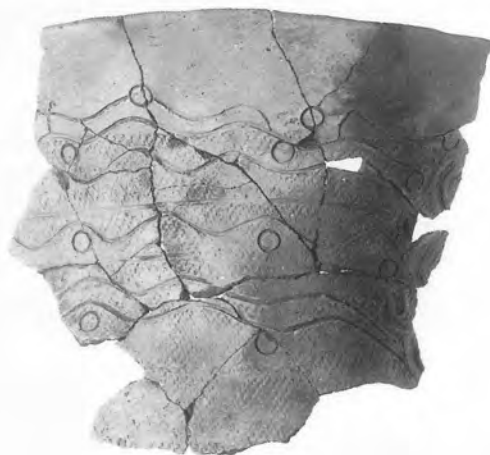
第141図 210



第155図 89



第157図 135



第157図 139



第165図 1



第165図 2

A~C区出土土器



写真図版19



第165図 4



第166図 29



第166図 30



第170図 157



第173図 218



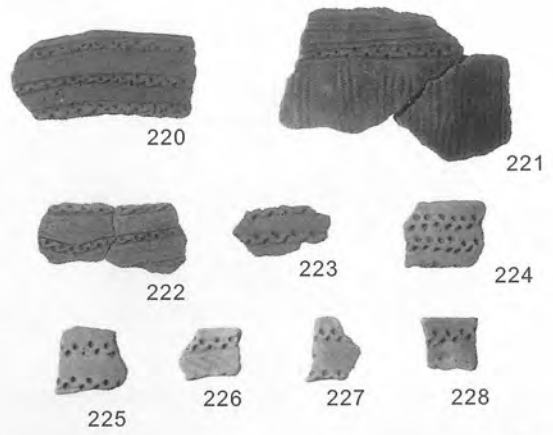
第173図 218の突起の接写

C区出土土器

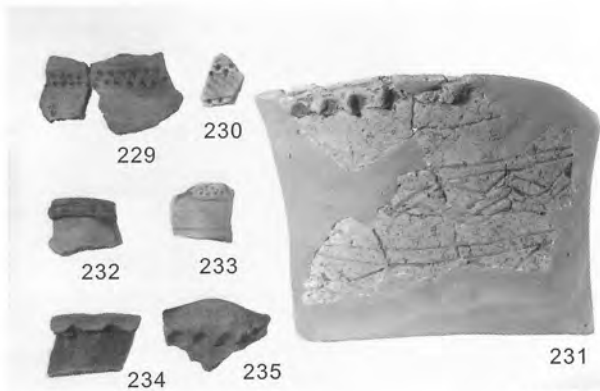
写真図版20



第171図 163



第174図



第174図



第197図 1



第203図 41



第197図 5

C、D区・D区谷遺物包含層出土土器

写真图版21



第198图 8



第198图 9



第200图 28



第200图 29



第201图 30



第201图 32

D区谷遺物包含層出土土器

写真図版22



第202図 34



第202図 35



第202図 36



第202図 37



第203図 38



第203図 39

D区谷遺物包含層出土土器

写真図版23



第203图 42



第204图 43



第204图 44



第206图 73



第206图 74



第206图 80

D区谷遺物包含層出土土器

# 写真图版24



第208图 94



第208图 98



第209图 101



第209图 105



第210图 106



第210图 109

D区谷遺物包含層出土土器

写真图版25



第211图113



第214图156



第214图157



第215图163



第215图166



第216图179

D区谷遺物包含層出土土器

写真図版26



第216図 185



第216図 186



第217図 203



第218図 220



第219図 233



第219図 248

D区谷遺物包含層出土土器



写真図版27



第103図 324



第105図 361



第106図 367



第60図 93



第182図 439



第182図 440

D-7号住居跡出土土器・土偶

写真図版28



第113図 459



第47図 143

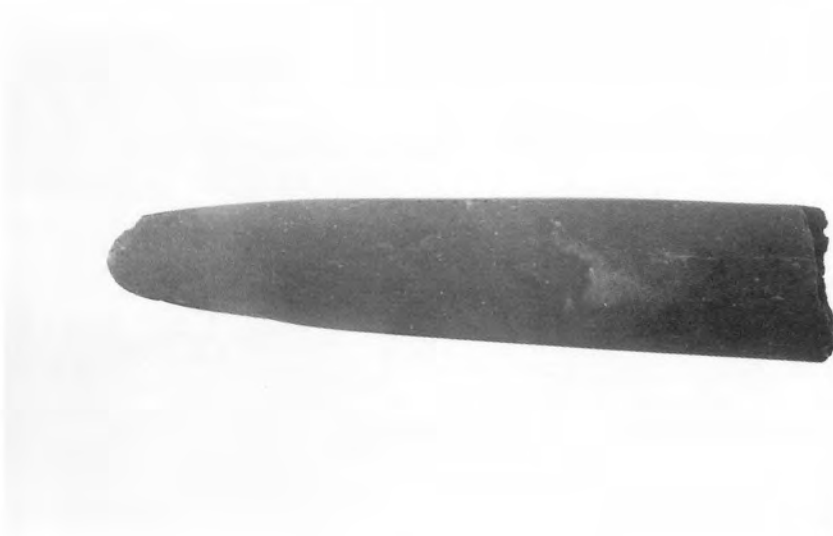


第149図 318



第149図 317

石製品



第70図 22



第117図2

第228図364

第113図457

第187図497



第47図 142



第78図 105

石製品・骨角器

# 写真図版30



C区土層堆積状況



D区土層堆積状況

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ちけい4いせき							
書名	千鷄IV遺跡							
副書名	宮古市水産課千鷄地区漁港漁村総合整備事業関係							
巻次								
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書54							
シリーズ番号	NO.54							
編著者名	阿部 豊							
編集機関	宮古市教育委員会							
所在地	〒027-8501 岩手県宮古市新川町2番1号							
発行年月日	平成11年3月31日(1999. 3. 31)							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		(㎡)	
ちけい4いせき 千鷄IV遺跡	みやこしおお 宮古市大 あざおも えだ 字重茂第 ちわりあざ 12地割字 ちけいわの 千鷄上野 42-31ほ か	03202	LG75- 0248	39°-31'-47"	142°-1'-43"	19950921 ~ 19951124 19960411 ~ 19961015	347  1020	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落	弥生前期 縄文前期、中期	竪穴住居跡 遺物包含層 土坑跡		弥生時代の土器、縄文時代前期~中期の土器、石器			



—宮古市埋蔵文化財調査報告書54—

## 千鷲Ⅳ遺跡

—宮古市水産課千鷲地区漁港漁村総合整備事業関係—

平成11年3月31日発行

編集発行 岩手県宮古市教育委員会  
宮古市新川町2番1号

印刷 株式会社文化印刷  
宮古市松山5-13-6







